

# 鞠智城

古代山城シンポジウム  
成果報告書

「古代山城の成立と変容」

2018

熊本県教育委員会

平成三〇年度鞠智城・古代山城シンポジウム二〇一八

# 古代山城の成立と変容

平成三〇年度 鞠智城・古代山城シンポジウム二〇一八

# 古代山城の成立と変容

## 一、開催日時等

日時：平成三〇年一〇月一四日（日）一〇時三〇分～一七時一〇分

場所：明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール（東京都千代田区神田駿河台一一一）

主催：熊本県・熊本県教育委員会・明治大学日本古代学研究所

後援：明治大学博物館・明治大学社会連携機構・熊本県文化財保護協会

## 二、講演等プログラム

### ・基調講演「古代山城の成立と変容」

亀田 修一（岡山理科大学教授）

### ・講演① 「七世紀後半の国際関係と古代山城」

仁藤 敦史（国立歴史民俗博物館教授）

### ・講演② 「朝鮮式山城の特徴（主に兵站と備蓄について）」

赤司 善彦（大野城心のふるさと館館長）

### ・講演③ 「神籠石系山城の捉え方（築城年代・築城主体論の克服）」

向井 一雄（古代山城研究会代表）

### ・パネルディスカッション

コーディネーター 佐藤 信（人間文化研究機構理事）

パネラー  
亀田修一氏

仁藤敦史氏

赤司善彦氏

向井一雄氏

中村友一（明治大学准教授）

五十嵐基善（明治大学講師）

矢野裕介（熊本県教育委員会職員）



# 目次

## シンポジウム概要

主催者あいさつ 1

熊本県教育長

宮尾千加子

明治大学文学部教授・日本古代学研究所長

石川日出志

5 2

基調講演 「古代山城の成立と変容」 亀田 修一 7

一、はじめに 8

二、未完成と完成 9

三、遺構と遺物の個々の検討と総合化

(一) 遺構

(二) 遺物 33 24

四、古代山城の成立と変容

## (一) 古代山城の成立

六六〇年の百濟滅亡、六六三年の白村江の戦いの前に築かれた古代山城  
神籠石系山城はいつ築かれた? 44

## (二) 古代山城の終焉とその変容

古代山城の停廃記事 45  
古代山城の変容—使用され続けた古代山城 48  
五. おわりに 53

講演① 「七世紀後半の国際関係と古代山城」 仁藤 敦史 59

【はじめ】 60

【白村江後の倭国の立場】 61

【天智期の外交】 64

【大宰総領と国宰】 72

【おわりに】 74

講演② 朝鮮式山城の特徴—主に兵站と備蓄について— 赤司 善彦 75

はじめに 76

一、朝鮮式山城とは	77
二、朝鮮式山城の特徴	
立地	
土塁	94
石積	96
施設	97
三、古代山城の兵士	98
四、朝鮮式山城の兵站	99
五、筑紫城の存続と備蓄	102
六、大宰府と古代山城（筑紫城）の関わり	
おわりに—筑紫城の倉庫群の意義—	106
講演③「神籠石系山城の捉え方・築城年代・築城主体論の克服」	
はじめに	110
一、神籠石とは何か	
神籠石論争	111
神籠石遺跡の発掘調査	
112	
向井	
一雄	
109	

柳田國男の神籠石批判	113
磐座・石神としての神籠石	114
神籠石系山城という学術用語の変遷	
神籠石系山城に関する諸説	
二 城郭研究からみた古代山城	
古代山城にアプローチする方法	119
分布からみた古代山城	118
烽・大宰・總領制・山陽道	120
国郡境や軍団との関係	121
占地と繩張り	123
水際防護と縦深防護	125
横矢がかり	126
築城にかかった日数	127
城壁の構造	129
新しい土木技術や建築技術と古代山城	132
パネルディスカッション	135

## 付録

### 参考資料

講演③	(向井 一雄)	
講演②	(赤司 善彦)	
講演①	(仁藤 敦史)	
基調講演	(亀田 修一)	1 13 23 35

### シンポジウム次第

### 【平成30年度鞠智城・古代山城シンポジウム 資料編】

※今回の成果報告書を刊行するにあたって、当日使用した資料を「資料編」として巻末にまとめました。



主催者あいさつ

# 主催者あいさつ①

熊本県教育長 宮尾千加子

ありがとうございます。皆さま、本日はようこそお越しくださいました。こんなにたくさんの方にお越しいただきました、ほんとに感謝でいっぱいございます。“ごろう君”も年々スキルがアップしてまいりまして、鞠智城のPRを一生懸命やつておりますが、お楽しみいただけましたでしょうか。ありがとうございました。

本日は大変お忙しい中、ご来賓としてたくさんの皆さま方、また、講師の方々にも大変お世話になります。ありがとうございます。そして、何よりも、こんなにたくさんの方に朝早くから、九時ぐらいからお並びいただいた方がおられるかと思います。感謝申し上げます。

さて、今日は十月十四日でございますが、ちょうど一年半前の今日、四月十四日が熊本地震でございました。ちょうど二年半でございます。震度七が二回、震度六が五回、そして余震が四二〇〇回という大変な地震でございましたが、ほんとに皆さま方にご支援、励ましをいただきまして、おかげさまで復旧・復興に向かっております。厚くお礼を申し上げたいと思います。他方、国内外



で大変な災害が頻発しております。日本国内だけでも、今年に入つても大阪での地震、西日本での集中豪雨、台風、そして北海道の胆振東部地震等々、ほんとに災害列島でございます。そういう意味では、私どもほんとに微力ではあるんですが、少しでも恩返し、そして、熊本地震での反省点とか教訓を次の世代につないでいくことができればと願っております。

今年度も明治大学日本古代研究所をはじめ、関係者の皆さまのご支援ご尽力のおかげで、この会場で開催することができました。感謝申し上げます。熊本県が熊本地震からの復興・復旧に向かっているということをご配慮いただいたと伺っております。重ねてお礼を申し上げます。

さて、鞠智城は多くの皆さまがご存じのとおり、今から約一三五〇年前、先ほどVTRにもございましたが、七世紀後半の激動する東アジア情勢の中で大和政権によつて築かれた古代山城で、全国有数の重要な遺跡として高く評価されております。熊本県では昭和四二年に始まる発掘調査や研究を通して鞠智城の構造解明を進めるとともに、近年では、その成果を報告するため、講座やシンポジウムなどさまざまな機会を通じて、鞠智城の歴史的価値を明らかにしてきたところでございます。

本年度からは、第三次鞠智城跡保存整備基本計画に基づいて、発掘調査を八年ぶりに再開いたします。本来はもう少し早く実施する予定でございましたが、熊本地震での影響で延期していたものでございます。今後も地道な取り組みを一つ一つ積み重ねていきたいと考えています。

を取り上げることといたしました。古代山城とは何なのか。その姿が時間の経過とともにどのように変わつていったのか。講演・ディスカッションで活発な議論がなされるものと期待しております。今回のシンポジウムを通じて古代山城全体に関する理解と研究が深まることで、鞠智城の歴史的・学術的価値がさらに高まり、多くの皆さまに広く知つていただくことを願っております。

結びに、ご来場いただきました皆さま方に重ねてお礼を申し上げ、熊本県教育委員会からのあいさつとさせていただきます。本日は大変お世話になります。ありがとうございます。

## 主催者あいさつ②

明治大学文学部教授・日本古代学研究所 石川日出志



皆さん、おはようございます。主催者の一員として、私、明治大学古代学研究所の石川が一言あいさつ申し上げます。まず、非常にこの夏、暑い暑い日が続いてまいりました。だいぶその暑さも残つておりましたが、ようやく本日はほんとにさわやかな、ほんとにほんとに素晴らしい秋の一日となりました。そのようなすがすがしい本格的な秋の大変な大事な一日を、ここ明治大学に足をお運びいただきまして誠にありがとうございます。

先ほど、後ろを振り返りまして、満席の状態を目の当たりにしまして、驚きとともに感激をしております。本日は鞠智城古代山城シンポジウム、一日、夕方までたっぷり時間を用意いたしまして、なおかつ、本日は古代山城研究のトップランナーの先生方をお招きまして、ここでシンポジウムを開催いたします。私ども、明治大学日本古代学研究所は十数年前、一五年ほど前から教育・研究両面で、これまでの考古学、また古代史学、あるいは古代文学という三分野だけではなくて、それらを横断する形で、少し戦いながらも共同で今までと違う日本古代史像を描き直そうではないかということで、取り組みを続けてまいりました。

そうはいいましても、東国の東京が根拠でありますので、思いをどう積み重ねても限界があります。従いまして、本日のように、こうして九州から、あるいは西日本から、近畿から、さまざまな先生方をお招きして、古代学研究の最前線をご紹介いただく。私たち明治大学のスタッフとしても最先端を学ばせていただく、こういう機会がどうしても必要です。

本日は熊本県および熊本県教育委員会の皆さまのご尽力、ご協力、ご理解をいただきまして、こうした会を持てることを本当にありがとうございました。夕方まで、ほんとに長丁場でございます。しかし、面白い鞠智城の姿を存分に味わっていただければありがたいと思います。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。ありがとうございます。

## 基調講演

# 古代山城の成立と変容

### 講演者紹介

亀田 修一（かめだ しゅういち）

九州大学文学部卒業。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。大韓民国忠南大学校留学。岡山理科大学助教授を経て、現在、岡山理科大学生物地球学部教授。専門は考古学。博士（文学）。

基調講演  
「古代山城の成立と変容」

岡山理科大学教授 亀田 修一

おはようございます。岡山理科大学の亀田でございます。今日はよろしくお願ひいたします。一時間ほどということで伺っています。

「古代山城の成立と変容」という題目ですが、事務局側から、こういうお話で、総論的にということを伺いまして、そのまま今回のシンポジウムのテーマを題目に使わせていただきました。僕のあとに、仁藤先生、赤司先生、向井先生が中身の濃いお話をされますので、総論としての大まかなお話をさせていただきたいと思っております。

一・はじめに

さて、今日のお話ですが、まず、「朝鮮式山城と神籠石系山城」の違いについて簡単にお話しします。それから、総論ではあるんですが、全く今まで言われている話をそのまままとめるだけでは面白くないと思いまして、僕自身がここ数年研究してまいりました内容をちょっと付け加えてお話しさせていただき



ます。

一つが、ここにあります「未完成と完成」というテーマです。これは、何年前だつたでしょうか、この一連のシンポジウムの一つの回が東京国立博物館であった時に一度お話をさせていただきました。古代山城、いわゆる朝鮮式山城は大体できあがつてあると思います。しかし神籠石系山城と言つてあるものに関しては、以前から言われているんですが、かなりのものができあがつてないんじやないだらうかということです。このような見方で検討しますといろいろ違つた見方ができるのかなというお話を以前させていただきましたが、今回もちよつとそのようなお話をさせていただきます。

それから、この三番目の「遺構と遺物の検討と総合化」。鞠智城の立派な報告書が数年前に出されていますが、その中で、今日も来られます矢野さん、それから、土器のほうを検討された木村さんたちが素晴らしい成果を挙げられています。その後、このような視点でほかの古代山城を見ていくとどうになるんだろうと思い、僕自身もやり始めました。遺構という構造物、それから遺物という土器などを個々に検討した上で総合化すると、いろいろ見えてくるんじやないだらうかと思つています。

特に今回は、古代山城の土塁を築く時に、一層一層積み上げていく版築という丈夫な土塁の築き方について少しお話したいと思います。ここに書いています「堰板」という、枠の板を使って土留めをしていくと僕たちは習つてきました。しかし、実は、よく見てみるとそうでもない、よく分からぬ部分があるんだと、あらためてわかつてきました。今回は、ちょっとそのような新しいねたも少し含めながら、古代山城の成立

と変容についてお話を進めていきたいと思ってます。あとでまた向井さんのお話にも出てくると思いますが、「こことここが違うから確実に分かれるよ」という話にはどうしてもなりづらいのです。同じ古代の山城の中でグループが違うというぐらいのものなんです。その違いをどう理解するかによってグルーピングのしかたが変わってきます。それで、ひとまずの話として現在定着している分け方ですが、「日本書紀」であるとか、「統日本紀」などの記録に名前が出てくるも



図1 日本の古代山城（総社市2005）

ます、これはよく皆さんのがご覧になられる分布図なんですが（図1）、ここが高安城です。ここから大体西側の地域、瀬戸内海沿岸地域から北部九州に広がっています。ここでちょっと見にくいくらいですが、赤い丸が神籠石系山城、それから三角が朝鮮式山城といわれているものです。記録にある鞠智城もこの朝鮮式山城に含まれますが、大体こういう分布状況になつております。

そこで、朝鮮式山城と神籠石系山城というのは何が違うんだという点について少しお話ししま

のを朝鮮式山城と呼んでいます。例えば、水城は朝鮮式山城に入るかどうか悩ましいですが、大野城、様城（基肄城）、それから金田城、屋嶋城、高安城。そして、六九八年の繕治、修築でいいと思いますが、鞠智城が加わります。これら以外にここに載っています、備後の国、広島県南東部の茨城・常城があります。この二つの城は築城記事や繕治記事は出てこず、城の停止記事だけがでてきます。

それから、記録にはみられませんが、考古学的に確認されているものがあります。山の上に土壘や列石が確認されているものです。もともとは列石が注目されていました。筑後の高良山や筑前の雷山、そして周防の石城山などで、このような山城が北部九州を中心に確認されています。ひとまず神籠石系山城と呼ばれています。

これらの大きな特徴は、記録が見られないことと、切石の列石です。北部九州の場合、きれいに加工した石をずっと列に並べています。この列石が神籠石の名前の元になつたといわれています。ただもともとは別のものが神籠石と呼ばれたと向井さんが述べられています。いずれにしても列石が大きな特徴で、その列石がちょうどお宮さんの範囲を囲んでいるものが高良山や石城山の神籠石でみられます。ということで、この列石は神域、神のエリアを囲うものだという説があります。いや、そうじゃなくて、これは朝鮮の類例と比較をすればやっぱり山城なんだという説があります。それで有名な神籠石論争になるわけです。そして、九州大学の鏡山猛先生や小田富士雄先生たちが発掘調査をされて、土壘があることが確認されました。さらにその土壘に版築を使っていることが明らかになり、朝鮮式山城と同じようなものなんだろうと考えられるよ

うになりました。

こうして調査が進んできますと、瀬戸内側では切石ではなくて加工した石、割石、そのままの石を使っているものがわかつてきて、ちょっと多様な様相が見えてきます。このようにこのグループの山城は「列石」が一つのキーワードになってきました。それから「版築土壁」、そして、もう一つが、城内に建物がどうも見つからないということです。一部あるものもあるんですが、基本的に見つかりません。大野城などの朝鮮式山城では、あとで赤司さんからお話が出てくると思いますが、たくさんの中庫群があります。そういう意味で、やはり違いはあるわけです。ただし、きれいに割り切ることができません。そういう微妙な違いもご理解いただいた上で、次のお話を進みたいと思います。

## 二・未完成と完成

僕自身、神籠石等の発掘調査に主体的に関わったことはございません。学生時代、韓国に留学にして、韓国の山城はほんの少し発掘したことがございますが。日本の古代山城は、城壁の長さが大体二キロ前後で大きいです。韓国の場合は、百濟地域ですと一〇〇メートークラスから、九〇〇メートー台ぐらいまでの幅の中にあります。王城といわれている、王様がいた公山城とか、扶蘇山城などと大体二キロ台です。そういう意味で言いますと、日本の神籠石や朝鮮式山城もそれぐらいの大きさですのでかなり規模の大きいものということになります。

そして、大野城とか、基肄城などは城壁にそつて回っていきますと、城壁がちゃんとあります。基本は土壘で、一部石垣の城壁があるところがあります。神籠石系のものと、ほんとうに石垣とか土壘が回っているのかというと、岡山県の備中鬼ノ城と福岡県の豊前御所ヶ谷神籠石の二カ所だけはいいだろうと思いますが、きちんとめぐつていらないものが意外に多そうです。朝鮮式山城の香川県の屋嶋城、上部の城壁は自然の地形を使つてあるようですが、少し下の方にある浦生<sup>ハシ</sup>石堀<sup>イシガサ</sup>というところは、今注目されて発掘調査もされているんですが、この付近はどうも未完成のようです。

このように、古代山城にはそれなりに未完成のものがあるのではないかという視点で、神籠石系の山城を見ていきますと一六遺跡中、豊前唐原山城跡や筑前阿志岐山城跡など、少なくとも六遺跡は未完成と考えざるを得なくなつてきました。

そして、それらの価値付けといいますか、そのような視点で、完成したお城を見ていくと、大野城や基肄城などは、重要な場所で古い段階から築かれ始めたのではないか。未完成の場合はそこまで重要視されていなかつたのではないかと、思われてきました。

以前、新たな未完成説を提示させていただいてから、「亀田さんの言つてゐる未完成ってどういう未完成ですか」という質問が時々あります。僕は未完成にもいくつかの段階があると思っていて、例えばある施設を造ろうとする時、一期工事、二期工事みたいな区別がありますよね。その時にひとまず一期工事が終わつたからここで止まつて、休憩して二期工事にしようかと。例えばこの段階で工事が止まつてしまつた場合、

これを未完成と見るのか、それとも少なくとも一期工事は完成しているんだと見るのかという、見方です。それから、ここに書きました「意図的な未完成」。例えばあるビルを造っていたら資金が続かなくなつて、ビル工事が途中で止まつてしまつて、そういうビルもありますよね。神籠石とか朝鮮式山城の中にもそういうのはないのかと考えています。政治情勢との絡みもやはりあるのかなと思っています。

それから、「見せる城」。これは向井さんが以前書かれた考えですが、僕もそのような考えはあると思っています。「見せる」ということは、こういう城があるんだよと見せることによって敵が来るのを防ぐという意味合いがあると考えられます。古代にもそのような意識はあったと思います。こちら側の見える所だけ造つておきやいい、こつちは重要だから先に造つたけど途中で止まつてしまつた、とか、いろいろな状況が推測されます。

ですから、「未完成」という言葉に関して、途中での停止は単なる偶然ではなくて、当時の政治、社会情勢を反映したものだろと僕は思っています。「見せる」というのはそのとおりなんですが、それプラス、深い意味もあると考えておいたらどうでしょうかということです。

それから、これに関わる話で「繕治」ということばがあります。大野城・基肄城・鞠智城が六九八年に「繕治」されます。この前後に高安城も修繕などがされています。この「繕治」が修繕なのか、何か新たに造るのか、意見があります。六九八年という、奈良時代直前の時期なんですが、「繕治」しています。繕治記事が出てくるのはこの三つですから、当時の国家としてはこれらを意識し、重要性、その城の性格なども加味

して繕治しているんだと思います。

「繕治」っていう行為は、そういう意味で城の重要性を示していると僕は思っています。その「繕治」が「修繕」でしたら、岡山の鬼ノ城も城壁の修繕をしています。この「修繕」っていう発想もすごく重要なと思っています。大野城もちゃんと城壁を修繕しています。つまり維持管理しているということになるわけですね。実は「修繕」が確認された例はほとんどありません。「繕治」という見方で考えてみる必要もあるのかなと思っています。

鬼ノ城に関しては、僕は今、岡山におりますから特にそうなんですが、朝鮮半島から北部九州、近畿地方を攻めて行く時に途中にあり、とても重要な城だと思っていました。あの地域の海は、備讃瀬戸という言葉をされます。備讃の「備」は吉備の「備」で、「讃」は讃岐です。岡山県と香川県の間の海、ちょうどそこを押さえると通りにくくなるという重要なエリアです。記録には出てきませんが、鬼ノ城が造られた一つの要因だと思います。鬼ノ城と屋嶋城でこの海を監視するわけです。

そこでこれから「完成と未完成」、「未完成の諸段階」、「遺構の有無、多い・少ない」、「遺物の多い・少ない」、これらをキーワードとしてお話ししていきたいと思います。

まず、未完成のお城ということで土壘の有無でみていきます。豊前の唐原山城、筑前の阿志岐山城などは土壘がない部分があります（写真1）。このスライドは唐原の、先ほど言いました列石です。この上部にはちゃんと加工の痕跡があります。そういう意味で、ちゃんと据えて、上に土壘を作ろうとしているんです

が、ご覧のように後ろに何もありません。どうも土壘がなかつたのではないかと考えられています。もし土壘がもともとあつて削られたんでしたら、こういう削られ方はしないのではないかといわれております。先ほどの場所はちょうどこの辺(図2、丸で囲つたところ)ですが、この点々々の所は土壘も列石もありません。つまり、唐原の山城に関しては土壘がない、そういうことになります。これはもう一力所



写真1 豊前唐原山城跡（末永2003）

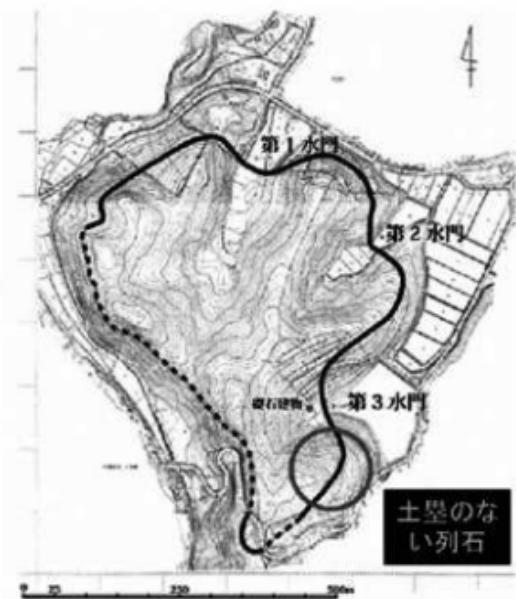


図2 豊前唐原山城跡  
(古代山城サミット実行委員会2010)



写真4 大分県中津城石垣に転用された石材



写真2 唐原山城跡（南東部）



写真5 大分県中津城石垣に転用された石材



写真3 唐原山城跡（南東部）

の所ですが、こんな感じです（写真2）。斜面を加工して石を置いて、後ろにちょっと裏込めの土を入れたかと思いますが、そこで止まってしまっているみたいです。これが、その裏の状況です（写真3）。もし後世に削られたのであるならば、もう少し違う削られ方があつていいんじゃないかと思つています。

さらに、行橋市の小川さんが明らかにされたんですが、この遺跡の近くの山国川という川の対岸に中津城というお城があります。有名な黒田官兵衛が造ったお城なんですが、そこに、この唐原山城跡の列石の石が持つて行かれています（写真4、5）。

黒田官兵衛が中津城を造る時に持つて行つたんだといわれています。つまり、ちょうど豊臣秀吉の頃になるのかと思いますが、唐原山城跡の列石が見えていたのか、あることが知られていた、そして、持つ

て行かれた。その時に、もし石が欲しくて、そして石の上に土塁があつたのならば、その土塁をわざわざすべて削らなくても石の所だけ持つて行けばいいわけですよ。土塁が全部ないというのはやはりおかしいので、もともと土塁がなかつたんだろうといわれています。

それから阿志岐山城跡、ここも、この北側部分に土塁があつて、南側はありません（図3）。ですから、三分の一ほどしかないということになります。上側が大宰府側になりますので、ここは大事な場所だねつていて、見える場所だけに土塁を築いたのかもしれません。これが土塁で、きれいに版築して石が置いてあります（写真6、7）。ちよつとここは特徴的で石を二段に積んだりもしています。出てくる土器はこういう土器です（写真4）。

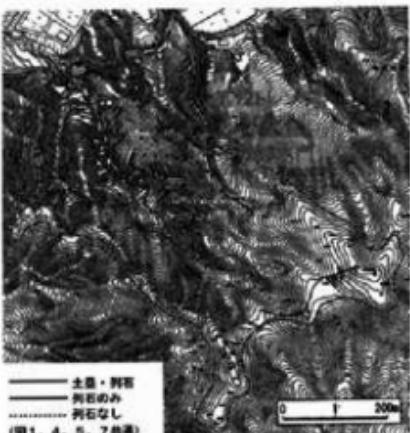


図3 筑前阿志岐城跡（向井2010b）



写真6 阿志岐城跡第12トレーンチ列石と土塁（草場2008）



写真7 阿志岐城跡第12トレーンチ列石と土塁（草場2008）

だいたい八世紀の前半ぐらいかなといわれております。それ以外に分かつていません。それからもう一ヵ所、これは筑前の鹿毛馬神籠石です（図5）。福岡県飯塚市にあります。ここはほぼ全域きれいに残っているんですが、後ろのほうに行くと、発掘調査をした時点で右上の写真のように段がついていて石がないところがあります。おそらく石を置くために段加工はしたんだけれど、石が置かれなかつたようです。近くに石が転がっています。ここも、造る途中の最後の最後だったのかもしれませんが、石を並べる段階で工事が止まつたのではないかと思われます。こういう例が各地にあるようです。

それから、みやま市の女山神籠石です（図6）。福岡県の南のほうの有明海に面するところですが、ここ

の場合は南側に列石があつて、北側にはないといわれております。これは向井さんが書かれた図なんですが、

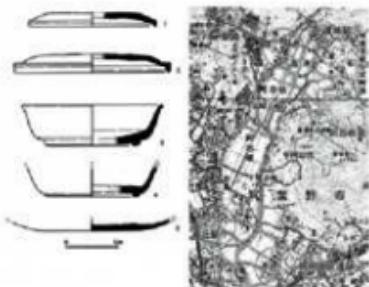


図4 阿志岐城跡第3水門の土器  
(左:草場2008、右:向井2010b)



図5 筑前鹿毛馬神籠石列石未確認地点  
(井上1984、向井2010b)

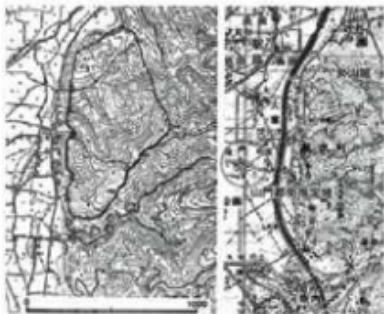


図6 筑後女山神籠石 (向井2010b)

城の西側に駅路があつて、こちら側を意識したと考えられています。これはある面で鞠智城と通じる面があつて、有明海を意識すると南から攻めてくるんじやないかと意識したのではないかと思われます。そうすると、北側はひとまずなくとも、南側さえ造つとけばいいんじやないのという話です。こういうようなやり方で土塁が全周しない、そういうものが各地にあるようです。これらを僕はひとまず未完成のグループに入れておりまます。つまり、「ここだけでもう完成なんだ」という言い方もあるかもしれません、僕は、ひとまずこれらは未完成のグループに入っています。

それからもう一つ、瀬戸内海沿岸地域の山城には、門を建てる時の門の基礎部分に石を添える、唐居敷と

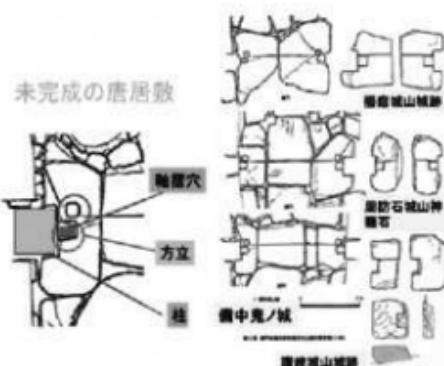


図7 未完成の唐居敷（村上1998）

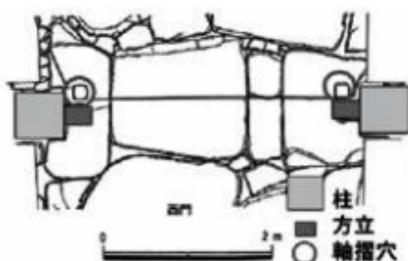


図8 備中鬼ノ城西門（村上1998）



写真8 備中鬼ノ城西門



写真9 備中鬼ノ城西門（村上1998）



図9 備中鬼ノ城西門唐居敷（村上1998）



写真10 備中鬼ノ城西門唐居敷（村上1998）

いうものがございます（図7）。ちょっと見にくいかと思いますが、この石の凹んだところに四角い柱を添える。その横に方立という扉と柱の隙間を埋める材を立てる穴、それから、ここが軸摺穴です（図8、写真8）。扉の軸、「ギギー」って回した時の軸を据える穴などがあります。このような唐居敷があります。これは鬼ノ城（図9）のものなんですが、鬼ノ城以外に播磨の城山、周防の石城山などにあります。それから、讃岐のほうにもございます。

この写真10は唐居敷を使用した門の下の部分の復元の様子です。この辺の石敷は当時のままのものです。

ています。先ほどの鬼ノ城のものは四角の穴がきちんと抉られています。この城山のものには方立用の穴や軸摺穴はございません。それから、特にこれ。柱用の四角の穴が途中まで彫られていますが、貫通していません。つまり、これはもう未完成だと考へざるを得ないということです。つまり、讃岐の城山に関しまして

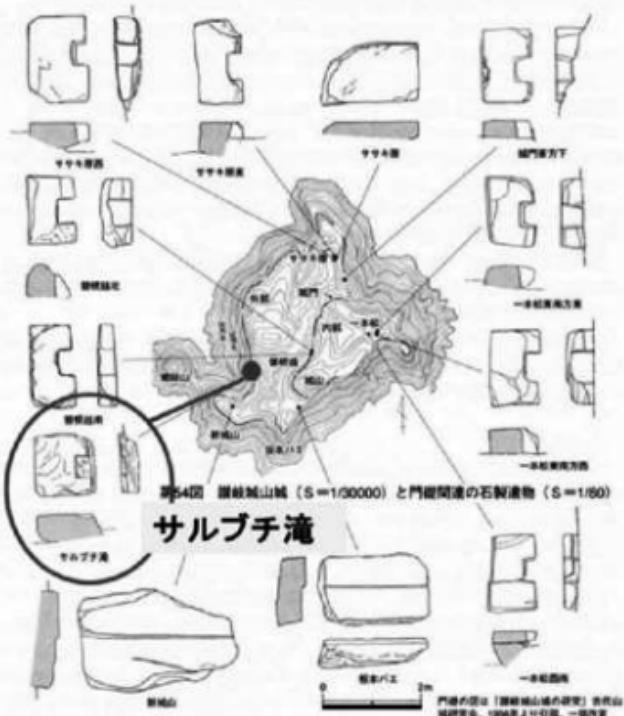


図10 讃岐城山城跡の唐居敷（松尾・谷山2006）

この四角、大きいほうが柱になります。この小さい方形のもの、これが方立、そしてこちらが扉になります。この穴に扉の軸があつて、「ギギギツ」と回すわけです。

先ほど挙げた唐居敷の資料の中で、讃岐の城山ではたくさん見つかっています。これは総社市の松尾さんが作られた資料です(図10)。

もともと向井さんたちがされた仕事がベースになっています。この中に、明らかに四角い柱を添える穴が通つてないものが見つかつ



図11 播磨城山城跡（加藤1995）



写真11 播磨城山城跡石垣C（加藤ほか1988）



写真12 播磨城山城跡唐居敷

は、門を造る準備をして、その門に据える石を準備して加工を始めたんだけれど、少なくとも唐居敷を据えて建物を建てるところまでは行ってないということが、こういうことからお分かりいただけるかと思います。これは播磨の城山の図です（図11）。点線が加藤さんという地元の方が想定された城壁のラインです。この山城、城壁が残っておりません。部分的に、石塁と書いてあります。それから門の跡と書いてある所がございます。この写真が先ほどの石塁の所です（写真11）。僕も現地にお邪魔させていただき、この石垣を見学させていただきましたが、よく見ると、石垣に土塁がつながっていないんです。石垣だけなんです。

門の所に行きましたら、このように唐居敷がおかれ되었습니다（写真12）。

方立の穴はあるんですが、軸摺穴がありません。実は屏の軸を唐居敷に入れなくても、柱の中に支えるものを作つて屏をまわすことも可能なんですが、ひとまずあるだろうと想定すると、これも未完成なのかななどいう話になります。少なくとも先ほどの讃岐の城山のものはそう考えざるを得ないということです。つまり、このように見ていくと、結構未完成のものがありますねという話になります。このようなことを頭に入れていただきながら、次に行きます。

### 三・遺構と遺物の個々の検討と総合化

#### （一）遺構

つい最近行つた仕事の一つがこの版築にすることです（写真13）。これは百濟の風納土城といいまして、西暦四七五年ぐらいまで、百濟の王様がいた城の築城の様子です。これは版築で城壁を造つてゐるところです。ここに、見にくいかと思うんですが、塙板をは



写真13 百済風納土城の城壁復元模型  
(漢城百済博物館2012『漢城百済博物館』)

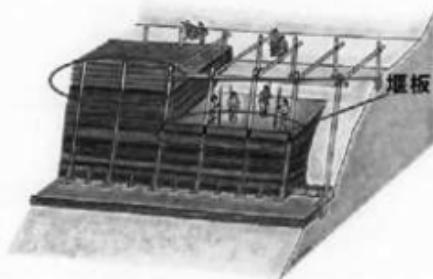


図12 豊前御所ヶ谷神籠石版築土壁復元模式図  
(小川2006)



図13 備中鬼ノ城西門復元図（平門）（総社市2007）

めて、棒で囲んで、人が突いています。

これは豊前御所ヶ谷神籠石の山の斜面をカットして片側だけに土を入れるやり方をしている復元図です（図12）。版築していく時にここに柱を立てて、板をはめて中に土を入れて突いていく。本来ならこの側面にも板をはめ、版築していると思うんですが、この絵では板が描かれていません。最近、僕はどうもここにはもともと板がなかつたのかなって思っています。

これは鬼ノ城の城壁です（図13）。先ほどの門がこの場所ですが、その横にこのような石垣があつて、こちらのほうに土塁が残つております。これが復元された版築土塁（写真14）なんですが、もともとはこの右のような様子です。これが、版築の様子を再現しているところです（図14）。こういう棒で、こちら側に堰板があつて、



図14 備中鬼ノ城土壁復元図（総社市2005）



写真14 備中鬼ノ城西門南東部土壁・石敷（左：総社市2005）

上から突いています。そうするとこんなふうになりますよという模式図です。

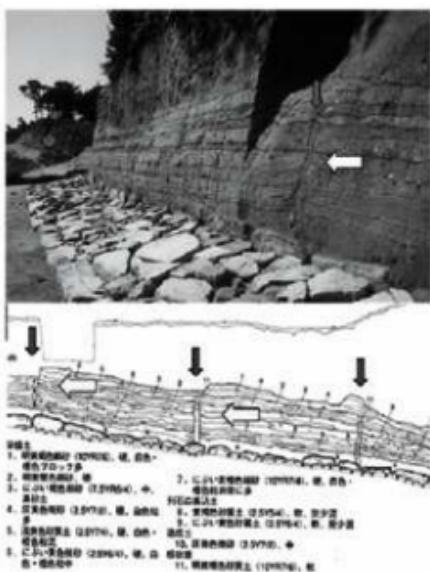


図15 備中鬼／城第5壁状区間版築土壁・堰板痕跡、土層端部の上がり（村上・松尾2005「古代山城鬼／城」）

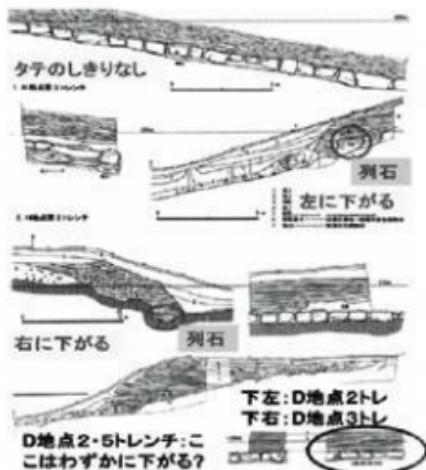


図16 備前大庭小廻山城の版築土壁・図面  
(出宮・乗岡1989)

この図、すごく細かい図ですみません（図なし）。お手元の皆さんのおレジュメにも入れてあります。まず、石垣の右端のところに石が立っています。そこから土壁があるのですが、その右側に斜め上からつけたところです。ちょっと見にくいかと思いますが、赤い矢印のところが堰板の場所と思われます。そしてその横の土層をみると、その堰板のところで少し上に上がります。このような土層になるのはそこに板

などがあるからだと思います。つまりこの鬼ノ城の土壘には正面だけでなく、側面にも堰板があつたことがわかると思います。

これは同じ岡山県ですが、備前大廻小廻山城の土壘の図です（図16）。まず、正面からの図には鬼ノ城のような縦方向の線はありません。さらに次の図では列石の上から前に土壘が被つてることがわかります。左下の図も同じです。大廻小廻山城では土壘の前面の柱穴が見つかっておりません。この部分の土壘には堰板が使われなかつた可能性があります。

一方、堰板がなくて水平の土層ができるのかという疑問もあります。実は奈良の薬師寺の東塔を掘つてい

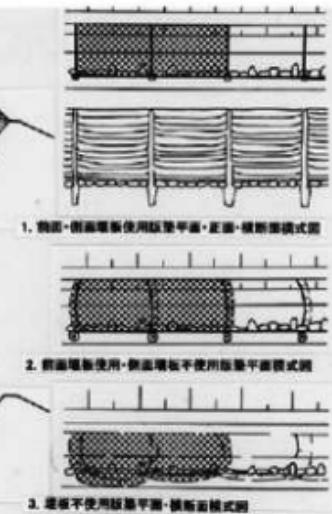


図17 版築模式図

るときに見学に行つたことがあります。そのとき、土層を見学させていただくと、基壇の両端側が少しずつ下がっていることに気がつきました。そこで担当の青木さんには「堰板なし？」と伺うと、その可能性を述べられていました。そして報告書にはそのように書かれていました。あれだけ立派な版築なんですが、堰板がなくてもできるようです。

これらを模式的に示したものがこの図です（図17）。

備中鬼ノ城（1）では正面と側面に堰板を使用し、豊

前御所ヶ谷神籠石（2）などでは正面には使用しますが、側面には堰板を使用せず、最後の大廻小廻山城

（3）では正面にも側面にも堰板を使用しない土塁があると考えられますと言うことです。

これは韓国木川土城（図18）のものです。ここにも堰板の痕跡が見られます。この稷山蛇山城でも側面の堰板の痕跡が推測されます。正面観ですと、土層がずれている部分があります。この蛇山城では前面に鬼ノ城と同じような敷石があります（図19）。

そして、これは一二五〇年に築かれた高麗時代の江華島の外回りに築かれた江華中城の土塁です（写真）

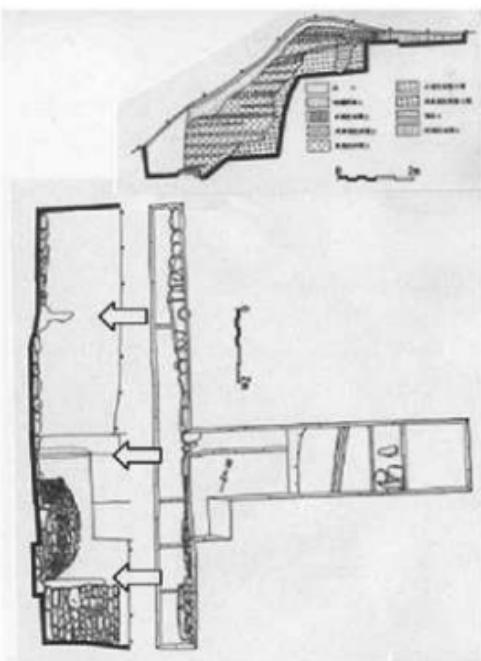


図18 韓国忠清南道木川土城西側土塁  
(尹武炳1984『木川土城』忠南大学校博物館)

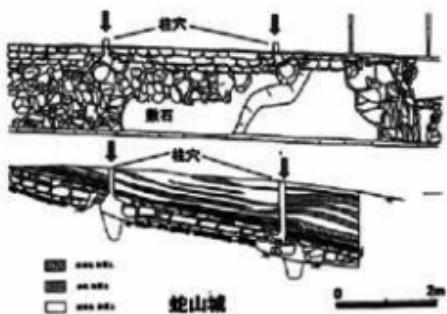


図19 韓国蛇山城  
(成周鋒・車勇杰1994『稷山蛇山城跡』)

15)。写真のように側面の堰板が埋もれたままになっている状況がよくわかります。次がその模式図です(図20)。そして正面側に堰板の痕跡がきれいに残っている痕跡です(写真16)。これだけきれいに残ると言うことは堰板がそのまま被さっていたことを示していると思います。つまり堰板を取り外さなかつたと言うことでしょう。

実は日本の筑前鹿毛馬神籠石でも前面に一部板が残っていたという話があります。ということは、日本でも堰板を取り外しながらあげていくやり方と、そのままにしておく両方のやり方があつたのかもしませ

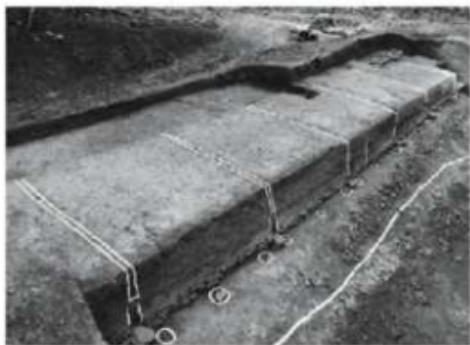


写真15 江華中城土壁 (1250年築城)  
(中原文化財研究院2012「江華玉林里遺跡」)

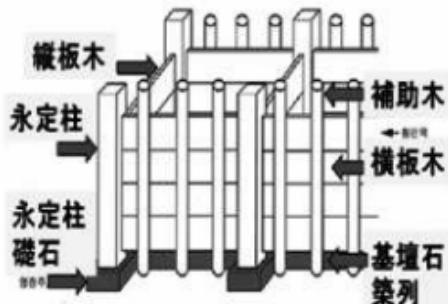


図20 江華中城土壁 (1250年築城)  
(中原文化財研究院2012)



写真16 江華中城 (1250年築城)  
3地点2トレンチ外側土壁堰板痕跡  
(中原文化財研究院2012)

ん。このような視点でまたみると違つたものが見えるかもしれません。

これは百濟漢城期の四、五世紀の王城、風納土城の城壁の断面（写真17）で、版築の痕跡がきれいに残っています。これは同じく百濟漢城期の王城の一つ、夢村土城の東側土塁の写真（写真18）で、発掘調査途中にお邪魔して撮らせてもらったのですが、版築ではありません。つまり同じ百濟漢城期の王城ではあるんですが、土塁の築き方が異なっています。

そして、百濟最後の泗沘時代の王城、扶蘇山城の版築土塁です（写真19）。これは統一新羅時代のもので

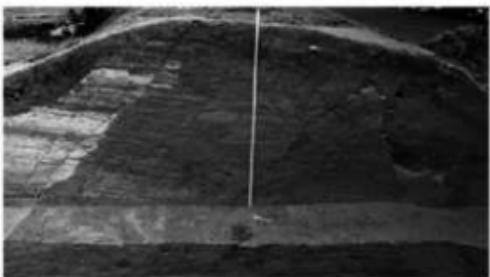


写真17 風納土城東側土塁断面・版築



写真18 夢村土城東側断面



写真19 扶蘇山城南門東側土塁

あるという話もありますが、きれいな版築土塁です。

これは泗沘羅城の東側の土塁です（写真20）。六世紀代のものと思われます。外側の下部に加工した石を積み上げた石垣があります。土塁の断面です（図なし）。裏込めの様子がわかります。こちらが裏側です。石を葺いて、被せていました。これは土塁外側の基礎部分の写真（写真なし）で、敷粗朶（しきそだ）工法といつて、葉っぱとか、枝とかをそのまま埋めて土塁を作る工法が採用されています。これが大宰府の水城でも見つかっています。このあたりから日本に入っているんだねって、また注目されました。

次の写真（写真なし）をよく見ていただくと、土層の中に黒いものが見えますでしょうか。これは粗朶がスパツと切られた状況です。つまり、この部分にも同じように粗朶をいれていることがわかります。ここもそうです。この上の面に、葉っぱとかが散らばっています。何枚も粗朶を入れては土を入れて、粗朶と土とを繰り返して積んだようです。この土塁が築かれたところは水気が多いところで、水気の多いところではこのような敷粗朶工法が使用されたようです。大宰府の水城でこの工法が採用されているのは、まさに水気が多いところだからだと思います。



写真20 扶余泗沘東羅城（北東より）

今、なんのお話をしておられるかといいますと、朝鮮半島の土塁の築き方も結構多様だということです。これは新羅の梁山尊池里土城というお城の土塁です(写真21)。六世紀前半頃のものといわれています。ちょっと写真が見にくくて申し訳ないですが、版築にはなっていません。日本の古墳築造時の土の入れ方に似ているように見えます。ただし、これはこういう柱はちゃんとあります(写真22)。

このような多様性をどう捉えるかということは今後の課題です。先ほど見ていただいた高麗時代の土塁もそうですが、そういう視点でもう一度日本の山城も見ていく必要があるのかなと思っています。



写真21 梁山尊池里土城 (新羅) 6世紀前半・城周約1000m  
(沈奉謹・金東鎮1983『梁山尊池里土城』東亜大学校博物館)

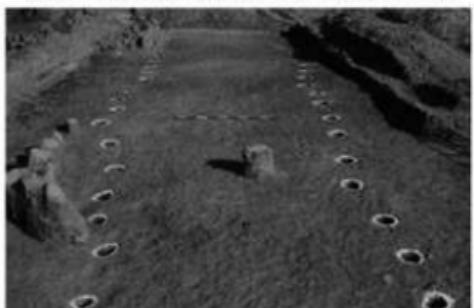


写真22 梁山尊池里土城 北側土壁構造 (新羅)  
(沈奉謹・金東鎮1983)

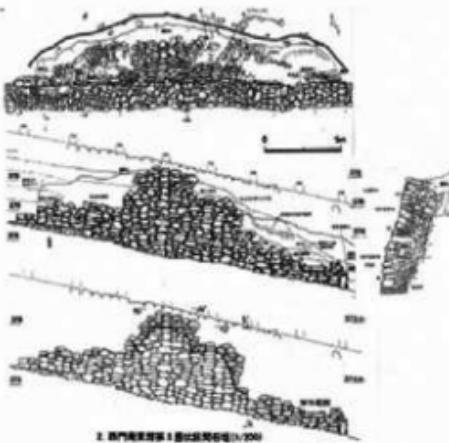


図21 西門南東部第3壁状区间石垣 (1/200)  
(村上・松尾2005)

それから先ほどもお話しした修繕の話です。ここに石が立っているのをご覧いただけますか(図21中・下)。ここから先の石垣は修繕した部分だと思っています。この上図はこの部分を上から見たところです。

この赤い弧状のラインは石垣を作るときの穴といいますか、掘方です。この弧状のラインは、僕は当初のものではないと思っています。当初のものでしたら、普通は直線的になると思います。これは弧を描いています。これは土壘が壊れて落ちた時の跡、つまり土砂崩れで落ちて、そこを埋める時にその穴をそのまま使つて石を積み上げたのではないかということです。そう考えると、この高石垣は修繕したものになります。それは、おそらく古代、鬼ノ城が使われている時代にされたんだろうと。つまり、鬼ノ城に関してはかなり大規模にこうやって修繕したのではないかと思っています。鬼ノ城はほかの神籠石系山城とはちょっと違っていると思っています。

## (二) 遺物

次に遺物のお話をします。ゆっくりしゃべると時間がなくなってしまいますので、ちょっと急ぎます。朝鮮式山城では比較的の遺物が出土しますが、神籠石系山城ではほとんど出土しません。朝鮮式山城では、土器以外に瓦も出ます。神籠石系山城では基本的に瓦は出ませんが、鬼ノ城ではごく少数出土しています。ただ、これはもともと鬼ノ城に使ったものかは分かりません。

これらは讃岐の屋嶋城跡、伊予の永納山城跡の遺物です。図22-1-6は屋嶋城跡のものです。当初この

3の杯身は古過ぎるように思われていましたが、近年では築城時でもいいのかなと思われています。

それからこれは愛媛県の永納山城跡のものです(図23)。7の杯身に関しては、担当者の方は「うーん」とおっしゃっていますが、僕はおそらく築城時のものでいいと思っています。永納山の大多数の土器は八世纪に入るくらいのものだと思いますが、こういう古いものもあると思っています。屋嶋城に関しては六六七年の築城記事がありますので、

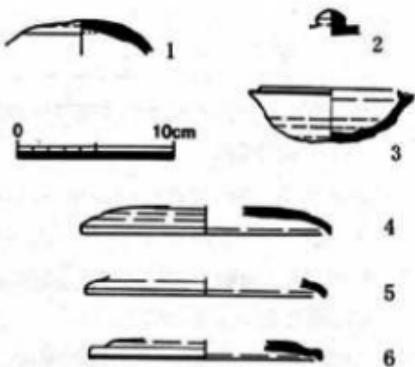


図22 講岐屋嶋城跡  
(高松市教育委員会2010『古代山城日韓シンポジウム』)

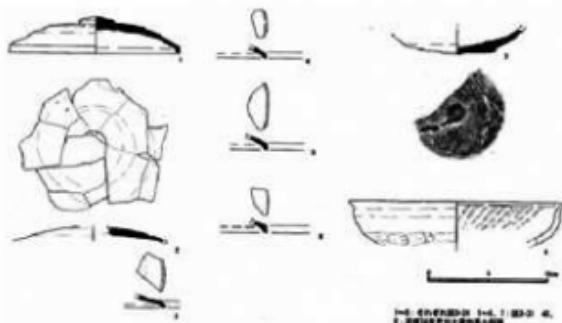


図23 伊予永納山城跡 (渡邊2012)

図22-3のようなものが出ても、そして八世纪のものが出てきても、別に問題ないと考えますが、永納山城跡に関しては少し問題視されます。しかし、屋嶋城を参考にして土器をみましたら、永納山城跡のものも問題ないのではないかと思っています。

鬼ノ城に関しては、このように城壁が全周回っています

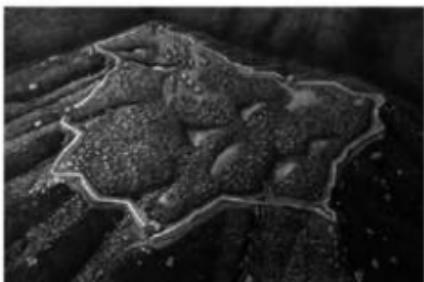


図24 備中鬼ノ城復元模式図（山陽新聞）



写真23 備中鬼ノ城北門（懸門）



写真24 備中鬼ノ城北門（懸門）  
(村上・松尾2005)

（図24）。このように復元もされています。これは北側の門（写真23）なんですが、懸門といつて、梯子をかけて上に上がる構造になっています。城内で建物群が見つかっています。この建物はちょっと長くて管理棟ではないかと言われています（写真25）。そしてこの西端の長い建物の近くに平安時代のお堂があつたと考えられています。

この写真は倉庫です（写真26）。傾斜地に造っていますのでやはり前面が流れやすくなっています。これはしようがないですね。

さらに、鬼ノ城に関しては防水施設が見つかっています。これが土手（写真27）で、この内側が池に

なっています。この池の意味は、飲料用の池でもあるでしょうし、雨水が直接城壁にぶつかると、城壁が壊れてしましますので、途中に池を造ることによって城壁を壊れないようにするためのものだとも考えられています。このような貯水施設と考えられるものは豊前の御所ヶ谷の神籠石にも似たものがあります。つまりこのような施設がある山城はやはりきちんと城ができるがつていたんだろうなと思っています。

さらに、これは東門の近くの鍛冶炉の一群です（図25）。鉄器などを作る鍛冶炉が出てきております。ここに柱穴があつて、どうも小さな小屋ぐらいはあつたようです。このような鍛冶炉が見つかっていますのは、鬼ノ城以外は対馬の金田城と先ほどの永納山だけです。何を造っているのか。武器を造っているんじゃない



写真25 鬼ノ城磁石建物 (2×6間: 管理棟?)



写真26 鬼ノ城磁石建物 (3×3間: 倉庫)



写真27 備中鬼ノ城貯水施設土手1  
(金田・岡本2013)



図25 備中鬼ノ城鍛冶遺構（金田・岡本2013）

もう十何年も前のことですが、姫路の沖の家島っていう所で発掘調査をやったことがあります。「石切屋さんが石を採るから発掘調査してくれ」ということで発掘したんですが、石屋さんたちと宴会をしたことがあります。その席で、「石屋さんのちよつとお年の方と飲んでいましたら、「俺たちは朝現場に行つたらます鍛冶をやるんだ」とおっしゃっていました。「まず、たがねを打つて使えるようにし、それで石を切るんだ」と。つまり、石屋さんたちは自分らが使うたがねを自分で鍛冶をするんです。鬼ノ城の鍛冶場もまさにそういう話でもいいのかなということです。

次に土器です。いろいろあります。たくさん出ました。ほかの山城に比べて、神龍石系山城の中では最も多いほうです。これは林部さんといいまして、国立歴史民俗博物館の教授が昔出した本の図面、飛鳥の宮殿から出土した土器の編年表です（編年表1）。

かとよく言われていますが、出てくるのは、たがねとか、釘とか、鉄錐です。つまり、築城時の石を加工したりする時のものを作つたり、修繕していくんじゃないかと考えられています。

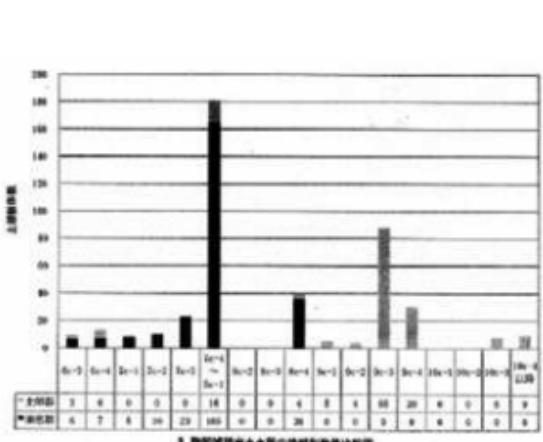
		須恵器杯H	H-G	土師器杯C
飛 鳥				
		小堀御宮推定地		
	○	○	○	
I				
		川原寺下層SD020		
640年頃				
飛 鳥				
		山田寺下層		
II				
		坂田寺下層SG100		
		飛鳥水路道路		
660年頃				
飛 鳥				
III				
		大官大寺下層		
飛鳥IV				
		藤原宮下層SD1901A		
飛鳥V				
		藤原宮		
710年頃				

飛鳥時代を大まかに5時期に区分した。飛鳥Iは600~640年、飛鳥IIは640~660年、飛鳥IIIは660~680年、飛鳥IVは690年前後、飛鳥Vは710年前後。飛鳥I・II・IIIをさらに細分したのは、伝承飛鳥板蓋宮跡で検出される宮殿遺跡の年代を明確にするためである。

編年表1 飛鳥時代土器の編年（林部2001）

この六六〇年頃に空白があります。その理由は、飛鳥を一時離れた時期、大津宮の時期です。つまり、大津宮に都が移ったときに飛鳥の王宮では、ちょうどその時期の土器が出てない、というのが林部さんの考え方です。この考え方は、僕は素直にいいんだろうと思っています。先ほど見ました径の小さい土器はまさにこのあたりのものです。

鬼ノ城の土器には径がやや大きいものが多く、こういう径の小さいものが少しあります。この径が大きなものは大体七世紀の終わり頃から八世紀の初め頃に入るものです。この径の小さな一点をどのように見るのか、この辺りはまた意見が分かれるところです。



からいったら、やはり築城時は数が多く、繕治段階にたくさん使用されていたと考えられます。

この図は鞠智城の六四号建物のものです（図27）。一番はちよつと別のものなんですが、これが築城時の古いものではないかと思っています。そしてこの残りのものが六四号建物の遺物です。ここでは瓦も出ております。鞠智城跡の瓦としてよく取り上げられるのですが、この瓦をいつにするのか、すごく難しい問題です。六六七年頃の築城時のものか、六九八年の繕治段階のものか、すみませんが、今日は置いておきます。

そして、遺構と遺物の総合化の話です。あの赤司さんのお話にも出ると思いますが、この図は赤司さんが二〇一六年に出されたものです（図28）。僕は基本的にこれに同意していますので、そのまま使わせてもらっています。これは大野城と鞠智城の建物の流れを合わせたものです。

今回の発表に関連してこの図26の年代について、木村さんに電話して確認しました。何を確認したかといいますと、「木村さんの土器の年代観は作られた年代を言っているんですね」と。つまり、「使用年代はもう少し幅を持たせて結構です」ということを確認しました。

鞠智城では六九八年の繕治の時に瓦を使つたのか、使わなかつたのかということはやはり大きなポイントかなと思っています

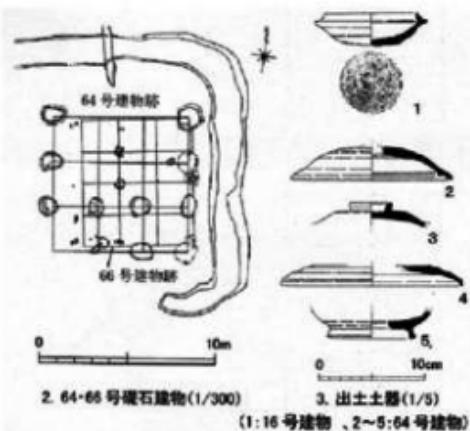
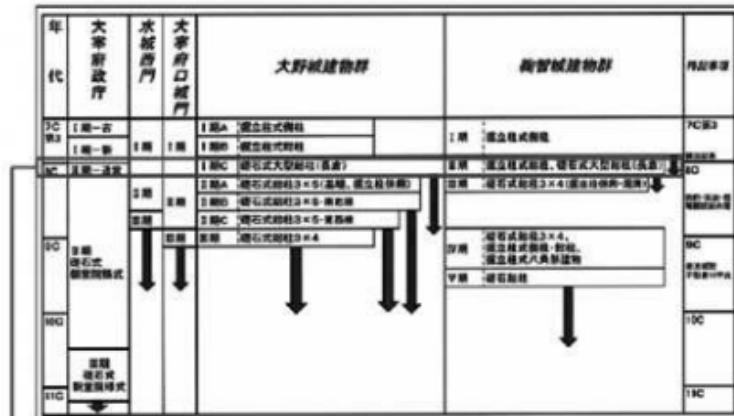


図27 肥後鞠智城跡礎石建物と出土遺物（西住ほか2012）

います。佐賀県の基肄城の話ですが、礎石建物第9地点の調査で瓦が出土しています。ちょうど僕が大学院生の時で、そのお手伝いに行き、拓本や図面を探りました。このあたりのものは僕が一部関わったものです。その左の四分の一の破片の軒丸瓦は少なくともこの建物から出ています。これ以外にも礎石建物周辺でいわゆる百濟系單弁軒丸瓦が出ておりますので、少なくとも基肄城に関しては礎石建物に瓦が使用されたことは動かないだろうと思います。基肄城では奈良時代の瓦も出土しており、土器も新しいものが出土しています。ただ、一方で基肄城に関しましては、礎石建物以外の掘立柱建物がよく分かっていません。調査がまだ十分進んでないので今後どうなるか次第ですが、ひとまずは基肄城では瓦は礎石建物に伴っていたと考えています。

次に遺構・遺物・記録が語るものということで、これらのまとめの話をします。城内に遺構があつて、遺物がたくさんある山城は大野城、基肄城、金田城、鞠智城で、これに僕は



→繕治期(698年)における礎石建物造営・瓦使用?

図28 大野城・鞠智城建物群の変遷案（赤司善彦2016）

鬼ノ城も含めたいと思つています。そういう意味では、鬼ノ城は元成したお城の中に入れていいんじゃないかと思います。遺構がなくて遺物もほとんど出ない山城が神籠石系のもので未完成であつたんじやないか。これは神籠石系のものに多いんじやないかと考えています。これらを併せますと、北部九州の記録のある朝鮮式山城と、記録はありませんが、プラス鬼ノ城、これらは大多数の神籠石系の山城は違うのではないかとうお話です。

#### 四・古代山城の成立と変容

##### (一) 古代山城の成立

###### 六六〇年の百濟滅亡、六六三年の白村江の戦いの前に築かれた古代山城

さて、ここからが本来の総論のお話です。まず、古代山城はいつできたのかということで、六六三年の白村江の戦い以前にあったのかという話です。これも以前からいわれていることですが、「日本書紀」の齊明天皇二年の六五六年のは歲條の「宮の東の山に石を累ねて垣となす」という記録があります。石垣を造つたんだ。これは酒船石遺跡ではないか、という明日香村の報告書が出ています。

それから、渡辺正氣先生が六五八年は歲條の「日本書紀」の中の記録を取り上げて、これが神籠石なのではないかとおっしゃっています。これにつきましても意見が分かれています。

遺構として、酒船石遺跡をどう捉えるかですが、少なくとも場所としては板蓋宮、後飛鳥岡本宮の東の山

の上にありますので、そういう意味ではおかしくありません。左側の写真が発掘した時のものです。これは地震で倒れたんだろうといわれています。それを修繕して、積み直したものがこちらです。

下に花崗岩の石材を並べ、その上に、砂岩、奈良県天理市の砂岩で作った方形の石を積んでいます。この砂岩が先ほどの齊明天皇が関わる「狂心（たぶれごころ）の渠」に関わるのではないかと考えられています。狂心の渠のお話というのは、齊明天皇が、大規模土木工事ばかりしてだめだという話の中に出てくる話ですが、その中の一つに、まさに天理の石上山から石を運んできた話があります。この石がそれではないかとうお話を。

僕はこの酒船石遺跡関連の話は、一応可能性はあると思っています。これを山城と呼ぶかどうかはちょっと別にして、山城状のものであるのは間違いないと僕は思っています。ですから、それらしきものが六六三年より前にあつた可能性、少なくとも明日香村の出土土器の編年をそのまま信用するならば、先ほどの記録に関連する可能性は無視できないと思っています。

次に六六三年以降についてです。ここからが本番です。六六四年の水城、それから長門は場所が分かつていませんが、六六五年の大野城、基肄城、六六七年の高安城、屋嶋城、金田城。ここまで六六七年以前の築城記事があります。このあとは継治や修繕の記事になってしまいます。そして神龍石系山城の築城はいつかという論争が続いています。朝鮮式山城より古いんだ、新しいんだ、一部重なっているんだという論争が続いている。さらに瀬戸内系のものに関して、北部九州系のものとは、やはり違うんじゃないかな、区別すべ

きだなどという意見が出ています。

### 神籠石系山城はいつ築かれた?

神籠石系山城の朝鮮半島における類例として、昔から気になっていた山城があります。益山猪土城と呼ばれている土城です。このお城では百濟の瓦が出ます。それ以降の瓦も出ます。ですので、年代観に関してはいろいろ考えられます。この城壁の造り方、山の斜面をカットして石を置いて土を入れるというやり方は日本の神籠石の土壁と似ています。この写真の部分、場所によってちよつと違いますが、この部分が築造当初のものであるならば、これは百濟時代の土城で良いと思います。発掘担当者は当然百濟時代のものと考えています。これが百濟時代のものでなければ、七世紀の前半段階で良いと思います。

この図29は、おもな流れからは外れるんですが、官道との関係はとても重要なと思っていましたという図です。

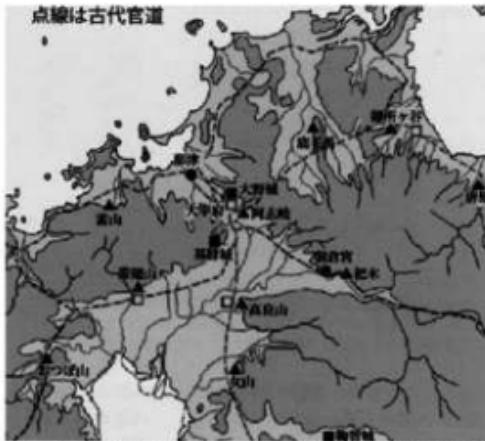


図29 北部九州の古代山城と官道。山城と古代の交通路や朝倉宮、大宰府との密接な関係がわかる。「九州国立博物館 日韓の古代山城を掘る」2006を改変。

図29 古代山城と官道（九国博2006）

## (二) 古代山城の終焉とその変容

### 古代山城の停廃記事

ようやく古代山城の終焉とその変容という話にたどり着きました。まずやめるお話を。大宝元年、七〇一年の高安城の廃城。それから烽、のろしを七一二年にやめる。そして七一九年に備後の茨城・常城を停止します。ということで、少なくとも八世紀の初め頃には、これらの山城はやめるということになつてゐると思います。記録でも考古学的資料でもだいたいそういう年代観です。当然ちょっとずれもありますが。その中で宗教的施設を作るものがあります。大野城では、新羅が悪いことをしてるので懲らしめるといって、四天王の塑像を四体造るという話が出てきます。これは七四年です。その後、八〇一年に大野山寺の四天王像を筑前金光明寺（筑前国分寺）に下ろします。そうしましたら疫病が流行つたので、よくないからといって戻したという話があります。そしてこの時に「大野城の鼓峰に堂宇を建てて四天王像を安置する」とあります。このようなことが八世紀の後半から九世紀の初めの頃に大野城の中で起っています。

それから、基肄城に関しましても八世紀の後半、先ほど見ていただきましたが、「山寺」と書いた墨書き土器が出ています。これに関して小田先生は、よそから持つてきたのではないかといふこともおっしゃっています。それも当然あります。素直に、基肄城の中に山寺があつても構わないのではないかと思つています。何年前かに基肄城にお邪魔して、基山町の田中さんにご案内いただき、基肄城の近くに古いお寺さんとかお宮さんはないですかつていいましたら、連れて行ってくださったのが荒穂神社です。基肄城の南側約一

キロの所にあります。『日本三代実録』の貞觀二年、八六〇年のところに、従五位上の荒穂天神を正五位下とするという記録がきちんとあります。そして基肄城に登った時に教えていただいたんですが、あそこの一番高い所の近くに、もともとあつたんだということをおっしゃっていました。ですから、基肄城の山頂部にもしかしたら小さなほこらのようなものがあつたかもしませんね。

それから、高良山は、高良大社の話ですね。それから、周防の石城山も有名な話です。高良の神、石城の神ですね。それぞれ従五位下、従四位下の位をもらっています。石城の神のほうが、ランクが高いですね。少なくともお宮さん関係はこのように記録が残っています。



写真28 荒穂神社（『延喜式』式内社：860年）



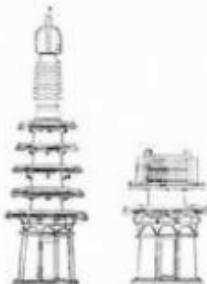
写真29 石城神社（『延喜式』式内社：867年）



写真30 屋島寺

\*瓦塔

瓦塔とは焼き物で作った仏塔で、本来木造建築である三重塔や五重塔の代替えとして、仏教信仰の対象として作られたもの。從来平安時代のものが多く知られているが、最近では7～8世紀のものも知られる。今回の出土は、城内で仏教信仰のシンボルとして用いられたものと考えられ、文献に見る他の山城同様、堅城に百姓人が開拓し、彼らの信仰の象徴としてもたらされた可能性も指摘されている。



瓦塔図 (岡山県尾道市美術館蔵山道跡出土瓦塔・瓦文解説書復活監修)(岡山市教育委員会 1993)より



図30 備中鬼ノ城・瓦塔 (岡山県立博物館2010)

屋島に開しましては正確には分かつていませんが、土器は九世紀頃のものが出でています。寺さんはどうもありそうだと思います。その関係は分かりません。少なくとも古いお寺さんはどうもありそうだと思います。

これは堅城の麓の「延喜式」式内社の荒穂神社です(写真28)。上に見える山が堅城だと思います。それから、これが石城神社ですが、こんな感じで厳かな感じで残っています(写真29)。これはかなり昔に撮った写真ですが、こんな感じで嚴かな感じで残っています。これは屋島寺です(写真30)。現在、屋島の観光の中心の一つになっています。

鬼ノ城に関しましては、発掘調査をしました中でこのような瓦塔が見つかりました(図30)。この瓦塔に関しては、年代決定は難しいのですが、関東で瓦塔を研究している池田

敏宏さんからこの造り方だつたら関東では八世紀まで上るよと伺いました。それでこれをどう理解するかは難しいところですが、ひとまずこういう仏教関連遺物があつたことがわかります。それと先ほど述べました管理棟と推測している礎石建物の横で、平安時代前期の仏堂と想定される遺構が見つかりました。その柱の穴から隆平永寶が出ています。最初に铸造されたのが七九六年ですので、それよりあとなんでしょうか、平安時代前期ぐらいの仏堂があつたのは間違いないと思われます。

その後、鬼ノ城の近くには新山寺というお寺が出てきます。一〇七一年に成尋阿闍梨が備中國新山別所に行つて修行をしたという場所がここだろうといわれています。これは国文学の世界で、「成尋阿闍梨母集」でしたか、そういう記録があつて、この人が中国に行く時にここで修行をしたという話です。ということで、この時期には新山寺はあるんだろうと考えられます。現在、鬼ノ城の入り口近くに、大きな鬼の釜といわれているものがありますが、その近辺になります。

以上が、古代山城が宗教的施設に変わった、または古代山城のなかに宗教的施設ができた例です。

### 古代山城の変容－使用され続けた古代山城－

次に、古代山城が八世紀以降も使用された、大野城、基肄城、鞠智城についてお話しします。考古学的には八世紀前半以降の軒先瓦があると年代が分かりやすいんですが、軒先瓦を使うということは格が高いということを示していると僕は思っています。継続的に、七世紀後半の瓦、八世紀前半の軒先瓦ができる山城は大

野城と基肄城です。

あとで赤司さんのお話に出ると思いますが、礎石建物の倉庫群との関連も出てきます。先ほども言いましたように、いろいろな記録が大野城にはありますが、天長三（八二六）年の太政官符の中で、衛卒の仕事の中に大野城の修理というのがあると書かれています。ですから、この時期、大野城はきちんと維持管理されていますねということになります。それから、そのあと、「統日本紀」の八四〇年の条に、大野城の管理者の一人である大主城一員を廃したと書かれています。その後八七六年の記録が大野城に関する最後の記録で、考古学資料も大体この辺で終わるといわれています。

大野城に関しましては、皆さんよくご存じのとおり、この場所ですね。これが水城で、これが基肄城で、そして最近土壘が見つかったのが阿志岐山城跡近くです。大野城の中にはこのような掘立柱建物と礎石建物が見つかっています。大体七世紀代は掘立柱建物で、八世紀に入る頃に礎石建物に変わり、その後ずっと礎石建物が倉庫群や管理棟として使用されたと考えられています。

大野城に関しましては、何年前でしたか、大雨で壊れた時に若い方が頑張って、危ない崖の所などで発掘をしていました。その時の成果



3. 小石垣地区大谷東方土塁B地区土塁積み直し状況(1/100)～

図31 小石垣地区大谷東方土塁積み直し状況（入佐・小澤2010）

の一つなんですが、この太い線の外側は明らかに修繕ですと報告書に載っています（図31）。これを見ると何度か修繕しているんだろうなと思われます。つまり、土壘の積み直しをやっているだろうということです。

瓦に関しては、最近、小田富士雄先生がまとめられて、細かな年代観を出されています（図32）。ひとまずこの左端のものを築城期と考えて、次に2、そして3が六九〇年代から七〇〇年代の初めぐらいとされています。八世紀の前半まで下がりますと、瓦は大宰府政庁の造営と運動するとされています。さきほど読みましたように大野城も八世紀前半にきちんと動いているという話になるという資料です。

それから、基肄城に関しましても、百濟系車弁軒丸瓦が出ています。小田先生が七世紀後半とされている瓦です（図33－1・2）。重弧文軒平瓦（4）がセットで使用されています。最低でも七世紀末には礎石建物群があることになります。そのあとに八世紀前半の老司系の瓦（3）も出ています。先ほど言いました八世紀後半の「山寺」土器（3）、そして九世紀までは継続して使用されているんだろうと思います。

それから『万葉集』の左注といいまして、ちょっと横に書いてある文章の



図32 大野城跡7世紀後半の瓦（横田・芳沢1979）

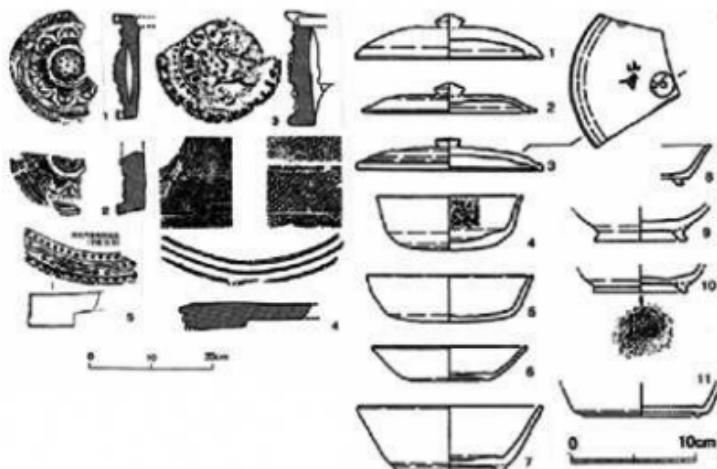


図33 基肄城跡の瓦と土器（7世紀後半～9世紀初）（小田2011）

中に「記夷城」っていう名前が出てきます。これは七二八年です。さらに、大宰府の前面の政厅に関連するところで、天平年間の土層から木筒が出ています。それに基肄城の稲“もみ”でしょうか。田中朝臣さんって人が動かしたっていう話が出てきます。左が木筒です。右がさきほどお話しした軒瓦です。

この図面3が先ほどお話しした「山寺」の墨書き土器です。これはだいたい八世紀後半のものと考えて問題ないと思います。あと、これらの土器は九世紀ぐらいの可能性があります。瓦も同様で、七世紀から八世紀のものがあります。

最後、鞠智城です。七世紀の後半から八世紀初めのところに、軒丸瓦が入っていることにちょっと注目してください（図34）。八世紀中頃はちょっと空白があつて、八世紀末に今度は平瓦と丸瓦がありますが、軒先瓦は出ません。ちょっと性格が変わらぬかなと思っています。土器に関しては、も、先ほど言いましたように、木村さんがやつた編年観でい



図34 鞠智城跡石建物と出土遺物（西住ほか2012）

いますと、八世紀の第2～3四半期の所が抜けています。八世紀の末に土器がまた出てきて、このあととの動きとまさに合っているんだろうなと思います。あと、記録の上で八七九年の記録が最後になります。

この七世紀第4四半期から八世紀第1四半期が先ほど申し上げたように土器が一番多い時期です。そういう意味で綱治の時期だと思っていました。そのあとちょっと空白があります。この空白期、さきほども少しお話ししましたが、八世紀の第2四半期になにも使用されていなかつたのかといいますと、そこまで言えるかどうか分かりません。つまり、考古学の資料はそれが作られた時期の話はできますが、そのあとどこまで使用されたのかということはよくわかりません。ただ、その時期に作られたものが入っていないってことは意味があるかと思います。

これが版築です（写真32）。今日お話しした堰板のことを意識しますと、この版築はいかがでしょうか。

中央で少し沈んでいる感じが  
ちょっと気なりますね。そういう  
意味でもう一度調査される時に、  
こういう部分を意識して調査して  
いただぐと、何か違って見えてく  
るのかなっていう気はします。

それからこの池はすごく大事だ  
と思います（写真31）。今後もし  
調査されるならば、この中を掘つ  
てほしいです。そして、年号を書  
いた木簡を出してほしいと思つて  
います。「秦人」の話もそうです  
し、仏像もそうなんですが、やはり貯水施設は、いろんなものが入りやすい場所になります。

## 五・おわりに

「おわりに」です。皆さんもうお分かりのことだと思いますが、日本列島の古代山城は六六〇年の百済滅

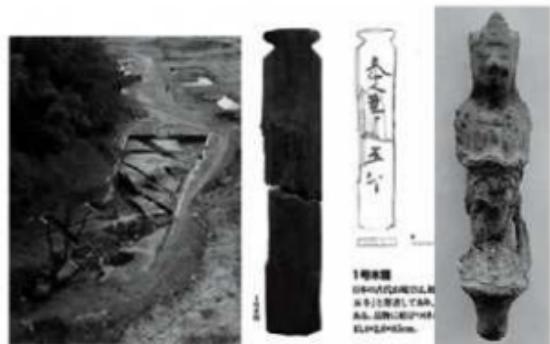


写真31 鞠智城跡貯水施設と「秦人」木簡・百済系菩薩立像  
(熊本県教育委員会1999『グラフよみがえる鞠智城』) (岡山県2010)



写真32 肥後鞠智城跡版築 (古代山城サミット実行委員会2010)

亡、六六三年の白村江の戦いの敗戦を契機として築かれた。これはこれでいいと思います。朝鮮式山城と神籠石系山城に関しては、基本的に同じ古代山城ですが、記録の有無、それだけでなくて、土壘の列石の違いであるとか、建物の有無、遺物の多寡、そして完成・未完成などでもやっぱり多少違いがある。築城年代は七世紀の後半を中心とする年代ですが、その前後関係、重なりの関係は今のところ僕も整理できていません。

築城目的はヤマト政権による对外防御が第一義だと思います。そのあと変わっていく部分も当然あります。特に八世紀の初頭に止まつて、その後、大野城・基肄城、そして鞠智城はちょっと様相が変わるのかなと思っています。これら三つの城は大きい意味では一緒なんですが、細かく見ると違う可能性があります。そして宗教的施設に変わっていく。大野城もそうですが、鞠智城に関しては、これも矢野さんにご案内いただいた時に、下のお宮さんに連れて行つてもらいました。細かな時期はわかりませんが、鞠智城にもお宮さんあるんだなと思いました。

一一時四九分になりました。ご静聴、どうもありがとうございました。

（おもな引用・参考文献）

- ・赤司善彦 二〇一六 「鞠智城の建物景観の推移」「海と山と里の考古学」山崎純男博士古稀記念論集編集委員会
- ・明日香村教育委員会 二〇〇六 『酒船石遺跡発掘調査報告書』
- ・井上裕弘・宮小路賀宏 一九八四 「鹿毛馬神籠石」額田町教育委員会
- ・入佐友一郎・小澤佳憲編 二〇一〇 『特別史跡大野城跡整備事業V』福岡県教育委員会
- ・岡田博・龜山行雄 二〇〇六 『国指定史跡鬼城山』岡山県教育委員会
- ・岡山県立博物館 二〇一〇 『鬼ノ城—謎の古代山城—』
- ・小川秀樹 二〇〇六 『史跡御所ヶ谷神籠石I』行橋市教育委員会
- ・小田富士雄編 一九八三 『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書一〇、名著出版
- ・小田富士雄編 一九八五 『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書一三、名著出版
- ・小田富士雄 二〇一一 『基肄城跡』基山町史資料編、基山町史編さん委員会
- ・小野忠燕 一九八三 『石城山神籠石』小田富士雄編『北九州瀬戸内の古代山城』名著出版
- ・加藤史郎 一九九五 「播磨・城山」「古代文化」四七・一一、古代学協会
- ・金田善敬・岡本泰典編 二〇一三 『史跡鬼城山2』岡山県教育委員会
- ・亀田修一 二〇一四 「古代山城は完成していたのか」熊本県教育委員会編『鞠智城跡II—論考編—』
- ・亀田修一 二〇一五 「古代山城を考える—遺構と遺物—」岡山県古代吉備文化財センター編『古代山城と城柵調査の現状』平成二七年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第二八回研修会発表要旨集、全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会

・亀田修一 二〇一八 a 「日本列島古代山城土學に関する覚書—版築・堰板について—」『水利・土木考古学の現状と課題Ⅱ』大韓民国ウリ文化財研究院

・亀田修一 二〇一八 b 「緒治された大野城・基肄城・鞠智城とその他の古代山城」『大宰府の研究（大宰府史跡発掘調査五〇周年記念論文集）』高志書院

・木村龍生 二〇一二 「第VI章 第一節（二）鞠智城跡出土の土器について」『鞠智城跡Ⅱ』熊本県教育委員会

・木村龍生編 二〇一五 「鞠智城跡出土土器・瓦の生産地推定に関する基礎的研究」熊本県立装飾古墳館分館歴史公

園鞠智城・温故創生館

・九州歴史資料館 一九九八 『大宰府復元』

・草場啓一編 二〇〇八 『阿志岐城跡－阿志岐城跡確認調査報告書（旧称 宮地岳古代山城跡）』筑紫野市教育委員会

・草場啓一編 二〇一一 『阿志岐城跡Ⅱ－阿志岐城跡確認調査報告書総括編』筑紫野市教育委員会

・古代山城研究会 一九九六 『讃岐城山城跡の研究』『溝渠』六

・古代山城サミット実行委員会 二〇一〇 『古代山城サミット展示会 あつまれ!!古代山城』

・猿渡真弓 二〇一三 『女山神籠石』みやま市教育委員会

・末永浩一 二〇〇三 『唐原神籠石I』大平村教育委員会

・末永浩一 二〇〇五 『唐原山城跡II』大平村教育委員会

・鈴木拓也 二〇一二 『文献史料からみた古代山城』『条里制・古代都市研究』二六、条里制・古代都市研究会

・須原継 一九九八 『国指定史跡鹿毛馬神籠石』額田町教育委員会

・総社市教育委員会 二〇〇五・二〇一二 『古代山城鬼ノ城－展示ガイド－』

・田平徳栄 一九八三 「基肄城考」九州歴史資料館編『九州歴史資料館開館十周年記念大宰府古文化論叢』上、吉川弘文館

・出宮徳尚・乗岡実 一九八九 「大廻小廻山城跡発掘調査報告」岡山市教育委員会

・西住欣一郎・矢野裕介・木村龍生編 二〇一二 「鞠智城跡II・鞠智城跡第八・三次調査報告」熊本県教育委員会

・松尾洋平・谷山雅彦 二〇〇六 「古代山城鬼ノ城2」総社市教育委員会

・松川博一 二〇一八 「律令制下の大宰府と古代山城」九州歴史資料館研究論集 四三、九州歴史資料館

・向井一雄 一九九九 「石製唐居敷の集成と研究」「地域相研究」二七、地域相研究会

・向井一雄 二〇一〇 a 「古代山城研究の最前線－近年の調査成果からみた新古代山城像」『季刊邪馬台国』

一〇五

・向井一雄 二〇一〇 b 「駅路からみた山城－見せる山城論序説」『月刊地図中心』四五三、(財)日本地図センター

・向井一雄 二〇一六 「よみがえる古代山城－国際戦争と防衛ライン－」歴史文化ライブラリー四四〇、吉川弘文館

・村上幸雄 一九九八 「鬼ノ城 南門跡ほかの調査」総社市教育委員会『総社市埋蔵文化財調査年報』八

・村上幸雄・松尾洋平 二〇〇五 「古代山城鬼ノ城」総社市教育委員会

・山元敏裕編 二〇〇三 「史跡天然記念物屋島」高松市教育委員会

・山元敏裕編 二〇〇八 「屋嶋城跡II」高松市教育委員会

・横田義章 一九九一 「特別史跡大野城跡VII」福岡県教育委員会

・横田義章・芳沢要 一九七九 「特別史跡大野城跡III」福岡県教育委員会

・渡辺正氣 一九八三 「神籠石の築造年代」斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編『考古学叢考』中巻、吉川弘文館

- ・渡邊芳貴・半沢直也 二〇〇五 「永納山城跡」西条市教育委員会
- ・渡邊芳貴 二〇一二 「史跡永納山城跡Ⅱ」西条市教育委員会
- ・渡邊誠 二〇一八 「古代山城築城とその後」考古学研究会岡山例会シンポジウム資料

## 講演①

### 七世紀後半の国際関係と古代山城

#### 講演者紹介

仁藤 敦史（にとう あつし）

早稲田大学第一文学部卒業。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。早稲田大学第一文学部助手、国立歴史民俗博物館助教授を経て、現在、国立歴史民俗博物館教授、総合研究大学院大学文化科学研究所教授併任。専門は日本古代史。博士（文学）。

# 講演① 「七世紀後半の国際関係と古代山城」

国立歴史民俗博物館教授 仁藤 敦史

こんにちは。昼休み明けの少し眠たい時間ですけれども、四〇分間お時間を借りてお話をさせていただきます。ただいまご紹介いただきました、国立歴史民俗博物館の仁藤と申します。よろしくお願ひします。

私はこれまで山城そのものについての論考は発表はしませんでしたが、周辺を巡る外的条件といいますか、外交と行政については、レジュメ等に書きましたものをいくつか発表しております。最初のきっかけになりましたのは二〇〇五年の高安城での古代史サマーセミナー、そこで発表させていただいたのが、山城について考える契機になっております。

## 【はじめに】

本報告では、こうした議論を前提にして、古代の山城そのものの検討は、お二人控えている専門の先生にお任せしまして、私は築造とか維持管理に大きな要素となります外的条件、これについてお話をしたいと思います。



私のレジュメは13～22ページにわたるところになります。結論的なところは18ページ、ないしは末尾の21～22頁あたりにまとめておりますので、最後時間がなければそこを見ていただけだと思います。一番今回お話をしたかったのは、なぜ山城体制が八世紀の初頭まで続いていたのかという疑問を自分なりに考えてみたいというところあります。

### 【白村江後の倭国の立場】

まず、白村江の敗戦後の倭国の状況として、唐の軍隊が旧百濟領に駐留しており、倭国に攻めてくる可能がかなり後まで存続したと考えられます。レジュメに書きましたように、倭国を征伐するとか、唐人が岡るところなどと表現されてるような、倭国への侵攻の現実的 possibility が、天智朝末期までは少なくとも存在したのではないかと思います。高安城に塩や穀を集積した記事が、前後にあつたり、さらには百濟の兵法を導入してるとか、あるいは、17ページに資料を載せておきましたが、「彼の防人、驚駭みて射戦わん」とあるよう中国からの使者を侵攻軍と誤解するような緊張状態がある。筑紫の防人が唐の使者を侵攻軍と誤解するような緊迫した状況が存在しました。

高安城は、畿内あるいは、大和・河内を単位とし、総領といわれる一国を超えたかなり広域を担当する地方行政官によって造営・管理されていたと考えられます。天智朝の当時においては大宰と呼ばれる役所があり、その下に国宰と呼ばれる国司、そしてその下に評一五十戸という体制をかなり急速に作り上げようとし

ていました。六〇余州という国々の上に、さらに大きな単位があつたのではないかと考えられます。その広域行政単位と山城の整備が連動していると思います。白村江の敗戦以降、國造軍と呼ばれる古い國造（ぐにのみやっこ）から編成された軍隊から、唐の律令に基づいた軍團兵士制への転換が急速に進められていましたと考えられます。

端的な証拠としては、白村江の戦いで軍事動員は準備から渡海するまで、いろいろに事情があつたにせよ数年かかっています。ところが、皆さんご存じの壬申の乱、これは大海人皇子が吉野から出て、そして大津の宮に進軍するまで一ヶ月かかっています。兵を集めまるまでにほぼ半月、そしてもう半月で決戦に及ぶということになつていて、この時間の短縮というものは、この間に大幅に軍團兵士制的なものが整備され、あるいは動員体制が整備されたということの証拠ではないかと思います。

さらに、この時期には古代の山城造営だけでなく近江に遷都しています。これも防衛的な側面が指摘されてますし、もともと都があつた倭京という所には留守司が置かれて、そこには兵庫が置かれたという記載もあつて、白村江以後はこういう防衛体制ないしは内政の整備に努めていた状況が見て取れます。

海外関係に目を転じるならば、唐・新羅は百濟の滅亡後、高句麗征討に集中しますが、高句麗滅亡の後には新羅と唐との戦争が開始されます。13～14ページにあります年表を見ていただくと、現地勢力の登用による懷柔策を取りつとも、唐は百濟・新羅に対して中國的な州県制の整備を進めます。新羅に対しては旧百濟との和睦を強要し、新羅による百濟併呑は認めませんでした。このことが後に唐と新羅との大きな論争・対立点になつたわけですが、共通の敵である対高句麗戦の終了までは、この対立点は必ずしも頭在化しません

でした。高句麗戦の趨勢が決したあと、旧高句麗や旧百濟の残存勢力をそれぞれ自己の勢力に抱き込みながら、新羅による対唐戦争が発生します。この対立は唐が朝鮮の征服を断念する六七七年まで継続します。その対立抗争は、天智朝を超えて、天武朝の初期まで及んでいることが、倭国の防衛体制を考える場合に重要なではないかと思います。唐と新羅の抗争を背景に、天智期には倭国に対する取り込み政策として、旧高句麗や百濟勢力を含めて、唐や新羅から外交使節団が頻繁に倭国にやって来ますが、倭国は必ずしも明瞭な、どつちに肩入れをするかについて明確な意思表示していません。通説では協調外交とか全方位外交とも評されるわけですが、私は、倭国内部には異なる外交路線の対立が存在したのではないかと思います。以下、具体的に見て行きたいと思います。

まず、山城体制の維持と関連する重要な論点としてここでお話ししたいのは、唐との正式な国交回復はいつなのかという問題です。倭国・唐と新羅との国交回復時期を検討すると、新羅使や遣新羅使が行き来するのはいつからかということになりますは問題になるわけですが、新羅とは高句麗滅亡後の六七八年以降とすることに大きな異論はないと思います。ただ、中国と最終的にいつ講和したのかという問題を考える場合は、六六六年の遣唐使が「封禪の儀」へ参列するというのが一つのチャンスでしたし、六七〇年に高句麗が滅亡した時にそれをことほぐ使いが行っているというのが二度目のチャンスでした。最終的には七〇一年の大宝の遣唐使が考えられ、この三回が倭国から主体的に中国と関係修復できる機会であつたと考えられます。

正式の使者ではないと思います。さらに二度目の高句麗平定の賀使についても、この時期はちょうど壬申の乱の直前でして、大友皇子がメインの時期がありました。近江朝廷の中心は大友皇子で、大海人皇子とか、中臣鎌足とか、天智天皇らは、それほど影響力を及ぼせない時期でした。このあと大友皇子は壬申の乱で敗北したことからすれば、唐と仲良くしようとすることはあくまで一時的な和平であつた可能性があります。少なくとも壬申の乱以降、外交方針が新羅寄りに変わりますから、その点で一時的なものの可能性があると思います。結局、大宝の遣唐使というのが、以後も連続する正式な和平ではないか。これが山城体制の転換と密接に関連するというのが、前半の大きな結論です。

### 【天智期の外交】

それでは以下、天智期の外交を資料に則して見てきますが、「善隣国宝記」と呼ばれる中世に作られた書物によると、天智三年にやつて来た唐の使いですが、唐は高句麗征討に先立ち、戦後処理を考えたのですが、倭国のほうが難癖をつけて、これは天子の直接の使いではなく、百濟へ派遣された将軍の私的な使者であることを口実にして追い返しております。すなわちこの段階には、唐使に対し積極的な国交回復の意思がなかつたと考えられます。

翌年には、前年にいちやもんをつけられたので、今度は天子の正式な使者が来たということで、大津京に入京させています。ただし、宇治の道では閻兵があつたという記載がありますように、おそらく、これは唐

への示威行動であつて、必ずしも熱烈歓迎ではなかつたと思われます。この時、「懷風藻」には唐の使いが大友皇子の人相を見たという記載もあつて、唐使と大友皇子の間には交流があつた可能性が指摘できます。天智四年、守君大石と坂合部連石積らを唐に遣わすという記載があります。通説ではこの記載が第五次の遣唐使と評価されていますが、しかし、よくよく見ますと、本文を注で補つているように記載にやや混乱が見られます。位階も、小錦・小山・大乙など、中途半端な位階の記載となつており、混乱した記載になつています。

この時の唐からの使者ですが、翌年の「封禪の会」に参加するための使者と通説的にはいわれていますが、ただ、帰国は一二月と書いてありますので、翌年の「封禪の会」には時間的に間に合わないということが指摘されております。遣唐使、すなわち国交回復の全権大使というふうにはちょっとと考えづらくて、唐人を送る使い、あるいは百濟からの捕虜の使いというような議論が提起されていて、その説が首肯されると思います。その根拠としては、この守君大石という人は元百濟救援の將軍で、帰国記事がありません。小錦という曖昧な位階表記からも、唐の捕虜であつたのではないかと考えられています。

天智四年に唐へ送られた使節のうち、坂合部連石積のみが天智六年に帰っていますが、守君大石の名前は記載がありません。渡唐した白雉四年以後に帰つてきたという記載がないことからすれば、彼は白雉四年から天智六年まで唐にいたと考えられます。このように『日本書紀』の記載は混乱があると言わざるを得ません。実際は、最後の二人、吉士と書いてある二人が行つたのではないかと思いますが、次に見える天智五年

の記載と勘案すると、唐へ行つたとする守君大石と唐の使人を送る坂合部連石積は、別の使節だつたものをまとめて、「日本書紀」が誤解して、合わせて書いたのではないかと考えられます。

天智五年になりますと、「冊府元龜」と「旧唐書」に記載が見えます。天智五年の正月には、国名とか出発の場所を見ますと、東都から出発して倭国、新羅、百濟、高句麗等の諸蕃酋長がそれに従つたとあります。東都から出発したと書いてあるんですが、もう一つの「旧唐書」のほうは、劉仁軌という人が、新羅・百濟・耽羅・倭国の四国の酋長を連れて來たと書いてあって、微妙に内容が違っています。すなわち、いずれも同じような内容ですが、耽羅と高句麗について記載に違いがあります。

白村江の戦いの時にも耽羅は関係したことは記載がありますし、おそらく一〇月二九日に東都を出たグループと、仁軌が連れて來たグループは別グループの可能性があるのではないかと考えられます。留学生の、先ほど出てきました坂合部連石積が東都にいて、彼らを倭国酋長として封神に参加させて、その後帰国したと考えられます。従つて、この時の使者は、倭国と唐との戦争で捕虜になつた人々や留学生らを、唐は正式な使者に仕立て上げたと解釈できます。天智三年以降、消極的対応から積極的対応に外交方針が転換されたとは、考えにくいのではないかと思います。同じような資料がいくつか存在しているのですが、耽羅をメインにしているものと高句麗をメインにしている資料の二系統があることから、このように考えられます。

次に、天武六年には、前年からの高句麗征討に關係していた百濟の鎮将劉仁願が、高句麗と日本が裏で連携することを阻止する使者として倭国にやつて來ます。この時の記載には、「筑紫都督府」という見慣れ

ない名前があり、これは百濟の鎮将が派遣した熊津都督府からの使者と対等な存在として筑紫都督府を位置づける意図があつたと考えられます。都督府同士が対等に外交しているという意味で、あえてこういう記載がなされたのであり、同等・同格の対外的表記として使われたと推測されます。なお、この時の使者は四日間で帰っています。筑紫の大宰府独自の判断により冷淡な対応がなされているのではないかと思います。

『日本書紀』には、白村江の戦いにおいて高句麗が倭国に救援兵を求めたという先例があります。前年には高句麗から実際に救援要請の使者も来ておりますので、唐は倭国が高句麗に援軍を送った先例を警戒していたのではないかと考えられます。反対に倭国も、高安城をはじめとする築城記事があるよう、天智六年に防衛拠点を作っております。警戒態勢を維持しているということが言えるわけで、対高句麗戦の兵力集結というものを倭国は中国の懷柔的な意図とは別に脅威として認識している。外交記事と山城の整備というのは連動している可能性があるのではないかと思います。

天智七年になりますと、新羅使と遣新羅使が見えます。すなわち行く使者と帰ってくる使者ですが、新羅との外交が再開されます。御調船を送り和平を受け入れ、朝貢を求めています。九月一二日には高句麗の滅亡が確実になつてきますが、今回の使者は半島の主導権を狙う新羅の思惑により、新羅が唐と戦争を開始する前提として、高句麗の滅亡後における、唐・新羅による倭国侵攻への恐怖感を緩和するため、新羅と倭国の協調連携という働きかけを開始するもので、唐に対しては対立的に動くという反唐的立場を両国は共通点として持とうとしていたことになります。

しかしながら、新羅使に対する厚遇は『家伝』によると、ある人がこれを諫めたとの注目すべき記載があります。すなわち、この時期におそらく外交主導したであろう中臣鎌足とか大海人皇子の親新羅的・反唐的な政策への反対論も根強くあつたと推測されます。こういう方向に一〇〇%政府内が一致していたわけではなく、唐と新羅のどちらを支持するかという外交的な対立が存在したことことがわかります。

次に天智八年になりますと、河内鯨らを唐に遣わす記事があります。通説では第六次遣唐使として評価されているものです。ただし、郭務悰の記事は、重複だろといわれております。天智期の外交記事の多くは是歳条というかたちで出てきて、日時が不明な、かなり不正確なものです。

『三国史記』を見ますと「國家」、これは唐のことですが、「船舶を修理して、外には倭国を征伐するに託し、其の実は新羅を打たんと欲す」という記事が見られます。これは新羅が当時戦争状態に入るのは、翌年ですが、天智一〇年には「唐人の計るところ」ともあるように、前年からの倭国征討の準備を示すのではないかと考えられます。

天智九年には、唐による日本侵攻が現実化したこととの関係で、高句麗平定を賀すという名目で、倭国から唐に対して急ぎ使者が派遣されています。この時期の政権を見ますと、中臣鎌足が一〇月に死んでおり、天智八・九年には蘇我赤兄が筑紫の率となつていて、すでに大友皇子が近江朝廷方の中心になりつつあるので、そういう意味では、唐と親しくしようとする遣唐使であつたと考えられます。

次に天智一〇年になりますが、天智一〇年には、三年前の六六八年に既に劉仁願というのは排除されてい

て、ここに劉仁願と出てくるのはちょっとおかしいのではないかという議論もありますが、唐からは、これは四年ぶりの使者です。天智六年に百済の熊津に使者を派遣しているのですが、たた四日で帰国させたりするなど極めて消極的な対応だったことは異なって、外交姿勢が少しずつ変化している様子が分かります。この時期において、百済の遺民と唐というのは、基本的に新羅が旧百済領を併呑しようとしているので、そういう意味では対新羅との関係では、旧百済領の維持という観点では一致をしています。

もしそうならば、日本の倭國の伝統的な外交的立場であります百済支援というは、唐と一體的なもの、百済支援は唐支援というかたちで変質してきたのではないかと考えられます。この頃は旧高句麗の残存勢力と新羅、および旧百済の残存勢力と唐が、倭國へ積極的に外交攻勢をかけている時期に当たります。両者ができるだけ倭國を自分の味方に引き込みたいという時期になります。

この時には百済の三部使人を名乗る使者がやって来ますが、三部というのは百済の基本的な行政単位である五部制、東西南北に真ん中の中、これを入れて五部制というわけですが、そのうち西部・北部で反乱が起きている、唐の支配下あつたのは残りの東・南・中の三部しかないので、そこに属する百済人たちが唐の倭國に対する交渉を有利に運ぶため送り込まれてきたのではないかと考えられます。百済三部は、軍事援助も求めています。唐と百済三部使人が一緒に帰国していることからすれば、この時期、唐が熊津という場所に置いた都督府と百済三部使人というのはある意味一体、同じ方向の外交を働き掛けたのではないかと考えられます。

次に、一月になると唐による更なる外交攻勢として、唐軍の倭人捕虜や亡命百済人を送還することが行われ、倭国の支持を取り付けようとなります。唐の章回としては、自分の側に味方になつてほしめため、必ずしも威圧ではなく懐柔策をとります。対新羅外交への牽制という意味があつたと思われます。ただし、唐本国ではなく都督府との直接な交渉であつて、なぜ懐柔策が行われているかというと、当時、唐は吐蕃という大きな国と戦つていて、そつちに力を取られていて、悪いことに吐蕃の戦いに大負けをします。従つて、なかなか大軍をこちらに援軍として回せない時期に、倭国が敵に回らないように、懐柔的な政策をしたのではないかと考えられます。ただ、それでも若干の援軍が来て、薛仁貴を將軍とする援軍が新羅に派遣されたことが『三国史記』に出てきますが、この時の軍の一部が倭国へやつて来たのではないかと見えられます。

二、〇〇〇人以上の人人がやつて来るので、冒頭で申し上げましたように、防人は倭国に唐軍が攻めて来たのではないかと驚いたと書いてあります。そういう意味では緊張状態が続いていると考えられます。

さらに、天智一〇年になりますと、新羅王に天智七年の使者よりも多くの賜物が与えられたということが出てきます。これは旧百済領を新羅が支配するということを倭国に黙認してもらおうという意向があつたのではないかと思いますが、高句麗滅亡後の唐・新羅の対立以降、この時期までは倭国は唐よりも新羅寄りの立場が出ております。しかし、このあと、倭国は、先ほど申し上げましたように、大友皇子が太政大臣になり、百済の亡命貴族を大量に官僚として登用しております。学者や軍事顧問に大量採用しており、大友皇子の側近は旧百済人だらけという状況で、そういう意味では大友皇子の外交政策が親百済、すなわち新羅勢力

から旧百濟領を守るという意味では、親唐的な立場を取つたことが推測されます。

これに対し、既に中臣鎌足は死んでしまい、大海人皇子も吉野に去つてしまつて、まさにこの時期であり、このあと外交方針が変わっていくことになると思います。すなわち政権中枢部の変化によつて外交方針が微妙に唐寄りになつていく時期なのではないかと思います。

天武元年になりますと、新羅を討つため倭国との軍事同盟を迫つてきた中国の高宗による国書が届きます。この時には二通の国書がもたらされ、おそらく二度目の国書が、天智が死んだあとに親唐的な立場を取る大友皇子に与えられたということが想定されます。筑紫大津の客館に安置して、あくまで入朝を認めなかつた天智朝前半の外交方針とはかなり変わっています。天武元年には、郭務悰に対して甲冑、弓矢などの武器を与えています。これは、かなり中国に肩入れをした政策として認められます。唐との、いわば軍事的同盟の証として与えられたと解釈できます。

そういう意味では、新羅寄りに傾いていたものが、天智朝の末年、すなわち大友皇子の執政期には中国寄りに変わるということが指摘でき、亡命百濟人たちに囲まれていた大友皇子が親百濟・親唐的な立場に転換したことが推測されます。ただし、これ以降七〇一年の大宝の遣唐使まで唐との交渉は跡絶えます。これは唐の出先機関である熊津都督府の滅亡や、壬申の乱の敗北による大友皇子の失脚により、親百濟・唐的勢力が急速に力を失つたためと考えられます。しかしこの間、大宰・総領制および山城体制は存続します。再び親新羅派が台頭することにより、唐に対する緊張関係は天武期にも継続したと考えられます。

しかし持統朝には振り戻しが来て、再び新羅とは緊張関係に入ります。天武の死去を新羅に伝えようとしましたが、使者の地位を巡って争い、その役目を果たさず帰国したとか、新羅からの使者の地位が低いことや、朝貢の船が一隻だけであつたことを非難して、献上物を返還しているように、持統期に入ると天武期の密接な関係とはやや異なる対応が両国でなされます。この転換は無視できないもので、やはり外交的な緊張関係、唐に対して緊張を持つのか、新羅に対して緊張を持つのかは微妙に揺れ動くのですが、全体としては対外的な緊張関係は大宝の遣唐使あたりまでは統くのではないかと考えられます。

### 【大宰・総領と国守】

それでは最後に、大宰・総領の話をしたいと思いますが、もう時間がなくなつてきましたのでかいづまんでお話をしたいと思います。大宰・総領制ですが、私見では臨時使者的な東国総領が、いわゆる大化革新の時に派遣されるんですが、本格化するのは白村江の敗戦後に、おそらくは全国的規模で、軍事動員を前提として大宰・総領制が本格化したと考えます。持統五年の段階で、二九年前に筑紫の大宰府典がいたという記載がまずあります。さらには、熊津都督府と筑紫都督府が対等な関係で記載されています。そして、筑紫の大宰という用語や、吉備の国守という表現も見えてています。

壬申の乱の時に出てくる記載で、大海人皇子が勝利したあとに難波の小郡宮で西国諸国の国司たちから、倉庫のカギや駅鈴・印を取り上げる。すなわち権限を剥奪したという記載が出てきますが、これは西日本の

平定を、彼らの帰服により確認するためにおこなつたセレモニーではないかと思います。律令成立期の国司（国宰）が必ずしも屯倉（みやけ）とか、正倉の管理権を有しておらず、むしろ上位の大宰とか總領と呼ばれる人がこういうものを管理しているという、そういう流れが見て取れるかと思います。たとえば、大倭と河内の国境に置かれて大宝期まで存続した高安城について、畿内の田税を一括して集めたと書いてあつたり、あるいは周防や筑紫の大宰には軍事物資を集めたとあるように、大宰總領は一貫して大きな軍事・財政権を有していたことが確認されます。

天武朝後半期になると、周防とか伊予にも新たに總領が見えます。そして、「大宰・国司皆遷任」とあるように、この時期から交代の期限とか昇進方法などが定まって、持統朝になると大宰總領と国司の併存というものが確認され、制度的に整備されてくると考えられます。

大宝令の直前になると、筑紫の總領とか吉備の總領、周防の總領などの名前が見えて、少なくとも西日本にはこうしたものが置かれたことが分かるかと思います。最後のほうに總括をした表を掲載しておきましたけれども、筑紫・周防・伊予・吉備辺りは確実で、その配下に山城が含まれています。そして、可能性としては畿内とか東国などにも同じようなシステムが試行された可能性があると考えます。

この山城と大宰總領の関係を示すものとしては、大宰府が三つの城を管轄したとか、大宰府の役人が西海道諸国の稲を管理していることが見えています。

## 【おわりに】

このように、七世紀後半には広域行政組織として大宰総領の存在が確認され、大宰府が筑前の国を帶したと同じように、大宰の帶国制度が機能していたと考えられます。西日本において、筑紫・周防・伊予・吉備の四地区における大宰総領制の施行は山城の存続と関連して確實ではないかと思います。畿内と東国においても正式な用語は見られませんが、高安城などとの関係において、天武天皇の信濃への遷都計画などとも連動して、広域行政の単位が存在した可能性は高いと思います。

大宰総領が対外防衛において大きな意味を持つていたことについては、「日本書紀」によれば、壬申の乱の時に筑紫の大宰の兵を出せという募兵の使者に対して、募兵を拒絶した総領の回答に、筑紫の国は外敵を防ぐために城を造るということが述べられており、まさに大宰の設置目的がここに端的に表現されていると思います。最後早口になりましたが、以上でございます。ご静聴ありがとうございました。

## 講演②

### 朝鮮式山城の特徴

—主に兵站と備蓄について—

#### 講演者紹介

赤司 善彦（あかし よしひこ）

明治大学文学部卒業。福岡県教育委員会、九州歴史資料館、九州国立博物館、福岡県教育庁総務部副理事兼文化財保護課長を経て、現在、大野城心のふるさと館館長。大宰府跡の発掘調査に長年携わる。専門は日本考古学。

## 講演② 「朝鮮式山城の特徴——主に兵站と備蓄について——」

大野城心のふるさと館館長 赤司 善彦

みなさんこんにちは。著名な古代山城である大野城跡のある大野城市に今年開館しました大野城心のふるさと館からやつて参りました。先ほど鞠智城のマスコットキャラクターである「ころう君」が舞台に出ていましたが、大野城市的マスコットキャラクターは「大野ジョー」君と言います。大変人気がありまして、現在行われている「ゆるキャラグランプリ」では、今日の段階で暫定六位に付けています。大野ジョー君にも投票よろしくお願ひします。

私の話は本日の資料編の一三三頁からです。これに沿つてお話しいたします。皆さんお座りの椅子の右袖の下からテーブルを引き出せますので、資料集をその上に載せてお使い下さい。

### はじめに

さて、私に与えられましたテーマは朝鮮式山城です。朝鮮式山城とは文字通り、古代の朝鮮半島に源のある山城ですが、研究者の多くは一般的には用いま



せん。あくまで学史的な用語として使っています。対をなす神籠石式山城と併せて実体としては古代山城という言葉で統一しています。

朝鮮式山城という用語を用いる際には、もう一つ『日本書紀』などの古代の出来事を記した日本の正史などの史料に城の名称が記してあるもののことです。これに対して神籠石式山城は史料に名称が登場しない城のことです。

朝鮮式山城は『日本書紀』・『続日本紀』に十一城の名称が記載されています。この他にも福岡県糸島市の怡土城や博多湾岸にあったとみられる大津城なども史料に名称が記載されているのですが、狹義の意味での朝鮮式山城からは除外しています。このうち現地で確認され一般的に認定されているのは僅かに六城だけです。

### 一・朝鮮式山城とは

さてこれらの築城の契機は、先ほどからお話ししている六六〇年に唐と新羅によつて百済が滅んだことに始まります。百済滅亡の方を受けて救援軍を百済の遺臣から要請を受けて、倭国（日本）は援軍を出します。友好国に援軍を出すというのは、まさしく我が國初の集團的自衛権の行使に他ならないのですが、結局は六六三年に白村江で大敗してしまいます。その後、唐や新羅と戦争状態に入つてることから、次は我が国が攻められるかもしれないために、防衛戦を構築することになります。（図35）

白村江敗戦の翌年に防人を配備したり烽火を配置したりして、さらに水城を築紫に築きます。それ以降六六七年あたりまで大野城などの古代山城の築城記事が続いています。それからは、鞠智城・大野城・基肄城などの修理など修理の記事が六九八年まで続き、七〇一年からは今度は廃城記事になります。七一九年まで廃城記事です。わずかに五十年間に、築城・修理・廃城の時期が凝縮されています。非常に短命だとうことが史料から見えてくる特徴です。

二・朝鮮式山城の特徴

立地

さて文献史料が語る古代山城の姿は、これまでにお話がありましたので、実際の遺跡についてみたいと思います。山城は九州北部と瀬戸内そして大和に設置されるのですが、今日は皆さん、朝鮮式山城は初めて名前を聞いたという方も多いと思いますので、これからは九州北部の弾丸ツアーデどんとん写真を紹介しますので、皆さん写真ツアーに参加して

まずこれは九州北部の福岡市の南側に入つたところに太宰府天満宮もありますが、古代の大宰府政庁が



図35 白村江海戦の図

あつた場所です。その航空写真です。（写真33）大宰府政庁の北側に大野城が築かれていました。ところで、仮に唐・新羅の軍隊が攻めてくるとしたら、当然海から船でやつてきて上陸してきます。対馬・壱岐を経由して玄界灘の沿岸から上陸するのですが、どこからでも上陸できません。断崖が多くて湾のようなところではないと上陸できません。鎌倉時代のモンゴル軍が侵攻してきた時と同じで実際には航路がありますので、博多湾を目指して上陸することが想定されます。だいたい博多湾あたりに上陸するのはまちがいないと思いません。

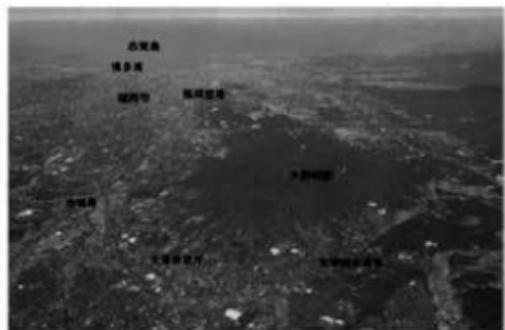


写真33 太宰府上空より博多湾を望む



写真34 水城跡と大野城跡

これは大野城と水城です。（写真34）博多湾から内陸の福岡平野の一番奥のところに狭い平野があるので、幅一・三キロほどの地峡帶がありまして、そこを水城という上塙を築いて遮断してしまうのです。こ

こは現在でも九州の高速道路や鉄道などの交通路が狭い場所を通過する交通の要衝です。ここを完全に塞ぐために水城を築くということにしたのです。

『日本書紀』には「水を貯えしむ 名付けて水城という」と記されていますが、ではどこにどのように水を貯えたかというと、調査の結果、水城の土壙の前面（博多湾側）で幅六〇メートルの濠が発見されました、外濠を設けて、ここに背後から水を流して貯えたと考えています。しかし、濠がない部分があり、高低差のあるところなのでどのように溜めたのか判明していないこともあります。この考え方は確定していません。それからもう一つ、次は大野城です。水城に隣接した山、四王寺山といいますが、この山中に大野城が築

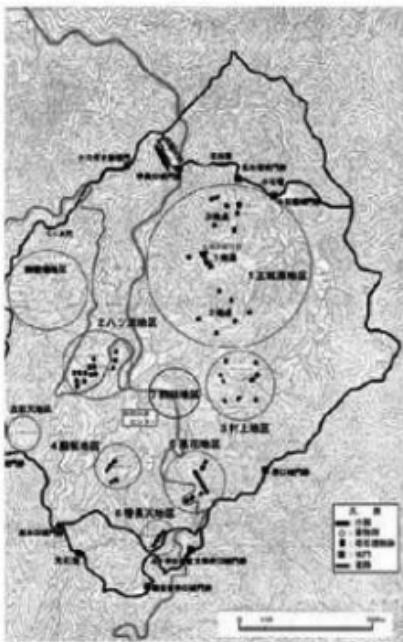


図36 大野城跡遺構配置図



図37 大野城跡レーザー計測図

かれます。写真のように朝鮮式山城と  
いう山城は非常に規模が大きいので  
す。（写真33）この図の城壁はイラス  
トでデフォルメしていますが（図38）  
城壁が万里の長城のように描かれてい  
ますけど、ここまで城壁は明瞭なもの  
ではありません。

内部にはいろんな倉のような建物が  
あり、また城壁には城門があります。  
古代山城を構成する要素には、このよ

うな城壁が最も重要ですが、土塁や石垣があります。そして建物としては城門があり、各種の建物が造営さ  
れていたと考えられます。ただし、古代山城では建物がよく確認されている例は実は少ないので  
さて、大野城の代表的な城壁を紹介します、百間石垣という大野城の北側に設けられた石積みを主体にし  
た城壁です。（写真34）名前の通り百間の長さがあります。古代の尺度では一間が一・八メートルですので、  
一八〇メートルあります。おそらく偶然ではなく当初から百間という長さでの設計があつたと思われます。  
規格に厳しい律令社会ならではだと感心します。高さは七メートルあります。



写真35 大野城百間石垣



図38 大野城太宰府口城門建物イラスト

それから、大野城には内外の出入りをするための城門が設けられています。この写真は復元建物です。（写真35）次に城内にはこの写真のような高床式の倉庫群が整然と建物の棟方位を合わせて配置されている状況です。（写真36）

写真37 基肄城跡土壘



写真36 大野城跡八つ波礎石群



次は、大野城の南方の佐賀県と県境にあります基山に築城されているのが基肄城です。こちらも大野城と同じ年に築かれた朝鮮式山城です。両者の間は七～八キロ離れています。その間には現在の太宰府市と筑紫野市所在する小平野といいます

か盆地状の地形がありまして、古代に大宰府政庁や大宰府の都市が形成された場所ですが、これを挟んで北に大野城、南に基肄城があるということになります。大宰府を守護する山城です。

この写真は基肄城の土壘線です。（写真37）草が茂っていますが明確な土壘遺構を現地で見ることができます。城壁の土壘線の規模が大きく周囲が五キロあります。大野城も六キロ以上あります。大野城の場合ですと、現代人は足が弱いので私でもおよそ一日はかかります。ですから戦国時代の山城とは規模が違つて大きいということがお分かりになると思います。

基肄城の築城に統いて六六七年に対馬の金田城・讃岐の屋島城とともに「大倭高安城」が築かれています。さて、次の写真は大和の高安城です。(写真39) 先ほどのお話をもありましたが、「日本書紀」では、大野城・



写真38 基肄城跡で新しく発見された水門



写真39 高安城跡から大阪方面を望む

基肄城の城壁は谷を渡るところは石塁を築きます。そこには水を外に流すための水門があります。古代山城は山の地形を利用していきますので、梅雨や台風などの大雨で土砂崩れが最も恐ろしいために、水の処理が重要になります。そのため石塁で強固にして水の通り道である水路を内部につくりますが、これを水門と呼んでいます。基肄城の場合には大きな水門が一つありました。人が中を通れます。今も水が流れています。数年前にこの石塁の解体修理をされた折に、水門が三つ発見されました。写真の人が立っているので大きさが分ると思います。(写真38) この三つと先ほどの大きな水門は作った時期が異なり、次期差があると考えています。

地図をご覧になるとお分かりのように、現在の大坂府と奈良県の県境にありますて、国宝『信貴山縁起絵巻』で知られています信貴山と、高安山をめぐるようにして築城されているとみられます。写真はこちらが東側の大坂方面、そしてこれが西側の飛鳥方面を眺めたところです。（写真40）

この写真は木立の中に残る土壘です。（写真41）土壘が大変低いので明瞭ではありません。そのようなこともあり高安城の城壁線はまだ確定していません。大正時代以来さまざまな復元案があります。高安山付近の城内にはこのように大野城の倉庫建物と同じような建物の礎石があります。（写真42）文献史料では高安



写真40 高安城から飛鳥地域を望む



写真41 高安城内の土壘



写真42 高安城跡の礎石建物群

城は八世紀初めには廃止されたことになっていますが、ここから出土した土器は八世紀後半の土器でした。奈良時代を通じて高安城は存続していたと考えられます。



写真43 屋島城跡遠景



写真44 屋島城跡遠景

の山の頂上に城壁が部分的に発見されています。下から見るとこのような写真になります。(写真44) 拡大するとお分かりのように、絶壁が自然の要害になりますので、あえて城壁を作ることはありません。自然の城壁ですね。たぶん敵が攻めてきてもここを登ることは不可能です。そのような場所に屋島城は

次は、高安城と同じ年に築城された讃岐の屋島城です。香川県高松市に所在します。瀬戸内海を望む海辺の高い山にあります。空撮した写真ですが、(写真43)ここはメサ地形というのですが、周囲が侵食されたテール状の台地のことですけども、そのような独立した山です。断崖絶壁の地形です。今は陸続きですが、もともとは独立した島だったのです。そのため屋根のような島という意味で屋島と呼ばれていたようです。こ

築かれています。



写真45 屋島城跡の整備された城門



写真46 対馬浅茅湾

この写真是三年前に復元整備された城門でして、(写真45)ちょうど開幕式の時の様子です。この城門の前面は、高い段差があります。亀田さんの話にもあります。韓国では懸門という漢字をつけています。梯子を悬けるので、懸門ですね。はしごを悬けないと

それからこちらは、長崎県対馬市の金田城です。地図にありますように対馬は南北に約六十キロと長く上島と下島からなりますが、その間ぐらいたい多島海といいますかおぼれ谷のような複雑な地形をした湾があります。本来は浅い湾という意味かもしれません。この浅茅湾ですが天然の良港となっています。

黒潮や日本海の荒波の影響を受けない穏やかな内海です。（写真46）

二年前に金田城へ海からカヌーで行く機会がありました。この写真がそうですが、（写真47）海の背後の山に金田城があります。湾を回り込んでこの山の背後に行きますと、こちらの写真のように城壁線が見えます。（写真48）金田城の城壁は海に面しています。しかもほとんどが石積みです。他の古代山城の城壁は土塁が多いのですが、ここは石積みでして、あまり土がなかつたからではないかと思います。現地の状況でかなりしづらさも土塁にこだわっているのではないかと思います。

これは城門の写真です。（写真49）ずいぶんと壊れていきましたが、現在はきれいに整備されています。こ



写真47 金田城跡遠景



写真48 金田城跡石壁による城壁



写真49 金田城跡三ノ城戸城門

こも先ほどの屋島城と同じ懸門構造の城門です。前面に段差があり正面から見ると、城門の石垣が凹形になるものです。新羅山城の特徴的な構造ともいわれていますが、このような門の構造が朝鮮式山城に採用されているという共通点があるといえます。共通点は石積みにもあらわっています。写真のように自然石を割つて大きさをそろえた割石を積み上げています。金田城の石積みで後世に積まれたところがはつきりわかるところがあります。写真是城壁の外壁に設けられた角形の突出部です。（写真50）下は乱石積みという加工をあまり施さない石英斑岩の石材を積み上げますが、上の方は加工した平板な砂岩を整層積みしています。上は江戸時代の寛政年間に外国船出没に対する防備のために、金田城の一部が再利用された時の石積みです。突出部は防御性を高めた城壁構造ですが、明確なものはお大野城にはありません。

次は、熊本県の鞠智城です。説明については、先ほどビデオで調査成果を皆さんご覧になつたのでここでは割愛します。

これからのはこれまで個別に紹介してきた朝鮮式山城の全体的な共通点性や特徴は何かということを考え



写真50 金田城跡一ノ城戸突出部

えたいと思います。最も重要なことは築城技術です。どのように築城したのかということを知りたいのですが、多くの一般書籍で語られているのが、「日本書紀」に百濟の達率を遣わして築城したという記述です。達率というのは百濟の貴族階級のことです。つまり、すべて百濟の築城技術でつくられたという解釈がある意味ステレオタイプ的なされています。

しかし、そこはよく考えないといけないわけです。築城技術と一口に言つても、軍略的に城壁をどのように巡らせるか、あるいはさまざまなしきけの配置を設計企画する軍事技術があります。次に城壁などを築くために土塁構築や石を積み上げたり、あるいは地形を掘削して整えたりする土木技術があります。さらに城門建物や倉庫などを建てたり、瓦を焼いたりする建築技術があるのです。

これら軍事技術・土木技術・建築技術すべてがほんとうに百濟の技術であるのかというと、そんな単純なことではないのです。たしかに百濟人が関与したと史料から読み取れるのだから、古代山城は百濟人が作つたと考えるとストーリーとしてとても分かりやすいと思うのですが、考古学的には日本古来や在来の技術との関わりは考える必要があるのです。

土木技術は弥生時代に海外の新しい技術が持ち込まれて発達しています。先ほど亀田さんのお話にもありました、敷粗朶工法や敷築工法という要するに軟弱地盤の上に枝葉を敷くことや、土塁になかに葉っぱの層をかませるというような工法は、弥生時代の壱岐で発見された原の辻遺跡の船着き場で確認されていますし、大阪の七世紀初めに築かれた狭山池の堤防でも用いられているのです。つまり山城築城以前にこうした

技術は日本に定着していたのです。

それから土塁を築く版築工法ですが、版築の版は板のことで築は土を突くという意味です。つまり板で囲つた土を木の棒などで捣いて固く締める工法でした。本来は中国の黄土地帯の樹木がない地域で、建物の壁などを黄土の粒子の細かな土を捣いて作ろうとした発想が始まりです。しかし、非常に硬いのです。その技術が朝鮮半島を通じて日本列島に入ってきたなかで、少しずつ変容したのは間違いないと思います。古墳時代の終わりごろに仏教の寺院建築がもたらされた時に、寺院の基壇つまり建物の土台をつくる技術として、すでに六世紀代に技術的には知られているのです。

今日は触れませんが、七世紀の日本列島にも匠（たくみ）の人たち、職人さんですね。石工の人たちとか古墳の石室を積み上げた人たちもたくさんいたはずです。彼らが果たして百濟の技術を簡単に受け入れたのかどうか、つまり百濟人の言うままに自分の技術は使わずに従順に働いたのかどうか考えることも想像力として大事です。歴史とはいえ生きていた人たちのことを考えなきやいけないということです。

まずは軍事技術からみていきたいと思います。朝鮮式山城の特徴はとにかく、城壁の範囲が広いということです。規模が大きいのです。

次に山の高い位置に築城しているということです。ところで、「日本書紀」には山城という名称はありません。あくまでも城、音読みでキと書いてあるだけなので山城という名称も適当でないかもしません。ただし、平野でなく山を選択しています。どうして山を選んだのか。これはたぶん軍略というか軍事技術に関

わる事だと思います。それはなんといっても山の上につくる山城にはメリットがあるということです。

皆さんは山に登った時にまず何をなさいますか。高い山の山頂に到着したら、お弁当を開くという方もいらっしゃるかもしれません、やつぱりまずは眺めですね。周囲だけでなく眼下の眺望を確認されると思います。これは高ければ高いほど遠くが見えますし、高所の一番のメリットだと思います。敵の動向を観察することができるるのがメリットです。そしてその敵の動向に合わせて兵を動かせます。下の平地からは山の人たちはなかなか見えません。城壁から覗いている人を下からは見ることができません。それに平地の敵兵は道を通りますので、視認しやすいのです。

また、山を守るというのも戦では攻めるよりもメリットがあります。下から登ってくる兵は大変です。ふうふう言いながら登ってきて、そこに山城側の兵が待ち構えているのですから。さらには当時武器の主力は弓矢です。下から上の兵を狙って矢を飛ばしてもなかなか当たらないでしょが、上の兵士だつたら、前面のいる兵士だけでなく後方の兵士にも当たりますし、重力で威力も増します。

このように高所を陣取ると大変メリットがあり、敵の人数より少なくとも大丈夫だというのが山城の利点です。

ただし、デメリットもあります。高ければ高いほどいいかというと、食料や武器などの補給が困難になるのです。食べ物がなければ餓死するわけで、戦乱に明け暮れた戦国時代の場合にも食べ物の確保が大変でした。時には略奪するしかないわけでして、近代も含めて戦争では戦闘で死ぬより餓死者の方が多いという話

もあります。いかに補給路を確保して前線に物資を届けられるかが戦の勝敗を握っていると言つてもいいで  
しょう。

少し話が脱線しますが、高い山に山城を構えて陣取つても、平地の敵兵はその山をスルーして、横を通つ  
ていけばいいじゃないかという人がいます。実はそんなことをやつても意味がないのです。仮に新羅や唐の  
軍隊が上陸してきて、福岡平野の奥にある大野城をスルーしても、では彼らはどこに行けばいいのでしょうか  
か。近畿を目指す道をして居るのでしようか。そもそも近畿がどこかも知らないと思います。手引する人が  
いてもどうやつて物資や進むルートを確保できないと思いませんし、道を進んでも夜に大野城から降りてきた

兵士に背後を突かれたら大混乱です。戦では兵力と兵力を  
使って相手の兵力をつぶさなければなりません。地勢に明  
るくない海外の兵团が、九州北部の山城や軍団のいる拠点  
をスルーすることはないと私は思います。机上のゲームではな  
いのでスルーするという発想がないと思います。

さて、眺望の話をしましたが、ここで最近実施した古代  
山城の眺望分析について紹介します。このスライドは大野  
城の土堀線のいくつかの地点を選んで GIS（地理情報  
システム）の手法で眺望分析したものです。黒く網をかけ  
たところが眺望できる範囲です。山の頂上に登つても、実

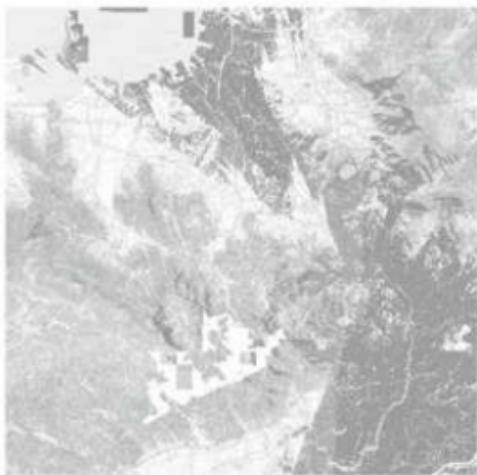


図39 基肄城跡可視領域

際には樹木に覆われていて下界は何も見えません。デジタル地形図を作成して地図に示したのですが、大野城の場合には北の福岡平野それから博多湾の方角が可視可能範囲です。東南に阿志岐城という山城があるので、これが邪魔して眺望がよくありません。南の基肄城はよく視認できます。こちら側は実際に大野城の土塁線からも確認できます。北側の一部分は視認できません。ここには海に向かつて延びる山稜があるからです。

このスライドは基肄城の眺望分析です。（図39）基肄城も樹木が高くて実際にはすべての山頂稜線からの眺望はできません。特に北側は見えないのでですが、デジタル地形図で可視範囲をこのように示すと、博多湾も一部を見ることが実は可能なのです。見えないと思っている研究者が多いのですがそうではありません。しかし、部分的にしか見えません。やはり眺望が開けているのは東と南です。筑紫平野と呼んでいますが、筑後平野と佐賀平野を合わせた呼び方ですが、この写真のように遠くまで見通せます。天気がいい時には島原の雲仙普賢岳まで見えることがあります。基肄城の場合には、北側の博多湾側ではなく、筑後川によって形成された筑後平野をにらんで築かれているということがお分かりになると思います。

このように結論的に言いますと、古代山城の立地は共通する特徴として高所に位置することで、それは眺望ということを意識した選地だということです。戦における眺望との関わりで、「日本書紀」によると、七世紀の同時代の事例として壬申の乱というのがあげられます。先述した大和の高安城は大阪平野と奈良盆地の間に位置しています。天武朝の軍が高安城を占拠している時に、河内方面の近江朝の軍勢の動向を把握

して、近江朝軍の迎撃に降りていったという話が掲載されています。

戦闘では高いところを陣取り、敵の動向を把握し峠などの攻撃に適した場所を封鎖するなどして、迎撃つことが戦術的に重要です。朝鮮式山城はそういうよく似た立地の特徴があります。鞠智城は立地する標高が低いです。けれども平地との比高差は結構ありますので、やはり他と同じように周辺への眺望の確保に加えて、断崖のような自然の要害という好条件を兼ね備えているので、眺望第一で選ばれた場所だったと思います。

こうした眺望のために高所に位置し、規模が大きいというのは朝鮮半島の三国時代でも百濟時代末期から採用されたもので、どちらかというと百濟の後ではないかという見方もあるようです。

## 土塁

次に土木技術を見てみたいと思います。このスライドは大野城の土塁の版築の状況です。（写真51）多くの土塁は、万里の長城のような城壁の両側が壁ではなく、外壁を作りますが、内側は丘陵斜面にもたせ掛けるようにして土塁を築く片壁式ですね。上部は両壁式になります。この盛り土して突き固めるというやり方



写真51 大野城跡土塁

です。この大野城で確認できた版築技法の堰板を紐や棒でひっぱつて留める方法は、まちがいなく百濟の扶蘇山城で調査の際に発見された技法で、韓国の研究者にも確認してもらいました。

それから先ほどの亀田さんの話にありました版築でなく、土を上から棒で掲ぐだけの土壠構築の技法があつたのではないかということですが、これは重要な指摘で、同感です。

盛り土はお墓作りにみられます。すでに弥生時代の佐賀県吉野ヶ里遺跡の墳丘が構築されています。前方後円墳と呼ばれる古墳も非常に高い墳丘が構築されています。特に六世紀以降の古墳の墳丘は高くなることが指摘されています。版築技法ではなくとも土木的に高い盛り土が可能なのです。例えば、どのう積みといがあります。版築の堰板の代りにどのうのようなものを積み上げて一定の高さにしたら、その内側に土を盛り上げていく方法です。在来工法でも高い盛り土は可能だというのは知つておく必要があります。すべてがその時代に伝えられた渡来の新技術だと考えるのは間違いだというご指摘だったと思いました。

次に石積みや石垣があります。これには縦石垣と貼石垣があります。これも朝鮮式山城に特徴的な石積みの姿です。先ほど紹介した対



写真52 大野城跡百間石垣石壁

馬の金田城は総石垣です。大野城の百間石垣も総石垣の場所と上に行くほど貼り石垣が用いられています。写真にありますように岩盤に石垣を築き、控えの少ない内部にグリ石を充てんします。（写真52）写真が小さくておわかりにくいのですが、背後の控えがほとんどないのでグリ石も入れられていない事例もあります。

### 石積

また石積みでは石材の加工、ほとんど行わず、割った状態の割石を用いることが多いです。神龍石式山城には石材を加工した切石を使う事例も多いのですが、朝鮮式山城では割石で、しかも大人二人が持ち上げられる程度の大きさが多いですね。城壁の上部になるほど石材が小さくなります。これは戦闘の折りには、落とし石や投石に使うために軽い石を使用するという魂胆かもしれません。

さて、この大野城の百間石垣というとても豪壮な石垣があります。私の勤める大野城市の新しい博物館には、この百間石垣をレプリカで再現し、その地上からの高さをクライミングで体験してもらうコーナーがあります。ここにも大人気です。

石積みで付け加えますと、石垣の内部を充てんするグリ石ですが、近世のお城の石垣は砂利石を持ちることが多いですが、朝鮮式山城では人頭大のゲ



写真53 大野城跡増長天地区礎石建物跡

リ石を用いることが特徴です。

### 施設

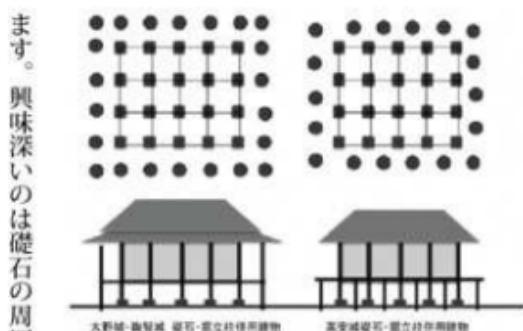


図40 碓石・掘立柱併用建物模式図



図41 大野城跡増長天地区復元イラスト

ます。興味深いのは礎石の周間に掘立柱式の柱穴が巡っています。整然と並んでいます。

調査で判明した痕跡や礎石と柱穴のあり方から、この図のような変わった建物が復元できます。（図40）瓦葺きの屋根からなる木造の高床倉庫です。二重の屋根だったと考えられます。こういう珍しい建物の礎石にお注目すると、礎石・掘立柱併用建物と呼んでいます。非常に特殊ですがこのタイプのものが古代山城にのみ存在しています。大野城だけでなく鞠智城にありますし、さらに遠く離れた大和の高安城にもあります。ただし、高安城の掘立柱穴はすこし並びが異なります。

次は朝鮮式山城に特徴的な建築技術です。特別な事例を紹介します。この写真は大野城跡の増長天地区で確認された礎石建物です。（写真53）このような建物の床を支える柱をくまなく碁盤の目のように立てたものを総柱建物と呼び、高床の倉庫だったと考えられています。ただし、高安城の掘立柱穴はすこし並びが異なります。

大野城の増長天地区の復元イラストがこれです。（図41）瓦屋根の外側にさらに二重に屋根があります。この外側の屋根はある段階で取り払われてしまします。臨時のな屋根だったのです。礎石の周囲を巡る柱穴は、私は倉庫を取り巻く板塀と考えていましたが、最近の調査で、柱穴の外側に雨落ち溝が伴っていることが分かりました。つまり、屋根がかかっていたたということになります。以上、このような特殊な建物も朝鮮式山城の建築に共通する様式です。

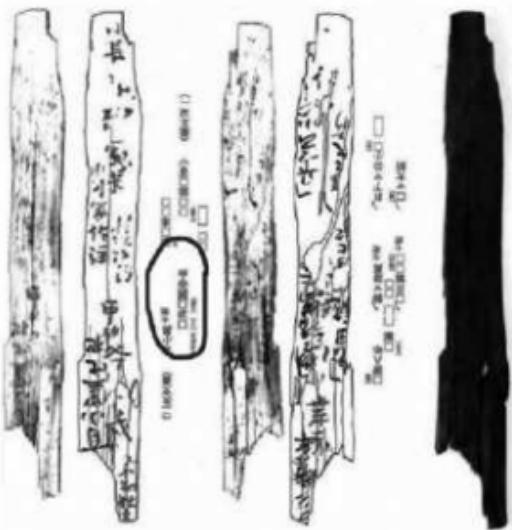


図42 唐津市中原遺跡出土木簡

### 三・古代山城の兵士

さて次は古代の兵士について二六頁あたりになりますが、中央政権は、白村江敗戦後にそれまでの豪族主体の軍事のあり方から、中央主権的な軍事体制を強化しようとします。その柱は徵兵制が敷かれていくのですが、そういう人たちが古代山城に配備されていきます。その証拠となる資料が、佐賀県唐津市で出土した木簡です。甲斐国の戊人に関する内容です。戊人とは防人のことです。今の山梨あたりから徴兵された防人が、任期

が終わつた後も今の唐津あたりにそのまま帰らずに残つたことを示すのだと思います。（図42）

この写真は七世紀末頃の木簡です。太宰府市の松本遺跡から出土しました。「兵士」という文字があります。嶋評という地名が記載されています。嶋というのは今の福岡市西隣の糸島市の地名です。そこの戸籍の作成についてですが、徴兵していることが分かる資料です。つまりこの七世紀後半になると、先述したように各地の豪族の寄せ集め軍隊ではなく、統制の取れた軍團制という軍事制度に移行していたことを遺物で確認できる貴重な文字資料です。古代の大宰府では、この軍團制と海浜部を守護する防人制の二本立てでした。軍團は今の県に当たる各国に置かれていました。

#### 四・朝鮮式山城の兵站

ところで、このような軍事機能というものが、本当に朝鮮式山城の中で遺構や遺物として確認することができるのでしょうか。兵站機能が重要と言いましたが、実際に武器や武具あるいは食糧などを大野城に備蓄していたのかどうかお話ししたいと思います。

大野城の建物跡の変遷をみると、主城原地区という大野城の北側にあって、見晴らしも良く比較的広い場所があります。ここでは建物が長期間にわたつて何度も造営されていますので、その前後関係が把握できました。基本的に建物というのはそれほど建て替えられません。掘立柱建物という建物の場合、これは屋根を支える柱を礎石の上に据えるのではなく、地面に穴を掘りそこに柱を埋め込む縄文時代以来の建築です

が、考古学的には二五年ぐらいで柱が朽ちるので、建て替えるとよく言われているのですが、そんなことはないのです。奈良の正倉院は千年以上、今日までその姿を保っています。もちろん数十年ごとに補修されていますが。なので、火災などの災害にあつたとか、よほどの理由がないと建て替えられません。主城原地区はかなり頻繁に建て替えられています。その原因はよく分かりません。しかし、この地区的建替が発掘調査で分かつことで、大野城の建物の変遷が明らかにできました。

七世紀後半の築城期の建物は、掘立柱建物の側柱建物です。内部が土間構造の建物、要するに高床ではないものが建てられます。次に掘立柱建物の高床建物に変更されます。ところで、今日の発表では建物の規模を示すのに間数（けんすう）を用います。一間、二間、三間というふうに言います。それから建物の平面プランは長方形に成ることが多いのですが、の短辺を梁間、長辺を桁行といいます。それから側柱建物は長方形に柱が並んでいて、内部に柱がありません、これに対して内部に幕盤の目のように柱があるものを縦柱建物と呼んでいます。重量のある床を支えるために、何本も柱があるのですが、これが高床の倉庫です。

これらの建物のある場所からは、先ほど申しましたように軍事施設なので弓矢の矢や武具などが出土すると思っていたら、全く出土しません。実は日本の古代山城からは武器・武具が出土しません。これまでに確認できたのは鞠智城で弓矢の鉄鏃が一点だけです。韓国の山城では武器や武具が見つかっているのですが、日本の古代山城では全く出土しないのです。もちろん、文献史料には大野城に城庫の名称や、鞠智城に兵庫の名称が出てきますので、存在していたのはまちがいないのですが、出土しません。

が、痕跡がないのです。つまり山城内に備蓄されていなかつたと考へられます。また、廢城時に持ち去るとではどこから出土するかというと、平地です。大野城では南のすぐふもとに大宰府政庁がありました。その横に「藏司」と呼ばれている丘陵があり、昔から藏司を司っていた役所があつたと言わせていました。近年、その藏司を九州歴史資料館によつて計画的な発掘調査が行はれています。大変大きな礎石群があつたのですが、スライドにみられるような梁行三間、桁行九間という内部に柱も備えた格式のある建物が確認されました。（図43）

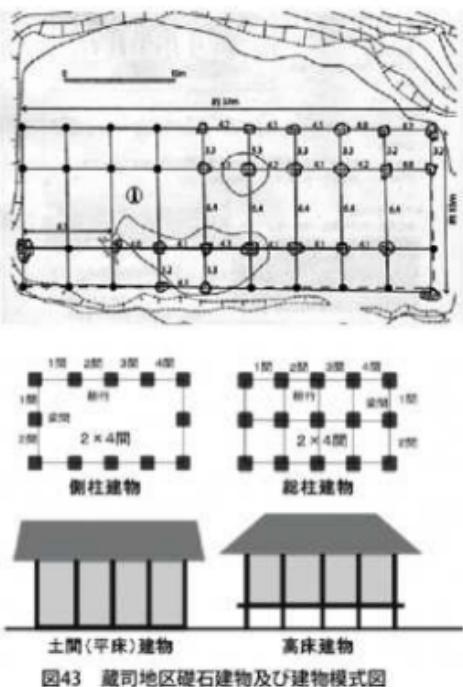


図43 藏司地区礎石建物及び建物模式図

何が考へられるかというと、山城の倉庫には武器武具が備蓄されていなかつた。または、廢城時に全て持ち去られた。

さらに考へられることは武器類が徹底的に管理されていて、日頃は山城に持ち込まれず別の場所で台帳などの管理がなされていた。ということを考えられます。兵士が大規模な戦闘訓練していたら、使用した矢がどこかに飛んでいつてそれがいつしか地面に埋もれるとおもうのです。

（）

さらに隣接して、礎石総柱式の高床倉庫が数棟発見されています。物資の収納と関係のある地区だということが分つてきました。

大規模な建物の地面から火熱を帯びた武器が大量に発見されています。ほとんど弓矢でして、スライドのように束に成っている状態で発見されました。（写真54）弓矢の弓に用いる金具や鐵鎌です。ですので、大量の武器がこの藏司地区に備蓄されていたことはまちがいありません。平地の大宰府の官司で管理されていたことになります。大野城のような山城には武器は備蓄していない

かたのです。結局唐や新羅との戦争が、日本では幸いにもなかつたので、有事がおこらなかつたので武器は備蓄されなかつたとみることができます。兵士もそうで、平時は軍団が常駐する場所ではなかつたということがいえます。

### 五・筑紫城の存続と備蓄

では倉庫には何を貯えていたのでしょうか。九州の朝鮮式山城を包括した用語として「筑紫城」という名称が文献史料に見えます。この大宰府が管轄した筑紫城は八世紀以降、つまり奈良時代以降も存続していました。たくさんの倉庫が継続的に管理されていました。側柱の倉庫ではなく、全て総柱の礎石建物です。瓦葺



写真54 大宰府藏司跡出土鉄器

きの立派な高床倉庫です。

このスライドの写真は、レーザー計測による大野城の地形を示したもので（図44）、山は尾根と谷から成り立っていますが、大野城の尾根はこのように狭いのです。この尾根のあらゆる所に倉庫を建てています。こちらは基肄城の地形図と倉庫の分布図です。大野城の倉庫の数に近い三二棟がこれまでに確認されています。規模は梁間三間、桁行五間です。写真のように鞠智城もたくさんの礎石式高床倉庫が建ち並んでいました。

この八世紀以降もたくさんの倉庫が造営されていたことが筑紫城に共通する特徴といえるのですが、もう一つ、この筑紫城の三つの山城に共通するのが、倉庫群の一つに規模の大きな長倉が必ず造営されているということです。規模は梁間三間、桁行八間から一〇間です。この長倉というのはどういう姿かと言えば、奈良の正倉院の建物が類似しています。正倉院は実は北倉・中倉・南倉と三つに内部が仕切られています。このような長倉が一棟あるのです。

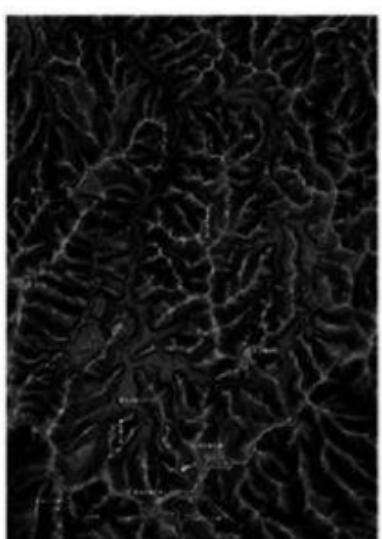


図44 大野城跡レーザー計測図

さきほどの繰り返しになりますが、大野城と基肄城の場合と数が多いのは三間・五間の倉でこれが建ち並んだ景観でした。いずれも奈良時代に建てられたこの倉庫は、柱間寸法もきつちり同じです。規格性が高いのです。おそらく材料の木材も長さ

どの寸法や規格を等しくしていたと思います。奈良時代の律令制とうのが世の中を制度できつちりと縛ろうとする試みですが、まさしく寸分の違いも許さないような時代の空気が、建築の設計や材料にまで及んでいる気がします。

ところでこれらの倉はとても規模が大きい建物です。当時の住居に比べたら大変大きな構造物で、威圧感があつたと思われます。倉が建ち並んでいる様子はさぞや壯觀だつたことでしょうか。では、この多数の倉庫群に何を収納していたのでしょうか。それは稲穀です。稲を脱穀して粗米の状態にしたもので。タネの状態です。現代では通常白米の状態で買い求めて蓄えています。少し前までは糠をのぞいていない玄米ですね。玄米でも何年も保存できません。粗米ですと一〇年近くは保存できるのです。というと別に普通じゃないかと思われますが、実は当時一般的には田んぼで稲を穂刈りして、これをまとまつた量の束にしていました。貨幣がわりに長いこと使用していました。脱穀ていなかつたのです。というか脱穀の必要はなく、食べる時に穂と稻を一緒に落として玄米にすればいいわけで、脱穀は一手間必要なわけです。ところが、倉庫に貯蔵する時には穂の部分を外して粗米にしたのです。倉庫の内部にこの粗米をどんどん溜め込みます。イラストのように入り口に堰板を積み上げていきます。（図45）そし



図45 高床倉庫稲穀収納復元イラスト

て最後は塞ぎます。扉を閉めて封をして鍵をします。鍵はおそらく大宰府の役所か都に保管されていて、中央の命令がなければ誰も勝手に開けられないようになっていました。

そうした厳重に管理された米倉が奈良時代の初めに大野城では三十五棟、基肄城もおそらく三十五棟が其通に配置されていたと思われます。合計七十棟の米倉を計画的に造営しそして稲穀を貯蔵したと思います。それは何を目的としたのか。実は大宰府政庁の前面にある奈良時代の天平年間に使われていた溝から木簡が出土していて、そこに書かれていたのが、基肄城の稲穀を筑前・筑後・肥の国等に遣わして貸し与えよという大宰府の役人の命令書です。大規模な災害が起つたことに対する救済と復興事業だと考えられます。つまり戦争のような有事に備えているだけでなく、地域のための備蓄基地であつたことが分かります。そろそろ時間がきましたので、まとめに入ります。朝鮮式山城の特徴ですが、古代山城は軍事拠点なのですが、平時には門番や敵兵の来襲の連絡を受ける見張りのような警備の兵士が詰めているだけで、城内に兵士が常駐しているわけではないということです。兵士がたくさん生活していたような遺構や遺物も出土しません。おそらく警備の兵士も野営していたようなものだったかもしれませんね。

それから武器・武具も城内で生産していません。このことから城外で生産されたものが有事の際に持ち込まれたと考えられます。中世や近世の山城のように城内で生産・使用までが完結することはないようです。あくまでも国家管理されており、特に九州は大宰府の役所が一括して生産から保管まで管理していたと考えられます。

## 六・大宰府と古代山城（筑紫城）の関わり

次に建物ですが、掘立柱建物から礎石建物へと変化します。筑紫城と呼ぶ大野城・基肄城・鞠智城の九州の朝鮮式山城は七世紀末に長倉という規模の大きな倉庫が造営されます。そして奈良時代に入ると定型化した梁間三間、桁行五間の礎石高床倉庫が建築され始めて、数を増やしていきます。さらに九世紀前後になると今度は梁間四間、桁行五間の少し小さな礎石式高床倉庫を建築し始めます。これは建て替えではなく増やしています。このような変遷を辿っています。基肄城は表面調査だけで建物の発掘調査が実施されていますが、八世紀の奈良時代は同じ歩調で歩んでいます。鞠智城は少し異なりますが、しかしほぼ同じような歩調で倉庫群を造営し拡張しています。

### おわりに—筑紫城の倉庫群の意義—

それから倉庫群のあり方というのは、実は各国に置かれた稲穀などの正税を蓄える正倉の規模や構成とよく似ています。しかし、古代山城は有事の際の備えということで、災害に備える必要がある現代と一緒にです。つまり有事を想定してはいますが、やはり地域の安定のために災害時には供出することがあつたと言えます。管轄は奈良時代には大宰府です。それにしてもなぜ山城に倉庫をたくさん作ったのかと言えば、災害や盜難などで平地よりも安心安全のためだというほかないです。あえて標高三〇〇メートル以上の場所に運び入れたのです。しかも大野城・基肄城合わせると奈良時代の終わりまでに七〇棟が建てられました。

計算すると一棟の倉庫に約四千石収納できます。一石は一人が一年間食べる平均量です。四千人×七〇棟なので二十八万人を一年間養える膨大な稲穀を蓄えていたことになります。

古代山城が軍事機能から地方支配といった行政的な機能に変化したという点もあるかもしれません、あまり強調すると古代山城の役割がぼやけてくる気がします。宗教的な側面や行政的な側面もありますが、軍事的な機能は揺るぎなかつたのではないかと思います。

最後にこの古代山城が築かれた時代は国境を強く意識した時代でした。この写真は対馬の北端から韓国の釜山を写したもので、今でもこの海のどこかに国境があるという事になります。以上で終わります。



## 講演③

# 神籠石系山城の捉え方

—築城年代・築城主体論の克服—

### 講演者紹介

向井 一雄（むかい かずお）

関西大学経済学部卒業。関西大学考古学研究室で考古學を学ぶ。1991年から日本及び韓国、中国東北部に遺る古代朝鮮式山城を研究・調査する研究者間のネットワーク機関として古代山城研究会を組織し、現在、古代山城研究会・代表を務める。専門は日本考古学。

# 講演①「神籠石系山城の捉え方～築城年代・築城主体論の克服」

古代山城研究会代表 向井一雄

こんにちは。古代山城研究会代表の向井です。私は、東京に住んでおり、今日は多摩ニュータウンから参りましたので、多分、発表された先生方の中では明治大学に一番近いんじゃないかと思います。

## はじめに

私に与えられたテーマは「神籠石系山城」についてということで、「シンロウセキ」と書いて「こうごいし」と読むんです。知らない方もいらっしゃると思ふんですが、まず最初に神籠石のお話、何故こういう名前になつているのかという話ををして、それから、最近の研究の話をしたいと思っています。

今、映っていますのは阿志岐山城という、大宰府の近くで九九年に古代山城研究会の中嶋さんという会員の方が新しく見つけた、古代山城の一つです。（写真56）列石が二段積みになつていて、下にもう一つ地覆石があるという変わった構造になつています。



## 一、神籠石とは何か

### 神籠石論争

今日のお話は研究史の話と最新の研究の話ということになつていま  
す。まず研究史の方なんですが、神籠石という、山城としては変な名  
前だなと思われると思いますが、こういう名前に決まつた経緯、それ  
をご説明したいと思います。

神籠石論争という言葉が今までの発表の中で出てきてたかと思うん  
ですが、明治の終わりぐらいから大正にかけて、日本の考古学とか歴  
史学会で論争が行われました。古代山城の遺跡がその頃発見されたの  
ですが、実は江戸時代の久留米藩士である矢野一貞や、福岡藩の貝原  
益軒も古代山城の遺跡について本に書いております。矢野一貞は磐井の反乱を起こした、筑紫の君磐井が造つ  
たものだと、そういうことを書いております。

神籠石論争のきっかけになつたのは小林庄次郎さんという、東京大学の学生さんだったんですが、この方  
が九州の調査旅行の中で高良山の列石遺構を見て、それを報告したことから始まつたんですが、もう既に論  
争の一〇年くらい前に久米邦武や、何人の学者が知つていたようです。これは高良山という久留米市にあ  
る、今、高良大社という大きな神社がありますが、そこの江戸時代の絵図です。赤丸の所に神籠石があるん



写真56 阿志岐山城の列石・土壁

ですが、ちょっと拡大してみましょう。神籠石という字が見えると思います。祠みたいになつてゐる所にその岩があつたんですが、手前には古代山城の列石が転がつています。

神籠石論争は、山を巡る列石の遺跡を靈域説だという人と、山城説だという二手に分かれて論争が行われました。大論争になりまして、最終的には山城説の方が若干有利というところで論争が終わっています。今、論争というと相対立て全く相手の意見を聞かないという感じだったと思われるかもしませんが、それは間違いでして、平面プランを見ますと、朝鮮の城郭と非常に似ているということで、朝鮮の山城と関係がある遺跡だという認識はお互いに共有していたようです。最終的に列石の上に何があるのかというところが論争の焦点になつていていたようです。ただ、當時発掘調査も行われなかつたので、この点が解明できなかつたとすることです。

### 神籠石遺跡の発掘調査

論争のその後なんですが、昭和の初め頃に高良山とか、女山とか、次々に史跡の調査が行われています。これは福岡県で行われたり、佐賀県で行われたりしてます。その中で、ここに図面を載せてあります、これが列石です。列石の上に何か土盛のようなものが書いてあるんですが、これが土壘だという指摘が既にこの段階でされています。それから、國學院大学の大場磐雄先生、祭祀考古学の第一人者の先生ですが、大場先生も「城塞の一種なる事疑うべからず」ということで、この当時の見解を後に本に書いておられます。し

かし、昭和七年から神籠石遺跡の史跡指定が始まつて、史跡の名称として、○○神籠石という名称が付けられてしましました。

それからだいぶ経つた戦後一九六〇年代、発掘調査がいよいよ行われることになつて、九州の佐賀県武雄市、武雄温泉という大きな温泉がある所ですが、ここで、おつぼ山という遺跡が見つかりました。それから、もう一つは石城山です。山口県の光市になりますが、神籠石の遺跡が初めて発掘調査されました。列石の上に土塁のようなものがあるということはある程度予想されていて、発掘調査をしてみると、これが土塁です。これが列石になるんですが、版築土塁が確認されて、やつぱり山城だろうということになりました。

ただ、このように列石の前から妙な柱穴が出てきました。柱の間隔は三メートル間隔や、一・八メートル間隔で、これは一体何だろうということで、当初「逆茂木説」というのが唱えられました。亀田先生のお話の中で版築工法というお話をありました。その中で埴板や埴板の支柱というお話をあつたと思います。版築には支柱が必要なんですが、この版築工法に対する技術的な認識がどうも当時はまだ不足していたようです。最終的に、この柱は版築に関わるものだと現在考えられています。

### 柳田國男の神籠石批判

さて、神籠石についてなんですが、柳田國男、皆さん、ご存じですよね、日本民俗学の泰斗です。柳田國男が実は喜田貞吉の靈域説に大反対してゐるんです。「石神問答」という本があります。今では柳田國男全集

に入っていますので簡単に読めますが、この中で、神籠石という言葉は列石のことじゃないということをかなり厳しく書かれています。当時は「かうご石」と書いて「こうご石」と読んでいるんですが、神籠石というの大きな石もありますし、小さな石もあるんですが、石単体の名称であると。「磐座」と書いて「いわくら」と読みますが、岩石を信仰の対象にすることを「存じだ」と思っています。そういう磐座や石神の名称であると言っています。

今、古代山城と思われている列石遺構について、神籠石という呼称を使うべきではないという、こういうことを柳田國男が明治・大正の時点で、既に指摘していました。ただ、喜田貞吉は靈域説を主張していますので、神籠石という言葉は「神が籠まる石」と書くので非常にロマンチックというか、靈域説を支える言葉として使用を止めようとせず、最終的に史跡の名称になってしまったという、こういう経緯があります。

### 磐座・石神としての神籠石

この地図は磐座や石神としての神籠石の分布図ですが（図45）、全国で一四〇カ所ぐらい見つかりました。私が調べたのが、一〇〇六年に九州国立博物館でシンポジウムがあつた時で、その時はまだ五〇カ所ぐらいしか見つからなかつたんです。柳田國男は一五カ所ぐらい、明治時代ですが、もう全国でそれぐらいの数を調べ上げています。北は、不確かなものを入れると岩手県まで、宮城県のは確実です。南は大隅半島ですかから鹿児島まであります。

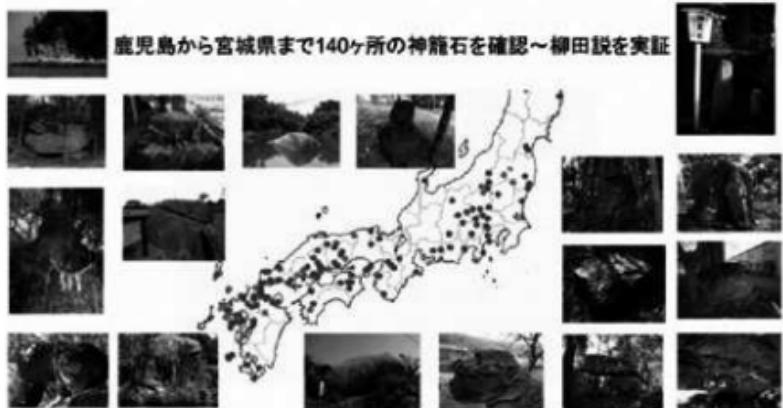


図45 築座・石神としての神籠石の分布

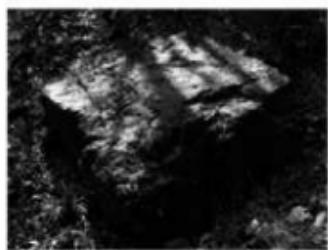


写真57 賀茂神社の神籠石



写真58 皮籠石

関東地方にもありますて、左の方のは群馬県桐生市にある賀茂神社という、かなり古い神社ですが、神社から少し入った山に神籠石があります（写真57）。三メートル四方の巨大な岩です。この岩に神が降臨したという伝承があるんです。それから、こちらの方は「皮籠石」と書いて「こうごいし」と読むんです。写真58、福島県の小野町、リカちゃんキャッスルがある町です。小野町のこの神籠石については、ここに小さな石碑のようなものが建っていて、「二十三夜塔」という、十五夜のお月見とはちょっと違うんですけども、そういう月待ちのお祭



写真60 香合石



写真59 川子石

りをしていた場所だと分かれます。

これは中四国地方で、こちらは岡山県の倉敷市にある川子岩（写真59）。  
こういう沼というか、池というか、水中にある岩で河童の伝承があります。

こちらは交合石といつて、淡路島にあります（写真61）。こういうふうに上  
下に石が合わさって見える。夫婦岩信仰の対象になっています。これは九州  
の例ですが、雷山の遺跡の近くにあるのがこの香合石（写真60）。神功皇后  
が三種の神器を納めた所と伝えられています。それから、こちらは基山町で  
すから基肄城のすぐ近くなんですが（写真62）、コウゴシドンという、これ



写真61 交合石



写真62 コウゴシドン

は現在でもお祀りを集落の人々がされています。ということで、とにかく神籠石というのはこういう岩のことという言葉で、古代山城のことではないということを今日は覚えて帰ってください。

### 神籠石系山城という学術用語の変遷

その後、七〇年代末に瀬戸内海沿いで山城の遺跡が次々発見されました。それまでも瀬戸内海沿いには、高安城、屋嶋城、香川県の坂出に城山城、それから山口県の石城山の遺跡があつて。古代山城の遺跡があるということは分かっていました。それが七〇年代末以降、鬼ノ城、大廻小廻山、永納山、それから、これは八〇年代の終わり頃ですが兵庫県のたつの市で城山城が見つかって、それまで九州が中心だった古代山城の分布が瀬戸内海の方にもたくさんあるということが分かってきたわけです。この時期、神籠石という名称について見直そうという動きもあつたんですが、結局そのまま使い続けることになります。

朝鮮式山城とか、古代山城とか、神籠石系山城とかいろんな名称が今日出てきて、皆さん一体どうなつてるんだとお思いだとと思うんですが、一応変遷がありますので説明します。戦前は、「古代城柵」という言葉しかありませんでした。それに対して列石を巡らせた遺跡を「神籠石」と呼んでいました。それを戦後、鏡山猛先生が「朝鮮式山城」という用語を作つて、そのあと瀬戸内海でもたくさん見つかり始めたので、「神籠石系山城」という呼称が出てきます。最近は、これらを全部ひつくるめて「古代山城」と呼ぼうと、こういうことですから、いつの間にか神籠石の名前を消そうとしているわけではなくて、こういう学問的な研究の

進展で名称が変わってきたとご理解ください。

もつと細かい話なんですが、神籠石式とか、神籠石型とか、神籠石系とか、古代山城に関する本を読んでいるいろいろ出てくるんですが、それぞれちょっとずつ微妙にニュアンスが違います。神籠石式というのは朝鮮式山城に対する用語です。神籠石型というのは瀬戸内でいっぱい見つかりだしたので、瀬戸内と九州を区別しようということで、九州の方を神籠石型ということに。最終的に、九州のものも瀬戸内海の方も全部ひつくるめて神籠石系と呼ぼうと、こんな話なので、非常に細かい話ですが、それほど意味はありません。「神籠石系」と覚えていただければいいです。

### 神籠石系山城に関する諸説

八〇年代以降の研究の動向なんですが、地方豪族築造説とか、渡来系氏族説とか、非常に盛んだった時期があります。五六世紀ぐらいに造ったんだろうということです。地方の豪族が大和朝廷に対抗するために城塞を造つて戦争をしたというような反乱伝承に結び付けて捉える考え方です。次は、八〇年代の終わり頃から九〇年代にかけて根強かつたのですが、齊明天皇が白村江の戦いの前に百濟を助けるために九州に行つた時に造つたという説です。それから、三番目は二〇一〇年以降主流の説ですが、大野城などより新しいと考える説です。私もこの説です。

神籠石系山城というのは文献に記録がない山城のことをいうとよく書いてあります。じゃあ、本当にない

のかというと、実をいうと、文献史料に興味深いものがあります。これは持統三年（六八九年）、ちょうど鞠智城の緒治の時期の少し前なんですが、ここに「新城を監せしむ」という記事があります。これは「筑紫の新城」ということで昔から問題にはなっているんですが、これを普通に読むと、この時期に九州で何か築城されているということになるので、今まで無視されてきたんです。

もう一つ、六九九年には「三野城と稻積城を修らしむ」という記事があります。足利健亮先生や、私は、この三野城を久留米市の耳納山のことだと解釈して、高良山城のことじやないかと考えています。筑紫の新城というものがあるということ、文献にも記録があるんだよということを強調しておきます。

## 二、城郭研究からみた古代山城

さて、最新研究に移りましょう。どちらかというと、今日は考古学の方よりも城郭研究の方からお話ししたいと思います。亀田さんから版築のお話もありましたし、土器のお話もありました。赤司さんからは大野城の倉庫の話とか、少し私とかぶりますけれども、軍事技術たとか、築造技術のお話もありました。私はどちらかというと、お城の研究から攻めてみたいと思います。

## 古代山城にアプローチする方法

古代山城を攻める方法というか、研究する方法としてはいろいろあります。一つは、亀田先生がお話になつ

た出土土器から研究する方法。それから、韓国の山城からアプローチしていく方法です。それに対してもう一つ、歴史地理学というのがあつて、分布論ですか、交通路ですか、港ですか、そういういつたものから総合的に山城を捉えていこうという考え方もあります。今日、主にお話ししようと思っているのは、立地とかプランのお話、それからもう一つは、城壁の造り方とか城門の形とか、そういうしたことをお話ししてみたいと思います。

### 分布からみた古代山城

まず分布論なんですが（図46）、北九州から瀬戸内海沿いにあるよということは今日お話を聞かれて分かると思うんですが、日本海側に全然ないんです。島根や鳥取など、大陸に近いですし、あつてしかるべきだなと思うんですが、一城も見つかってません。それから、九州の方は、特に有明海沿岸といわれている筑後地方とか、佐賀地方とか、こちらの方にはたくさんあります。ここは磐井の反乱でも有名な所ですが、筑紫君磐井だとか、そういう九州勢力に関連



してるのでないかという説は、この辺から来ています。それからもう一つ、近畿地方ですね。高安城一城しかありません。これも何か奇妙な感じを受けます。

もう一つ、これは「吉備包囲網か」と書いたんですが、播磨の城山城、香川県の屋嶋城と城山城、讃岐です、それから備後の常城と茨城、それから、岡山県の北部にも終末期の古墳があつて、ちょうど吉備中央を取り囲むようななかたちで山城や古墳があるので、吉備包囲網ではないかという説もあります。

新羅に対する防衛という観点では、山陰側なんですが、奈良時代には山陰道節度使という、新羅に対する軍備強化と国内の動搖を抑える目的で、節度使が置かれますし、貞觀年間というのは平安時代に入りますが、山陰諸国に四天王寺を各地に置いたりして、新羅を調伏したりしています。ですから、山陰側にお城がないというのは対外的な防衛という面ではちょっと腑に落ちない点です。

### 烽・大宰總領制・山陽道

じやあ、北九州から瀬戸内海側沿いにずっと分布しているということは、どういう意味を持つのかということです。一つは烽(とぶひ)、狼煙ですね。先日といつても9月の初めですが、大阪で古代山城研究会が、狼煙について研究会をやりました。一二〇人ぐらい集まって頂き活発な議論があつたんですが、その中で発表した「ヒノヤマ」地名の分布を持ってきました(図47)。ヒノヤマというのは、下関に火の山公園というのであるので、ご存じの方もいるかもしれません、烽があつた所です。水城と一緒に設置された烽です。



写真47 ヒノヤマ地名の分布

北九州から近畿の都までずっと烽があつたといわれてるんですが、ヒノヤマというのが烽のあつた所ではないかといわれています。ちょうどその分布が瀬戸内側沿いなんです。他の地域にはありません。

もう一つ、これは仁藤先生のお話にあつた大宰・總領制との関係です。大宰・總領が置かれた所というのは、筑紫はもちろんですが、周防、吉備、伊予。こういった地域というのは、伊予には永納山がありますし、吉備は鬼ノ城と大廻小廻です。周防には石城山があるというかたちで分布が重なることは、はつきりしています。

それからもう一つ、山陽道。畿内から筑紫の大宰府まで伸びている道は唯一の大路というか、一番大きな交通路として重視されていました。ですから、やっぱり近畿地方と北九州地方を結ぶこのラインを守るというか、押さえるという意味が強いのだと思われます。

## 国郡境や軍団との関係

七世紀後半の地域の再編成ということも考えています。古代山城の占地している山をいろいろ調べますと、国郡境に沿つて、国とか郡の境ですね、そういった所に占地してます。それから、駅路に沿つて配置されていて、これが二〇キロメートル間隔という、計画的な配置をしてます。これは、あまり防衛的ではないと思われます。

それから、これは西海道についていえることなんですが、西海道の軍団制について、各國別に軍団が何個あつたかということが記録に残つてます。この数が、例えば豊前ですと二軍団なんですが、神籠石系の山城も二つあると。それから筑後の国も二個、肥前の国も三個と山城と軍団の数が合うんですね。これも何らかの関係があるんじゃないかという、示唆的、蓋然的な情報です。

## 占地と縄張り

次は、占地とか縄張りについて、赤司さんのお話とちょっとだぶつてしまふんですが、最近の研究では縄張り研究ということがあまり重視されていません。お城の研究では縄張りの研究というのは非常に重視されているんですが、古代山城ではあまり研究されていない。古代山城もお城ですから、やっぱり縄張りとか、占地やプランということを研究していかないといけないと思うんです。研究しているのが考古学者ですか、どちらかというと、構造研究の方ばかりが重視されていますが、縄張り研究と構造研究というのは車の

両輪なのだと思います。

占地について、山の高低だけでは防御的かどうかは分からぬということをご説明しましよう。鞠智城の立地する地形は低い低いと言われて、一〇回ぐらいのシンポジウムでもずつと言われ続けていますが、詳し

く一日中かかつて鞠智城の周辺を歩いてみますと、たいへん要害といえる地形なのです（図48）。なかなか攻めにくい。一つは、鞠智城はここなんですが、南の菊池市の方にはここに断崖があります。ここにもあります。北側はずつと山地が巡っていて、まるで鞠智城を守っているようなんですね。鞠智城の、内部には平坦面としてこれだけの面積があります。

同じように低い地形に立地する女山城なんですが、内部の平坦面というのはこれだけしかないんです（図49）。ですから、同じ低い所にあるといつても、これだけ内部の面積も違うし、女山城は平野側にむき出しの状態なんです。で



（注）スクリーントーンは沿岸を意味する。

図48 鞠智城平面図

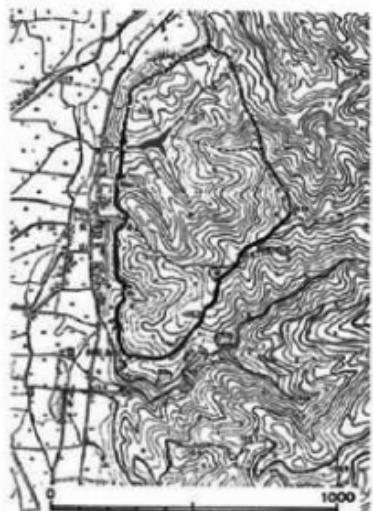


図49 女山城平面図

すから、全然防衛的な占地をしていない。こういう違いがあります。だから山の高低だけで、山が高いから防御的に強いとか、低いから弱いとか、そういうことではないといえます。

関東地方だと、良い例で、忍城の戦いを描いた『のぼうの城』という映画があつたと思いますが、忍城というのは行田市にあるんですが、平地の沼地の中にある城です。ああいう低い所にあっても周りが沼地だと籠城戦で強いんです。こういう例は、戦国時代の戦史を見ていればあちこちにあります。ということで、占地が重要な話でした。

### 水際防衛と縦深防衛

それから防衛戦術というか思想について、これも、日本人にはなじみがないかもしませんが、「水際防衛」という言葉と「縦深防衛」という言葉。これは元寇防壁の配置図なんですが、日本人は防衛というところの方が好きなんです。水際で侵略軍を守つて戦うという。ただ、水際防衛は、このラインで守れたらいいんですけど、どこか破られたら次がないんです。古代山城は博多湾からずっと引いて、二日市地峡帯に大野城、

水城、基肄城というふうに配置されています。もちろん博多湾でも戦うんでしょうが、いつたん引き下がつて守るという布陣です。これを縦深防御といいます。百濟の達卒たち、將軍たちは縦深防御の戦法を取ったということは明らかです。何といっても唐とか隋の大軍を破つた高句麗はこの戦法を取つてゐるからです。

### 横矢がかり

城門の防御ということで、「横矢がかり」という言葉をご存じでしょうか。これも中世のお城の研究ではよく出てくる言葉なんですが、城門防御の基本です。これは新羅の赤城という山城の北門の写真です（写真63）。研究会の会員でドローンを使われる方が空撮したものなんですが、ここが城門です。この部分が飛び出しているでしょう。敵がこちらから入つてくるんですけど、飛出した部分から横から攻めるのを横矢がかりといふんです。これは非常に有効です。北門では左側から入つていますけど、本当は右側から入らせて、右側から叩く方がいいんです。何故かというと、盾は左手で持ちます。右手に刀ですか、右から攻撃される方が弱い訳です。この横矢がかりは鬼ノ城です



写真63 韓国 丹陽・赤城 北門

とか、御所ヶ谷もそうですが、大野城にもあります。横矢がかりを意識した城門の防御、古代山城を見る時にも使えますので覚えて帰つてください。日本の古代山城は、最初は防御的な城門を造つてゐるんですが、だんだんと防御性の低い城門になつていきます。

### 築城にかかつた日数

次に、土木量と築城期間について、どれぐらい築城に時間がかかつたかということで、よく怡土城が一二年かかつたから一〇年ぐらいかかるだろうとか、四年ぐらいだろうとか、いろいろ議論されていますが、そんなに長くはかかつていないと私は思います。築城には土木工事（普請）と建築工事（作事）があるんですが、何といっても築城は土木です。近世城郭だと秀吉の石垣山一夜城の八〇日間、名護屋城だと八カ月です。戦国期の城館、これは竹井英文さんの研究なんですが、群馬の金山城で七〇日間とか、肥後の花山城だとわずか二日間というのもあります。これはソウルの漢陽です。ハミヤンと読むんですが、ソウルの外郭城を、一八キロあるんですが、九八日間で造つたという記録があります。

結局、土木工事というのはあつという間にやらないといけないんですね。人数をかけば出来ます。城門とか建物というものは建築技術を持つている工人がないと出来ない、そんなふうに考えています。これは石城山の場合を計算してみたんですが、六万立方メーター、一〇トンダンブカーで万台ぐらいの

土木量です。のべ二七万人なので、当時の周防国の人口で計算しますと、一戸から三～二人徵發して六三日間。一戸というのは、国、郡、里（郷）の最後の単位で郷というのがあるんですが、一郷が五〇戸です。そこから一人徵發すると二二五日かかります。また、一〇カ所ある九州の神籠石系山城といわれている所を全部集めた数と、金田城、大野城、基肄城、鞠智城、この四城を足した量と比べてみると、両方とも三〇万立方メートルとなりほぼ同じです。ただし、神籠石系山城は土塁をちゃんと造つていなかつたり、全部列石が巡つていなかつたという話もありますから、もつと土木量は少なくなると思います。このことからも、大野城だと基肄城の築造にかかつた土木量がどれだけ大きかつたかということが分かります。

古墳と比較してみると、山口県の能毛地域にある前方後円墳三基の土木量は合計しても石城山の半分ぐらいいです。それから、群集墳という小さな古墳と比較すると六〇〇基分になります。結局、古代山城をこういう労働力の面から考えると、地方豪族のレベルで築造できるしろものではありません。もつと小さな城ならできると思いますが。

韓国には、こういう築城の記録を記した「刻字城石」という石碑も見つかっています。これは慶州の南山新城碑ですが（写真64）、現在まで一〇基発見され、三年以内に崩壊すれば罰せられる誓約や受作した工区（平均一九メートル）を辛亥年（五九一年）二月二六日に完成したということが書かれています。それから、これは明活山城の作城碑で、これも慶州の山城ですが、高さ一五メートル、長さ二五メートルの城壁を三五日間で完成したということが書いてあります。三五日ですから、そんなに長い期間ではありません。長さ二〇

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

①辛亥年二月廿六日南山新城作節紙法以作庚三

②年順被者罪教事カ聞教令舊事之阿良頭頭沙喙

③吾乃吉大舍奴舍道使沙喙合戰大舍養活運使沙

④喙△△化知大舍都上村生阿良村今知擴干染吐

⑤△△知全利上千匠尺阿良村末丁次千奴舍村次

⑥△△乾干文尺△文範箇尺或使上開且沒幸生上

⑦△△尺同其△次千文尺竹生次一伐圓堤上寺印

⑧△門提上知見次原堤上者全次小石堤上等ゲ次

△△受十一步三尺八寸



写真64 南山新城碑（第1碑）

メートル程度、二〇〇力所ぐらいの工区に分担して工事を行う訳です。

### 城壁の構造

城壁構造については、「型式学」が重要です。型式学って何だということですが、考古学の話でよく出てくるので、「ぐまモン」でちょっと説明してみたいと思います。これはくまモンの移り変わりで、最初の細いのが初期型です。これがⅡ型。ちょっとかわいらしくなります。これがⅢ型です。一番いろいろいたずらをやるくまモンです。もう一つ、最近こういうのが出てきました。

中国のくまモンです。「偽モン」といわれてます。色が微妙に茶色になっていますし、頭もなんか変ですよね。これを「型式の崩れ」といいます。九州の神籠石系の山城は中国のくまモンに似ています。

いるという感じがします。

城壁の形を見てみましょう（図50）。朝鮮半島ではこういう外と内に壁を持つ城壁が多いんです。その中でもこういう「内托」と呼ぶ内側に低い壁のあるものが多いんですね。それに対して日本の古代山城は「土

## ①内托



## ②土段状

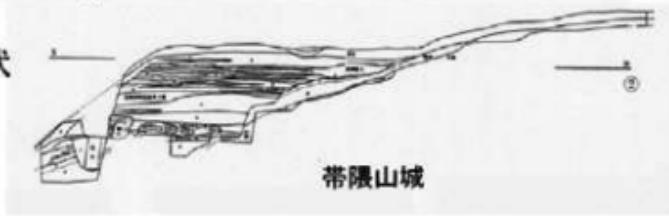


図50 日本の古代山城の版築土壁断面図

段」状の城壁が多い。これは簡略化された城壁で日本独自の形です。韓国の研究者に聞いてみましたが、こういう形の城壁はないそうです。それから石壁については、石の積み方による分類だとか、石材による分類とかいろいろありますが、これは韓国の山城ですが、乱積み、割石積み、切石積み。これだけバラエティーがあります。どちらかというと切石積みが新しいんですが、新しい時代にも自然石や割石の城壁はあります。結局、築城地でどういう石材が利用できるかということが一番大きいのです。

日本の石垣と韓国の石壁の違い。これも覚えて帰つてください。赤司さんのお話で栗石（グリ石）という言葉が出ましたがあが、これは姫路城の石垣の断面です（写真65）。石垣つて外から見ると似ていますが、日本の近世のお城の石垣の中はこういう、玉石というか、川原石が充填（じゅうてん）されています。この石垣内部の小さな石が栗石です。それに対しで韓國のお城はこういうふうに内部まで大きな石材で積み上げられているんです（写真66）。先ほど大野城の石壁内部の

先日、丸亀城の石垣が大きく壊れたニュースが流れましたが、原因は今年七月の西日本豪雨とその後の台風、何回も来ましたが、これらが影響しています。持ちこたえられなくなつて、どこか外側の石がずれると中の栗石が全部出てしまうんです。韓国の石壁の工法には、打堀法や井桁積み、内部を版築で造る月坪洞式などいろいろあります。版築土壁についても、これは扶余・東羅城の断面図なんですが（図51）、すごく凝つた構造になつています。日本の古代山城では背面版築とか、基礎版築というものはありません。やはり簡略化されているとみるべきでしょう。それから、列石についてですが、韓国では7世紀に登場して、九世紀以降に普及する工法です。そういう意味では日本の列石というのは、韓国で始めた頃に導入されて、その



写真65 姫路城石垣断面



写真66 韓国 忠州山城 石垣断面

写真が出ましたが、大野城は韓国の城壁に近いと思います。栗石仕様というのは日本の気候に影響していて、土圧の低減ということもあります。やっぱり排水ですね。

韓国の城壁というのは城壁内に水を入れないようになっているのですが、日本は雨が多いせいでしょう、ある程度城壁内に浸透させて排水するということを考えているようです。

後大きな石を使うように独自に発展していったというふうに考えています。

### 新しい土木技術や建築技術と古代山城

この時代の新しい土木技術として、花崗岩に対する切石加工の技術ですがとか、それから、韓国から導入されなかつた技術として矢穴の技術など、いろいろあります。当時入ってきた技術もあれば入つてこなかつた技術もあります。もしかしたら教えてくれなかつたのかもしれません。版築の技術なども、飛鳥寺が五八七年造営で、近畿地方には早くから入つてくるんですが、地方レベルで広がっていくのは古代山城の築城の頃からなんですね。

最後に門礎石の話をしましょ。唐居敷（からいじき）というんですが、こういう丸い柱を添えるタイプと四角い柱を添えるタイプがあります。方立が長方形のものが百濟系で、方形のものが高句麗系のようです。

まとめになりますが、縄張りや構造を見ていくと、日本の古代山城は縄張り的には、高句麗を志向しているようです。倭国の政権首脳部、天智天皇や中臣鎌足たち、クライアントとしては、高句麗みたいな強い城を造ってくれというふうに頼んだんでしょうが、頼まれたのは百済の将軍たちですから、城壁の造り方などは百済型を基調としつつ、日本に住んでいた渡米系の人たちの技術、新羅

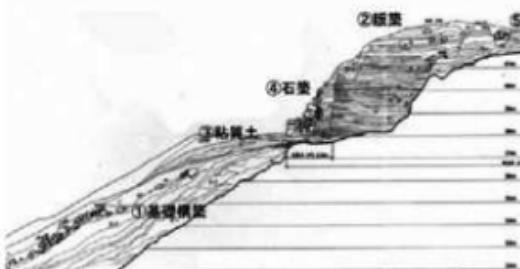


図51 韓国 扶余・東羅城 版築土壁断面

だとか高句麗の技術も使っています。ただ、その後急速に日本化していく。これが日本の古代山城のあり方なんだと思います。

ということで、あまり写真などいろいろとお見せできなくて申し訳なかつたんですが、駆け足ですみません。お城として古代山城を見ていただきたいなと思って今日のお話をしました。神籠石という名称についても、ああいう祭祀の対象となつた石や岩がいっぱいあるんだということを覚えて帰つてください。よろしくお願いします。ありがとうございました。



パネルディスカッショ<sup>ン</sup>

## コーディネーター

佐藤信（人間文化研究機構理事）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学大学院人文社会系研究科教授を経て、現在、大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事。東京大学名誉教授。専門は日本古代史。博士（文学）。

## パネラー

亀田 修一（岡山理科大学教授）

仁藤 敦史（国立歴史民俗博物館教授）

赤司 善彦（大野城心のふるさと館館長）

向井 一雄（古代山城研究会代表）

中村 友一（明治大学准教授）

五十嵐 基善（明治大学兼任講師）

矢野 裕介（熊本県教育委員会職員）





司会

皆さま、大変お待たせいたしました。それでは、ただいまより、パネルディスカッションを開催いたします。まず初めに、パネリストの方々をご紹介いたしましょう。

岡山理科大学教授、亀田修一さま。

国立歴史民俗博物館教授、仁藤敦史さま。

大野城心のふるさと館館長、赤司善彦さま。

古代山城研究会代表、向井一雄さま。

明治大学准教授、中村友一さま。

明治大学兼任講師、五十嵐基善さま。

熊本県教育委員会、矢野裕介。

それでは、パネリストの方々を簡単にご紹介させていただきます。明治大学准教授、中村さまは、明治大学文学部を卒業後、明治大学大学院文学研究科博士課程修了。明治大学文学部助教を経て、現在、明治大学文学部准教授をされています。専門は日本古代史です。

明治大学兼任講師、五十嵐さまは、明治大学文学部卒業後、

明治大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学、明治大学文学部助手を経て、現在、明治大学文学部兼任講師をされています。専門は日本古代史です。

熊本県教育委員会、矢野さまは、同志社大学文学部を卒業、熊本県教育委員会熊本県立装飾古墳館分館・歴史公園鞠智城温故創生館を経て、現在、熊本県教育長教育総務局文化科文化財調査班参考事をされています。鞠智城跡の発掘調査に長年携わっています。

そして、コーディネーターの佐藤信さまは、東京大学文学部国史学科を卒業され、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了後、奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部教授、東京大学大学院人文社会系研究科教授を経て、大学共同利用機関法人人間文学研究機構理事、東京大学名誉教授でいらっしゃいます。本日はコーディネーターの佐藤さまと、そして七名のパネリストの皆さまによりまして、「古代山城の成立と変容」というテーマでパネルディスカッションを行っていただきます。

それでは、このあとはどうぞよろしくお願ひいたします。佐藤先生、よろしくお願ひいたします。

佐藤： それでは、今から約一時間五〇分ほど、今日の四人の先生方の講演を踏まえたかたちで、古代山城の成立と変容について議論をしていきたいと思っています。私も今日の四人の先生方の講演を聞きま

して、本当にわくわくするような思いで、古代山城の研究が今どういうところまで来ているのか、最

近の研究状況を知ることが出来ました。それでお話の中では、これまでとちょっと違う考え方が出でたり、あるいは、これからどういう調査や研究が必要であるかというテーマについて、それぞれ指摘があつたように思います。そうしたテーマをまとめて議論して、これからの研究に資するようなパネルディスカッションになればいいと思っています。

ただ、今日は講演の先生方の他に、コメント頂く先生も三名お願いしていますので、できばさきと進めていきたいと思っています。大きく分けて三つのテーマに分けて話をしたいと思います。第一のテーマは、「成立と変容」ということです。特に成立を巡って、どういう時代に、どういう状況の下で、どういう技術などで古代山城が營まれたかということを、もう一度確認していきたい。例えば、長いこと朝鮮式山城とか神籠石系山城という言葉が使われてきて、今日もそういう言葉を使いましたが、今日の段階ではそれらを分けて考えなくてもいいのかなと思いました。

また、成立を巡る技術については、土木技術や建築技術だけではなく軍事技術も比較していく必要があるということだと思います。また、朝鮮半島といつても百濟、新羅、高句麗、それぞれの特徴もあるということですので、それをどう見ていくかということも課題になろうかと思います。

一番最初に、コメントをお願いしております日本古代史ご専攻の明治大学の中村友一さんから、今日の講演を聞いた上でのコメントをお願いいたします。

中村： 明治大学の中村友一です。よろしくお願いします。私の専門は日本古代史で文献史学をやっており

まして、今日は考古学の先生方を中心に、四人の皆さまに有意義なご報告をいただきて、私自身とも勉強させていただきました。私自身は氏族や律令法をメインに研究しておりますので、あまり絡まないんじゃないのかなというふうに今回コメントーターをお受けしたんですけど、時々渡来系の氏族、そういうお話を出てきて私の専門とも重なるところがあるんですが、残念ながら、鞠智城が所在する肥後国というのは日本古代史の文献、出土文字資料というのがかなり少ない地域です。ですので、なかなか私の専門としている分野も含めて申し上げることは難しいのですが、皆さんご存じだと思うのですが、火君というものが『日本書紀』とか、あとは浄水寺の碑の中にも出てきたりする。あるいは阿蘇君など、そういうものが有力な氏族として捉えられるかと思います。

一つ注目したいのが、『日本書紀』の敏達天皇のところに書かれている火葦北君、達率日羅という人が日本人なんですけど、百濟で一番目の位をもらつて。それが帰つて来る時にいろいろ糺余曲折があつて殺されてしまうんですけど、そういった人たちが行つて帰つてくる、そういう面も含めて今日の技術論とか、そういうものにも絡められるんではないかと思います。

残念ながら、氏族の分布という面からいきますと築城技術、そういうものが知られるようなものはございません。そして、ちょうどいいなと思つたんですが、今日、封筒の中に皆さまお手元に、「ここまで分かった鞠智城」というものが入つていてるかと思います。こちらの九ページのほうに、ようやく鞠智城でも出土文字資料ということで一号木簡が見つかってるんですけど、こちらに秦人という氏

名と目されるものが見つかっております。ただ、秦人、渡米系ですけど、それがすぐ築城技術などに結び付くかというと、普通でいうところの、某部というのと同じで農民レベルの人です。ですので、おそらく築城自体の技術を持つている人というよりは、それを間接的に勉強したり、見たりしている人、そういうふたつのようなレベルですので、先ほど来築城の技術、版築の技術、そういうふたつのが少し日本的になつてくるというものになつてくるんではないかと思います。

さらに、向井さんのお話にも出てきました烽、のろしの道ですね、それにつきましては私もちょっと考えがございまして、火君というのは肥後の国に主に分布してますけど、基本的には、律令制の国でいうと肥前ということで、佐賀と長崎を含めて火の国に本来は入つております。そして、火の守というのろしの道のお話をされたんですが、熊本市の古城横穴群、横穴に閉塞石という、横穴をふさぐ石なんですけど、火の守る、もしくは火の安ともいわれるんですけど、八木充さんの報告書では火の守のほうがいいだろうということで、おそらくは火守ということで、その火守が何を意味するのかといふと、今日の向井さんのお話を聞いて烽関係、対外的にまず情報をいち早く仕入れるためにあいつた所に火君などが、そういう氏名をもらうような氏族が分布するようになつたのではないかなどいうふうに考えが至りました。

もう少し出でてくればというところもあるんですけど、私としては、氏族の面からいうと、最後、偽くまモンがあつたかと思うんですけど、そういうレベルの人たちがいろいろな所でつくる、ただ、お

そらく金田城の場合はかなりいい石積みをしてますので、一番、朝鮮半島とかに近い所からだんだんと優秀な人材とかが行つたりとかするのかなと思います。

あとは、重要なことについて、日本人にも通訳とか、朝鮮語とか習わせたりするんですけど、そういった所で築城に関する技術を伝習するということは文献上は見つかっておりませんし、奈良時代後半の吉備真備が兵学を習つてくるということで、四書五經というような重要な論語とか、そういうような勉強をするものとか、仏教経典に比べるとどうも軍事技術というのはなかなかやり取りをしてるんじゃないかなというふうに文献史学の上からは考えております。今日はそういった意味で、いろいろな面で勉強させていただいたので、また討論を踏まえて、より勉強させていただきたいと思っております。

佐藤：ありがとうございます。火君は、古くは肥前・肥後を合わせて火の国といいまして、今は「肥」という字ですけれども、その前は「火」も使っています。お話にあつたように、「日本書紀」には火葦北君という、肥後の国、今でいうと熊本県の地方豪族の有力な人が、百濟の国の高官にまでなつて、また外交顧問として日本でも迎え入れられようとした記事がある。肥後の地方豪族が朝鮮半島との間で行つたり来たりして、大活躍をしているということだと思います。これは例えば、同じ火君が八世纪の初め大宝年間の戸籍を見ると、福岡県の博多湾に面した志摩郡の郡司が肥君猪手という人で、奴婢を含む一〇〇人ぐらいの戸口を抱える戸主として出てくる。つまり、志摩郡というのは、弥生時代

でいえば伊都国が相当すると思われますけれども、大陸半島との最前線に火君が郡の代表者として存在していたということもある。そこで中村さんに伺いたいのは、一応肥後の国にある鞠智城が、そういう対外関係とどうつながるのでしょうか。

中村：先ほどの仁藤さんの資料に吉士岐彌とか、吉士がいくつか出てきて、渡米系氏族が紀氏というような、代わりに類するものをもらって主に参加してくるんですけど、そうじゃない、それ以外の普通の氏族もだいぶん朝鮮外交に関わっている。今までの先生方は結構そういうところを、和歌山の紀氏とか、ああいうものが外政に特に関わるとか言うんですけど、特にそんな縛りはないというふうに考えておられますし、向こうで混血になつている人で物部の朝鮮語の麻奇牟や用奇多といった名前の人もたくさん出ておりますので、氏族によって特に朝鮮半島によく行くとか、そういうものはあまりないというふうに考えております。

佐藤：分かりました。どうもありがとうございました。それでは、続いてもう一方、明治大学の五十嵐さん。五十嵐さんは、熊本県教育委員会が主催する鞠智城の若手研究者のための研究助成を得て、鞠智城の研究をしていただいたことが一度あつたと思います。そういう意味で、鞠智城の研究を前に進めていただいた研究者の方ですけれども、今日は鞠智城に限らず古代山城についてご専門の軍事的な研究のお立場からでもコメントを頂きたいと思います。

五十嵐：明治大学兼任講師の五十嵐です。若輩ではございますが、本日はよろしくお願ひいたします。私

の専門は古代の軍事制度でありまして、一般的に律令体制が本格的に成立・機能しました時期、概ね八～九世紀の軍事に関心を持つております。古代山城が築城されたのは、本日のご講演の中にもございましたように七世紀後期といわれておりますので、私の研究の前段階に位置付けますが、私の研究にとつても重要な時期、また研究対象であります。また、日本古代史の観点からすれば、律令体制・律令制国家ができるその前段階もありますので、古代史的にも非常に重要な時期であると思います。

古代山城を考える際には、本日の先生方のご講演でも触れられていましたように、長期的な視野からの検討が必要になります。私はこの観点からコメントを申し上げたいと思います。

大きく分けて三つにコメントでは整理した次第でございます。まず起点となる築城期と、あとは廃城が進む、取捨選択がされる時期と、あとは長期的には維持された古代山城——大野城、基肄城、鞠智城の性格、この三段階に分けられるのかなと思います。

まず起点となります築城期を見てみると、白村江敗戦（六六三年）が発生した七世紀後期ということになります。一般的に、白村江敗戦で考えていいのかなと思いますが、百済滅亡の時のインパクトに比べれば白村江敗戦のほうが圧倒的に大きいわけですねけれども、そのあと百済復興という一定程度の衝撃があつて百済復興作戦、最終的には失敗してしまいますが、六六〇年をどう捉えるかということももう少し考えてもいいのかなと思います。まだ百済復興の可能性がありますので、白村江敗戦に比べれば軍事危機としては低いため、そんな大きな問題にはならないかなと思いますが、ひとつ付

け加えておきます。

築城時の基礎的事項ですけども、築城時期・築城主体・施設構造については亀田さんと向井さんのご講演で明確になつたと思います。特に亀田さんがご指摘され、向井さんもそれに関連しまして、「よみがえる古代山城」でも「見せる城」ということで関連して述べられておりますけれども、古代山城が未完成か否かという論点はかなり重要なと思います。

この点は、仁藤さんが検討されました国際関係も踏まえますと、外交から得られる情報、本日は天智朝・天武朝等々、長距離の話を聞いていただきましたが、そういう中で得られる情報の中で防衛体制構築に何か変化があるような情報があつたのかということと、連関するのかということをお聞きしたいと思います。すなわち、唐・新羅の戦争であるとか、唐がチベット方面との戦いに専念せざるを得ないような情報も入つてきましたか否かということで、そういった対外情勢が変化を与えたのかということをお聞きしたいと。すなわち、現在知られている对外防衛体制というのは、天智天皇が當時構想していたものであるのかということと関連する問題であります。

二つ目につきまして、築城期の防衛体制に関しての話ですけれども、これは私の個人的関心となりますが、一般的に天智朝に構築された防衛体制は古代山城、あとは烽・防人・水城が出てきますけれども、それとは別に水軍というのも考えてもいいのかなと私は思っております。陸上で戦うことも大事ですが、海上での迎撃という点は軍事的に見れば結構大事で、白村江敗戦で全水軍が無くなつた

とは考えられませんが、一定程度低下しておりますて、特に唐の水軍に惨敗を喫しているということを考えますと、水軍の再編というものは陸上の軍事力とは別に、もう少し考えていいかなと思います。しかし、関係史料が全くないですし、考古学からアプローチできるのかは難しいところですので、文献のほうで仕事しなくてはならないと思います。瀬戸内の迎撃なども含めて、水軍はもう少し考えてもいいのではないかと考えております。

あと築城期の三点目としましては、赤司さんから兵站機能から検討を加えられておりますが、白村江の敗戦の前後では軍事的環境は大きく変化したと思います。それ以前は、ご批判はあるかもしれませんけれども、対外的に進出する外征型の軍事形態だったものが、防衛型にシフトするわけですけれども、その際に兵糧をどのように確保するのかについても変化があつたのではないかと思います。

白村江敗戦前は博多湾に近い那津官家が重要な役割を果たしていたと考えますが、敗戦後そこに置いておくと奪われてしましますので、おそらく那津官家はなくなつたんだろうと一般的にはいわれておりますけれども、白村江敗戦後の軍糧備蓄はどのようになつたのかということは、文献のほうからちよつと分かりづらいところがあるので、考古学の面から何か、倉庫施設の関係で何か言えないのかなと。分かることがあつたら教えていただきたいなと思っております。

次に、ミドルレンジの中長期的な視点では、大部分の古代山城が廢城となつたことが論点となります。亀田さんも、八世紀初期までには古代山城の大部分が廢城とされ、いうなれば国家・王権による取捨

選択があつたことを述べております。宗教施設に転換した事例があるということも非常に興味深いところではございました。古代山城の廃城は天智朝の防衛体制が継承されなかつたことを意味することになりますけれども、仁藤さんは大宰總領制との関係から検討しておられるところでございます。

この点に関して、天智朝と天武朝以降には連続性と断続性があるといわれたりもしますが、防衛体制の面から見たら、断続性をいかにして求めるのかというものが論点になるのかなと思います。白村江敗戦後の軍事危機の潜在化、これは国際関係に依拠するところですけれども、律令体制を構築する中で支配体制が再編・強化されていきますが、その律令体制において古代山城というものは不可欠なものであつたのか否かということも気になるところです。国際関係以外で律令体制構築の中で古代山城をどう評価するのか、どう位置付けるのかということは重要であると思います。

あと、最後に長期的な視点から見ますと、維持された古代山城をどのように理解するのかが論点となります。すなわち大宰府近傍の大野城・基肄城と肥後国の鞠智城が該当します。これはご報告の中にもあつたかと思います。亀田さんも地方支配の機能を持つようになると指摘しておりますし、赤司さんは古代山城の機能は兵站から備蓄に転換。以前、リスクマネジメントという言葉もお使いになられていたと思いますが、そういった観点から米穀の備蓄に適していたと指摘しておられます。

ここからは私の関心ですけれども、大宰府の独自財源として、軍事的用途だけではなく様々な用途、災害とか天変地異に対して支給されることもあったとは思いますが、色々な目的に変化していくた

いうのは、私も鞠智城を研究する中で感じたことがあります。

問題となるのは備蓄された米穀はどこから来たのか。どこから来たって言葉は軽いですね。どういった形態で徴収されていたのかということでありまして、大野城・基肄城の場合は大宰府に貢進されてきたお米で理解できるのかなと思うのですが、私も鞠智城の特別研究で採用していただいた中で、鞠智城の場合はどういう形態でお米を徴収しているのかは要検討であるかなと思いますので、本日のディスカッションの中での検討主題としていただければ、私としても嬉しい次第でございます。以上、雑駁で長くなりましたが、古代山城の成立と変容という観点からコメントを述べさせていただきました。

佐藤：ありがとうございました。今日のこれからパネルディスカッションの課題を整理して頂きました、大変ありがとうございます。亀田さんが言われた古代山城の完成・未完成といったことが、どういう歴史的な状況変化の中であり得たか。あるいは、未完成でも機能したということもあるかなという気もいたしますし、あるいは兵糧、山城に蓄積される穀穀がどういうかたちで徴収されたかということですね。

おそらく齊明天皇の時代に百濟の復興支援を行つて派遣した白村江戦への過程では、那の津の屯倉に近い所に貯積されていたかと思いますが、それがどうなるかということですね。最前線の水際で守るのではなく少し奥の地でそういうことになるのか。これは向井さんの話にありました、纏深防御と

いうかたちになると、博多湾に面した屯倉よりは少し奥の、大野城とか、基肄城とか、あるいは鞠智城にあるほうがいいということになろうかと思います。それも大きな課題になるかなと思います。

もう一人コメントの方がおられるので、それを伺つたあとで、その話に移りたいと思います。熊本県教育委員会の矢野さんは、長いこと発掘調査を担当されてきたわけですけれども、鞠智城の総括報告書をまとめられた日から、今日のそれぞれの講演をどう受け止められたのか、コメントをお願いしたいと思います。

**矢野**　こんには。熊本県教育委員会文化科の矢野と申します。私のほうからは、佐藤さんのほうからもお話をありましたように、まずは本日、鞠智城、古代山城シンポジウムということで、鞠智城について、少しその概要を述べさせていただきたいと思います。

まず鞠智城の位置ですが、熊本県の北部、菊池川という川が阿蘇北外輪山から有明海へと流れているんですけども、その北岸のほう、山鹿市、それから菊池市のちょうど市境に位置している城になります。古代の律令制下といいますか、古代の段階ではどうも菊池郡のほうに入つてたらしくて、昭和三〇年代に山鹿のほうと菊池のほうに分かれてしまったということになつております。

一九六七（昭和四二）年から発掘調査を実施しておりますが、現在分かつていてることは、まず城の範囲です。城は外周が三、五キロあります。現在、古代山城が全国で二三確認されておりますけれども、それの中でも大きな方の城になります。東京ドームに換算しますと一二個分という広さを持つ

てる城でござります。

矢野… 先ほど、赤司さんのはうからもお話をありましたけれども、標高が非常に低いところに立地しているのが特徴として挙げられます。一番低い所で標高九〇メートル。一番高い所で一七一メートルということで、山城というよりも、どちらかといいますと丘城のような所に立地をしております。そういった非常に低い立地なんですが、眺望は非常に開けておりまして、標高一六五メートルほどの灰塚という展望台を置いている箇所がありますけれども、そこからは三六〇度の景観が楽しめますし、特に南側で、三〇キロ南に離れた熊本市のはうも一望できるような、非常に開けた所に鞠智城が所在をしております。

発掘調査で見つかつてするのが現在、城門三カ所ございます。門の形態で言いますと、先ほど向井さんのお話にありましたけれども、円形の繰り込みを持つタイプです。先ほど四角いタイプと円形のタイプがあるという話がありましたけれども、円形のタイプということで、百濟系の門礎石を持つ城門が三カ所となります。それから土壘のはうですけれども、版築工法で造られた土壘になりますけれども、今のところ、亀田さんがおっしゃるような側面に板を設けるような、そういうた痕跡は今のところ確認されておりません。ですが、向井さんのおっしゃいました、土壘の前面に柱が並んでおりまして、この柱は土をせき止める板を支えるための柱といわれてるんですけども、その前面の柱列が確認されておりますことから、版築による土壘だろうというふうに判断をしております。

それから、七二棟の建物が見つかっておりまして、その中には、上から見て平面が八角形の形をした建物跡が見つかっております。この八角形の建物に関しては朝鮮半島の方と関連のある施設ではないかというふうに考えられております。それから、北側の谷のほうには五、三〇〇平米という非常に広い池があつたことも調査で分かつております。

この他、建物遺構と合わせて遺物も出でておりますけれども、土器、瓦、貯水池の方からは建築に使用する建築材、それから、七世紀の中頃と考えられておりますけれども、銅製の菩薩立像が見つかっております。これは、国内産ではなく、朝鮮半島の方で作られたものであろうというふうに考えられておりまして、今日お配りしている資料の中にもありますけれども、おなかの前で持物をささげ持てる姿、百濟の方で流行する宝珠捧持形菩薩、「百濟觀音」なんかにもありますけれども、玉を持った菩薩像と類似するということで、百濟系の銅造菩薩立像ということで位置付けております。

それから、鞠智城は実は約三〇〇年間存続したというふうに考えておりまして、その創建はおそらく大野城・基肄城と同じぐらいの頃に築城されただろうと考えられております。七世紀末に縫治、先ほどから先生方のお話の中でも縫治に触れられてましたけども、縫治される。これが七世紀末。全部で五つの各期に分かれておりまして、一期が創建期、二期が縫治期。八世紀の第1四半期の後半から三期になるんですが、そこで初めて鞠智城に礎石建物が建つ。それまでは掘立柱の建物なんですが、三期で礎石建物が建つというふうに考えております。それから八世紀の第4四半期、時代でいいます

と平安時代ぐらいから大型の倉庫が建ちまして、最終的に一〇世紀の中頃で廢城を迎えるという変遷を考えております。

その変遷の中でも特に鞠智城一期から三期の前半ぐらいまでは、本日も赤司さんの方から話がありましたが、大宰府関連史跡とほぼ変遷が同じということで、仁藤さんのお話にもありましたけども大宰總領制。そういう広域行政組織の中で、大野城、基肄城と鞠智城は修理をしたんではないかと、いうようなことを考えております。ちょっととりとめなくなりましたけど、鞠智城の概要などということでお話をさせていただきました。

佐藤：ありがとうございます。最初に拝見したビデオと絡めてご理解頂ければと思いつれども、鞠智城はこれまで長いこと調査された成果がまとめられている。色々なかたちで全国の古代山城の研究を今日ではリードしてゐる面があると私は思っています。そうした全てを踏まえて全体の古代山城にメスを入れるというのが、今日のシンポジウムです。

それでは、続いて、古代山城の成立を巡るテーマに移りたいと思います。成立を巡って、細かい意味では成立時期をどう見るかということです。講演の中では酒船石遺跡のようなちょっと古い、七世纪でも半ばぐらいの話からあつたし、白村江の敗戦の直後が一番大きいインパクトがあるとも。ただし、五十嵐さんの話でも、六六三年の白村江の敗戦の前に、六六〇年の百濟滅亡も一つの外交上の脅威であったということです。こうした外交的な環境の変化の中で、古代山城の築城を考えるとどうな

るか。細かなことを見ると、様々なことが考えられると思います。

またその際に、「日本書紀」によれば、大野城や基肄城が百濟の亡命将軍の指導の下で築城されたというので、一般的には百濟系の技術とみています。ちょうど白村江で破れて日本列島に大量に百濟の貴族や將軍たちが渡ってきた、その人たちの軍事的なノウハウも含めて、古代の朝鮮式山城が築かれたと一般的にはいわれてきました。その技術が具体的にはどうかということになると、どこの系統の瓦かという話もありました。また、土木技術もあります。版築とか敷粗朶工法とか、あるいは、石垣の積み方もそうだと思います。そういう工法が半島系の技術というのですが、具体的にどれが百濟で、あるいは高句麗の影響や、新羅の影響もあるかもしれない。そのことをどう見ていくかということも、成立時期の中を見ていただきたいと思います。

最初に成立の時期については、古代史の立場から仁藤さん、詳しくはどのように見たらよろしいですか。

仁藤：先ほどからいろいろなお話があつて、六六〇年の百濟の滅亡のあと齊明が朝倉宮に来て、その時期に何かあつたかもしれないという議論が一つと、もう一つは六六三年の白村江の敗戦以降、守りを固めるという話と両様のご指摘があつたと思います。先ほどの五十嵐さんのお話にもありました。それより前は那津屯倉の設置もそうですが、外に出て行くことを前提に考えると、物資の集積所のようなものは外向きに置かれていた可能性が私は高いのではないかと思います。むしろ負けてから内に

こもると考えるならば、まさに鞠智城みたいなものは六六三年以降の構想として取りあえずは考えた方が辻褄が合うように思いますが、いかがでしようか。

佐藤…

その点については、向井さんいかがですか。時期の問題。かつては神籠石系山城はもつと古いという意見もありました。あるいは、齊明天皇が百濟の救援のために出兵して朝倉宮を守るために築城したのではないかという意見もありますが、その点についていかがでしようか。

向井…

齊明天皇築城説ですが、一〇〇〇年代の初め頃までは九州では根強いものでした。一〇〇八年の『日本歴史』七二二号に八木充先生の反対論文が発表されてから、九州の考古学者の人たちは節操がないというか、八木論文が出たら即座に転向してしまって知らん顔してます。私は以前から齊明天皇説はおかしいと言っていました。一つは、韓国でも列石のある版築土塁の城は八〇年代に木川土城という城が見つかって、最初は百濟の城だといわれていたんですが、だんだん調査が進むともう少し新しい時代の城だということが分かつてきました。

韓国で列石が始まるのは、せいぜい早くみても七世紀の中頃、だから、ちょうど日本に古代山城が伝わってくる頃に韓国でも始まるということが分かつてきました。もう一つは、ああいう大きな切石を使った列石の城は韓国にはないということで、こういうことが分かつてくると、旧石器ねつ造事件じやないですが、日本だけ古くから列石を持つた版築土塁の城があつて、韓国では新しいというのは、これはあり得ない話でして、そういう点からも私は齊明天皇というのはちょっと厳しいかなと思

うんですね。

それと酒船石の遺跡、私も興味深く、発掘状況も見たことがあります、先ほどのミーティングの時にちょっと出た、亀田先生の意見でしたか、山城みたいなものを造ろうとはしているんだけれども、どうも何か違うものになつてているという中途半端な感じは受けます。これは甘樺丘の蘇我氏の邸宅跡といわれている遺跡についても、同じような印象を受けます。こんなところでいいでしょうか。

確かに、酒船石の石積みには裏込めもない。『日本書紀』にも、造るからに崩れてしまうだろうと人々に言わされたという石積みなので、やはり大野城の百間石垣などと比べるとかなり違うものではないかなというイメージが私もございました。今の成立時代観については、亀田さん、いかがでしょうか。

亀田　古代山城の成立？、神籠石系山城の成立？。

佐藤　それがもし違うのであれば、どう違うか。

亀田　まず、朝鮮式山城に関しては、大野城や基肄城などから六六五年が一つの定点です。酒船石遺

跡に関しましては、僕はどのように扱かえればいいのかよく分からないと申し上げました。今、佐藤さんがおっしゃったように、積み方はあまり上手ではないのかもしれません。ただ、一方で、版築はかなり立派に行っています。そのあたりをどのように理解するのか。それで、先ほど中村さんがおっしゃったように、上から、こういうものを造りましようとなつた場合、現場監督や実際に施工する人たちはどのような人たちなのか、気になるところです。

先ほど版築のお話をしました。堰板を使つていなくても、作業自体は素人さんでもできるのかなど思います。ただ、赤司さんや向井さんからお話をあつた、繩張の話、どこにどう造るのかという話になると、ある程度の知識がないとできないと思います。つまり、洒船石遺跡の実際の施工には少なくとも、飛鳥にいた渡米系の人たちは関わっていてもいいのかなと思つております。

あの石垣の下、基礎部分には花崗岩の石を敷いていました。上の石は砂岩です。花崗岩の上面が人為的に平らにしたものであるならば、技術面で気になります。飛鳥地域には、猿石などと呼んでいる花崗岩製の石造物があります。この石造物に関しましては、推古天皇の時百濟からやって来た路子工という人物が須弥山や呉橋を造つたという記録があり、飛鳥の花崗岩製の石造物作りに彼が関わつていたと考えられています。

日本国内で花崗岩の加工がいつから始まるのかということに関しては、一部例外はあります。近江、滋賀県の六世紀の終わり頃の削り抜き式石棺が古いグループに入ります。ただ、まだあまり上手ではなさそうです。そして飛鳥時代を代表する飛鳥寺の造営などで花崗岩が使用されています。つまり六世紀の終わり頃から花崗岩の加工技術が本格的に入つてくるようです。石の硬さも含めて加工技術、道具であるたがねの問題などを考えると、やはり渡米系の人が関わっている可能性はゼロではないと思います。

そうしますと、少なくとも洒船石遺跡の造営といいますか、あの周辺の遺跡に関しましては渡米系

の人たちが何らかのかたちで関与している可能性はあると思います。ただし責任者がどのような人物であつたのかという点に関しては、よくわかりません。酒船石遺跡につきましては、その遺跡の中の状況が全然分かっていませんので、もう少し調査を期待したいなと思っています。

鬼ノ城も、時期的には7世紀の半ば、六六〇年代の築城を考えていますが、ここのは花崗岩加工に関するまでは、以前から、地元におられた葛原克人さんという方が、備中で一番古いお寺の一つである、秦廃寺の礎石が花崗岩を加工したものであることから、秦廃寺関連の花崗岩加工技術を持つた人間を連れて来て造らせたのではないかとおっしゃっています。

それから、鬼ノ城を実際に造ったのは誰かということについてです。鬼ノ城のある所は旧の賀夜（かや）郡です。あの地域に関しましては「備中國大税負死亡人帳」という『正倉院文書』があります。鬼ノ城の麓の人々で、税金を納めずになくなつた人たちの七三九年の記録です。その記録の中に、畿内系の渡来人の名前がかなり出てきます。西漢人（かわちのあやひと）など、いくつか出てきます。忍海漢部（おしみのあやべ）も出てきます。その人たちは、畿内経由で入つて来た渡来人たちだと思っています。例えば築城技術に関わるようなものを何か、直接的ではないにしても持つている可能性はないのかなどちょっと期待しています。理由は、鬼ノ城はよその古代山城どちょっと異なる部分がありますので、そのような情報なり技術をお話しした渡来系の人たちが持つていれば、彼らのような地元の人たちも使って築いたのかなと思っています。

向井さんたちが最初におつしやつた、縄張はどうするか。これはプロがいないと全くの素人さんが縄張を行うのは無理だと思いますので、そういう縄張をする人から実際の現場監督と施工する人たち、そこまで分けて考えたら、鬼ノ城築城の実態にもう少し接近できるのかなと思っています。

年代に関してはちょっとまだ詳細はわかりません。ただ、これは危ない話ですが、鬼ノ城に関しては、僕は六六七年でもいいのかなと個人的には思っています。理由は、備讃瀬戸の香川県側に屋嶋城を造つて吉備側に造らないというのは、交通路の重要性を考えても厳しいのかなと思つております。可能性ですが、ひとまずそのように考えております。

佐藤… ありがとうございます。渡米人研究の第一人者の亀田さんのご意見ですので、渡米系の技術については、今のご指摘はお聞きするほかないと思います。ただ、技術のところでは今お話しにあつたように、縄張りは、例えば亡命してきた百済の将軍の縄張りかもしないけど、実際の工事をやる時には、人々を動員して築城する時にはやはり地元である倭の、あるいは律令でいえば大宰府からの人も行くかもしないし、地元の肥後の国人も鞠智城の場合には行くかも。地方豪族が、それまでの支配下の民衆を動員して築くということもあるかなと思つております。

大野城の太宰府口城門では、最初に築城した六六〇年代の時の堀立柱の根が残つていて、それに刻書で3文字が書いてあつた、それが、「浮石部」と読めるのではないかと思っていますが、私は、在地の豪族が部民を動員して門を造つたと考えています。しかも、その豪族がその門を守つてもいる

と思つています。これは藤原宮とか平城宮にも門号氏族というのがありますし、大伴氏が大伴門を守り、佐伯氏が佐伯門を守り、的氏が的門を守るというふうに、部民を引率する中央の豪族が宮城の門をそれぞれ守ってきたという伝統があります。

つまり、地域の豪族の方も、やはり山城の城門の造営や守衛に関わるのではないか。ただ、軍事組織がどういう指揮命令系統にあるかについては、少し考えなくてはいけないと思いますけれども。

あと、今のお話を聞いていて気になったのは、堅い花崗岩を加工する技術だとか、あるいは版築技法など、日本で初めて版築や花崗岩の礎石を造る技術は、飛鳥寺の造営で六世紀の末に行われている。これは蘇我馬子が建てた日本で初めての伽藍寺院ですけれども、その時には百濟からたくさんの工人の指導者を呼んできてやっている。

仏像を造る時は渡来系の鞍作止利が造るということで、渡来系の技術を使いながら初めて寺院といふものを建てた。三重の塔も、いわば高層ビルも建てるし、礎石建ちで瓦葺きの伽藍の建物を造った。そうすると、基壇を築く時に見事な版築をしている訳ですけれども、私は版築技術は寺院建設から日本列島に渡ってくるものとかつて思っていたのですけども、最近だと古墳の石室の下層に版築みたいなことをしてある例もあることが分かつてきました。築城技術としての版築の場合は、どうなのでしょうか。それも含めて、今の成立の話について、赤司さん、話を聞いていただけないでしょうか。

赤司： まず版築の技術からお話をします。日本には百濟の版築の技術が六世紀後半に仏教と一緒に入ってき

たと考えられています。先ほどの古墳ですが、高い盛土の古墳が古墳時代中頃に出現しますが、版築に近いと考えられています。版築は堰板で挟まれた土を突き棒で締め固める技術です。大野城の土壘に百濟の版築技術が使われていたかということは間違いないです。百濟最後の都の泗沘に扶蘇山城がありますが、この山城の土壘版築の技術に、土壘の外側の堰板を、棒や繩で背後に引っ張つて留める方法が見つかっています。版築には堰板で四角く閉むという方法もありますが、土壘の高いところで版築する際には、堰板をひっぱるようです。中国では繩ではなく髪の毛を用いる場合もあるそうです。扶蘇山城の土壘にその棒や繩の痕跡が孔になつて残っていました。「横木孔」という名称で報告されていたと思います。この横木孔を探したいと思つていたら、大野城の土壘の調査で検出できました。初めて確実な百濟の版築技術を確認できました。きっかけは、もともと土壘の内側は道路になつていていたので土層断面が見えていたのですが、小さな孔がいくつも並んでいました。先輩たちはこれをカワセミが開けた孔だろうとか言つていたのですが、本当に孔がランダムに空いていたのです。

ある時、水害で大野城の一部、土壘の外側が崩落したことがありました。そこで簡単な調査を行った機会ができました。崩落した土壘の外側断面を掃除して観察しましたら、径五センチぐらいの孔が見つかり、随分と中の孔が通っていました。ちょうどその調査の時に、韓国の百済山城を専門としている忠北大学校の車先生がご覧になる機会がありました。扶蘇山城の横木孔と同じもので間違いないとおっしゃいました。

ということで大野城に関しては百済の版築技術が、少なくとも一部に入っているのは間違いないと  
いうことが言えると思います。飛鳥寺などの寺院基壇の版築技術の流れではなく、百済山城の技術だ  
と確實に言える例だということです。

それから築城時期ですが、さきほどから『日本書紀』の齊明四年（六五八）の記事の話が出ていま  
す。大野城は六六五年に築城と記されています。

齊明四年（六五八）の記事は、たしか出雲の海岸に雀魚が大量に揚がったということで、それは後  
に百済が滅亡したことと、国家が西北の畔に陣を構え、城柵を築いて山川を断ち塞ごうとしたことの  
兆しであるということでした。これは朝鮮式山城築城の六六五年以前なので、神籠石築城のことと解  
釈する説です。九州の皆さんには支持しているということですが、私はそうは思いません。もつと後の  
ことだと思っています。

ところで、六六五年にお大野城を築くとあるのは、完成した年だと理解しているのですが、これは  
築き始めた年で、完成はもつと後だという方もいらっしゃいます。私は六六五年に完成したというの  
が一般的な解釈だと思いますが、山城の築城期間で分かっているのは怡土城のケースで、一三年ほど  
かかっています。大野城に適用すると六六五年以前のさらに古く、白村江海戦よりももつと前から造  
り始めていたと考えられるのではないかと思っています。

今日のお話の中にもありました、山城は簡単にできるという見方もあると思います。ただそれは

よくわかりません。かつて、とあるゼネコンに水城の築城期間を算出してもらつたことがあります。土量計算した結果、一年でつくれるということでした。そのかわり膨大な動員量が必要です。そのような膨大な人間の動員が可能であればいいのですが、白村江の敗戦で筑紫の人々は疲弊し、さらには戦闘で壊滅していますからではいつたいどこから動員することが可能かということになります。造るうと思えば一年で造れるのでしょうかが、怡土城の例を当てはめれば十年以上さかのぼることになると考えています。

この築城年代についてはもうひとつ、大野城の太宰府口城門の築城期の門の建物を支えた木柱が残存していまして、そのうちの一本を取り上げました。これの年輪年代測定をお願いしたら、六四八年という年代が出ました。三〇年前のこととして、その時、外側は削られているので、数値上の年代でしかないということでした。しかし、私が九州国立博物館に勤務しているときにレンタルゲンCTスキャナーで断層写真を分析したら、削られていないことが分りました。そこで、再度、年輪年代測定をされた奈良文化財研究所の光谷さんと検討したら、木材は伐採された時の年輪を残しているという結論が得られました。結論的に言いますと、六四八年十二年ということとして、大野城の城門に用いられた材木は六五〇年に伐採されたということでした。さらにこの樹木はコウヤマキとして奈良の平城京に用いられていたコウヤマキの年輪年代データと一致するので、奈良近郊のあたりから運び込まれたのではないかということです。国家的事業として用材は奈良からは運んだものと推測されます。

私は考古学ですので、史料では六六五年ですが、出土遺物を無視はできません。

さらにもう一つ、私が考へてゐる説がありますがこちらはあまり評判が良くありません。齊明天皇が飛鳥から九州にきて入つた宮殿を朝倉橋広庭宮といいますが、その遺跡は大野城の南麓にある大宰府政府の第一期の下層の建物で真北方位の中核建物が確認されていて、これが朝倉宮ではないかという考え方です。大野城・基肄城・水城を築きますが、まず、これらを築いた後に、大宰府政府の前身官衛が成立するという考え方もあるのですが、そうではなく、中心的な施設があつたから大宰府や大野城を築いたと考へるのが普通ではないかということです。朝倉宮は仮宮という方もいますが、遷都と記されていますし、一族郎引き連れてやつてきていますので、都だつたと思います。

この朝倉宮は現在の朝倉市朝倉町にあつたという説があります。私もそう考へてかつては発掘調査をそこで実施していました。市の方でもいろんな個所を発掘調査していますが、何も手掛かりがないのです。比定地と近くで奈良時代の官衛と寺院は確認できているのですが……。

そういうことがあつて、大宰府政府の七世紀後半の下層の建物遺構の方が、ふさわしいのではないかと考へた次第です。あくまでも一つの可能性です。ただし、大宰府政府の下層の建物が、朝倉宮以外にはどのような性格のものかということも大事です。先輩方は那津官家が太宰府の地に移設されたと言わされてきました。

朝倉市内説は江戸時代の終わりごろに地元の庄屋さんが書き記したものに書いてあり、これを福岡

藩の学者が取り上げて、その流れの中で朝倉説が続いている。もういちど見直してみないかということです。そのようなことで大野城の築城も併せてもっと古くなる可能性もあるのではないかと考えています。

佐藤.. 向井さん。

向井.. 大野城の太宰府口城門の年輪年代、赤司さんは非常に重視されてるんですが、法隆寺の心柱の年輪年代は五九四年でしたか。あれはどう考えられますか。法隆寺非再建論なんですか、赤司さんは。

赤司.. 年輪年代測定で、古い時代の年輪年代は大丈夫かというお話は分かるのですが、現代から遡って七世紀あたりまでは、物差しのスケールとしては大丈夫だと言われています。それより以前、確実かどうかよくわかつていません。

向井.. 法隆寺の場合は、心柱は非常に古い年代が出てるんですが、ほかの部材が見つかって、それはもつと新しい、七世紀末から八世紀。だから、太宰府口城門については私はもうちょっと他の部材がいろいろ出ていて同じような年代が出たら認めるんですが、ちょっと柱だけだと築城年代にはできないなと。

佐藤.. 年輪年代学は、天候の良い年は年輪の幅が、木が成長するので広くあつて、天候の悪い年には年輪の幅が狭いと、いうのをグラフしていくと、確實に、木の皮があれば何年に切ったかということが分かることですね。これはスギとかヒノキ、コウヤマキなどで確認されています。今の赤司さんのお話だ

と、六五〇年頃に切った木が大野城の太宰府口城門の最初に建てた門の柱に使われていたという結果が出た。ただ、向井さんがおつしやつたように、法隆寺では建てた年よりも一〇〇年ぐらい古い時代の木を使っていたという例がありまして、例えば木を貯木したり、乾燥させてから使つたのかということがあります。赤司さんも、それを理解するために、奈良から運んできたのではないか、そういうことに時間がかかるのではないかということをお話をされた訳です。気になりましたのは、コウヤマキは九州でも生えてたいそうですが、七世紀代はあまり九州ではなかつたのではないかでしょうか。

赤司.. 九州にもコウヤマキはあるといわれています。宮崎にコウヤマキが自生しているとうのは、一体どこに根拠があるのか確實にはわからないです。

佐藤.. 百濟の武寧王という、桓武天皇の母方のずっと先祖である百濟の王様のひつぎの材がコウヤマキなのです。これは、日本列島から持つて行つたひつぎでして、武寧王は北部九州の加唐島という島で生まれたという伝承もあります。その島は、佐賀県にあります。その島で生まれたのでシマ王という名前の王なのですけれども、あれは、九州から持つていつたのか、大和から持つていつたのか。

赤司.. 分かりません。コウヤマキはあるといわれてるんですが、それがどこなのかは。

佐藤.. 今のお話では、六五〇年ぐらいから、赤司説によれば六六五年以前から大野城の築城の段取りが進んでいたのではないかということですが、仁藤さん、そうなつてくると何が契機になるかという点ではいかがでしょうか。

仁藤：そうなると、やっぱり孝徳朝の渟足（ぬたり）柵とか、磐舟柵とか、との連動ですかね。なかなかすぐには思い浮かばないところがありますけど、隋や唐が高句麗を攻めるという、対外的な危機をかなり過敏に受け止めればそういうこともあるのかなと思います。

佐藤：隋は高句麗を攻めに行つて三回失敗して、自分の国が瓦解してしまったのでした。唐は、皇帝の親征で、高句麗への遠征を始めるのが六四〇年代半ばぐらいです。そうすると、高句麗・百濟・新羅・倭国の諸国には激震が走るわけです。それで何とか国家的な統一を図らなくてはというので、いろいろ事件が起きる。倭では、蘇我の本宗家を滅ぼす事件が起きるし、高句麗でも、百済や新羅でもそれぞれ大きな事件が起きて、国家的な集中を図ろうという動きが起きる。

そういう中で六四〇年代後半には、齊明天皇の時、北では能登半島から阿倍比羅夫が日本海側に遠征して、新潟県の新潟市に渟足柵という城柵、新潟県の村上市に磐舟柵という城柵を立てて、さらに北方の蝦夷と交流して帰つてくるということがあつた。あれはやはり、唐の東アジア遠征を受けた一つの北周りの動きだと、私たち古代史では考えています。そういうことが南の方であつたのかどうか。それはまた今後の研究ということになろうかと思います。この点についてはいかがでしょうか。中村さん、五十嵐さん何かありませんでしょうか。五十嵐さん、いかがですか。

五十嵐：渟足・磐舟は七世紀中期となりますが、城柵と古代山城が同じ時期に運動してくるかどうかは少し難しいかなと思います。以前、岡田茂弘先生が鞠智城のことで、齐明朝との関係でおっしゃつておりましたが、施設の構造に共通点があるのかどうかということもひとつ考えてもいいのかなと思います。

城柵タイプなのか、山城タイプなのかは、もう少し慎重に見てもいいのではないかと考えております。

佐藤.. 五十嵐さんは、先ほど、日本の国防体制が外征型から防衛型に変わるとされ、その大きな変化は白村江の戦いではないかということをお考えでした。唐・新羅が攻めてくるかという危機感の下では水城をあつという間に造るということはあつたかと思うのですが、なかなかそれ以前の段階でそれだけの危機感があるかということはちょっと問題かもしれないですね。色々なことを考える必要があるかと思います。今のお話は、いろいろまだまだ広がるのですが、次のテーマにそろそろ……。では、亀田さん。

亀田.. 仁藤先生か佐藤先生に教えてほしいんですが。八木充先生の論文に関して、堀江潔さんは違った考え方を出されています。どちらの可能性が高いのか。いかがでしょうか？

佐藤.. 仁藤さん、どうでしょう。

仁藤.. 八木論文については、堀江さんによる反批判の論文もあるのは承知しております。史料に見える「國家」という用語が何を指すかというのが一つ焦点になっていて、百濟を指すのか、倭国を指すのかというのが論点で、堀江さんは国家というのが自分の国を指す場合もあるということで批判をされています。先ほども紹介があつたように、もともとは怪異的な記事ですが、それを後知恵でどう解釈しているかということで、少なくとも『日本書紀』は七二〇年にできてますから、齊明朝以降の歴史の道筋を編者は知ってるわけで、そういう意味では、あれが倭国ものであるとしても、いわゆる白村江の

敗戦以降、山城を建てたということの前兆、兆しであるというふうに後知恵で解釈したとしても、私は全然問題ないと思います。逆に、あの記事によって造営を齊明朝だと決め付けるのは逆に危険ではないかと思います。だから、堀江説に乗つかつても否定的なスタンスで解釈できるのではないかと思います。たとえあれが百濟ではなく倭国と解釈しても、あの年に山城を造り始めたとか、そういう話ではなくて、ということだと思います。

佐藤…

「日本書紀」のこの時代の百濟関係の記事は、やはり色々と検討して挑まなくてはならない記事がいっぱいあると思っております。よろしいでしょうか、亀田さん。それでは次の、最初にお示したテーマで言いますと、成立とも関連して、どういう国際関係、歴史的背景の下で古代の山城が築かれたか。そしてまた鞠智城については、大野城と基肄城と鞠智城という三つの山城だけが、六九八年に「繕治」すなわち修理されて、そのあとその三つの城だけが九世紀、一〇世紀まで続いて機能していったのか。それ以外の山城は八世紀の前半ぐらいでもう早く機能を失って、廢城する山城も多いのに。そうなった背景をどう捉えるかという問題、それは三つの城をどう捉えるか、なぜその三つの城を選択したかということともつながります。それについてはどうでしょう。順番に行きましょうか。

亀田… なぜ三つのお城なのか。

佐藤.. それも含めて、お願ひします。

亀田.. もうすぐ『大宰府の研究』という、大宰府発掘五〇周年記念の論文集が出来ます。そのなかでこれらの三つのお城が縛治された理由について少し述べました。答えは「これらが大事なお城だったから」です。ただ、これら三つの中では大野城・基肄城と鞠智城はちょっと違いがあるのかなと思いました。

先ほどの未完成の話にも通じるんですが、大多数のお城は、少なくとも国家は是が非でも造りたいとか、何とかさせたいとかいうことまでは考えていなかつたのではないか。やはりこの三つの城は地理的に重要だということです。対朝鮮半島、対中国もそうですし、九州という地域を押さえる意味でも大野城、基肄城、鞠智城は大事だったから縛治もされたと、素直に思っています。

佐藤.. 仁藤さん、いかがでしょう。

仁藤.. やはり大宰府がこの三城の縛治を命じてていることが、私は大変重要なことです。奈良時代以降にオーバーランして、いわゆる大宰・総領的なシステムが残るのは、この西海道地域だけです。それより前は、数え方はいろいろありますけど、いくつかの大宰の管轄地域、軍管区的なものがあつて、それぞれに山城が維持されている時期が七世紀後半だったということで、そういう意味ではシステムが変わりつつある。

だから、大宰総領を介さなくとも一般の国は支配できる。いわゆる国司制というものが浸透していくれば、上に乗つかる機構は必ずしも要らないという前提で整備がされてくると、吉備などの場合は要

らなくなる。そういう流れの中で、逆に言うと西海道固有の理由として残されていると考えたほうがいいと思います。逆の方面でも、陸奥、出羽のほうは城柵があるわけです。辺境支配とか、対外的緊張状態など、特殊な事情において、山城は大宰総領制と裏腹の関係で維持管理されてるという流れで解釈せざるを得ないのかなと思います。

なぜ文武二年なのか、これもなかなか難しいのですけど、大宝の遣唐使の段階になれば唐との関係はそれなりに和解をするですが、逆に今度は新羅との関係が、天武朝はかなり蜜月だったんですけども、持統朝になるとだんだん悪化してきて、代替わりごとの賀膳極使が、天武の時には来ているのですが、持統の時にはこうした使者が来なかつたとか、天武の死んだ時に新羅の僧侶行心によつて大津皇子を擁立しようというクーデターがあつて、それが失敗したりとか、路線論争でいえば大津皇子が天武の路線を引き継いで、持統は天智系の親唐路線をとり、新羅とはちょっと距離を置いています。持統が後見した文武期までは、対唐だけでなく、対新羅関係の緊張も続いているので、山城体制は維持されたと考えられます。

面白いのは持統二年に新羅からの貢ぎ物が不足していることが問題となつた時に、神功皇后伝承が強調されています。「帝紀」「旧辞」の編纂をしている途上に、神功皇后伝承を新羅に強制しているところが天武の段階とかなり違うだろうといえます。そういう意味では新羅を意識して修理・修繕しているというような解釈も可能と思います。以上です。

佐藤.. 大宰府において三つの城を選んだ時に、例えば最前線は対馬の金田城ですよね。それは選んでない

ということについてはいかがでしょうか。

仁藤.. 以前、辺要国について論文を書いたことがあります、律令国家にとつて、大宰府全体が辺要国として意識される時期と、本当に大隅・薩摩と対馬・壱岐だけを意識する時期があつて、前者の時期には筑豊肥六国はいわゆる兵站基地的な役割で辺要国に入っています。北と南は律令財政的には単独では賄えない地域です。絶えずそこに食料なり、兵士なり、何なりを送り込まないと維持管理できない所で、そういう意味で兵站基地として山城体制というのは必要であつたのではないかと思います。

佐藤.. 江戸時代も、対馬の宗氏という大名は、対馬には水田はたくさんありません。ですから、佐賀県の鳥栖に所領を持つていて、そこで米の収入を得ていた。古代にも、それに似たようなことがあつたのでしょうか。赤司さん、次お願ひいたします。

赤司.. 文武二年（六九八）の大宰府による九州の三つの山城を縦い治めるということに、大野城・基肄城・鞠智城がなぜ選ばれたのかということですね。私が六九八年をターニングポイントだと思うのは、この段階で掘立柱式から礎石式へと変化し、さらにそれは長倉という大規模な倉庫を建てているということです。大宰府が備蓄機能を強化しようとした時期といえます。時期的な決め手は土器や百済系の

単弁瓦があります。それらは7世紀後半段階のものです、瓦を屋根に葺くというのは、他の地域では八世紀に入つてからですので、そうなると七世紀でも末ごろであれば屋根に葺かれていたと考えてよく、継治の年に行われたと理解するのがいいと思つています。亀田さんも同じ考え方だと思います。ではなぜ選ばれたのかというと、それは先ほどのお話のように大宰府の役割だらうと思います。九州北部の国境警備機能や有事の備えということで、兵站としての備蓄を必要としますし、あとは、どのように迎え撃つのかという戦術も関係しますけれども、長倉の在り方からすると、七世紀末に律令体制が整備される中で、大宰府の地域支配体制を強化しようとした側面もあつたのではないかなと思います。

ただし、ご指摘のように大野城と基肄城の二つの城については、奈良時代にはそれぞれ礎石式倉庫が三十五棟ずつと一緒なのです。計画的で、規格性が高いのです。ただし、鞠智城の場合は、八世紀に一時期停滞期があるよう少し違いますが、倉庫を多く築造するところの動きは同じです。基肄城は九世紀遺構が現在のところ倉庫は造営されていないかもしれません。大野城と鞠智城のみになります。

佐藤：倉庫の大規模礎石化は、大野城のほうは七世紀で古いわけですよね。鞠智城の場合はちょっと遅れるという。

赤司：熊本県の公式的な発掘調査報告書の見解では、そのようになつてますが、私はちょっと見直して

大野城の動きに合わせて建物の変遷を理解した方がいいのではないかと思います。

佐藤.. 鞠智城もさかのぼる。

赤司.. 鞠智城の出土瓦に大野城と同じ系譜にある百濟系單弁瓦がありますので、瓦を礎石建物に用いたならば同じ時期に合わせていいのではないでしようか。

佐藤.. 鞠智城も同時期ということでしょうか。大野城、基肄城と並んで。

赤司.. と解釈した方が、この年に三城を緒治と記し大規模改修が共通の両期になっていたと考えられるのではないかでしようか。

佐藤.. 私も、六九八年になつて緒治が必要たということは、やはり、白村江の戦いの後の六六五年頃でしょ  
うか、に築城して三三年経っていますよね。だんだん修理が必要になつてきたという切実な問題もあつたのではないか。そういう必要もあつたし、さらに積極的な大宰府の機能強化も図る。唐との国交を再開することも含めて、あるいは新羅との関係という国際関係の下で理解できるのではないかと思いました。向井さん、お願いします。

向井.. 九州の例を皆さんにお話しになつたので、瀬戸内の方の話をしましよう。八世紀初めの頃、一齊になくなつてることは確かだと思うんです。記録的には高安城の廃城、それから常城、茨城の廃城といふ記事が残っています。仁藤さんもおっしゃっていた大宰統領制がどうなつたかということに関して、九州の筑紫大宰を残すか残さないかという、議論はあったと思うんですよ。最終的に大宰府として残つ

たので、私たちは大宰府ありきで考えていますが、西海道に大宰府がない世界というのもあり得たのかなと思います。

当時、新羅も九州五京制を敷いて、着々と朝鮮半島を統一して地方支配の体制を進めていましたし、遣新羅使が行き来して情報も入ってきますから、日本の方もどうにかしないといけないという状況だったと思われます。ただ、天武朝から持統朝にかけての段階でどんな地方支配を考えていたのかなというのあります。一つは持統三年（六八九年）の、先ほど私が新城というのを紹介した記事に石上麻呂を筑紫に派遣しています。

この時期が筑紫大宰が大宰府的になつてしていく画期だというふうに古代史の研究者の方々は皆さん考えられていますが、同じ時期に何が起こっているかというと、持統三年の伊予総領の田中朝臣法麻呂、この人は二年後に伊予国司になつてゐるんです。これは仁藤さんに教えていただきたいんですが、この人は降格になつて国司になつちゃつたのか、それとも同じ人が兼務していると考えるべきなのか、ちょっとその辺は私は不勉強なのですが、瀬戸内の大宰総領制の変動が始まっているのかなと思っていますが。西海道地域と瀬戸内地域の分かれ目みたいなのがこの時期にあつたのかなというふうに思つてます。

考古学的には、コの字型の門礎石ですね、私が最後に紹介した。あれはほとんどが未完成の状態で残されているんです。石城山や播磨城山城もそうですし、讃岐の城山城もそうですが、途中まで運んで、

これからという時にみんなほつたらかしで工事止めちゃつたみたいな感じです。まるでイースター島の石造物のモアイみたいに工事を中止した様子なんですね。そういうふうに、瀬戸内の山城は急に終わってしまったって感じが私はしています。

佐藤.. 今の瀬戸内の総領制について、仁藤さん。

仁藤.. 先ほどもちょっとお話をしたと思いますが、摂津職が津国を帶国し、大宰府が筑前国を帶国しているように、総領が国司を兼ねるということで、大宰総領と国司の併任という関係から解釈できます。伊予国司と出てきたり、伊予総領と出てきたりというのは、他国に対して命令する時、すなわち讃岐に命令する時は伊予総領と出でますが、自国に対しては伊予国司というふうに出てくる。その使い分けではないかと思います。

佐藤.. それでは、今までの議論で、中村さん、何かありませんでしょうか。

中村.. 文献史学から言いますと、結局、あまり文字にのつとり過ぎるとというのもあるんですけど、例えば全然お話変わるんですけど、齊明天に出雲大社の杵築の大社を造りよそおしむ、集合するっていうことで、実際それより前に杵築の大社がなかつたか、意宇の熊野から移転しているのかどうか、そこが造り始めてのとか、いろんな議論があるんですけど、今回の山城の話を聞いてても同じことが言えると思いますので、まず考古のほうに結論をかつちり出していただいて、「日本書紀」のすさんを論じたいなどいうふうに思つてゐんですけど。もしかしたら、こういう所に「等」という字があつて

「何々等」になっちゃつたら全然數も変わつてくるとかもありますので、あんまり『日本書紀』から、これ以上生産的な議論つて難しいなとは思つております。

佐藤… 造つたといつても、造り始めたのか、完成したのかというのでも違う、というお話が今日あります。そうした古代の文献史料の限界みたいなものもあるけれども、史料批判を行つて、考古学ともタイアップして事実に近づく努力が必要でしょ。『日本書紀』は、七二〇年にあとから編さんされて国家的に整えられた記事ですので、それをどう読み取るかという古代史の側も、これからさらに研究しなくてはいけない問題だと思います。五十嵐さんはいかがですか。

五十嵐… 大野城・基肄城・鞠智城三城の縛治についてですが、軍事的脅威が潜在化しているとはいえ、緊張感というものは残つていた時期なのかなとは思つております。この三城に関して、南九州の隼人との関係を論じる人もいますが、時期的に若干早いので、もつと対外防衛のほうを重視するべきであると私は考えております。

三城のうち鞠智城に注目してみますと、城内施設も充実したということではありますので、米穀の備蓄という意味では能力が高くなつたと言えなくもありません。鞠智城を考える時、第一期の築城時からフルパワーで兵站能力が構築されていたのかどうかは要検討でありますので、米穀の収穫能力と発揮される兵站能力については、もっと時期的な差異を踏まえて考えていいばいと思います。そういう意味では、この六九八年の記事は前線の北部九州の軍事を考える上で、結構大事なことかなと考え

ております。

佐藤：ありがとうございました。鞠智城に関しては、律令制下の八～九世紀には、後の史料でも筑前・筑後、肥前・肥後、豊前・豊後の中で圧倒的に生产力の高い国が肥後国なのです。大宰管内で。ですから、そうした生产力を基盤にしたかたちで兵站（へいたん）に稲穀を貯積したということであれば、肥後の鞠智城というものの機能が説明できるような気もします。矢野さん、鞠智城の調査をされたお立場から、今までの議論にコメントしていただけませんでしょうか。

矢野：現在、鞠智城を五つに画期に分けているんですけれども、縹治の時期というのが、そのうちの鞠智城Ⅱ期に当たる部分になります。実は鞠智城、今、建物七二棟確認されておりますけれども、その七二棟が全部同じ時期にあつたわけじゃなくて、変遷しながら総数で七二棟が現在発見されているという状況になります。

鞠智城Ⅰ期の方なんですけれども、創建されてすぐの建物ですが、總柱の建物はあるのはあるんですけど、建物自体が比較的小型になつております。城内に長者原地区という非常に広い平坦面がありまして、その西側ぐらいに展開している建物群が鞠智城Ⅰ期の建物群になります。鞠智城Ⅱ期、いわゆる縷治の時期ですけれども、その建物群が少し場所をえて東側に移つて、さらに三間七間の建物がL字形に建物が配置されるというふうな区画が出現します。それが鞠智城のⅡ期になつておりまして、L字形の建物の南に掘立柱の總柱の建物が、その軸線に合わせて配置されるというのを

## 鞠智城Ⅱ期として位置付けております。

先ほど赤司さんがおっしゃられた、礎石に変遷したのではなくて、城内の施設をやり替えた時期と  
いうことで鞠智城Ⅱ期を位置付けさせてもらっております。ただ、少し問題がありまして、一つは、  
先ほどから話題になつております瓦の年代なんですけれども、通常やはり瓦というのは非常に重い重  
量物ですので、やはり土台石の上に建物の柱が乗らないとなかなか支えられないんではないかという  
ことで、礎石建物が出現したと同時に瓦が葺（ふ）かれるというのが恐らく自然な流れなんだと想う  
のですが、熊本県内における現在の鞠智城から出土している瓦の年代は、鞠智城の創建に近い年代、  
七世紀の第3四半期というようなことが研究者の中で言われております。掘立柱建物の瓦というこ  
とになります。たた、瓦は再利用される部分もございますので、その後礎石建物でも利用されたと考  
えておかしくはないのかなというふうに思つております。

それから、縁治以降のことですけれども、その次の鞠智城第Ⅲ期、いわゆる奈良時代に入つてから  
ぐらいいになると思うのですが、礎石建物が出現します。大野城、基肄城では三間五間という規格的な  
倉庫が建てられるということですけども、鞠智城の礎石建物は、建物の規模が考えられるのが四間六  
間とか、あまり規格性を伴わない礎石建物が建てられます。礎石も小型の礎石を利用しています。

その後の鞠智城Ⅳ期の三間四間の整然とした礎石建物と重複してるので、全体の様子が分からず  
という状況になつてきます。先ほど赤司さんのお話にもありましたけれども、鞠智城Ⅳ期に三間四間

の建物が建てられたしてようやく大野城と同じような役割を附加されたんではないかなというふうに思つております。ただ、奈良時代には、礎石建物も少し違う様相を示しているということで、大野城、基肄城とは少し違う役割があつたのではないかという風に考えているところです。

佐藤：これは、編年観を含めて、まだこれから考古学的にも検討が必要かなと思えてきました。さて、だいぶ時間がたつてしまつたので、最後のテーマに。今日は、鞠智城古代山城シンポジウムということですでの、最後に鞠智城に絞つたかたちで進めたい。熊本県教育委員会では、鞠智城の城門をこれから六年ほど継続して調査されるということです。本日会場の一階でパネル展示として、各山城の城門についてのパネルを並べて頂いておりました。今日の話の中で、同じ工法技術を見る場合、たとえば版築の場合でも、こういうところに今まで目を向けていなかつたけれども、今後注意しなくてはいけないという指摘もございました。これから鞠智城調査に対する注目とか、あるいは期待みたいなものを、お一人ずつお話しいただきたいと思います。亀田さんからお願ひします。

亀田：今日はいろんな好き勝手なことを話させていただきました。鞠智城もお邪魔するようになつてかなりの年数になります。矢野さんにもいろんな所に連れて行つていただき、いろいろ見せていただきました。今回のお話の中で大野城、基肄城、鞠智城の順番で呼んでおりますが、発掘調査が進んでいるのは大野城と鞠智城です。これは、こういう場では言わぬ方が良いのかもしれません、大野城も頑張つていい報告書を作つていただいているんですが、土器などの数量的なまとめと検討がこれから

の課題かと思っています。

そして、古代山城の報告書の一つのモデルが『鞠智城跡II』だと思いますと、関連する方々に言っています。

それとともに、ここに、佐藤さんがおられるんですが、若い方に研究費用を出してあげて、研究を進めるようにしていただいていることは、とてもすばらしいことだと思います。このような研究助成は今後も続けていただきたいと思っています。

それから、現場に関してですが、今回門を掘られるということもすばらしいことだと思います。ただ、もう一つお願ひしたいのは、やはり池の中が掘れるんだつたら掘っていただきたい。文字資料を探すことがかなり重要な意味を持つています。先ほど中村さんが、文献のほうではこれ以上手が出せないつておっしゃっていましたが、まさにそのとおりだと思います。鞠智城を共通の話題にするためには、そのような調査……土器でもいいし、木でもいいし、何でも構わないんですが、字が書いてあれば大きなポイントになります。それはやはり池の中を掘るつていうのが一番手つ取り早いと思っています。

文化庁がどのように言うかわかりませんが、やはりそのような調査を念頭に置いて進めていくことが必要かなと思います。せひとも、門の後の調査で結構ですからお願ひしたいと思っています。

佐藤：ありがとうございます。確かに、門で出土する遺物を考えると、土器が少しあって、瓦が少しはある

かということになりそうです。一方、池のほうだいろいろ、私たちにとってはお宝というか、当時の人は捨てた物かもしれませんけど、さまざまな遺物が出土する可能性はあるかなと言えましょう。

先ほど途中で申し上げましたけども、熊本県教育委員会では、公募して、若手の研究者の鞠智城関係の研究に対して研究助成を行つてきました。これは、今の蒲島郁夫知事さんの指示で予算が増えて、一人五〇万円の研究助成を今年は四人の若手の方に、出して頂くということです。研究の裾野がすごく広がるといいましょうか、新しい新鮮な視点からの、私たちも気が付かないような指摘が出てくることもありました。これは毎年、「鞠智城と古代社会」という冊子にもしていますし、ホームページ上で公表して、誰でも若手の論文を見られるかたちになつておりますので、ぜひ一度見ていただければと思います。では、仁藤さん、お願ひします。

仁藤

.. 今日は天武・持統期の鞠智城、および山城体制は、どのように外在的条件により位置付けられるのかというところを、大宰總領制とか外交関係の変化、たとえるならば外堀から見たら本丸はどんなふうに見えるのかという、そういう報告をしたつもりです。報告書なども拝見しましたが、建物の評価、例えは兵舎とか、八角堂とか、そういうものも今日の議論の中でも微妙に評価が変わつてくるのではないかとも思いますし、さらには、今日全然議論にはなりませんでしたけど、奈良時代の在り方、あんまり遺物が出てない、生活感がないということを、どのように評価していくのかも気になりました。

これまでの議論で、平安期の史料として四つぐらい史料が残っているんですが、私が少し気になつ

てるのは、「何々城院」と書いてあって、お城のままではないことが気になりました。表現のバリエーションかもしれません、お米を貯蔵しておく地区のようなニュアンスも強くあって。そういうふうにシフトしているのか、それとも、兵庫が鳴るというような軍事的な危機といいますか、対外的危機みたいなものを呼び起こすような対象として、新羅の海賊とかということがあるんですが、白か黒かというつもりはないんですけども、例えば兵庫が鳴るというのも、ある意味レガシーとしてそういう存在になつてゐるのかもしれないとか、いろいろ考える余地がありまして、特に奈良時代以降の鞠智城の評価っていうのはまだまだ議論の余地があるのかなと思いました。以上です。

佐藤：九世紀の史料に鞠智城の兵庫の鼓が自動的に鳴らすサインとして受け止められて、六国史の『日本三代実録』等に記載されているということですね。また、米倉の屋根の茅を鳥がついばんで行つたという話もありましたね。赤司さん、お願ひいたします。

赤司：まず、熊本県がお話しになつた鞠智城の特別研究事業等で、古代山城そのものの裾野が広がつたことに敬意を表したいと思つています。これからのことでのアドバイスということですが、まず経験としてお話しします。

それは大野城の土塁線のことですが、南北が二重の土塁になつてることが定説になつていますが、北側は二重ではないのです。戦後に土塁線を調査された九州大学の鏡山先生が出版された昭和四三年の報告では、土塁線は不确定でした。ところが、その後のある段階から二重という解釈が流布しまし

た。そこはしようがない事情もありました。実は昭和四〇年代に大野城の山麓にも開発の波が押し寄せてきました。そこで、大野城全体を保護するために指定範囲を拡張したのですが、その根拠として、曖昧だったところも土壘として認定したのです。そうなるとこれ以降は地図に土壘線が実戦で明確に引かれますので、誰も疑わなくなるのです。

保護のためにはやむを得ない面もあるのですが、やはりおかしなところがあります。城門は二重土壘の内側に三か所確認されていますが、外側は皆無です。ではどのようにして城内に入ることができますのかという摩訶不思議なことになるのですが、誰も疑っていません。このようにかつて解釈された定説も、調査研究の進展に合わせて常に見直すことも大事だと思います。また、土壘の調査はトレンド調査という土壘の一部を掘り下げる手法ではなく、表土を除去して長い範囲で検討することが大切だと思います。今日の話でも土壘の完成と未完成という、つまり全周していたかどうかを含めて新しい知見が得られると思います。

それから最後にお願いなのですが、実は一昨日まで韓国に行っていて、百濟山城の研究で知られる国立公州大学校博物館と学術交流協定を締結しました。それはやはり単独では調査研究も進まないですし、資料の相互貸借の点でもメリットが多いと思います。是非とも、私どもの博物館と鞠智城温故創生館とで学術研究交流協定を結んで、力を結集して古代山城の研究を進めるというのも、これから一つの手ではないかと思い提案したいと思います。

佐藤： ぜひ交流協定、前向きに進めていただけたとあります。向井さん、お願いします。

四

した。それで城門の調査が開始されるということで、特に外郭線などは、見学に行かれた方も多分よく分からなくて困つてらっしゃるかなと思うので、是非、城門や外郭線の調査・整備を進めていくていただけたらなと思います。

それともう一つは、鞠智城のシンボジウム、長年の夢だと思いますが、韓国などの海外の研究者を呼んでいただいて、特に八角形の建物などをテーマにやつたら面白いんじゃないかと私は思つております。以上です。

佐藤：ありがとうございました。では、中村さん、お願ひします。

今日もいろいろと勉強させていただいたんですけど、私自身も鞠智城に複数回行かせていただい  
て、韓国の扶蘇山城とか、公山城とか、ああいう所も見てはいるんですけど、学生時代に歩きで大宰  
府から大野城を抜けて反対側の宇美まで、十数キロ歩いたことがあるんですけど、日本の山城という  
のは鞠智城も含めてどうも広い。守りに堅いなというふうにはずっと思っていたんですけど、ちょつ  
と休憩中に向井さんと『アングルモア』という漫画の話をしていたのですが、守りに堅くて、今日赤  
司さんのお話を聞いて、備蓄とともに需要だということを伺って、確かにそうだなと思いました。

今日話題には出なかつたんですけど、肥前国の国府が、平安時代にあつた建物のレベルは悪くなる

んですけど、規模自体は大きくなるっていうのも、おそらく備蓄する場所がわざわざ山じやなくてもよくなつてくるようなものもあるので、同様に国府が広がるのかなとちょっと考えたんですけど、そういう意味で、五十嵐さんが専門なんですけど、軍防令なんかでも、基本的な武器は百姓が自分で胸とか持つて行かなきやいけないですけど、武器と、あとは鼓が鞠智城で、名前出ますけど、鐘とか、銅鑼（どら）っていうのは軍團を動かすのに必要なので國が管理するんですけど、そいつたものとかも含めて管理する場所として機能するものだったのかなと思うんですが、実物は一つしか残つてなかつたということなので、終わつたあとは、使わなくなつたあとは持ち去つたんだろうなというふうに思うんですが。

一つ、やはり注文というわけじゃないんですけど、これは運でしかないと思いますので、最近、北九州ではだいぶ出てきましたけど、国分松本だつたり、佐賀の中原遺跡もそうですし、出る所には出てきてるので、鞠智城もぜひ。これはほんと天に任せるとしかないんですけど、木簡とか出土文字資料が出てくれれば……。

私もここ古代学研究所の仕事で文字瓦を数年やらせていただいたので、瓦に文字が刻んであるだけでもすごいうれしいなと思いますので、発掘される方にはぜひ祈りながら、祈れば出るかは分かりませんけど、出てくればいいなというふうに願つて、また次年度以降頑張つていただければと思います。

確かに、出ると思って掘らないと出ないんですよね。では、五十嵐さん、お願ひします。

五十嵐：私は鞠智城跡の特別研究に採用していただいて、それがなかつたら鞠智城に関心を持つことはなかつたですし、古代山城も勉強してなかつたと思いますし、今日ここに座っていないということですので、熊本県をはじめ関係者の皆さまにお礼申し上げます。

鞠智城は本当に史料がなく、やもすれば検討の俎上に上らないことにもなり、機能していないのではないかと、高く評価されないことにそれがちなところもあると思います。しかし、色々と見ていますと目に見えないかたちで西海道を軍事的にも非軍事的にも広く支えていた重要な施設だと思います。先ほど私のコメントの中でも述べさせていただきましたけども、やはり米穀をどうやって微収していたのかは結構大事な問題であつて、鞠智城の兵站機能・倉庫機能は広くいわれておりますが、微収形態については明確にいわれておらず、私はずっと疑問に思っていますが、それも先ほどの貯水池の発掘ではないですが、木簡なり出土文字資料、色々な遺物が出てきて分かることもあるのかなということで、今後の発掘に期待しています。あとは、第Ⅳ期の機能再開の時期ですね。第Ⅲ期は機能が低下していますが、その第Ⅳ期どうしてまた機能を再開したのかも結構重要な論点としてあります。例えば8世紀末の肥後国から大宰府への昇格によって、国司の人員も増えますので、鞠智城司みたいなものも派遣させていたことが想定されるわけで、そういったものも含めて考古学と文献史学を連動させて研究が進めばいいかなと思つております。

佐藤：ありがとうございます。もちろん肥後国とも関係するし、大宰府とも関係するし、律令国家とも関

矢野

係するということだと思います。それでは、池は発掘できませんかという質問があつたのですけれども、矢野さん、最後に、鞠智城のこれからについてお話ししていただけないでしょうか。

五、三〇〇平米という南北に長い池なんですけれども、最終的にせき止める部分に、おそらく木簡が集積してるだろうということで、平成20年頃に調査を実施しております。結果的に、木簡は出なかつたんですけども、そこで出ましたのが、銅製の菩薩立像。これは青灰色の水性粘土層の中ではなくて、池岸の部分に土砂で覆われたようななかたちで見つかっております。

私も当時はほんとに木簡を見つける思いでやつてたんですけども、本来はがつかりすべきだつたんですが、それに匹敵するほどの仏像が出たということで、非常に喜ばさせて頂きました。制作年代がおおよそ7世紀中頃で、それで朝鮮半島、特に百濟地域で制作された可能性が高いということですんで、「日本書紀」に百濟の亡命高官の指導により城が造られたという記述から、想像を膨らませれば、こうした技術指導に来た高官が懐にたずさえて現地入りし、最終的に池戸が決壊すると城として機能を失うということで、あえてそこに埋めたのではないかなという風に当時は思つた次第でございます。

先ほど先生方からのお話の中で出ています、城門ですとか、貯水池ですとか、そこはしっかり調査をしていきたいというふうに思つておりますし、また、本日の議論の中で、やはり県としての見解ではなくて、もう少し違う見方をしたほうがいいよというご意見をたくさん頂きましたので、それも踏まえて研究していくべきなと思つてることです。

最近私が意識してるのは、鞠智城という、当時の中央政府の出先機関が、その地に設置されたことが地域社会にどういう風に影響を与えていったかなども、周辺の遺跡を調査する中で、鞠智城も評価出来るのではないかという風に考えているところです。

佐藤：ありがとうございました。鞠智城や古代山城を巡っては、まだまだ色々な課題がありまして、今日のこの時間だけではとても議論を尽くせませんし、まだまだこれから新しい発見も見つかって、いろいろ話が広がって、古代史の謎が一つずつ解けていくことがあると思ってます。ぜひ、またこういうシンポジウムの機会を持てると思っております。本日は、午前中から長時間にわたりお付き合いいただきまして、どうもありがとうございました。それでは、これで終わらせていただきます。





平成二十九年度鞠智城・東京シンポジウム二〇一七

# 鞠智城跡

—その歴史的価値を再考する—

平成二九年度 鞠智城・東京シンポジウム二〇一七

## 鞠智城跡

—その歴史的価値を再考する—

### 一、開催日時等

日時：平成三〇年一月二八日（日）一三時〇〇分～一七時三〇分

場所：明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール（東京都千代田区神田駿河台一一一）

主催：熊本県・熊本県教育委員会・明治大学日本古代学研究所

後援：明治大学博物館・明治大学社会連携機構・熊本県文化財保護協会

## 二、講演等プログラム

### ・基調講演 「古代山城の保存と活用」

佐藤 正知（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官）

### ・講演① 「列島古代史における鞠智城」

吉村 武彦（明治大学名誉教授）

### ・講演② 「文化遺産としての鞠智城」

館野 和己（奈良女子大学特任教授）

### ・パネルディスカッション

コーディネーター 佐藤 信（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

パネラー 佐藤 正知氏

吉村 武彦氏

館野 和己氏

木村 龍生（熊本県教育委員会）

# 目次

## シンポジウム概要

主催者あいさつ 189

熊本県教育長 宮尾千加子  
明治大学文学部教授・日本古代学研究所長 石川 日出志

## 基調講演 「古代山城の保存と活用」

佐藤 正知

197

明治大学文学部教授・日本古代学研究所長

石川 日出志

193 190

### 一、神籠石 199

### 二、史跡指定の歩み

### 三、古代山城の保護

### 四、天智朝の山城

211

207 204

212

### 五、神籠石系山城の位置づけ

218

212

### 六、古代山城の保存と活用

講演①「列島古代史における鞠智城」

吉村  
武彦

221

はじめに

223

一、これまでの研究を問い合わせす

224

二、古代山城の諸形態

225

- (1) 朝鮮式山城と神籠石  
(2) 古代山城の種類

山城の種類

227

瀬戸内と大宰府管内の山城

230

- (3) 「綾領」と「大宰」—狩野久説の批判的繼承

「綾領」「大宰」とその性格

233

- (4) 山城築城の技術者  
「綾領」「大宰」と古代山城

237

239

三、鞠智城をめぐる諸問題

- 筑紫大宰と鞠智城  
大宝令の施行と鞠智城

241

243

講演②「文化遺産としての鞠智城」

はじめ 248

一、鞠智城の成立と存続 249

二、鞠智城の終焉以後 249

三、鞠智城跡の米原長者伝説 249

四、平城京との比較 260

五、鞠智城跡の再発見と調査・研究 260

六、文化遺産としての鞠智城跡 261

260

パネルディスカッション 263

付録 参考資料

講演②（館野 和己）

講演①（吉村 武彦）

基調講演（佐藤 正知）

51 67 75

シンポジウム次第

館野  
和己

247

**【平成29年度鞠智城・東京シンポジウム 資料編】**

※今回の成果報告書を刊行するにあたって、当日使用した資料を「資料編」として巻末に  
まとめました。



主催者あいさつ

# 主催者あいさつ①

熊本県教育長 宮尾千加子

皆さん、こんにちは。ようこそお越しくださいました。まだまだ本当に寒い中、ありがとうございます。シンポジウムの開催にあたりまして、主催者として、ご挨拶をさせていただきます。

本日は、大変お忙しい中、来賓として、衆議院議員で、財務副大臣の木原稔先生をはじめ、たくさんの方々にお越しいただいております。ありがとうございます。また、講師の皆様方におかれましても、お忙しい中、ご出席いただきまして、厚く御礼申し上げます。

熊本地震からもうすぐで二年が経とうとしております。これまで、熊本県の熊本地震からの復興・復旧に向けて、たくさんのご支援やあたたかい励ましの言葉、本当にありがとうございます。皆様方のおかげで一步一歩、復旧・復興に向かっているところでございます。そしてまた、今年度も明治大学日本古代学研究所をはじめ関係者の皆さまのご支援とご尽力のおかげで、このシンポジウムをこの明治大学で開催することができました。本当にうれしく思っております。

今年度は、鞠智城に関しまして、うれしいニュースが二つあります。一つ目



は菊池川流域が「米作り、二千年にわたる大地の記憶－菊池川流域・今昔『水稻』物語」として、日本遺産に認定されたことでございます。この流域は、二千年にわたる、米作りの大地の記憶が受け継がれており、菊池川の恵みに育まれた米作りによる豊かな生活が、鞠智城跡を含む三十三の貴重な文化財を生み出しました。

二つ目は、財団法人日本城郭協会により鞠智城が「続日本一〇〇名城」に選定されたことでございます。このことにより鞠智城が優れた文化財、史跡であること、著名な歴史の舞台であること、そして時代、地域の代表であることが全国的に認められることとなりました。この二つのことにより、鞠智城の価値はまた一步、高まつたものと思います。

さて、鞠智城は多くの皆様方がご存知のとおり、今から約一三五〇年前、七世紀後半の激動する東アジア情勢のなかで、大和朝廷によって築かれた古代山城で、全国有数の重要遺跡として高く評価されています。熊本県では、昭和四十二年に始まった発掘調査や研究を通して鞠智城の構造解明を進めるとともに、近年ではその成果を報告書にまとめ、講座やシンポジウムなど、様々な機会を通じて、鞠智城の歴史的価値を明らかにしてきたところでございます。少しづつではございますが、そういった取り組みが実を結んできているものと思います。

本日のシンポジウムにおいては、「鞠智城跡－その歴史的価値を再考する」と題して、約三〇〇年に亘って存続した鞠智城について、活発な議論がなされるものと期待しております。今回のシンポジウムを通じて、鞠智城に関する理解と研究が進み、さらに歴史的・学術的価値が高まり、多くの皆さんに広く、さらに

知つていただくことを願つております。

結びに、本日ご参加の皆様方のご健勝・ご活躍を心からお祈り申し上げまして、挨拶といたします。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

## 主催者あいさつ②

明治大学文学部教授・日本古代学研究所 石川日出志

皆皆さん、こんにちは。本日は、鞠智城・東京シンポジウムに非常に多数の方々にご参加いただきまして、大変うれしい思いでおります。わたくし、明治大学日本古代学研究所の所長を務めております文学部の石川日出志と申します。考古学、弥生時代が専門であります。



このように、熊本県と明治大学が連携をいたしまして、この鞠智城をめぐる調査研究の成果、それからそのおもしろさ、重要性を語り、また味わう そういう機会を東京でもちまして、これで一〇年、一〇回目になると伺っております。明治大学では四年連続で、このような会をもっています。たまには私たちのほうが熊本県におじやまして、語りたい、言いたい放題をする、こういう交流も重ねているところであります。

私ども明治大学日本古代学研究所はどんなところなのかということを簡単にご紹介させてください。私たちは考古学、古代史学、古代文学、それから民族学、二通りのみんぞく学がありますが、いろんな学問分野の者がいっしょに集まって、古代の日本列島に生きた人々の有様を、姿をより鮮やかに描き出したいという

ことで、共同で研究を進めております。

私たち専門家、研究者はどうしてもより深い井戸を掘りたい、井戸をどんどん、どんどん掘ると、いつのまにか周りが見えなくなってしまうことがある。「井の中の蛙」現象が起るんですね。しかも自分で気づかない。それではいかんということで、違う自分で日本の古代世界を探求している者どうしが、いっしょにやろうという場を作っているわけであります。もちろん、我々、大学だけではダメですので、日本全国、さらには海外の文化、歴史の受け止め方がまったく異なる世界で研究を進められた方々との交流も重ねながら、より広い視野を確保して研究を進めよう、新しい研究の方角、方法、方策を切り開きたいということであります。それだけでなく、空間的にもより広い視野をということを心がけています。常に日本列島全域を語る、アジアを語る、世界を語る、その中で日本を知るということであります。

日本列島といいますのは、実は狭いというふうに言われますが、南北、東西に非常に長く、そして山、海が複雑に入り組んでいまして、非常にそれぞれの地域に魅力的な、個性的な生態環境が出来あがつております。そこに、旧石器、縄文時代以来の特色ある文化、人々が生活しているわけです。弥生時代以降、大陸と往来を始めます。そこでもまた大陸とのつながりというのが地域ごとに違うわけです。ですから、それぞれの地域の実情にあわせて古代世界、人々をみなければいけない、というふうに考えています。

ところが、言うのは簡単ですが、なかなか大変です。その意味では、今日、このように東京にして、九州の熊本のものすごい魅力ある、この鞠智城の調査研究の成果を間近に知り、そしてその価値と魅力を手にすることができるというのは非常にありがたいことありますし、私たちの研究面でも大いに役立つものであ

るというふうに思つております。

本日は、「鞠智城跡～その歴史的価値を再考する～」ということで、少し堅いタイトルであります。冒頭に文化庁の佐藤先生から基調講演をいただきます。日本全国の歴史遺産、史跡の調査、保護、保存活用の最先端で、ずーっと長いことご尽力された方であります。そういう眼から鞠智城の魅力を語つていただきます。そのあと、私ども明治大学の吉村名譽教授、そして奈良女子大学の館野先生にご講演いただき、そして東京大学の佐藤信先生に司会進行、コーディネーターとしてお勤めいただいたて、存分にこの鞠智城の魅力・価値を語るというディスカッションをしていただくことになつています。

一七時三〇分までの長丁場であります。しかし、おもしろいことがいろいろと展開するであろうと思います。私も皆さんといっしょに味わいたいと思います。

なお、最後に、今日はとても寒いです。しかしあくまで春がきます。春になりますと、暖かくなりまして、鞠智城もたぶん非常に寒いと思いますが、暖かくなつて春の芽吹きが感じられるようになると思います。東京から一時間ちょっとで熊本空港に着きます。そこから三〇分で鞠智城に参ります。ぜひ鞠智城にもおいでいただきて、春とともに鞠智城の壮大さを是非満喫する、そのようなことを考えていただけるとありがたいなと思います。

ちよつと長くなりました。今日は一日、よろしくお願ひいたします。



## 基調講演

### 「古代山城の保存と活用」

#### 講演者紹介

佐藤 正知（さとう まさとも）

静岡大学大学院修士課程を修了。静岡県教育委員会文化課等を経て、文化庁文化財部記念物課文化財調査官として全国の史跡の指定等に従事。現在は同主任文化財調査官。伝統文化課文化財保護調整官および熊本城復旧総合支援室室員を併任。特別史跡熊本城跡の保存活用計画の策定等にあたる。専門は日本古代史。

# 基調講演 「古代山城の保存と活用」

文化庁文化財部記念物課 主任文化財調査官 佐藤 正知

只今、ご紹介にあずかりました文化庁記念物課の佐藤正知と申します。本日は、このような大きな講演の機会を与えていただき、本当にありがとうございます。私は全国を駆け回り、史跡の指定であるとか、史跡の保存活用ということを仕事にしております。私のこうした仕事に関わることを紹介しながら話を進めていきたいと思います。



私は記念物課というところにおりますが、記念物という言葉は明治時代になつて使われるようになつた言葉です。しかし、「記念」という言葉自身は、もつと古くからありました。江戸時代、松尾芭蕉は松島のあと、石巻を経て平泉に向かいます。そこで覆屋に護られた金色堂を見るのです。覆屋によって保護され、「千歳の記念とはなれり」というふうに、「おくのほそ道」に記しています。「記念」には「かたみ」というルビが振つてあります。朽ち果てることを免れ、千年ぐらいのかたみとして存在するというのです。現在の覆屋は鉄筋コンクリート製ですので、芭蕉がみたのは、その前のもので、金色堂の北側に移設されて

います。「記念」は「かたみ」であるとか、「思い出」という意味ですから、私はわが国の思い出係として、何を将来に残していくのか、という仕事をしているというふうに思っています。

記念物課には、史跡・名勝・天然記念物という、各分野の専門家がおります。天然記念物は岩石とか植物とか、動物などを対象にしております。私が思い出係ならば、彼らは生き物係だというふうに、私は言つております。芸能界の「いきものがかり」は放牧宣言をして今ちょっと休んでおりますが、こちらの生き物係は全国を飛び回って、鳥やカモシカなどの保存に奮闘している、ということになります。

本日はレジュメのほかにパワーポイントも用意してまいりました。ただ、原稿の提出が遅れてしまい、事務局の皆さんに大変ご迷惑をおかけしてしまいました。この場をお借りしてお詫びしたいと思います。

### 一、神籠石

さて、「こだいさんじょう」とか、「こだいやまじろ」と呼称されているものには、二種類あるんですね。

『日本書紀』などの文献に登場するものを「朝鮮式山城」と呼んでおり、文献に出てこないものを「神籠石系山城」と呼んでおります。この二つがあるということは有名な話であります。鞠智城は文献に出てきますので、百濟の亡命官人の指導のもとに造られた大野城、基肄城などとともに朝鮮式山城に分類されております。ただ、築城時期がみえないので、この鞠智城がいつ築城されたのかということが、学会の大きな問題になっているわけです。

「神籠石」というのは、何かロマンを感じさせる名前であります。この「神籠石」の名前のもとになつたところの話を紹介します。今日は、久留米市の教育委員会からスライドをお借りして、皆さんに見ていただいております。これ（写真1）が高良大社が所蔵する「高良大社縁起」と呼ばれているものの全体です。

手前の鳥居をくぐつて坂道を上り、一番高いところの本殿があります。右側の真ん中付近を拡大したのが、次の写真（写真2）です。ここに「神籠石」と書いてあります。坂道には参詣する人たちが描かれていて、石が並んでいます。現地に行きました、右手が谷になつておりまして、石列が巡っているんです。高良大社にある石列は1mぐらいある、角ばつた石が並ぶものです。江戸時代の貞享二年（一六八五）に、寂源という僧侶が、それまで埋もれていた石列を掘り起こしたのです。今は高良大社と言つて神社であります。江戸時代においては神仏習合でありますから僧侶がいたのです。江戸時代の終わりごろの文献には、石列のことを神籠石というふうに呼んでおります。そこでは、俗に蓮華石と呼ばれているけれども、そうではなく、神籠石なのだというふうに書か



写真1 高良大社縁起（久留米市教育委員会提供）

かれています。そうした江戸時代の文献を根拠に、明治時代の学者たちは、石列を神籠石とよぶと考え、それに代表される遺跡を神籠石というふうに呼んだわけです。神籠石系の山城の名前のもとは、久留米の高良大社にあつたわけです。

この写真（写真2）の神籠石は道を横切る石列を指しているのではなく、左手の大きな岩を指しているのです。絵の位置から撮った写真が次の写真3です。神籠石は大岩の位置だということになります。しかし、次第に、神仏習合でありましたけれども、蓮華石という仏教的な要素をできるだけ排除したいという動きが出てきたのです。明治の神仏分離の前に江戸時代の終わりにはすでにそうした動きがあつ



写真2 高良大社縁起部分（久留米市教育委員会提供）



写真3 馬蹄石付近現状（久留米市教育委員会提供）

ですが、もつと古い文献をみていくまますと、この神籠石と蓮華石というものはどうも別なものだということがわかります。馬蹄石は大岩の位置だということになります。蓮華石とは別のものだといふことになります。蓮華石という仏教的な要素をできるだけ排除しきであります。

たのです。「蓮華八葉」はたとえば高野山の周辺の山々をそう呼び、蓮の華が八つの葉を広げるような場所にある仏の都であるとされました。蓮華石も、蓮華八葉と同じ意味ですが、その言葉を避けて高良玉垂宮という、由緒のある神社であることを主張していくわけです。神籠石は神が籠るというわけですから、神道、神社信仰にふさわしい名前だということで、馬蹄石が神籠石の本来の名前であつたにもかかわらず、それが列石を指すような言葉になつたのです。そうして明治時代の学者たちはそれを採用したということになります。高良山神籠石だけではなくて、各地に列石が巡る遺跡が発見されます。それは山城である、いや山城ではない、列石が巡っているのは、まさに高良大社がそうであるように、神の領域を示す装置だと、山城説と一方の神域説というものが対峙することになります。これが神籠石論争と呼ばれる論争なのです。

地元の古賀寿さんという方が、昭和四二年に神籠石の研究を行います。江戸時代の文献をみて、列石のことを神籠石と呼ぶのは誤りであることを論証されます。寂源という僧侶が、さつき掘つたと言いましたけれども、寂源が石一つを見つけ、そして掘つたんです。そして鉄の錫杖をもって、突いて歩くんです。この辺に石があると探つていってどんどん見つけ、ずーっと掘つていった。それは古賀さんに言わせると、我々が今日やつてている発掘調査やボーリング調査のさきがけではないのか、という論文を書かれます。そして神籠石が列石の名前ではないということの証明として、神籠石と呼ばれる石を探します。するといっぱい出てきたんです。「コウゴイシ」と呼んだり、「カワゴ」と呼んだり、「カゴ」とか、それから後で出でますが、「カケノウマ」という鹿毛馬神籠石というのがあるんですけども、その「カケ」というのも、神籠石の「コウ

「ゴ」という言葉に関係あるんではないかと主張するのです。それはそもそも、「磐座（いわくら）」という、神が降臨する岩で、祭祀の跡であることを論証しました。

神域説と山城説というものは明治から大正時代に議論がなされますが、それは山城ということでは決着がついたということです。

私は、古賀さんは非常に大事な指摘をしているんじゃないかなと考へています。レジュメに書きましたけれども、「明治以前の記録・文献の中に」、中央の学者たちが見落としているものが地方にはたくさんあると言っているのです。「神籠石の名称を解く鍵」は、実は足元にあったと言っています。「郷土先人の優れた業績」、つまりこの古い文献をみていると、すでに山城であったことが言われている。実はこれは磐井の反乱に関わるものだと主張した文献なのですが、そういう山城説は、地元の江戸時代の学者たちも述べていてることであって、もっと早く地元の文献を解き明かしていたならば、神籠石論争の決着にそう時間はかかるなかつたのではないかという主張なのです。彼は、「しかし、これら地方に遺る記録・文献の類いも実は調査研究の不徹底なため、空しく埋もれていることが多いのである」と言い、足元の資料を大切にして、地域の歴史を明らかにしなければならないということを主張しています。私は、こうした観点は非常に大事なことではないかなというふうに思っております。

## 二、史跡指定の歩み

私は文化財の保護を仕事にしておりますけれども、私たちが依拠する文化財保護法という法律は昭和二十五年にできました。その前の年に法隆寺の金堂壁画が失火によって焼けるということが起つて、これから日本が文化国家としてやつしていくのに、それを護る法律がなくて、どうして世界に名譽ある地位を築くことができるのかということを、衆議院でも、参議院でも議論をして、議員立法として成立したのが文化財保護法なのです。その論陣の一一番先頭に立つた人物が山本勇造という議員でした。皆さんには『路傍の石』という小説をご存じだと思いますが、その山本有三と、同じ読みです。同じ読みだけじゃなくて、同じ人です。この人が、昭和二五年の文化財保護法の成立に大きな役割を果たしました。この山本有三が暮らしていたのが、三鷹市です。三鷹にいくと、記念館があります。洋風の建物に山本有三の遺品が並べられています。文化財保護法にかかるところは、ごくわずかだったような気がしますけれども、そういうことが、三鷹に行くとわかります。

記念物の中の一つである史跡を指定するには基準があるんです。表1がそれです。昭和二五年に法律ができ、左側の基準が昭和二六年五月一〇日にできます。基準は、「一」から「九」まであります。基準の「一」を読みますと、「貝塚、遺物包含地、住居跡（竪穴住居跡、敷石住居跡、洞穴住居跡等）、古墳、神籠石その他この類の遺跡」となっています。ここに神籠石が出ているのです。この「一」により高良山神籠石などが指定されていきます。

平成七年にこの基準を見直したんです。表1の右側にあります。「神籠石」はどうなったかということあります。「一」を見ますと、「貝塚、集落跡、古墳その他この類の遺跡」となっています。つまり、神籠石は平成七年に消えてしまったんです。もちろんこれまで戦前から戦後の初期にかけて、神籠石という名称での指定はやっていますから、神籠石というものが無くなつたわけではありません。右側の例示も平成七年にしたんですが、ここにも神籠石がありません。要するに、現段階で、神籠石と同じように列石が巡るものが出でてきたとする、この基準「一」を使って指定することはないと私は思います。神籠石の性格をめぐつて、神域・靈域を示す神域説と山城であるという山城説が対立したわけですけれども、先ほど言つたように山城であるということがほぼ確定していますので、基準「二」の城跡で指定することになるかと思います。

なぜ平成七年に改正したかといいますと、わかりやすい例でいいますと、基準「二」に「城跡、防壁、古戦場その他政治に関する遺跡」とあるんですね。関ヶ原古戦場はこれで指定されています。けれども古戦場というと、鎌倉時代や戦国時代の古いものはいいけれども、新しい時代の、近代の戦跡についてはこの基準では読み込めないのではないかということで、基準を、「古戦場」ではなくて、「戦跡」と変えたんです。「その他の政治に関する遺跡」の例示として、領事館なども含みこまれていますよね。というように、平成七年というのは、近代の指定もどんどんやつていこうということで、近代の遺跡が読み込めるように基準を変えたのです。「四」の「藩学、郷学、私塾、文庫」は「学校、研究施設、文化施設その他教育・学術・文化に関する遺跡」となりました。「五」の「薬園跡」は全国で三つか四つ指定しているんですけども、

これも「医療・福祉施設」となり、例示には病院なんかが挙げられているわけです。このように基準を見直しまして、原爆ドームなどの指定をやつたということです。基準を見直し、より広く、より深くですね、わが国の思い出を持てに残すために、どうしたらいいのかということを考えてやつてきたわけであります。

表2は「史蹟名勝天然紀念物保存要目」です。昭和二五年に文化財保護法ができたとお話ししましたけれども、実は記念物の保護に関しては、今から一〇〇年前、大正八年にその前身の「史蹟名勝天然紀念物保存法」という法律が制定されています。その時の基準がこれです。さつき神籠石は一番目にあつたという話をしましたけれども、これを見ますと、一番目は「皇室ニ関係深キ史蹟」でした。神籠石がどこにあるかというと、「九」の「貝塚、遺物包含地、神籠石其ノ他人類学及考古学上重要ナル遺跡」ということで、九番目だつたんです。それが、日本の敗戦によつてですね、第一の「皇室ニ関係深キ史蹟」は、政治に関する遺跡だとということで、先ほどの基準「二」の「都城跡」へと移行し、一番目には、さつき九番目にあつたものが、移ります。ですので、表3をみていただきますと、神籠石と名前がつくのは、「九」の基準でやつてきたんです。それが戦後の「一」にかわりましたので、それを対照させたのが、表3ということになります。鹿毛馬神籠石は昭和二〇年に「九」での指定がなされ、戦後は、昭和二六年から二八年、それから四七年ですね、杷木神籠石というのまでは、新しい基準の「一」で指定されたということであります。その後は、神籠石という名前を使わないで、何々城跡という、基準の「一」を適用して指定していることになります。

神籠石というものは、今となつては古代の山城ということになりましたから、城跡で指定すればいいと私

たちは考えますけれども、でも当時はですよ、これが神社に関わる遺跡かもしれない。つまり祭祀に関わる遺跡かもしれない。一方で山城であるかもしれないということだったわけですね。ですから、山城だったら、戦前の「史蹟名勝天然紀念物保存要目」の「四」で指定してもよかったですし、あるいは祭祀であるんだつたら「二」でもよかつたことになります。しかし、性格がよくわからなかつたので、「神籠石」という形で特徴を捉えて、石が並んでいるものを神籠石と呼ぼうということで、「九」に入れたんですね。今後、人類学や考古学の研究が進めば、その性格が明らかになるだろうということで、神籠石という名前をつけて保護してきたんです。これは、私の感じですけれども、非常に賢明であつたと思うんですね。神籠石という指定があつて今保護されているということが多いえるのではないかなと。論争はあつたけれども、文化財の保護は進んでいった。あるいはそういう論争によつて注目を浴び、文化財の保護が進んできたということが言えるのかもしません。

### 三、古代山城の保護

これまで古代の神籠石であるとか、古代の山城が保護されてきたわけでありますけれども、飯塚市の鹿毛馬神籠石はやはり石が並んでいるんです。指定は、並んでいる石の両側五メートルづつです。当時の図面は、次（図1）のような図面になつています。石がはつきりしないところは点線で描いているんですけども、昔の人たちは、しつかり実測図を作つて、これを保護しているのです。神籠石と呼ばれているほとんどの遺

門や土塁・石塁がしっかりと残っているので、それを測量して、ゴルフ場の開発と併せて指定をしたものであります。ですから、そのゴルフ場の許可を得て、あるいは教育委員会と連絡を取つて案内してもらう。そう感じで、顔を出すと、ボールがびゅーっと飛んでくる、そういうようなところなんです。ほとんどの方は見たことがないのではないかと思うんですが、これはすごい遺跡です。その山城としての風格は鞠智城に劣らないものを持つた遺跡であります。ここでは、現在は列石だけではなく、その内側も保護するようになつ

### 3. 管理機関の選定

昭和 16 年 7 月 15 日に、掛毛郡佐田村（現光岡）が管理機関に指定されている。

### 4. 文部省指定の状況

指定された史跡の範囲は、門や土塁、門や小門など地面上に出している遺跡をつなぎ縦断外周線の内側を内側線のみであり、ドーナツ状を呈していた。その後、昭和 38・39 年度には、当時の文部省財政委員会（現文部省）を主導として、該域内の施設の簡略化による水門設置費用の削減、城壁の水門への改修のための改修等を目的とした整備が実行されている。また、昭和 39 年度の実情は、黒道の修理の調査の工事により、城外道路の修理の一環が施工を受けている。さらに、新光岡市の大河原町が合併する前の昭和 16 年 8 月には、黒道によって城門の位置の一帯が整備されたため、平成 17・18 年度に調査結果をもとに保存修復を実施している。



図 1 鹿毛馬神龍石の指定時の図面

跡はこういう形で指定したんです。だけれども列石の真ん中にこそ本来保護すべきものがあるはずですよね。ですから、列石が指定されたのち、戦後、ある時期に内側も指定しようということで、追加指定がなされます。大半は真ん中まで指定されているんですが、香川県坂出市にある城山という遺跡は真ん中がゴルフ場になっています。ゴルフ場の開発の際に、立派な石積みの城

てきているということを少し記憶にとどめておいていただければというふうに思います。

神籠石系山城は、何年に造ったという文献に記載がないので、これがいつできたのか、朝鮮式山城とどういう関係にあつたのか、というのは明らかにしないといけないのですが、なかなか難しい問題です。

現在の状況を説明しておきます。表4は縦の表にまとめたかつたんです。一九一九年に法律ができて、ちょうど一〇〇年目になりますから、この一〇〇年の歴史を表にまとめるとなると、大変なことであります。この表は寺跡と神社、それから教会、それから経塚とか、先ほどの基準でいう、「三」の信仰にかかわるもの全部抜き出したものです。たとえば、わかりやすい教会をみてみます。真ん中あたりの教会の欄をすーっとみていくと、平成二四年に一例あります。これが長崎県の大浦天主堂境内です。教会はこの一例だけです。では、神社はどうなのかということですね。お寺と神社を比べると、圧倒的にお寺の指定が多いということがわかります。なぜこんなに神社の指定が少ないのか、と思いませんか。

大正八年に法律ができて、一番最初の史跡指定が行われたのは、大正一〇年なんです。ここの一九二一年、大正一〇年が一番最初の指定です。寺院内で指定されたのは大安寺旧境内という、奈良のお寺です。それから大正一一年には、毛越寺境内、これは平泉ですね。それから称名寺境内、これは鎌倉ですね。というようく著名な寺院が指定されています。国分寺なんかはたくさん指定されています。けれども神社境内、あるいは神社の跡なんかは無いんです。神社境内で一番最初に指定されたのは、昭和四二年の鎌倉の鶴岡八幡宮でした。それから四六年には宗像大社境内。先ごろ、世界文化遺産に登録されましたね。それから四八年

には日吉神社という、比叡山の山麓にある神社が指定されています。お寺と神社を比べると、圧倒的にお寺の指定が多いことがわかります。神社の指定がなされるようになつたのは、一つには、世界文化遺産の登録が関係しています。史跡の指定を受けていることが、世界遺産登録の要件なのです。たとえば、平成一四年の丹生都比売神社境内は「紀伊山地の霊場と参詣道」に関わる神社でありますし、平成一七年の荏柄天神社境内は、「武家の古都、鎌倉」に関する神社です。鎌倉の世界遺産登録はうまくいっていないんですけれども。日本の文化を世界に紹介しようとすると、寺院はもちろん重要ですけれども、神社もまた、大事だとということで、史跡指定が進められてきたということになります。最初に話題として取り上げた高良大社の神籠石は、高良大社の境内地全域を指定はしていますが、筑後国の一宮である高良大社の神社としての価値をきちんと考へるべきじゃないかと思つています。

当時、明治から大正にかけて、祭祀というものが大事だと考えた人々は、神域説を唱えて、これを保護しようとしたんですね。当時、神社ということの指定をやることがもしあつたとすれば、神籠石論争というものの展開はもう少し別のものになつていた可能性があるのではないかと思うんです。当時、神社というものは官有地でしたから、法で保護する必要はなかつたんです。しかも、お寺には瓦があるし、礎石がありますが、神社にはそれがない。瓦の研究は非常に進んでいました。伝承としてすいぶん古い神社だということはあるんですが、官有地で、かつ遺物がないということが作用して法による保護がなされできませんでした。私は史跡指定の歴史をたどるなかでこのような問題が存在することをずっと考へてきたのです。神

籠石論争というものもそつした観点から捉え直す必要があるのではないか、と考えています。

#### 四・天智朝の山城

鞠智城はいつ造ったかという記録がありません。

百濟復興を支援するために倭は何回かにわたって軍隊を送るんですね。そして、最後送り込まれたのが、大日本国教将麿原君臣という人物であります。これは私の第二の故郷である静岡に、麿原というところがあるんです。そこは麿原郡というところを支配していた一族だらうと考えられています。静岡からも水軍を連れて、そして途中の西日本でも、どんどん軍を集めて、一万余の人間が海を渡つていったわけです。白村江の戦いが行われて、倭が負けてしまいます。応援に行くんですが、負けてしまうんです。『日本靈異記』などの文献には、白村江で捕虜になつて、何年かして戻つてきたというような記録があるので、応援部隊が全国どこの出身かということがだいたいわかるわけです。もちろん西日本が中心でありますけれども、陸奥国からも行つてますので、これは国を擧げての百濟救援であつたんですが、唐と新羅の連合軍に敗けるわけです。そして日本が攻められるということで、城を築いていくわけです。小田富士雄先生は、だつたら対馬の金田城が一番最初でもいいだろうといふんですね。向こうから攻めてくるんだつたら、いちばん近い所から造るんではないか。なぜ造らなかつたんだと。最初に、防人と烽を置いて、そうして筑紫に水城を造つたんです。天智三年に大宰府の近くの水城を造つて、その翌年に大野城と基肄城を作りました。なぜ一番の

前線に城を築かずに入り大宰府の中心に近いところ、北に大野城、南に基肄城を造ったのかということを考えたわけです。それで第一次防衛網は、大宰府を守る事だと。第一次防衛網という言葉を使うわけです。水城の発掘をやつたんですが、大正時代に描かれた絵のとおり、敷粗朶といって、枯葉なんかを敷いて、そして土盛りをしている様子がわかつたんです。その枯れ枝を調べたら、それがいつ伐られたかということもわかつたんです。それによると、レジュメに書きましたけれども、晚春から夏、五月中・下旬から七月中旬頃でした。だからその年に水城を造つたということがわかつたんです。それで第一次防衛網をつくります。第二次防衛網がそれよりも遠い対馬の金田、それから瀬戸内の屋嶋、そして高安城だつたとするわけです。小田先生は大宰府の都城制の形成という観点で説明されています。大宰府を防衛するのが第一で、都の近くである高安城が第二次だというのは、果たしてどうでしょうか。都を守るために、小田先生がいう第一次、第二次という防衛線が築かれるのであって、高安城というのが重要なのではないかなというふうに思うんです。もちろん大宰府が一番の前線ですから、そこを整備するということが重要であるのはまちがいありません。前線である大宰府を守り、高安城を造つてその連間のなかで、全体として都・國土を守るというのが、この一連の記事なのではないかなというふうに考へておるわけあります。

## 五、神籠石系山城の位置づけ

おもしろいのは、屋嶋城です。皆さんにも是非行ってもらいたいんですけども、屋島の周囲はかつて海

で、まさに島だつたんです。近年、高松市教育委員会が城門跡を整備したんです。「日本書紀」に讃岐国の中田郡の屋嶋城を造ると出てくるんです。研究者は、讃岐国山田郡屋嶋城と、なんで山田郡と付けたんだと問題にしました。これおもしろいですよね。たつた一文でですよ。山田郡つてあるのは、讃岐国には他にもう一つの山城があるのではないかというわけです。事実もう一つあるんですよ。文献にはあらわれないんだけれども、さつき言った、ゴルフ場の城山がまさにそれなんです。そこは山田郡ではなくて、阿野郡になるんです。坂出市です。屋嶋城を造るという時に、すでに城山という坂出の城が出来上がっているんだという研究者もいます。このように、文献に出てこない山城が、朝鮮式山城よりも早くできただということで、決着がつくかというとそう簡単ではない。これがまたおもしろいところですね。一行を読み解くことによつて一步前進したんだけれども、次の疑問が出てくるということです。そういう解釈でいいのかということで、最大の問題は、神籠石系山城がいつできたかということですが、それについて文献は黙して語らない。だから考古学などで調べていかないといけないということです。

次に示す（図2）下図が大宰府です。北に大野城、南に基肄城が造られます。大野城は、大宰府と上図の百濟の都・泗沘とを比較すると扶蘇山城にちようど相当します。上図ではずつと土塁が回っています。最新の成果によると、西辺の土塁ははつきりしないんですが、北側の土塁と東側の土塁ははつきり認定されています。錦江も防御線として利用しています。百済の都市構想のなかで大宰府が造られていくんではないかということが言われています。水城の西方ではこれまで小水城と呼ばれている、谷を塞ぐ土塁が確認され



図3 大宰府羅城についての最新説

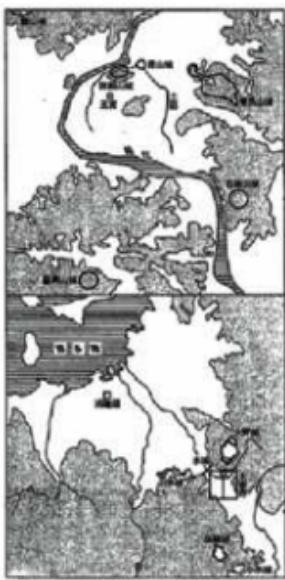


図2 滅城と大宰府

ていました。さらに全体に土塁が回っているんではないかという研究もあつたんです。これに関連して、最近発見された遺跡があるんです。次の図(図3)で筑紫土塁と書かれて認されたものです。宝満川も使って、防御線を張るように造っているんではないかと推定されています。現在、九州の仲間たちが、山を歩いてその痕跡を探しています。ここに阿志岐山城という文献にあらわれない山城があります。大野城や基肄城、阿志岐山城などで全体を取り巻く防衛線を造ろうとしたのではないか、ということがいえるわけです。だから、阿志岐山城は、大野城よりも後じやないかということになります。これは前後関係の問題だけではなくて、いつそれが造られたの



図43 大宰・總領制と古代山城の分布 「古代山城の分布」(『羅馬城が描かれた時代』より)をもとに作成)

向井一雄『よみがえる古代山城』より

#### 図4 古代山城の分布

かというのが今議論されているのです。

山城を地図におとしていくと、示している次（図4）のように、吉備の總領とか、周防の總領とか、筑紫の總領とか、大宰とかいうものの支配領域に対応するように分布することが指摘されています。七世紀の後半には、大宰とか、總領と呼ばれる広域行政官が置かれるのですが、彼らが山城の經營をやつていたのではないかということが言われています。

これらを考えるうえで、研究者の皆さんを取り組んでいることを紹介しますと、城跡は土塁で囲まれるわけで、列石というのも石だけがあつたわけではなくて、その上に土塁があつたんですね。ただ、土塁というのは土地なので、それが土塁であるかどうか分かりづらかったので、みんな石に着目してきたん

ちやつたんですけれども、現在は唐敷敷という遺構・遺物が注目されています。次の図(図5)は門の図です。右が扉。真ん中に柱を立てるわけですが、これは地下に埋もれる掘立の場合と石の上に乗る場合があります。現在は木製で、各地のお寺にあるんですが、古代山城の場合には、この図(図6)のように石でできてい

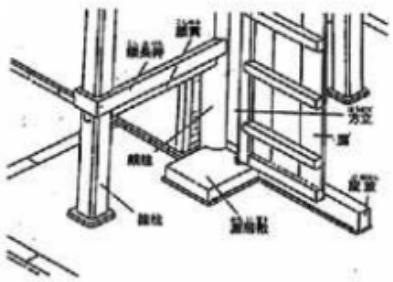


図5 門の構造と名称

です。寂源の  
ように地下の  
石を探して、  
ず一つと掘り  
出してきたの  
です。その結  
果、神籠石と  
いう列石の  
遺跡になつ

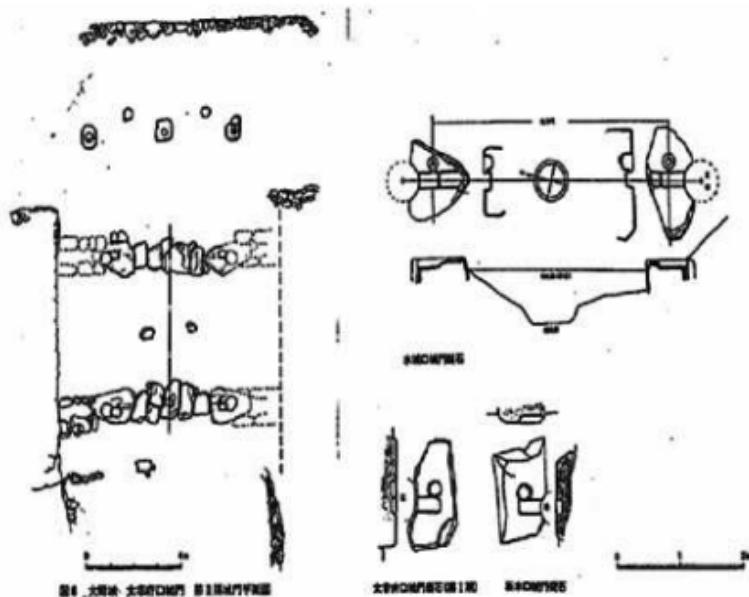


図6 城門と門礎石（唐居敷）

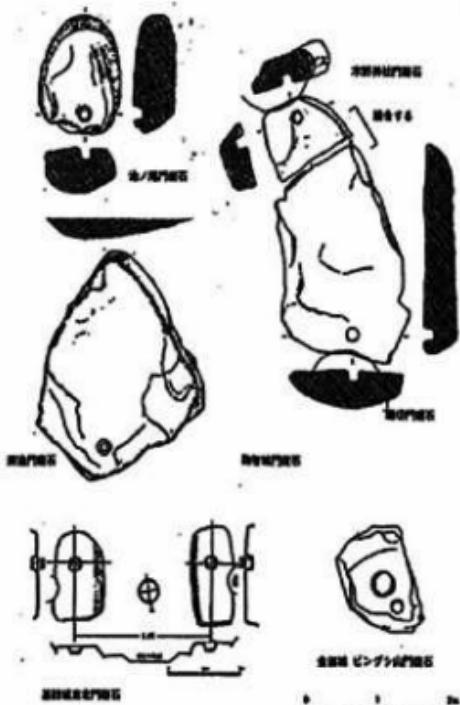


図7 門礎石（唐居敷）

るんです。真ん中部分を拡大してみると、右下のように、柱を立てるところに半円の削込みができるしますよね。また、その柱と扉との間に隙間が出来ないよう方立という板を立てるんです。さらに扉がくる一つ回るので、軸の部分は穴を掘って、据えつけなきやいけないんです。左図の礎石をみると、ここに柱があるて、ここに方立がある。これが軸摺穴という扉が据えられるところ。これは礎石立ちなんです。さつきのは掘立ですね。丸い柱の掘立。礎石立ちのほうがこの場合は新しいことになります。新しい時期になると、礎石に少しくぼみをつくり石に柱を立てるようになるということが大野城の事例から言えることになります。

鞠智城は次の図（図7）のような形の礎石になっています。二・八mあるんですかね、三m弱の間に、これが軸摺穴です。扉が立つた場所です。石の両端はちょっと分かりづらいのですが、やっぱり円形にちょっとくぼんでいる、こにくぼみがあるので、ここに柱を立てている。だけでもさつき言った方立の穴はないので、大野

城よりも新しいのだという意見と、それはバラエティーの問題であつて時期差ではないという意見が分かれています。瓦も基肄城や大野城と同じような古さの瓦が出るので、やっぱり單に記録が漏れただけで、修理が大野城と基肄城と同じ時期にやられるので、同じころ造られたのではないかというふうな研究があります。いずれこういう研究により謎に迫ろうとしているのが現状だということになります。

## 六、古代山城の保存と活用

この史料（史料1）は基山町にある基肄城に関する史料です。「記夷の城」に登つて望遊する日

にという、和歌が「万葉集」に出てくるんです。残念ながら、鞠智城は「万葉集」にとりあげられていません。でも、私はこういうものも参考につつ、考えていくべきであろうと思うんです。こ

の歌は、大宰帥である旅人の妻が亡くなつた時に、勅使が都からやってきて、喪を弔い、物を賜うのです。喪の儀式が終わると、勅使と大宰府の官人たちが基肄城に登つて望遊したというんです

大宰帥大伴卿・上妻魚御門が歌一首  
はととぎす来鳴き朝も卯の花の伴にや来しと向はましもの  
を

大宰帥大伴卿・上妻魚御門が歌一首

右は、神亀五年、戊辰に、大宰帥大伴卿が要大吉  
伊豆部女、病に罹ひて喪逝す。その時に、勅使式部大  
輔石上朝臣麿魚を大宰府に遣はして、喪を弔ひ并せて  
物を弔ふ。その事すでに驛りて、駆使と府の駕  
馬大先等と、ともに記夷の城に登りて望遊する日に、  
ナハちこの歌を作る。

大宰帥大伴卿が歌ふ歌一首  
横一三三〇の花散る里のはととぎす片恋しつつ晴く日しづめき  
大伴坂上部女 築紫の大城の山に思ふ歌一首

史料1 万葉集にみえる古代山城

伊藤博枝注「万葉集」上巻（角川文庫）より

ね。望遊するということは眺めが良いということです。こういう歌のやりとりをする時に、ゴザを敷いてそこに腰かけてやり取りをしたと考へるよりも、そこには、建物があつたと考へた方がいいんじゃないかなと思うふうに思っています。

私の話はいよいよ最後になりますけれども、あの史蹟名勝天然紀念物保存法という大正八年の法律を作ったのに、一番中心になつた人物は黒板勝美という人物です。この人は長崎県波佐見町の出身です。これは吉村先生、佐藤信先生の先生の先生の先生くらいにあたる方ですけれども、この方がですね、どんなことを言つてゐるかというと、「史跡と遺物というのはいつしょに保存しないといけない」と言つてゐるんです。遺物というと私たちは土器や瓦をイメージしますけれども、この先生はそんなちっぽけなことを考へていないんです。ここで言う遺物は、建造物、古文書、古記録、そういうものを全部ひつくるめて遺物だと言つてゐるんです。だから、私は古賀寿さんのことを見頭で紹介したように、地域で埋もれている、それは土器や瓦だけではなくて、古文書の類を含めて、そういうものを研究していかないといけないというふうに思ひます。坂本太郎先生という古代史の先生は、黒板先生のことを次のように評しています。「多方面の活躍は人に対する明敏な頭脳と頑強な身体とによって生まれた。性質は一面豪放であるとともに一面細心であり、活動の場は体制側にあることが多かつたが、性格としては在野的な傾向が強かつた」と書いています。「国史大辞典」のなかの文章ですが、黒板先生も、また坂本先生もすごく人間味のある感じがしませんか。坂本太郎先生は私の第二の故郷である静岡県の出身であります。

関係自治体の手で、古代山城サミットという取組みがず一つとやられております。神籠石サミットに始まり、古代山城サミットに発展的に継承されたものです。古代山城サミットになつてからももう六回を数えるに至っています。これは山鹿でもやつたことがあるんですね。史跡の活用は多面的な活用ということが求められています。私はそういった活動も応援していきたいと考えています。

古代山城は軍事的な記念物だと考えています。唐がいつ攻めてくるかわからないというなかで、造つたんです。戦前の「保存要目」という指定の基準には軍事という言葉があつたんですけども、戦後は軍事という言葉が消えてしまうんです。なぜかっていうと、平和国家にはふさわしくなかつたんじゃないかなとも思うんですね。だけれども、私たちはやっぱり日本の歴史において軍事というものがどういうものであつたかということを深く考えて、これから平和国家を築いていく材料にしていかなくてはいけないというふうに思つております。ご清聴ありがとうございました。

## 講演②

### 「列島古代史における鞠智城」

#### 講演者紹介

吉村 武彦（よしむら たけひこ）（明治大学名誉教授）

東京大学文学部国史学科卒業後、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。  
東京大学助手、千葉大学専任講師・助教授・教授を経て、明治大学文学部教授・  
文学部長・大学院長を歴任。現在、明治大学部名誉教授。専門は日本列島の古代  
史。

# 「列島古代史における鞠智城」

明治大学名誉教授 吉村 武彦

皆さん、こんにちは。今、ご紹介にあずかりました、明治大学を退職して二年目になつています吉村武彦と申します。今日は、鞠智城のシンポジウムということですが、七世紀後半の時期に、日本という国号があつたかどうか、そういう問題もあります。そのため日本という国号を避けて、列島古代史という言い方にこだわっていますので、「列島古代史における鞠智城」ということにしています。

実はこのシンポジウムでの報告は二回目になりますが、報告をさせていただきます。お手元には、鞠智城の東京シンポジウムという史料があるはずです。時間的に余裕がなく、文章レジュメは書けなかつたものですから、箇条書きのレジュメと若干の図面、この図面はパワーポイントでも使わしてもらいますが、最後に関係事項の年表を記しています。

今回の年表には、前回と違つて月まで入れて、年月の年表を作り直しました。ただし、レジュメをあわてて作成しましたので、I、II、IIIのところがI、II、IIになつていたりします。そうした間違いもありますので、ご注意下さい。



報告は、パワーポイントを使用しながら話をさせていただこうと思っています。

## はじめに

最初に「はじめに」なのですが、サブタイトルにあります「その歴史的価値を再考する」というテーマについて一言話します。僕が担当するテーマも難しいのですが、歴史的価値を再考する、そして遺産として保存するということは、日本国民の課題としてもなかなか難しい内容であります。

実は、こういう時に私がよく話すことは、井上ひさしさんが言う言葉で、「難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを面白く」ということです。彼が戯曲とか、小説を書くときに、念頭に置いている言葉のようです。実際、古代史を面白くするということは、歴史研究者にとっても重要なと思いますが、正直言って、史・資料が少ないので、面白くするのは難しいですね。ですから、いろんな説が出てくるわけですが、結局はその研究者の力量が問われることになります。

最近では、特にメディア関係に多く見られますが、通説のアンチテーゼを言えば面白いという風潮があります。たとえば志賀島で見つかった金印の問題では、これは本物と言われているが、そんなはずはない。偽物だといえば、面白いことになっているようです。僕は、そういう「面白さ」とは違った歴史の面白さを考えていかなければならないと思っています。

## 一・これまでの研究を問い直す

今回、最初お話をいただいた時に、やはりもう一度、これまでの研究を振りかえろうということで、まず自分で問い合わせたててみました。

(1) 古代山城の築城意図・形態は同じなのか?

(2) 「朝鮮式山城」と「神籠石」は同じであるのか、設置意図が違うのか?

(3) 百濟系技術者が築城すれば、百濟系の山城になるのか?

(4) 九州・瀬戸内の古代山城の運営は、国衛なのか総領(大宰)なのか?

(5) 廃止される山城と、継続する山城があるのはなぜか?

古代山城を造つたのは、同じ意図から出ているのかどうか。また、朝鮮式山城—朝鮮式という言い方は避けようとする傾向もあるようですが—と神籠石とは同じなのかどうか。あるいは違うとすれば、なぜなのかな。

それから、鞠智城の場合は明白な証拠があるかといえばないかもしれません、渡来系、特に百濟系の技術者が築城するというのが、「日本書紀」には九州や長門の山城で記されています。もし彼らが造つたとすれば、本当に百濟系の山城ができるのかどうか。

それから、もう一つ、最近は特に狩野久さん、かつて奈良文化財研究所から、文化庁・岡山大学に移られましたが、彼が強く主張することなのですが、九州あるいは瀬戸内海周辺に造られる古代山城、これを管轄するのは国なのか、あるいは総領ないし大宰なのか。古代史の研究の中では、総領とは何か、大宰とは何か、

この問題も再検討が必要です。なお、今は点を入れて「太宰府」と言っていますが、古代では筑紫大宰というように「大宰」の用法が正しいと思います。山城を管理するのは、国なのか、あるいは国を超えた総領なのか、という問題もあります。

それから八世紀初頭には廃止される山城があります。特に瀬戸内海周辺では、どうも廃止される山城が多いのです。また九州には神籠石も多いのですが、廃止される場合と継続される場合とがあります。どうして継続する場合と、廃止される場合がでてくるのか、その理由は何なのかという問題です。

およそこういう五つの問い合わせをして、これまでの論争を整理するとわかりやすいのではなかろうかと思っています。研究史も随分あります。こうした研究史の整理は、熊本の方にぜひやって欲しいと思います。向井一雄さんがやつておられます。新たに鞠智城に限定した文献目録と研究史の整理をお願いしたいと思います。僕も関係する研究論文を全部読んでいるわけでは必ずしもありません。

今日は、こういう問い合わせを頭に入れながら、話をさせていただきたいと思っています。

## 二、古代山城の諸形態

### (1) 朝鮮式山城と神籠石

一つは、西日本の古代山城の分布ですが、パワー・ポイントで図示しましたが、この鞠智城の位置は少しづれています。こういう図も作成されたということで、時代的背景を理解しておいて下さい。図面では、赤

が神籠石系で、「日本書紀」に書かれている山城が紫の印になります。

先ほど紹介した狩野久さんですが、特に鬼ノ城については、岡山大に勤めておられ、津山市に住んでおられる関係もあって、鋭い質問を発しておられます。鬼ノ城という、いわゆる神籠石系と言っている山城ですが、この鬼ノ城と他の朝鮮式山城とはどこがどう違うのか、という疑問です。このような問題意識をずっと持つておられたようです。

ご承知のように、日本の古代を考える場合、現在では太平洋側を裏日本というのですが、古代では九州島が朝鮮半島ないし中国大陆と応接する表玄関です。そのため、日本の表と裏の関係は、古代と近・現代では逆になるわけですね。古代では、対外関係では西日本が重要になるわけです。これを図面にしたのが、向井さんが作成した図になりますが、皆さんのお手元の史料に紹介させていただきました。ここでは、1、2、3、4という数字が神籠石系で、A、B、C、Dというア

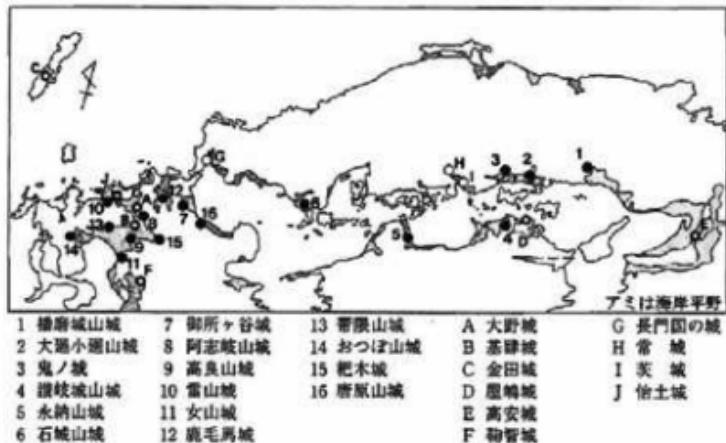


図8 西日本の古代山城分布図(向井一雄『よみがえる古代山城』吉川弘文館、2017)

ルファベットの方が、「日本書紀」ないし「続日本紀」に書かれている山城という具合になります。

## (2) 古代山城の種類

### 山城の種類

先ほども言いましたが、今日は時間の関係で、最初に結論的な話をさせていただこうと思います。西日本に限つて言いますと、大宰府、大宰府都城というのは、いわゆる九州をさす「大宰府管内の山城」という意味になります。それから「瀬戸内の山城」という、西日本には二つの地域的な山城に区別できます。

次に畿内といいますと、厳密にいえば畿内という言葉をいつから使うかという難しい問題もあります。事実としては、七世紀の半ばの大化の革新詔に、畿内国、ウチツクニがでてきますので、そこから使つても間違はありません。七世紀に入れば、畿内という用語を使用してもいいように思っていますが、この国の考古学では、いわゆる邪馬台国論争と関係して、畿内か九州かという言い方をする人がいます。邪馬台国がある時代に畿内があれば、当然、邪馬台国は畿内にあることになります。こうした場合は畿内の言葉は使わず、近畿地方ないし近畿中央部というべきです。そうしますと近畿地方の山城でもいいのですが、七世紀になると畿内という概念を使っても差し支えないと思います。大和にある高安城、それから滋賀県の琵琶湖沿岸にある三尾城を入れてもいいのですが、三尾城の全貌はまったくわかつていません。

そして、広い意味の城では、東北地方にある城柵があります。これは山城だけではありませんが、なかに

は山城みたいなものもあります。さらに興味深いといいましょうか、日本海側に城柵があります。これは大化の改新詔以降にでてきますが、渟足柵と磐舟柵です。太平洋側には『書紀』には記載がありませんが、仙台の郡山遺跡は孝徳朝の建造といわれています。そうしますと、日本海側の渟足柵・磐舟柵と対応してきます。これも考古学的な研究成果の評価と関係してきますが、渟足柵と磐舟柵とに引き付けて解釈しているのではないかという批判もあるようです。七世紀半ば前後に城柵が營まれるのは、おそらく蝦夷政策との関係があるかと思います。

このように山城を地域別にわけますと、大宰府（九州）、西日本、近畿地方の三種類になるかと思います。また、白村江の戦い、この戦いに敗戦するわけですが、白村江の戦いを含む図面と山城が書かれている図があります。白村江の戦いをみていくと、のちの防人のルートと同じですが、難波、今の大坂から瀬戸内海を船で行つて、筑紫に着きます。そして筑紫から半島に向かいます。そうしますと、瀬戸内の周辺にある山城と、九州にある山城。どうしても朝鮮半島を意識して造られますから、白村江の戦いと山城と一緒に図面化しますと、比較的わかりやすい図ができるかと思います。

大宰府都城周辺の山城といいますと、北部九州の分布図となります。齊明天皇が構えた朝倉宮の所在が、今一つはつきりしません。僕は通説的な朝倉宮でいいという考え方なのですが、通説は間違いだという考え方も提出されています。

瀬戸内の山城は、比較的明らかになつてきました。鬼ノ城には数回行っています。四国側では、今は復元

されました屋島城、かつて探しに行つたことがありましたが、その時はわかりませんでした。永納山では石の列を見ました。

岡山にもどりますと、大廻小廻山城はまだ行つていません。鬼ノ城につきましては、総社市から本がでており、また立派な門が復元されています。鬼ノ城には、確か長くかかる時間コースと、短いコースの二つの古代山城をめぐるコースがありました。

現在では、四国地方もはつきりしてきましたので、どのようなところに山城ができたのか、国府の周辺であるとか、あるいは郡衙の周辺であるとか、そういう立地のことを考察できる条件が整っています。これはまさに瀬戸内ルートをどう防衛するかという問題と、関係しているふうに考えています。

高安城につきましては、僕は千葉大時代に学生諸君と一度踏破を試みたことがあります。その頃、高安城を探る会の会員だったのですが、まだ踏査できる道というようなものがわからない段階で、途中で断念しました。そのため見ていません。岡は山田隆文さんが書いたものですが、まだ外郭ラインというのがはつきりしない図ですね。これも時期によつて、前期と後期の二つあるようです。こういう礎石建ちの建物が見えています。

壬申の乱の時には高安城をめぐる戦いがありまして、比較的都との関係で重要な場所ということになります。

今回の山城とは直接の関係はありませんが、東北に城柵というものがあります。日本海側と太平洋側とい

うことになります。これは対蝦夷策ということで問題ないよう思っています。律令制の時期を考える場合、東北の城柵はおさえておく必要があります。

### 瀬戸内と大宰府管内の山城

瀬戸内と九州にもどって、考えてみましょう。瀬戸内の場合は、体系的な防御ラインを築いたということです、基本的にはいいでしよう。

それから広い意味での大宰府管内の場合、大宰府都城の山城と都城を外れる山城があることになります。

細かい意図、機能とか、役割は違うだろうと思いますが、基肄城は大宰府周辺の山城と一体的に造ったとみて、それは間違いないだろうと考えています。

その大宰府と鞠智城ですけれども、直線距離で六二キロメートルといわれていますが、実際は古代の場合、古代の交通路を経なければなりませんので、もっと時間はかかるだろうと思います。



図9 大宰府管内の山城(小田富士雄『古代九州と東アジア』II、同成社、2013)

大宰府の方では、阿志岐城が地元の熱心

な方が探されました。瀬戸内の方では、長門の山城が、まだわからないことがあります。阿志岐城とも関係して、最近、大宰府を囲む土塁が見つかりました。かつて国立歴史民俗博物館におられた阿部義平さんが、大宰府にも羅城のような外郭を想定されていました。図は、小田富士雄さんが補訂を加えられた図面です。

ところが、前畠遺跡と言われている遺跡で、土塁が造られたことがわかりました。図は、現況資料からとりました。阿部さんが考えた羅城のラインとは、ちょっと東寄りになっています。新聞報道によりますと、このあと土塁を探そうという動きが、九州歴史資料館の人たちによって行なわれているとのことです。一番気にかかるのは、この前畠遺跡がいつできたか。つまり当初、大宰府をつくった時に造ったのか、あるいは律令制で整備され、その後に造られたのか。これが一つの大きな問題かと思います。

たとえば、七世紀後半に土塁が造られたと仮定しますと、その時、基肄城はどうなっていたのか。こういう問い合わせが必要かと思っています。大宰府にこうした羅城が巡っているということになりますと、羅城説に反対の意見もあるなかで、先ずは事実かどうかを確かめることから始まります。ついで当初から築造されたのか、あるいは後になるのか、きつちり評価する必要があります。博多湾に面している場所では、早くから造られたかどうかも気になります。つまり内陸側の土塁が遅れることがあるのか、そうではなく最初から造られたのか、大宰府都城を考えるうえで、大きな問題になるのではないでしょうか。

ります。私が研究を始めた頃は、古代の水城かどうか、まだ意見が分かれていました。当時は国鉄の時代でした。水城駅で降りて、この近くに行きました。見学したことあります。季節はおそらく夏前だと思いましたが、蛇がいっぱい出てきて怖かつた思い出もあります。立ち入り禁止と書いてあつたかもしません。これが都府楼であります。発掘調査が行なわれ、報告書もでています。

それから、ここが大野城で、南が基肄城になります。基肄城は比較的行きにくい場所ですが、この水門の跡までは行くことが容易です。ただし、ここから登っていくのは少し大変かと思います。

大野城の方は、土塁の総延長が八キロメートルを越え、七〇棟の建物が確認されているといいます。かつて、亡くなられた倉住靖彦さんには案内してもらいました。本当は歩いて実感をつかむ必要がありますが、彼の車で移動し、必要な場所は歩きました。

そして問題の鞠智城ですが、ここは肥後国ということになります。「大国」として扱われています。有明海と八代海に面していまして、南が薩摩国になります。薩摩国高来郡には、かなり肥後国から人が移っています。送り出した肥後は、やはり古代の大國ということでしょうか。

その鞠智城ですが、お手元の袋にパンフレットが入っているかと思いますので、見て下さい。現地に行かれても、三〇分では見学は無理かと思いますが、確かに一時間半ぐらいあれば、だいたい重要な所は回ることができます。低い丘陵地に造られていますので、大野城とか、基肄城とはまったく違います。

現地に行くには、バスの本数が少ないので、これから交通問題が課題になるかと思います。

### (3) 「総領」と「大宰」—狩野久説の批判的繼承

#### 「総領」「大宰」とその性格

次の話題は、ある程度、学術的な話として進めていかねばなりません。古代山城（こだいやまじろ）、あるいは古代山城（こだいさんじょう）というのは、誰がどういう形で設置して、どういう整備体制を築いてきたのか、という問題です。

基本的にいえば、七世紀後半は大和朝廷という言葉を使つてもいいかもしませんが、まだ律令制国家が完成していない時期ですね。とりあえずヤマト王権とさせていただきます。九州、瀬戸内周辺をはじめ、全國に令制国を建設した。これは事実ですね。難しいのは、この時期における地域行政組織の在り方で、まだ学界でも必ずしも確定した見解にはなっていないことがあります。

最初に、大化改新的問題です。僕は、元になる改新詔があつたという立場です。七世紀半ばには立評といふ、後に「郡」にあたる地方の行政体ができます。最近では、かなり有力な見解です。なかなか意見が一致しないのは、「評」というのと「郡」とが、單なる名称変更だけにはとどまらない問題が、あるのかどうかです。政治的な、あるいは行政的な組織の内容が、どのようになっているのか。わかりやすくいいますと、「評」というのは民衆を単位に支配する段階といわれます。領域支配になると「郡」になるのですが、そう簡単に言えるのかどうかですね。

それから東国に「總領」という役人が、派遣されます。早く「令制国」の成立を考える研究者は、大化の改新時に「國」ができたと主張します。「常陸國風土記」には、そのように読める箇所もあります。現在、学界で有力な考え方は、天智朝に「令制國」が成立したとする説です。これでいいのではないかと思っています。遅ましたが、律令制下の国のこと、学界では「令制國」と言っています。

ただし、吉備国はあってもいいのですが、吉備国が前・中・後に分かれて備前・備中・備後になる。あるいは筑紫国ですと、筑前と筑後。肥国ですと、肥前・肥後というように、前・後の国に分かれる国の成立は遅れます。

また関東で言えば、下毛野・上毛野国、房総半島では下総・上総国に分かれるのは、時期が少しずれるようです。ですから、カツコを付けておきましたが、令制國ができたからといつても、必ずしも律令制下の諸国とは同じではありません。

それともう一つ、七世紀後半には「初期國宰」が派遣されたということになっています。考古学的に言えば、これに対応する「初期國衛」というのが、いつできたのか。こういう問題もあります。また、國の下の「評」は早く立てられますが、「初期評家」というのが、いつから確かめられるのか、という問題もあります。早く認める研究者は、七世紀第3四半期、つまり大化の改新以降にできたと言います。その根拠となるのが、埼玉の東の上遺跡になります。考古学の研究者のなかでも、意見が一致しているわけではありません。

問題になるのは、古代山城が建設された時期です。朝鮮式山城というのは、「日本書紀」あるいは「続日本紀」

の「文武天皇紀」に出てきます。事実として認めていいかと思いますが、その時期に中央から派遣される「クニノミコトモチ」には、「總領」とか「大宰」という言葉が出てきます。そして、「書紀」に記されていない神籠石系の山城を含め、どのような場所に設置され、誰が管轄しているのか、確かめようにも史料がかなり限られています。

ここであらためて年表をみてみましょう。六六三年の白村江の戦いが終わった後、六六五年に筑紫国に大野城、基肄城を、その二年後に、大和国に高安城、讃岐国に屋島城、対馬国に金田城が築かれます。筑紫国に大野城、基肄城という時、筑紫というのは、「書紀」には二つの用法があります。一つは九州全体をさす筑紫の場合、そして後の筑前、筑後を指す場合の筑紫です。この時には、長門国に城を築くとありますので、筑紫国に大野、基肄の二城を築くという筑紫は、狭義の筑紫でいいかと思います。

そうしますと、基肄城は肥国（肥前・肥後）ですから、入らなくなります。これはこれで説明しやすいのですが、筑紫が、後の筑前、筑後でいいのかどうかという問題も残るかもしれません。

その後、康午年籍ということができます。全国的な戸籍で、国ごとに作成された。また男・女・良・践の区分もあつたと言われています。基本的にはそれで良いと思っています。さらに、いわゆる「近江令」という令が作成されたのかどうかです。僕は單行法令の一群と解釈しています。たとえ單行法令としましても、戸籍が作られる。戸籍を作るというのは、各地域に行政組織が整備されていないとできないですね。

また、体系的な法典がいつできたのか。これも現在、論争中ですが、これまでには淨御原令だといわれてき

ました。最近では、どうもそうじやないのではないか、大宝律令が初めての体系的法典ではないか、という意見も出てきました。こうした見解をどのように解釈するのかも考えなければなりません。この間には、全国的な康寅年籍も作られています。各地域にしつかりした行政組織がないと、やはり戸籍は作成できないですね。

古代史研究者、特に若手研究者の場合、戸籍作成の労力というものをどのように考えているのか、気になります。史料の上だけで考察しますと、机上の空論のような考え方になってしまいます。康寅年籍も、康寅年籍も残つていませんが、大宝律令以降の戸籍をみると、かなりしつかりした戸籍ができています。大宝律令になつて初めてできるとは考えづらい。やはり康午、康寅年籍があるからできる。そうした場合の行政組織はいつたいどうなつてているのか、もう少し実態的に考える必要があるかと思っています。

それと、一番問題かと思われる『日本書紀』の天武一四年十一月条があります。ここに、「周芳(周防)総令所」と「筑紫大宰」の語句がでてきます。この史料だけをみると、周防には総令(総領)が政事を執る「総令所」が存在したことになります。筑紫大宰の場合も、役所みたいな施設として考える。そうしますと、大宰が役所で、総領というのが官人だという意見がでてきます。ただし、それだけでは、『書紀』の解釈はできないように思います。

あらためて考えるまでもないのですが、古代山城を造る時、防衛体制を造るということは、国家的な行事として行なうわけですね。当初から令制国との関係を意識しているのかどうかも問題になります。設置場所

は、かなり地域的な特質が考慮されていますよね。やはり国レベルではなくて、国家的なレベルで考えた方がいいのではないかと思います。周防総領は、周防しか対象にしないのか、問題になります。

### 「総領」「大宰」と古代山城

官職名も厳密に考える必要があります。とりあえず総領・大宰を、筑紫大宰（大宰は総領と両用）、東国総領、吉備・周防・伊予の総領（総領は大宰と両用）という3種類に区分した方がいいと思います。東国総領の位置づけですが、これも地域が限定されています。

これらの官職と、山城、城柵との関係はどうでしょうか。筑紫関係と吉備・周防・伊予総領と、古代山城とは対応します。東国は、東国総領が派遣された地域で、朝鮮式山城などは見つかっていません。このように大宰・総領は三種類あって、筑紫大宰と吉備・周防・伊予の総領は、同じような役割と違った役割（たとえば外交）がありますが、東国総領とは異なっています。

ただし、史料上はそう簡単ではありません。大宰は、総領の語も使われます。筑紫総領ですね、また、吉備・周防・伊予も、大宰とも言われています。これらの文字表記は、「書紀」編者のミスの可能性も皆無ではありませんが、解釈に合わないから勝手に史料の読みを変更することはやめた方がいい。「書紀」「続日本紀」に書かれている「大宰」「総領」の史料を前提にして、考えてみる必要があります。再検討しても、なかなか結論がでてこないので、とりあえず三種類の大宰・総領に区分して考察を進める必要があります。

地図に山城をおとしていきますと、筑紫関係の山城、それから周防、吉備、そして伊予というように官人配置と山城は無関係ではありません。これらの山城は、確かに令制国単位に考えるよりはいいでしょう。周防の総領は長門に関係していますし、吉備は前・中・後に分かれていても、播磨に対しても総領（あるいは大宰）が政治力をもっています。伊予もそういう史料があります。古代史学界でも、総領・大宰と山城を連づける時期にきているように思います。

次に、筑紫では、大宰と総領の官職は、どうなっているかの問題です。僕は、大宰と総領は最初同じだと思っていました。ところが、九州の研究者は、九州大学や九州歴史資料館の研究者が、大宰と総領を区別するという考え方をとっています。そんなことはないだろと思っていたのですが、この報告を準備する過程で、あらためて論文を読んでみると、どうも大宰と総領を区別した方がよさそうだと思うようになります。大宰の場合には、那津官家の関係とか、朝鮮半島あるいは中国大陸の外交施設との関係で、考える必要があります。

白村江の戦いから少し時間がたつていますが、壬申の乱において、「書紀」には「吉備国守」と「筑紫大宰」が出てきます。それだけ吉備と筑紫が重要な位置を占めていました。筑紫大宰の栗隈王は、「筑紫国は、元より辺賊の難を成る。其れ城を峻くして濠を深くして、海に臨みて守らするは、豈内賊の為ならむや」云々と書かれています。これは大宰府の施設があつたから、こういう表現になるかと思います。そういう筑紫大宰と古代山城の関係ということになります。ただし、大宰府関係でも福積城の場所につきましては、再検

討が必要かと思っています。

なお、大宰府の成立につきましては、小田富士雄さんが作成された関連年表が参考になります。小田さんも白村江以降で考えておられて、それが大宰府政厅一期、七〇一年の大宝律令以降が政厅二期になります。この小田さんの区分説に則つて説明していくのが、妥当かと考えています。

#### (4) 山城築城の技術者

次の問題は、山城建設の技術者の問題です。

『書紀』天智四年八月条によりますと、長

門に達率答体春初、筑紫の場合は達率億礼福留と四比福夫を派遣して築城します。達率とは、百濟の官位で一六品の二番目の位です。筑紫に遣わされた二人が、大野城と基肄城に来たことは史料上明白ですが、基肄城はどうでしょうか。

さて、もう一つ気になつてゐるのが、百済人や百済系の技術者が山城を造つたら、本国タイプの山城とな

表1 大宰府の成立関係略年表  
(小田富士雄『古代九州と東アジア』II、同成社、2013)

		536 (宣化元) 那津官家修造		前 期
		609 (推古17) 筑紫大宰初見	663 (天智2) 白村江戦に大敗	
大 宰 府 政 厅 一期	古 段 階 (a) 獨立柱建	664 (天智3) 対馬・志岐・筑紫に防人・烽をおき 水城大堤を築く	665 (天智4) 大野・猿二城を築く	筑 紫 大 宰
	新 段 階 (b) 同上	689 (持統3) 6月飛鳥淨御原令制定 9月位記伝達使者筑紫に到る	690 (持統4) 7月大宰・国司選任 694 (持統8) 12月藤原京遷都 698 (文武2) 5月大野・基肄・輪智3城を修築	
大 宰 府 政 厅 二期	古 段 階 (b) 同上	701 (大宝元) 8月大宝律令制定 710 (和銅3) 3月平城京遷都	769 (神護景雲3) 「此府人物殷繁天下之一都會也」 (続日本紀)	大 宰 帥
	新 段 階 (b) 同上	941 (天慶4) 6月藤原純友の乱・政厅全焼		
大 宰 府 政 厅 三期	古 段 階 (b) 同上			
	新 段 階 (b) 同上			

るかどうかです。これは向井一雄『よみがえる古代山城』でも強調されています。しかし、もう一つは中国南朝との関係です。

小田富士雄さんをはじめ中国の南朝と百済との結びつきを考える研究者は多くいます。南朝と百済との関係は、非常に重要な関係です。今、明治大学で墨書き土器データベースの集成の作業をやっています。古い時期の墨書き土器が中国の南朝から出土していますが、木簡も出土しています。木簡の数は多くないので、比較検討するのが難しいのですが、木簡や墨書き土器は南朝から百済、そして倭というルートも考える必要があるかと思っています。小田富士雄さんと同じくらい重要なだと考えておられるようです。

こうした疑問を持つのは、飛鳥寺の問題があるからです。飛鳥寺は、明白に百済系の技術者が造った寺です。しかし、伽藍配置は高句麗系です。近年、飛鳥寺と韓国の王興寺との関係が話題になりました。王興寺には2回行つきましたが、三金堂とはなりませんので、系譜的にまったく関係がありません。王興寺を飛鳥寺に結びつける考え方には、成り立ちません。現在のところ、やはり高句麗の清石里廃寺の伽藍配置との関係が重要です。基本的には高句麗系の伽藍配置ではないかと思います。飛鳥寺を造る時、厩戸皇子の先生だった人は、高句麗僧の慧慈ですね。

それから、大化の革新で、いわゆる部民が廢止されまして、公民制が実施されます。そして立評で、評（後の郡）が立てられます。考えてみると、「部」は半島の制度ですが、「評」というのも半島の制度です。大宝令で「郡」になりますが、この郡は秦・漢の地方行政組織の単位です。秦の郡県制、そして漢の郡国制と

なります。こうした秦・漢時代の国制を参考して作られているのが、日本の国郡制です。

しかし、その前段階の国評制は、朝鮮半島の影響が強い。その「評」という組織は、高句麗から学んだ可能性が高いですね。一方の「部」は、百濟の影響が一番強いかと。朝鮮半島には三国ありますが、日本で行なわれた国評制には、意外と高句麗の影響も考慮する必要があるのではないかと思います。

このように考えていきますと、百濟都城と高句麗都城の比較研究も必要になります。百濟は扶余系ですが、高句麗も扶余系の民族集団です。三韓ということで、百濟、新羅、高句麗のことを考えがちなのですが、百濟と高句麗は扶余系なので、両者の関係性を考える必要もあるかと思います。

最近出された向井一雄さんの『よみがえる古代山城』では、日本の朝鮮式山城の規模と形態から考えると、百濟や新羅ではなく、高句麗との比較を強調されています。このように、百濟系の技術者が築城したとしても、高句麗や中国南朝との影響も考慮していく必要があるのでないでしょうか。

### 三、鞠智城をめぐる諸問題

いよいよ時間がおしてきましたので、これからはポイントだけを話していきます。まずは、「続日本紀」の文武二年五月条です。先ほどの「筑紫」の理解と関係しますが、筑紫大宰の管轄に大野城・基肄城と鞠智城が入りますから、鞠智城を「筑紫國」のなかで考えても差し支えありません。「續治」というのはやはり

修繕でいいだろうと思いません（レジュメの文字「修治」は間違っています）。天智四年八月条は、筑紫国で大野城と基肄城の二城の築城記事です。鞠智城は記載がありません。これが狭義の筑紫国（筑前・筑後）であれば、肥後国の鞠智城がなくとも特に問題はありません。

大宰府の成立につきましては、小田富士雄説をとると、白村江の戦い以降になります。鞠智城の築城も同じ頃だとすれば、繕治も三〇余年経つていますから当然のことになります。鞠智城跡の変遷をみると、第一期と第二期の間、つまり七世紀末で一部に変化があるようです。

鞠智城の第一期につきましては、仏像がでて、今のところ百濟系といわれていますが、百濟系工人の関与と推測できます。そうしますと、大野城・基肄城の築城との関係でいえば、鞠智城も天智朝でいいように思います。第二期になりますと、七世紀末が若干ひつかかりますが、「コ」字形の配列とかですね、律令制的な官衙的な性格をもつてき

表2 鞠智城跡の変遷（『鞠智城跡 II』 熊本県教育委員会、2012）

年代		鞠智城跡の変遷		関連事項
7C	3	鞠智城Ⅰ期		<ul style="list-style-type: none"> <li>白村江の敗戦（663）</li> <li>防人・壁設置（664）</li> <li>長門國城築城（665）</li> <li>大野・柳城築城（665）</li> <li>金田・脇崎・高安城築城（667）</li> </ul>
	4	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div>獨立柱建物の建設</div> <div>城門の構築（深造・堀切・池/尾門）</div> </div>		<ul style="list-style-type: none"> <li>野水池の造成</li> <li>土塁壁の構築</li> <li>大野・基肄・鞠智城繕治（694）</li> <li>船橋・三野城繕治（699）</li> <li>高安城修理（698・699）</li> </ul>
8C	1	鞠智城Ⅱ期		<ul style="list-style-type: none"> <li>高安城廢城（701）</li> </ul>
	2	鞠智城Ⅲ期		<ul style="list-style-type: none"> <li>備後國茨城・常城併める（719）</li> </ul>
		建物配置の改変		
		礎石建物の出現		

ます。大野城や大宰府との関係でも、それなりに合うのではないでしょか。

### 大宝令の施行と鞠智城

次が、一番問題になる大宝令の施行と古代山城ということです。七〇一年（大宝元）に、高安城が廃止されて、その後、大宝律令が施行されます。大宝律令には軍防令がありますので、古代山城とも関係してきます。律令法で軍団が組織されますが、どのように関係しているのか、非常に気にかかる事柄です。

それから七一九年には、備後国で茨城と常城が停止されます。「日本書紀」や「続日本紀」には古代山城の記事がすべて書かれていませんので、各山城の盛衰は考古学から確認しなければなりません。軍団体制と山城の防衛体制とがどのように関連しているのか、今後の史・資料の増加に期待したいと思います。

律令法と城の関係では、衛禁律（養老律）の越垣及城条に「筑紫城」と「陸奥・越後・出羽柵」の名前がでてきます。瀬戸内地方の城は書いてありません。筑紫城ですから、大野城・基肄城のほかに、「続日本紀」文武二年条を参考すれば、肥後の鞠智城が入つてもかまわないと 思います。東北では、陸奥・越後・出羽柵が対象ですか。

また、軍防令城障条には、「城の障（堀）」が崩れた時には、兵士で修理することが規定されています。残されている日本の律令では、ここまでしかわかりません。

古代山城の盛衰につきましては、考古学の研究に頼らざるをえません。赤司善彦さんが「出土土器からみ

た古代山城の時期成長表を作つておられます。この盛衰表をみますと、大野城・基肄城・鞠智城を除きま  
すと、だいたい八世紀第一四半期で消えていく山城が多いのですね。

つまり、継続する

古代山城と消失する

山城があることは明

らかです。普通に解

釈すれば、白村江の

戦い以降の防衛ライ

山城の  
かがれに

役割は、九州を除い

て終わっているよう

です。そういたしま

すと、  
継続する古代

山城は新たな役割と

機能が付加されてい  
るよう思います。

表3 出土土器からみた古代山城の時期酒長表(赤司善彦)

学史的な分類	山城名	時期				
		7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	
朝鮮式山城	大野城	■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	基肄城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	金田城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	屋嶋城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	高安城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	鞠智城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
(神籠石系) 濱戸内の山城	播磨城山城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	大通小迎山城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	鬼ノ城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	讃岐城山城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	永納山城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	石城山神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
(神籠石系) 九州の山城	御所ヶ谷神籠	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	阿志岐山城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	高良山神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	雷山神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	女山神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	鹿毛馬神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	希隈山神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	おつほ山神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	杷木神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
	唐原山城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	
備考			■ 出土遺物などからみて確実 ■■ 可能性がある ■■■ 出土遺物はあるがごく少量であるなど不確実			

それはいつたいどういうことなのか。付加されたという中身に、住居や倉などの建物があつたのかどうか。これは考古学の発掘調査によつて確認せざるをえません。

さらにもう一つの出来事として、七五六年に筑前国に怡土城が築かれます。当然、設置される理由があるわけです。そして七六年には怡土城建設の専門官が設けられると同時に、水城修理の専門官も任命されています。八世紀半ばにも新しい動きがあつたことになります。文献史料が少ないので、その実態につきましては、考古学の発掘調査の進展をまちたいと思います。

こうした動向を見ていきますと、第一段階としては、白村江の敗戦以降の大宰府を防衛する体制の一環として鞠智城ができる。ただし、大宰府の都城関係の施設と鞠智城とは別ですので、大宰府都城の防衛だけではなく、たとえば有明海や南方への対策を考える必要があります。第二段階としては、大宝律令の施行に伴つて、律令制支配にふさわしい新しい役割・機能が与えられるようになります。そして、八世紀半ばになると、怡土城の設置がありますので、大野城・基肄城と鞠智城には新たな役割が付加されます。こうした動向については、文献史料が少ないので、考古学の研究成果によつて解明していかなければなりません。ちょっと時間が延長しましたが、これで終わります。ご清聴ありがとうございました。



## 講演①

### 「文化遺産としての鞠智城」

#### 講演者紹介

館野 和己（たての かずみ）

京都大学文学部史学科卒業後、京都大学大学院博士後期課程を単位取得退学。奈良国立文化財研究所、奈良市教育委員会、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部主任研究官・史料調査室長、奈良女子大学文学部教授を経て、現在、奈良女子大学特任教授。専門は日本古代史。

## 「文化遺産としての鞠智城」

奈良女子大学特任教授 館野 和己



ただいま、ご紹介いただきました館野です。わたくしに与えられたテーマは、「文化遺産としての鞠智城」ということです。これまでには、生きている時代の鞠智城が、いつ成立したかとか、どんな機能を果たしたかとか、そういったことが、こういうシンポジウムで話題になってきたかと思うのですが、私の場合は、文化遺産としての鞠智城ということです。文化遺産とは、人間の文化的活動の結果、生まれたものの現在の姿のことでありまして、この場合ですと、遺跡といつてもいいかと思います。遺跡ということになると、すでに生きていない、鞠智城が鞠智城としての機能が終わった後のことについてお話をするということが、わたくしの今日のお話の中心となります。

### はじめに

鞠智城が成立して以後、文化遺産となるまでの歩み、つまり現在までの歩みをたどっていきたいと思います。そうすると、まず七世紀の後半に鞠智城が成

立し、そしてそれが一〇世紀まで、存続する。そして機能を終えて終わりを迎える。その後、忘却され、またある時点から、伝説の成立、これは後で詳しく申しますが、というような形で回想される。さらには江戸時代、あるいは明治ぐらいから、今度は鞠智城跡として再発見され、調査・研究が加えられて、そして現在に至り、整備も進んでいくと。このような、過程を鞠智城は辿ったと思います。

### 一・鞠智城の成立と存続

そこで、具体的にそれを見ていきたいと思いますが、まず、第一章は鞠智城の概要をまとめたところあります。

鞠智城は、米原台地に所在し、そこには縄文、弥生、古墳時代の遺跡が残っている。そういうところに鞠智城は成立した訳です。これは大地に人間が働きかけて生まれたわけですが、その成立の要因については、今の吉村さんの話にも出てきたところであります。どういうところに立地する、あるいは、どのような文献史料があるとか、さらに、これまでの発掘調査の成果で、どんな施設があり、あるいは、どんな時期区分がされているかということなどを、挙げたところでですので、ご覧頂きたいと思います。

### 二・鞠智城の終焉以後

ここから中心的なお話をていきたいと思います。

先ほどの時期区分の中でも、鞠智城は五期にわたる変遷が確認されていますけれども。Ⅴ期、これが一〇世紀の第3四半期までということで、そこで終焉を迎えるわけです。そうすると、それまで使っていた施設が廃棄されたり、あるいは破壊されたりして、使わなくなつて次第に土の下に埋没していき、遺跡となつていきます。

そして、生きている施設としての鞠智城というものがなくなるので、次第に忘却されていくということになると思いますが、一方ではですね、これがまた一つのことからなのかということは大変難しいわけですが、その米原台地の上にかつて何かがあつた、あるいは誰かがいたというようなことが、のちの時代になつて、回想されていきます。そういうなかで、関係地名といったものが成立し、あるいは、これはもしかしたら鞠智城が生きている時代から、あつた地名かもしれません、それが残つていくということになります。たとえば、そこに挙げましたように、涼みヶ御所とか、佐官（しゃかん）どん、少監どん、紀（まつり）屋敷とか、あるいは長者井戸。この長者井戸というものは、これはまた次に申します長者伝説に関わつてくる地名であります。こういったものが生まれてくることになります。これらの関係地名がどこにあつたのかといふのは、後ろのほうに、地図を挙げておきましたので、ご覧いただきたいと思います。米原台地の鞠智城跡の北の方に、こういったものが残つているということです。

そして、もう一つ、今日特に注目したいのが、米原長者の伝説が成立してくるということであります。

### 三、鞠智城跡の米原長者伝説

次、第三章にいきますが、鞠智城跡にある米原長者の伝説というもの。これは大部な鞠智城跡の報告書（熊本県教育委員会「鞠智城跡II」）にも、掲載されております。「肥後国誌」という、これは大正年間に、後藤是山という人が編纂したものであります。それの序文などをみていくと、江戸時代にも「肥後国誌」というものがあつて、その後、補訂されていったが、すでに絶版になっているので、この書を作ると言つておりますから、そのもとにあつたものは江戸時代のものではないかと思います。江戸時代につくられた「肥後国誌」の現物にあたつて、記載を確認できていないので、ここでは、大正五年の「肥後国誌」をひいておきました。

この長者伝説、「鞠智城跡II」に、詳しく引用されておりますが、長いので、概要を示しておきます。冒頭部に、「長者屋敷は」と書いておりますが、鞠智城跡のある所は、かつては米原（よなばる）村と言つたのですね。「長者屋敷」というのは、米原村の米原長者の住んでいた旧跡である。「烏（からす）ノ城」ともいう。そして長者の名前とか時代とかはわからないと。「仮名は孫三郎」というと。「涼ノ殿」、これはおそらく第二章に関係地名としてあげた「涼みヶ御所」にあたるのだろうと思いますが、「月見櫓、玉屋敷、蔵床などという旧跡あり」とあります。「蔵床」には、四方に土居、中に礎石があると。近辺に礎石だとして大きい石が多かつたけれども、近世になって耕作の妨げだとして、半ばは地中に埋めた。またある石には、長者の姫の足跡が残っている。たぶん石に溝みがあったのをそういうふうに言つてているのだと思います。ま

た、長者の鐘掛松というのがあったが、近年大風で砕けた。それからまたこの辺りには团粉土（だんごつち）というのでしようか、これは「兎余糧（うより糧）」であると。それから「焦米（こげごめ）」の砂あります。炭化米（たんかまい）でしょうか、そういうものがあつたということあります。

このように、長者屋敷の現状を述べた後で、里俗にいうには、昔あるお公家さん、公卿の娘さんが大変美しく、当然、貴族の娘ですから京都に住んでいるんですね。そして、泊瀬（はせ）の観音、奈良県桜井市の長谷寺の観音を信仰して、参詣していた。その娘が一六歳になつたので、父母は結婚先を探すのですが、娘は大悲尊、これは女性の信仰を集めていた長谷の観音様ですが、それを信じ、求めると必ず感應がある、つまりなにかお願いをすると、必ずその観音様からの反応があるというので、七日間を限つて仏意を聞いて、それに任せたいと言つたわけです。父母が結婚を勧めるわけですが、私はいつも観音様を信仰している。七日間、とにかく待つてください。そうするときつと観音様が、良いお応えを与えてくれるでしょうからといふことなのですね。彼女が參籠して祈ると、その観音が夢にてて、汝の、夫は肥後国菊池郡の賤夫（しずのむ）の、貧しい男ということでしょうね。孫三郎である。早く、その菊池に下れというように、お告げがあつたのです。それを聞いて、本当は都の誰々と結婚せよとのお告げがあるというふうに思つていたのでしようが、肥後国に行けと言われて、これは前世の行いがよくなかつたかと悲しむのですが、これもお告げだということで、父母の許しを得て、婢女、召使の女二〇余人を連れて、都を出て菊池郡に来て、出田村のあたりで籠を作つて生計をたてていた孫三郎に出会う。そして、夫婦の約束をしてここに移つて、ここは米原村で

すね、そこに移つて富有の身となつて米原長者と号したと。こういう話です。

また、一説には、こんどは長谷の観音ではなくて、清水寺の観世音を信じていた一六歳の娘が清水寺に通夜したところ、夢に観音が出てきます。本当だつたら一晩中起きて仏に祈るのでしあが、途中寝てしまつたのでしあが。夢で観音が、汝の夫婿は肥後国菊池郡の四丁分にいる薦編（こもあみ）小三郎というものである。これに嫁げば、福寿は意のままにならう、というお告げを下した。そこで娘は四丁分に到り貧しい小三郎に事の由を語り、夫婦となるように求めます。小三郎は驚いて、自分の貧しさを語ります。とてもあなたを迎えるようなものではないと。すると、娘は懐から金二両を出して、これで今晚の食事を買ってきてくださいと頼むわけです。小三郎は買いに出かけたのですが、すぐに戻ってきてします。訳を聞きますと、下の谷まで行つて、川にいた鷺をとろうと思って、その金二両を、投げたが、逃がしてしまつたと答えます。娘は驚いて、いつたいどうするつもりだ、そんな大金を捨ててしまつてというと、小三郎はこんな金ならば、わが屋布（やしき）、この屋布というのは大きな屋敷ではなく、自分の敷地内にという意味ですが、そこにたくさんある礫、つまり小石であると答えるわけですね。そこで、鎌で家の裏の土を掘ると、黄金が大量に出てきた。そこで一人は夫婦になって家は富み栄えた。その跡は、今、四町分村の長者屋布といふところである。その後、岩本村に移り住んだ所を屋布の谷という。その後、さらに米原村に移つた。河原にある車石という石は、長者の財宝を車に積んで岩本に移る時に、路傍の石に車を引っかけて軸が折れたところである。出田村の辺りにも一時住んでいた屋布跡というのがあると。このようにでできます。

さらには、また里老の説として、つまり、老人の話として、用明天皇の時に富饒の者、富のある者が朝廷から長者号を賜つて、米原長者と号した。奴婢、牛馬一〇〇〇余を有して、菊池谷から山鹿郡の茂賀ノ浦まで、田底三〇〇〇町を耕作した。三〇〇〇町は、三〇〇〇ヘクタールくらいですね、広大な土地を持つていた。そして毎年一日で田植えを終えていたけれども、ある年、ようやく半分終わったところで、日は西に傾いたので、長者は金の扇で太陽を招き返したが、なお田植えは終わらなかつた。そこで長者は油樽三〇〇〇を出して、山鹿郡の日ノ岡山にそれを注いで火をつけて、いわば人工的に山火事を起こして、その明かりで田植えを終えたところ、その天罰で、その夜、火の輪が出て、家、倉庫はことごとく焼けてしまつた。それ以来、火ノ岡山、前には日ノ岡山となつていましたが、火ノ岡山は焦土となり、山の石は黒く木は茂らなくなつた、その時昼飯にした团粉(だんご)は焼土となつた。これは兎余糧であるという注釈がついています。それから、歳に蓄えていた米は焼けて砂のようになつて今にある。これは炭化米、焼け米のことであります。また、彼が耕作に通つた道は踏切という切通しであつて、その昼飯を運んだ婢女一〇余人の像が踏切の崖に残つてゐる。このように里老の説を紹介しています。

そして、さらには、かつて長者は山本郡の駄ノ原長者と財宝比べ、宝くらべをしようとして、米原から茂賀浦の坂口まで、田底三里に黄金の踏石を敷いた。一方の駄ノ原長者はそういつた贅沢なことはしないで、二四人の息子を連れてきただけであつた。そして二人の長者は坂口で出会つた。黄金を敷き並べた長者と、子供だけを連れてきた長者が宝くらべをしているわけですが、米原長者には一人の男子もなく、金銀よりも

男子が多いことが羨ましいと言つた。要するに、子供が宝だということになつて、駄ノ原長者が勝ちとなつたのですが、米原長者が羨ましいと言つたので、そこを浦山口というようになつたと。こういうような話になつています。

最後に、これらの俚説は一笑に堪えないが、遍く老農の伝える話なので、記して万笑に備えると言つています、信用はしていないけれども、こんな話が残つているよというように結んでいるところです。

また、別に、「菊池風土記」というものがあります。寛政六年（一七九四）に渋江公正によつてつくられたものですが、そこにも長者屋敷の伝説がでてきます。それは、米村村に有り、米原長者の遺跡といい、烏の城ともいつたと。これは先にもありました。長者の姓氏や時代は分からず、名は孫三郎という。俗説に前田千町、奥永、これに註がついておりまして、今の玉名郡の庄嶋・土用月・川崎辺りをいうとあります。前田千町から奥永千町を所有していたという。涼殿・玉屋敷・月見櫓・蔵床は、今もその跡がある。蔵床というのは、俗に不動倉の跡を長者に付会するものだ。ここでは、歴史書にみえている菊池郡の不動倉というものを知つていて、それを蔵床というのに比定するのはこじつけだと指摘しています。

その次に＊印をつけておきましたけれども、上に出てきた庄嶋ですか、土用月、川崎というのはいずれも現在、山鹿市鹿本町の、中川というところのバス停の名前になつています。これは一月でしたか、案内して頂いてバス停を確認してきたところです。つまり、今でもそういう地名がバス停の名前として残つてゐるのです。ちなみに「菊池風土記」はその下に書きましたように、熊本県立大学の鈴木元さんが「菊池風土

記」の注釈をつくつておられて、ホームページで公開されているところからとったものであります。

さて、このように米原長者という、長者の伝説が、この鞠智城跡には成立しているということになるのですが、実はこの話は、有名な民俗学者である柳田國男によると、日本各地に残る長者伝説と同工異曲であつて、この地で生まれたものではないということになります。柳田國男がいろいろな辞書で「長者屋敷」、「炭焼長者」とか、「賣競へ」とかですね、全国にある、そういう伝説の解説を書いている訳ですが、それを見ても、あちこちに同種の伝説があります。敷地内を掘つたら、黄金がたくさん出てきたのでなんとか長者と呼ばれるようになつた。そういう人は炭焼きをやっていたという話が多いという解説を、「炭焼長者」という項目でしています。こういう長者伝説というのは例えば、この鞠智城跡から東の阿蘇山を越えて、もっと東に行つたところの大分県豊後大野市にも炭焼小五郎の伝説があります。あるいは、米原長者に関係してはですね、山鹿市古閑の十三部というところで、穂掛け孫六という落穂ひろいをして生計を立てていた男の所に京の姫が観音のお告げでやつてきて、夫婦になり長者になつたが、これが米原長者の起りであるという伝説があります（稲田浩一・小沢俊夫責任編集『日本昔話通観 第二四巻 長崎・熊本・宮崎』 同朋舎 一九八〇年）。

九州の中でも同工異曲の長者伝説というのがあるわけであります。

ですから、柳田國男は、長者伝説というのが全国各地にあるので、誰かの手によつて伝わつていつたものだと考察を加えているのですが、この米原長者というものに注目するならば、そういう話がよそから伝わつてきて、それがここに定着するにあたつて、鞠智城跡に残つていた遺構とか、近辺の地名といったものが取

り入れられていったということになります。やはり柳田國男が寶競べの中で述べている一説を引いておきました。「通例の形は二人の長者が地を接して住み、一方は米俵を堤に築き、又は金銀を路に布いて」、これは米原長者がそうだった訳ですが、「それを踏みながら出会いしたところが、他の一方はただ十二人の男を引連れて出て來た。これより以上の實は、この世の中にはあるまいと、一方の子を持たぬ長者が、初めて人生的寂寞を感じたという風に語つて居り、肥後では口碑を受け入れ易くするために、浦山という地名を援用した伝説もあつた。」と「浦山」「浦山口」というところがあるわけですが、それを「羨まし」とかけて「寶競べ」で、米原長者が負けて、駄ノ原長者に「羨まし」といつたというですね。こういう地名と結び付けていつたわけであります。

お話しした米原長者の中ではですね、例えば遺構として、なにかの跡が残っていた。それが地名にもなつたのでしょうか、涼みヶ御所ですか、あるいは蔵の跡が残っていたから、そういう名前が付いたのでしょうが、蔵床とか、玉屋敷も、礎石が残っているような形で、なにかそういうようなものがあつた跡とみられる。あるいは米原台地から、团粉土とか、焦米の砂と書いてありましたけれども、炭化米、焼けた米が出てきた。そういうものが、かつてここに誰かが住んでいた。しかも建物がいっぱいあるから、長者に違いないというようになつてですね、よそから伝わってきた長者伝説を受け入れる。

さらに、次に、地名・地物と書きましたけれども、今まで紹介してきた中の、地名等をみていきますと、出田村、米原、あるいは四町分村、岩本村とかですね、これらの地名にあたるところは地図でも見つけるこ

とができます。あるいは、茂賀ノ浦、これは菊池川流域の低湿地をいうようですが、田底に、三千町の田を持つていたというのがありました。田底も熊本市植木町の田底にあたります。日ノ岡山というのは鞠智城の西方の山でありますし、踏切の崖のところに婢女の像があつたとあります。これは鍋田横穴群ではないでしょうか。これは古墳時代の横穴墓ですが、その、入口のところに人間の姿などが浮き彫りにされており、もしかしたら、それを婢女の像と言つたのではないかと思います。浦山口というのも山鹿市の岩原というところがそれだということで、現地に行きますと、豊前街道の横ですかね、そこに「うらやま坂」との標柱もたつています。奥永千町は、先ほども、「菊地風土記」に今のどこどこにあたると註が付いていた、庄嶋や土用月、川崎はバス停の名前にあるといいましたけれども、前田千日というのは、山鹿市の石と山鹿に、どちらにも前田という地名があつて、そのいずれかと思ひますし、また奥永というのは、先程の庄嶋等から近い山鹿市鹿央町千田に奥永というところがあります。このように、地名を辿つていくことができます。その状況を最後の地図に示しました。

あまり時間がないので、急がなければいけません。こういうように、米原から焼け米がでたとか、礎石があるとかといったことが、誰か昔、ここに住んでいた。しかもたくさん米を持っていた人がいたに違いないと考えているところに、他所から長者伝説が伝わつてくると、ここにもそういう長者がいたのだということになつて、その長者伝説を受け入れ、米原長者伝説が成立する。それに伴つて現にある地名などもですね、それに付会して解釈してくる。「羨まし」というのが典型であります。さらには、そういった伝説が定着し

て周辺に拡大して、最初は米原だけが舞台だったのが、どんどん広がっていって、米原長者の田んぼの跡とかですね、あるいは隣の長者と出会つたところだとかというようになつた。それから各地に残つている長者屋布とか、屋布の谷や屋谷跡というような地名はおそらく長者伝説を受け入れてから、新たに成立した地名ではないかなというように考えます。こうなつてくると、ますます伝説はより確かなものとなり、本当にそういう人たちがいたのだというようになつていったと思います。したがつて、上記の地名というのは、さつきの地図で示したような地名は、米原長者伝説の受容範囲を物語るものかなと思います。

実は、こういう長者伝説というのは、全国にあると言いましたけれども、「日本古代の郡衙遺跡」（雄山閣）という、郡の役所遺跡を集めました本等を見ますと、例えば、一つだけ言いますと、水戸市にある、常陸国の那賀郡衙のところは長者山地区と言います。このように、郡衙の跡には、長者という地名が付いているところが多くあります。

同じようにみていくと、奈良文化財研究所が公開している古代地方官衙関係遺跡データベースにより、長者という地名をみていくと、やっぱり駅家だとか、郡衙だとか、かつてそういったものがあつたところが、長者原とか長者屋敷とか、そういう地名になつているのが多くあるということが分かります。全国各地で同じような動きがあつたということがわかるわけです。

#### 四、平城京との比較

次に進みますと、ここは時間の関係でさつと飛ばしますが、平城京と比較します。平城京は七八四年に長岡京に遷って、都としての歴史に一応のビリオドを打つのですが、その後も、ここでは伝説というよりも和歌で知られます。よく知られている百人一首にもあります、「いにしへの 奈良の都の 八重櫻 けふ九重に にほひぬるかな」ですとか、一二世紀に出来た『為忠家初度百首』という歌集の中でも、「すみれ咲く奈良の都の 跡とては いしづゑのみぞ かたみなりける」という、建物の礎石が、都を偲ぶものとして歌われるというようなことがあります。

それから、遺存地名ですが、平城宮跡の中に、「大宮」とか、「大り宮」、「大黒の芝」、これは大極殿からきていますが、こうしたものが地名として残つております。これは鞠智城跡と同じかと思います。ちなみに平城京、奈良の都の跡では、その条坊地割、つまり、都の道路が平城京が都でなくなつた後も、ずっとそのまま残り、現在まで引き継がれているものが多いですね。今の道路からも、平城京を偲ぶことが出来る訳です。

#### 五、鞠智城跡の再発見と調査・研究

そして、次に、鞠智城跡の再発見と調査・研究に移ります。江戸時代くらいから、鞠智城がどこにあったかという検討が進みます。これは焼け米たとか、礎石だとか、地名だとか、こういったものの検討から始まって、二〇世紀になると本格化する。発掘調査も開始されていくわけでありまして、現在では文献史料、地理

的な資料あるいは大宰府との関係など、発掘調査の成果も絡んで、様々な分野から研究が進められ、その研究成果の蓄積をもとに、整備、復元といったものも進められているところであります。

## 六、文化遺産としての鞠智城跡

そして、最後、しめくくりになります。文化遺産としての鞠智城跡ということです。われわれが鞠智城跡をみるときには、まずは、それを米原台地の中で見る必要があります。さらには菊池郡、肥後国、西海道、つまり九州、そして東アジアというように、拡大する視野の中で鞠智城を見ていく必要があります。まことに、それは当たり前のことであって、これまでさまざまに検討されてきました。それからさらには、発掘調査を継続し、その成果と、文献史料、地理資料等、すべてを総合して、それによつて学術的な意義を確定する。それが文化遺産としての価値を高める、鞠智城跡の価値を高めることになると思います。

最後に、今後の文化遺産、鞠智城跡ということですが、感じたことを率直に言わせていただきますと、やはり公共交通機関をなんとかしていただけないかなと思います。大変むつかしいことはよくわかるのですけれども、やはり車がないと行けないということは、人々がそこに行くことを難しくしていますね。毎日ではなくとも、もう少し人々がそこに行って、場を楽しめるというような手段を作つていただけたらありがたいと思います。それからさらには、今日紹介したことからいいますと、米原長者伝説が広がつてゐる範囲、さらには全国の長者伝説の範囲という中での鞠智城というものを語るということが出来ないでしょうか。これ

は活用の方になつてきますが、米原を越えて、全国的な交流が、そういった中で出てきたらしいのかなというように思つた次第であります。

それでは少し長くなりましたが、わたくしの話を終えさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッショ<sup>ン</sup>

## コーディネーター

佐藤信（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部助教授を経て、現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授。専門は日本古代史。

## パネラー

佐藤正知（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官）

吉村武彦（明治大学名誉教授）

館野和己（奈良女子大学特任教授）

木村龍生（熊本県教育委員会）



司会… お待たせいたしました。それでは、パネルディスカッションを開始させていただきます。まず初めに、パネリストの方々をご紹介いたします。

文化庁文化財部記念物課 主任文化財調査官、佐藤正知さま。

明治大学名誉教授、吉村武彦さま。

奈良女子大学特任教授、館野和巳さま。

熊本県教育委員会、木村龍生。

そして、コーディネーターは佐藤信さまです。

佐藤信さまは、東京大学文学部国史学科を卒業され、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了後、奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部教授を経て、現在は東京大学大学院人文社会系研究科教授でいらっしゃいます。今日はコーディネーターを、佐藤信さまにお願いいたします。

本日このあとはコーディネーターの佐藤さまと、四人のパネリストの皆さまにより、「鞠智城跡—その歴史的価値を再考する—」というテーマでパネルディスカッションを進行していただきます。それでは、壇上の皆さま、このあとどうぞよろしくお願いいたします。

佐藤（信）… それでは、約一時間二〇分ですけれども、ディスカッションさせていただきたいと思います。今日これまでに、佐藤正知さんはじめ、吉村さん、館野さんのお話がありまして大変興味深く、幅の

広い、色々な視角から鞠智城が理解できるというお話を伺つてきました。これをどうやつてまとめようかと考えております。これらのお話を踏まえて、これから議論したいと思います。パネルディスカッションに加わつていただいた木村龍生さんは、熊本県教育委員会の職員で、これまで鞠智城の発掘調査を担当されてきて、報告書の作成にも中心的に関わられた方であります。まず最初に、鞠智城の調査・研究の成果について簡単にまとめていただきたい。そのあと、今日の三人の先生のお話を伺つた上での感想も伺いたいと思います。最初に木村さん、どうぞよろしくお願ひします。

木村：失礼します。熊本県教育委員会の木村と申します。よろしくお願ひいたします。まず、鞠智城跡の発掘調査成果についてご説明したいと思うんですけども、今日同封しておりますこちらのパンフレットに沿つて簡単にではございますけれども、説明させていただきます。

まず表紙を見ていただきますと、鞠智城が写つております。古代山城というお城は、本当は山の中腹から上に造るというのが多いんですけども、この写真を見ていただくと分かりますように、鞠智城というのはかなり平坦な部分に造つてあるという点が、古代山城の中でも特徴的なものとして挙げられます。

次に2ページをご覧ください。こちらには古代山城が造られる経緯等が書いてあるんですけども、鞠智城につきましても、白村江の戦いのあとに日本を防衛するために造られたお城の一つということを考えられています。真ん中に「古代山城の分布」という地図があると思いますけれども、九州のち

ようど真ん中ぐらいに鞠智城がございます。地図を見ていただきますと分かることおり、鞠智城というのは、古代山城の中で一番南に造られたお城になります。

先ほど吉村先生のご発表の中でもありましたけれども、大宰府から直線距離で六二キロ、当時の古代官道を使いますと八十数キロの距離がございます。ですので、大宰府を直接的に守るお城、例えば、大宰府が攻撃されたから鞠智城から援軍を早期に派遣するということは厳しいところがございますので、今、熊本県教育委員会としましては大宰府の後方支援基地という位置付けで捉えているところでございます。

続きまして3ページをご覧ください。上のほうに「文献に見る鞠智城」とございますが、先ほどのご発表の中でも、朝鮮式山城と神籠石系山城という二つ、古代山城の種類があるとありましたけれども、鞠智城につきましては文献に記載がありますので、朝鮮式山城の一つと捉えられます。まず最初に『続日本紀』というものに六九八年、大宰府に大野城・基肄城・鞠智城の三城を修繕させたという記事が出てまいります。そのあと百数十年間が空くんですけれども、そのあと『文徳実録』というものにまた登場しますけれども、その時に一つ特徴的なことが、菊池城院という表記に変わってるんですね。

最初に出てきた時は、難しい字の「鞠智」、「くくち」とも読みますが、そういう文字なんですねども、それが、『文徳実録』に登場する段階になりますと、現在の市の名前であります「菊池」とい

う漢字に変わっています。この間に、おそらく何らかの事情があつて文字が変わっているものだと思われます。

『文徳実録』に登場する段階では、菊池城院の不動倉—米倉ですけれども、これが一棟火災に遭つてしまつたという記事が出てきます。これが先ほど、館野先生のご発表にもありました、米原長者伝説につながつた一つの要因になつてるとも思われますし、実際発掘調査しますと、米倉の周辺では、炭化米が今でも大量に出てまいります。ですので、この記事自体が発掘調査でも裏付けられる事実であるということが確認できます。

それと、その下の「鞠智城の位置」という、右下のほうに地図がございますけれども、鞠智城のすぐ南側に古代官道、車路と呼ばれるものが通つております。左上のほうに延びておりますのをたどつて行きますと大宰府まで行きます。それが左上から右下のほうに下りていきますけれども、途中で阿蘇方面と熊本市方面に分岐するという道になつております。鞠智城は古代官道のちょうど分岐する地点を守るような、そういう位置取りをしてる、交通の要所に配置されてるということも重要な点を守る重要な城だと思われます。

続きまして4ページからが発掘調査の成果になりますけれども、鞠智城跡は現在五五ヘクタールの広さがございます。この五五ヘクタールの中に現在七二の建物跡が発見されてるところです。ただ、この七二の建物は同一時期に全て建つていたというものではありませんで、鞠智城が三〇〇年存続し

ていた中で七二の建物があつたということになります。ですので、後ほど説明いたしますけれども、現在鞠智城は大きく五つの時期に分かれておりますが、だいたい一つの時期に十数棟ずつ建物が建つていたということが分かつております。

このほか南側と西側には、版築という工法を使つた土塁が築かれているのが確認されております。それと南側の三カ所に深迫門・堀切門・池ノ尾門という三つの城門跡が検出されております。それと、この地図でいきますと赤い数字が建物の配置になるんですけども、その北側に青く囲つてある部分がありますが、こちらが貯水池跡という、池があつた跡になります。この池の跡が、広さで言いますと五、三〇〇平米ございまして、この中から大量の瓦、土器、木簡、木製品、それと仏像とか、そういうものが出てきております。

あと、建物で特に注目すべきものが、4ページの真ん中に写真がございますけれども、八角形の柱配置をした建物跡が検出されております。こちらが、写真は一軒だけ載せておりますけれども、実際は二軒がだいたい南北に五〇メートル離れて存在しております。それが一度どちらもいったん倒れたか何かして壊れたあとに、もう一回同じ場所に造り直されるということで、合計四棟一二棟が二回で、四棟、八角形の建物跡があつたということが分かつております。

続きまして出土遺物をご紹介します。5ページをご覧いただきたいんですけども、鞠智城跡で出土しました遺物で一番重要なものが、真ん中にございます銅造菩薩立像という仏像になります。写真

を見ると大きさに見えますけれども、実際の大きさは一二・七センチという非常に小型の仏像になります。いろんな仏像の先生方に見ていただきましたところ、その特徴から、当時の朝鮮半島、おそらく百濟で作られたか、百濟の人人が作つた仏像であろうことがいわれております。

その小ささから、念持仏といいまして、携帯型の仏像ですね。おそらく、例えは戦争か何かに行く時にお守りとして自分の身に付けて持ち歩く、そういう仏像だということで、百濟が滅亡したあとに、こういうものを持てるのは貴族、そういう階級の人たちだと思いますので、そのような人が持つて日本にやつて来て、最終的に鞠智城に来て、そこで埋められたか廃棄されたか、そういう結果で、鞠智城で出土したものではないかというふうに考えております。

続きまして真ん中の、仏像の右側にありますのが一号木簡というものになります。こちらが「秦人忍□五斗」と墨書がございまして、お米を鞠智城に納めたということを証明する荷札木簡になります。古代の木簡ですけれども、実は熊本県では二例しかまだ発見例がございませんで、そういう意味でも非常に貴重な木簡ということで紹介しております。

続きまして、もう一つ右側に行きますと、軒丸瓦が載せてありますけれども、こちらの文様から見ますと、やはり百济か、朝鮮半島の影響を受けた瓦といふことがいわれております。その下に土器が、須恵器と土師（はじ）器を載せておりますけれども、これにつきましては右上のグラフも併せてご覧いただきたいんですが、こちらが鞠智城から出土しました土器の数量の変化をグラフ化したものです。

七世紀第3四半期というのがだいたい鞠智城が造られたであろうと考えてる時期になりますけれども、その次の段階、七世紀第4四半期から八世紀の第1四半期、この時期が急激に土器の量が増えてるのが分かると思います。

この時期がどういう時期かといいますと、先ほど、文献の記載に、六九八年に大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を修繕させたという記事があつたと紹介しましたけれども、ちょうどその時期に当たりまして、おそらく修繕の段階で、鞠智城にはたくさん人がやって来て何らかの活動をしていったんじゃないかということを、土器の数量からも見て取れるんではないかというふうに考えております。

ただ、その次の段階がまた面白いんですけれども、八世紀の第2・3四半期になりますと、土器の数がゼロになるんです。これにつきましてはいろんな解釈があるんですけれども、一つは、その時期に鞠智城に人が常駐はしていないと。おそらく城外に人が住んでて、何かあるときだけ鞠智城内に入っていたんじゃないかと考える方もいらっしゃいますし、もしかしたら、この段階で鞠智城はいったん廃城になっていたんじゃないかということを考える方もいらっしゃいますけれども、実際、どういう理由で土器が出ない状況になっているのかはまだつきり分からぬ状況です。そのあとまた新たに土器が出土するようになつて、最終的に一〇世紀の第3四半期頃までは鞠智城は存続していたということが言えると思います。

続きまして6ページをご覧ください。発掘されました遺物、それと、検出されました遺構から見ま

して現在、鞠智城は大きく五つの段階に分かれると考えております。まず鞠智城Ⅰ期としますのが、鞠智城が造られた段階になります。この時期は一番お城として重要な外郭線、土塁跡と城門、それと兵舎と倉庫など、中の施設、そういうものが造られております。お城として最低限の機能を持たせる、そういうものだっただと考えられています。

続きまして、鞠智城Ⅱ期の段階になりますと、写真にもありますとおり八角形の建物跡が登場します。それに加えまして、八角形の建物の北側に細長い建物が、片假名の「コ」の形に配置するというコの字型配置という、よく当時の役所で見られる配置が登場します。ですので、この時期にはお城という機能もあるんですけれども、お役的な機能も鞠智城に追加されたんではないかというふうに考えております。

その次のⅢ期ですけれども、一応、建物跡は存在するんですが、先ほど申しましたように、土器がこの時期ないんですね。ですので、この段階で鞠智城をどういうふうに管理・維持していたかということはまだこれから検討していく必要があります。

続きまして第Ⅳ期、八世紀第4四半期からですけれども、この時期になりますと、先ほどの八角形建物跡やコの字型の役的な配置の建物、そういうものが既になくなつております。米倉が建ち並んでいるような状態、基本的には倉庫群が中心になつてます。この段階の最後のほうに、先ほど文献にも載っていたと言いました火災が発生しまして、鞠智城Ⅴ期というのは、新し

く新たに建て直して、また倉庫がたくさんある状況になるんすけれども、その段階を鞠智城Ⅴ期といいます。最終的に一〇世紀第3四半期頃に、物も出なくなりますし建物もなくなっている、そういう状況になつて鞠智城は廃城するという流れになります。以上です。

佐藤（信）：「ありがとうございました。鞠智城の発掘調査・研究がこれまでたらしてくれた成果を非常に的確に、まとめてお話ししていただきました。こういったことが分かつてきただと自身が、すごい努力の成果だということありますし、そのためには、発掘調査を長年やってきて、それをまとめていただいたということでもあります。また、今日行つてゐるシンポジウムも、お話にありましたように一〇回目だということで、調査や研究の成果を学術的に議論する場、あるいは発信する場をこれまで作つていただきまして、熊本県には感謝したいと思います。

また、先ほど途中でご案内がありましたが、今度、熊本市で開かれる若手研究者の研究助成の特別研究の報告会というものもあります。これまで五名とか、今年は一人少ないみたいですけれども、若手の研究者に研究助成金を出して鞠智城に関する最先端の研究を若い人たちにやつていただき、それを発表していただく。その論文も『鞠智城と古代社会』という、研究紀要に載せて毎年刊行している。この『鞠智城と古代社会』のこれまでの論文は、若手による大変興味深い、いずれもすごく面白い研究です。これらの論文は、ホームページ、インターネットでも誰でも見ることができる。

また、鞠智城の発掘調査報告書も、これまでのものは全部ホームページで誰でも見ることができます

すし、これまでのシンポジウムの成果の冊子も、ホームページでどなたでもいつでも見られます。こういう努力をしていただいたおかげで、今日の古代山城の研究は鞠智城がけん引していると言つていのではないかと思つています。

これまで一〇回もこうしたシンポジウムをやつても、まだ鞠智城という研究テーマには色々な疑問や課題が残っていますし、テーマに尽きないところがある。まだまだこれからも、多方面に調査・研究を積み重ねていく必要がある。その上に、鞠智城の価値というものがより明らかになつていくということだと思います。

そうした歴史的な価値に沿つたかたちで、整備や活用が行われるという方向になつていくと思います。これからバネルディスカッションでは、三つの章に分けてお話をしていくたいと思っています。  
第一章は、いずれの先生のお話もそうだったわけですが、学術的な調査・研究によつて明らかになつた鞠智城の歴史的な価値、あるいは本質的な価値をどこに見るか。鞠智城の価値として、これこそが鞠智城の価値だと思われるものを、ご講演の先生方にそれぞれ話していただきたい、というのが第一章です。

第二章は、それを踏まえた上で、現地に行つたときに、鞠智城の魅力はどういうところにあるかとということをお話しいただこうと考えています。

第三章は、鞠智城のこれから活用とか発信に向けた課題。これから鞠智城を整備したり、活用し

たりする時に、どういうことが求められているかということです。あるいは、鞠智城の場合は特別にこういう点に力を入れたらしいのではないかということを、お話しいただきたい。以上の三章立てで、これからディスカッションしたいと思っております。まず第一のテーマで、鞠智城の学術的な価値、歴史的な価値をどこに見るかということについて、今日ご報告の順番で、最初に佐藤正知さんからお話をいただきたいと思います。よろしくお願ひします。

佐藤（正）：鞠智城は、白村江の敗戦を契機に造られた軍事的な記念物だというところに本質があるかと思います。これは当たり前の話で、何だ、そんなことかと思われるかもしれません、九世紀の半ばに、先ほど木村さんがおっしゃったように、兵庫が鳴動するということが起こりますが、それもまさに鞠智城の軍事的な本質故にそういうような現象が起るのではないかなどと考えます。また、菊池の郡家のほうでは、大鳥が飛び、屋根の葺き草を抜くことがあるんですが、それはカラスだったんでしょうか。鳥の城というのはそういうことかなと思いました。

さらに、河原にあつた車石というのは、まさに私がスライドで説明した軸摺穴のある門礎石のことではないかなと思います。あれをまさに車軸のように見ていたんじゃないでしょうか。別の伝承には姫さまの足跡ということでしたけれども、まさにそういう軍事的な記念物が別なかたちで人々の記憶の中に再生されていく、あるいは変容しつつ、記憶として語られていくといったところかなと思います。軍事的な記念物だということであります。

佐藤（信）… 軍事的な古代の山城としての在り方という際に、何のためのという点は、いかがでしょうか。

佐藤（正）… それは、敵が攻めてくるという状況のなかで造られたものだと思います。のちに大宰府をして大野城、基肄城、鞠智城の修理が実施されています。先ほど官衛的な役割というのが第Ⅱ期に登場してきますので、大野城や基肄城と違う別な性格のものではないかという意見も結構強いんですけれども、私は大宰府にこの三つを総治させた、修理させたということの意味が大きくて、これはやはり対外戦に備えたものではないかなと考えています。

また、高安城が大事だとお話をしましたけれども、これは山城をたくさん築いて国土の中央を守る、そのためには大宰府が一番の前進基地ですから、そこを整備するわけですけれども、今度は国家防衛政策が大きく変わるわけですね。高安城をやめちゃうわけですから。それに前後して鞠智城の総治記事が現れるというのは、大きく鞠智城の持つ意味というか、大宰府を防衛するという意味で大きな役割を担うことになるということで、総治記事は非常に大きな意味を持つてているんじゃないかなと。それは国土防衛の政策の転換の中で造られていくという、そういうイメージを持っております。

佐藤（信）… たくさんある古代の山城の中でも、大野城と基肄城と鞠智城だけが六九八年に修造されて、ほとんどの山城が八世紀の前半ぐらいで機能を失うのに、その三つだけは後々まで機能しているといふことがあるわけですが、その背景として対外的な軍事が重いということですね。軍事の対象としては対外的なということで、隼人政策などはあんまり重くないということですね。

佐藤（正）… そういうふうに考えてます。

佐藤（信）… 分かりました。ありがとうございます。それでは、鞠智城の歴史的な価値、本質的な価値をどう見るかということについて、今日も大変幅広いお話をいただいた吉村さん、お願ひいたします。

吉村… 日本の古代国家がどういうかたちでできたのかを考える場合、特に白村江の戦いで、当時は倭国ですが、倭国と百濟連合軍が新羅・唐連合軍に敗れるわけですね。この敗戦は、日本の古代国家をどうつくるかという点では、非常に大きな出来事だと思うのです。

白村江の戦いで敗戦して、次に壬申の乱という戦い、これは大海人皇子と天智の息子の大友皇子の戦いですが、日本列島内における内乱なのです。つまり、七世紀の後半に、国際的な白村江の戦いで負ける。それから、壬申の乱で国内的な争いがあつたということになります。そのあとは律令制国家の形成ということで、特に兵士制と関係する戸籍を造つたり、兵士を徴発したりということで急速に国づくりが進んでいくと思いますね。

今回の鞠智城というのは、先ほど木村さんが言われましたように、第一期、第二期で、鞠智城が成立して、展開していく様子を示すのだろうと思うのです。ここに国際的な影響がどういう意味であつたのか、考えなければなりません。今ですと、朝起きたらアメリカのトランプ大統領があれこれ言つたとか、北朝鮮の金正恩委員長が何かを述べたとか、すぐに伝わります。しかし、古代では対外的な影響がどのように出てくるのか、なかなか難しい問題です。鞠智城の遺跡の場合、対外的な契機の影

響は見やすいはずではないでしょうか。そうした視点から、歴史的な価値をどのように見ていくでしょうかね。

今では常識だと思いますが、稲作農耕はおそらく朝鮮半島を経由して入ってくる。日本遺産となつた菊池川流域は、米作り二千年といわれ、穀倉だともいわれています。鞠智城も関係していますが、これだけだと歴史的価値はなかなか理解できないかもしれません。今日のパンフレットの一番後ろを見ていただければ、和水町に江田船山古墳という古墳があります。この古墳からは、五世紀におけるワカタケル（雄略天皇）を銘記した大刀がでています。そもそも五世紀における金石文というのは、三点しかありません。そのうちの一つが、江田船山古墳から出土した、銀錯銘大刀（ぎんざくめいたち）なのです。貴重な文字が刻まれている大刀が出土しています。

その後になりますと、装飾古墳館も建てられていますが、装飾古墳です。これは九州のほかには山陰などにもちよつとあります。装飾古墳の中には、船が描かれ、馬がいるという絵があります。青銅器や鉄器が入ってくるのも、船を使って入ってくるのでしよう。日本古代の国づくりにおいて、国際的な契機：学術的用語では国際的契機という難しい言葉を使いますが、日本の文明化に対する国際的な影響を考えるうえで、非常に分かりやすい材料でしょう。そして、白村江の戦いに敗北した結果、鞠智城が造られるわけです。

大宰府というのは、外交施設その他があつた所で、大宰府都府樓とか、大野城、基肄城、あるいは

阿志岐山城などがあります。しかし、その周辺でも、朝鮮式山城といわれていた山城があつたということです。当時の七世紀後半の日本を考える上で、遺跡の持つ意味を、最大限に考えられると思いますね。しかも、朝鮮式山城の中では、大野城と基肄城は歩いて回るのがかなり大変なのですが、鞠智城は比較的低い丘陵地帯にあります。そうしますと、大宰府の大野城、基肄城とはちょっと別の役割をもたされていましたね。やはり日本の古代国家の形成という問題を考える場合、鞠智城が造られたことは、一つの大きなことではないでしようか。

われわれの歴史の見方は、日本の教科書も悪いのですが、ついつい大和中心史観になってしまます。だって教科書を見ると、中央のことしか出てこないでしよう。九州でも同じことで、大宰府だけを見ているようじや分からぬわけです。大宰府だけではなくて、肥後国に鞠智城という施設がある。これはいつたいどういう意味なのか。

さらに稲積城と三野城は、木村さんが言うように南に位置するという説を支持していますが、おそらく稲積城と三野城なども七世紀後半から八世紀初めにかけて造られ、修理されます。やはり律令制国家の形成とか、白村江の大敗を、当時の日本がどのような危機感を持つて、国づくりに励んでいたのか。こういう歴史を理解していくには、非常にいい遺跡ではなかろうかと考えています。

佐藤（信）：ありがとうございます。今日の吉村さんのご講演も、律令国家の確立過程の中で鞠智城を位置付けるというお話をうたうと思います。ちょっと補足させていただくと、「日本書紀」には、有名な

日羅という人物が出てきますが、この人は肥後国の地方豪族でありながら、百済の行政顧問になつて、その人を倭国の政府が自分の所に招請したいという話で出てくるのです。肥後の豪族が半島との関係の中で、外交的に古くからすごく活躍してることとは文献的にも出てくる。また、肥後の古墳の石材が、これは木村さんに聞いたらしいと思いますが、吉備の古墳で使われていたり、結構広い地域まで行っていますよね。よろしいでしょうか、それは、木村さん。

木村：熊本で採れます石材が、例えば五世紀代ですと、岡山の千足古墳に天草で採れる砂岩ではないかという石材が運ばれて、石室の石材として使われています。しかも、それには熊本の装飾文様、彫って円とか三角とかを表現するのであるんですけども、それとほぼ同じような文様まで入つてるということで、非常に注目されています。

それと、六世紀の後半ぐらいになりますと、宇土半島という所で採れます馬門石、通称ピンク石といわれるものがございますけども、これも、例えば大阪府高槻市の今城塚古墳、繼体天皇のお墓といわれる所に運ばれて石棺として使われていることもありますし、もう少し時代が下りますと植山古墳という奈良の古墳、こちらは推古天皇の娘さんでしたか、のお墓にもその石材が使われてるということで、海上を経由した運搬が熊本から岡山とか近畿のほうに行われてるという事例がございます。

佐藤（信）：吉村さん、どうぞ。

吉村：今、日羅のことを言わされましたけれど、これも朝鮮半島と日本列島との関係の一つですね。今は、「歸

化」という言葉を避けて、「渡来」という客観的な言葉を使っていますが、これは半島から列島への行き来です。もう少し広げて、「交流」という言葉もありますが、むしろ「往来」という考え方を取つたほうがいい。つまり、特定の政治的センター同士が結びあうのは「交流」ですが、必ずしもそうでない場合は「往来」です。

特に九州の肥後の肥君氏の活躍を、もう少し考えなくてはいけません。日羅の場合は、大伴氏との関係があります。中央とも関係がある。古墳時代には、さつき言われた阿蘇のピンク石が近畿地方でも使われています。実は、九州から近畿中央部に色々なものが運ばれています。

また、九州地方から朝鮮半島に影響しているものでは、南島とゴホウラという貝があります。それから、朝鮮半島では、豪族が棺おけとして、コウヤマキを使用しています。どうもそれが好きらしくて、かなり日本列島から半島にいっています。ヒスイもいっていますが、一方的に半島から列島に来ただけではなくて、実は、物も人もかなり半島に出ていると。

そもそも、六世紀・七世紀の戦い、戦争には、将軍クラスの参戦は夫婦での従軍だと思っています。『日本書紀』にも、そのように記されています。夫が将軍として行ったら、奥さんもついていく。たまたま『日本書紀』に出てくるのは、夫がひ弱だったので、奥さんのほうが、「あなた頑張りなさい」といつて夫を励ますという記事です。そういう意味から言うと、九州島と朝鮮半島との往来みたいなものもあります。

肥国でいいますと、さつき言つた阿蘇のビンク石は、おそらく有明海経由で近畿中央部に行くのですね。海としては、玄界灘だけじゃなくて有明海も重要です。有明海というと潮の満ち引きがかなりあり、大変なのであまり使つていないといわれますが、そうでもないだろうと思います。木簡に書かれた「秦人」は、向こうから来た移住民だと思いますが、出土した仏像も、向こうから来たものです。往来的な観点を持てばいいのではないでしようか。国家が形成される際、単に一方的な影響を受けただけではないことが、わかると思いますが。

佐藤（信）… 肥後の勢力が半島とも交流しているし、畿内の王権とも交流していたということですね。もう一つ補うと、菊池川流域の米作りの伝統が日本遺産になつていてるわけですけれども、「和名抄」などを見ると、古代の西海道諸国の中で米の生産力が一番高いのは筑前・筑後ではなくて、肥後国なのです。圧倒的に肥後がトップです。ですから、九州の米どころとしては、古代では肥後が最も生産力が高かつた地域である。そういう所に鞠智城も置かれているということかなと思います。次に館野さん、お願ひいたします。

館野… 先ほどの白村江の戦い以降の激しい政治改革というのですか、国づくりを何とかしなきやいけないという中で、戸籍や律令体制というのができあがつたというのは吉村さんのおっしゃるとおりだと思います。そういう危機感の中で鞠智城も出来てきたということだと思うのですが、鞠智城の歴史的価値ということに話を戻すと、なかなか難しいのですけれども、ほかの山城と違うのは、非常に広い

平坦地を中に抱え込んでいる。そして、そこに多数の、七二棟でしたか、もちろん時期は何百年かにわたるわけですが、そういう多くの建物が見つかって長期間存続しているという、このあたりが特に違うなというように思います。

そういう広い平坦地ということですと、これはやや妄想的などころもあるのですが、このパンフレット『鞠智城』の5ページの一番右下でも、貯水池跡から木製品が出ていて、鋤や鍬などがある。鋤は、今風に言えばスコップなんですね。鋤とか、鍬とか、斧の柄などが保管されていたということになつて、これらは建築材を使う際に最終的な加工を施して、工具として使用する予定だったという。何か建物を造つたりする時も、土を掘り返すことが必要なので、そういうことに使われたのかもしれません。が、鞠智城の中は平坦地が広がつていて、谷の地形の所も多い。それから、そこに当然兵士が詰めていたわけですけれども、兵士というのは戦うだけじゃなくて、平時にはほかのことにもいろいろ使われるわけです。

平城宮の中で木簡から兵士が池の掃除などに使っていたことが知られます。平安時代の大野城に關係する史料には、兵士がとにかく使われる。やたらに使われてしんどいんだというような記事があります。戦わない時には兵士をほかの用途に振り向けるということがあるのですね。そうすると、鞠智城というのは米の貯蔵、そこに米を蓄えるという役割も持つていたことと、兵士ももちろん食べなければならないということで、彼らが必要とするもののか、あるいは蓄えるためのものなのか、先ほど

もご紹介がありました、米の荷札がありましたけれども、もしかしたら、鞠智城内でも田畠を作っているということはないのかななど。自給自足みたいなこと、そんなことも考えられないのかなということが、今までの発掘調査で田畠の遺構は見つかっていないと思いますが、今後そうしたものも期待したいなというように思うところです。

それから、もう一つ分からるのは、九世紀後半の記事では、兵庫の鼓や戸が自然になつたと、そういう怪しげな記事が出てきます。当時の歴史書『三代実録』を見ていくと、そういう記事はあちこちに出てきます。特に兵庫が多いような気がします。兵庫の戸が自然に鳴つたとか、兵庫の太鼓が鳴つたとかいうことがあちこちにあつて、占いをすると対外的な危険が迫つてるのでないかといふことで、警備を強化したりということがありますが、当然、太鼓が勝手に鳴つたり、戸が勝手に鳴るということはない訳で、誰かがやっぱり仕組んでいるんだと思うのですよね。

例えば鞠智城だったら、まずは肥後の国府でしょうか、そこから大宰府へ報告するということになるのでしょうかが、誰かが仕組むということは、要するに、何か自己主張してゐるのではないかと。鞠智城側で何か上に訴えたいことがあつて、そういうことを演出するということになつたのかなと思います。それが何なのかというのは、私、分かりませんけれども、そういうような意味合いで、もう一遍こういった記事を見てみると、何か一つの突破口になるのかなと思います。以上です。

佐藤（信）：ありがとうございます。ほかの古代山城にはない鞠智城ならではのものに注目するというこ

とだと思います。貯木場のような貯水池があるのも、日本では他に見つかっていない。朝鮮半島ではソウルの近くの二聖山城にあると思います。また、八角形の建物も、朝鮮半島では高句麗とか、二聖山城などにあると思います。日本では、山城ではここだけですね。鞠智城を考えていく時に、八角形建物がどういう機能を果たしたかということも、まだ完全に解決しているわけではありません。そういうことを考えることでも、鞠智城の特徴を追及することになると言えるのかなと思います。次に、鞠智城の歴史的な価値について、木村さん、最後にお願いいたします。

木村： 私もまた、一番重要なのは古代山城であるということだと思います。これはもう佐藤主任調査官と同じで軍事的な記念物という、そういう本質がます重要だと思います。しかも、それが今のところ日本全国で二二しかないという時点で、もう既に貴重な文化財であるということが言えます。それに加えて、鞠智城だけが持つ特徴というのもやはりありますし、例えば、先ほどから何度も皆さんお話しされてますように、平坦面が広いという、建物をたくさん造つたり、活動ができる広いスペースがあるというのが一つ重要な点だと思います。

これにつきましては、一つ重要な指摘があるんですけれども、実は鞠智城の建物がある部分には古墳時代から集落があるんですね。古墳時代の後期後半、だいたい六世紀の後半ぐらいから、鞠智城が造られるその直前まで、古墳時代から続く堅穴住居跡が十数軒見つかっております。私なんかはもうそれが、鞠智城が造られる前身の施設といいますか、あつたんではないかというふうに考えてること

るがあります。そういうお城って、古代山城は二三城ありますけれども、鞠智城だけなんですね。鞠智城につながるような建物、そういう施設があるということがあります、鞠智城がほかの古代山城と違う唯一の特徴かなというふうに思っております。

あともう一つが、七世紀の終わり頃に、鞠智城の繕治という時期になりますけれども、私はこの時期に鞠智城に役所的な施設が、先ほども言いましたけど、できると言いましたけれども、こういうふうな役所的な機能を持たせる古代山城というのも鞠智城だけなんです。ですから、ほかの古代山城は、例えばすぐ近くに国府という役所が別にできるんですけども、鞠智城に関しては、鞠智城のすぐ近くに国府というのはできないで、鞠智城自身が役所的な機能を追加されると。そういうところがちょっとほかの古代山城とは違う特徴ということで、価値があるといいますか、差別化できるところではないかなというふうに考えているところです。

佐藤（信）

…ありがとうございました。それぞれ、基本的な歴史的な価値、それから、古代山城の中で鞠智城だけが持つ価値について話していただきました。以上が第一章の、鞠智城の歴史的な価値についての学術的な検討であります。これから第二章では、どういうところが鞠智城の魅力、売りになるかということに移りたいと思います。それぞれの方に、鞠智城の魅力はこういうところにある、私だったらこういうところを推すという話を、次にしていただこうと思います。これもまた順番で、佐藤正知さん、お願ひいたします。

佐藤

(正)・鞠智城は古代山城の中では長く維持されるということや、不動倉とか兵庫といったものの存在が確認されるということで、重要なのでありますけれども、私は、それでも資料は少ないので、文献史料はもちろん、発掘の成果も集めて分析しなければいけないし、地元に伝わる伝承も、それから、地元の古文書であるとか、あらゆるものを集めて研究しないといけない。黒板勝美さんが、史跡と遺物は同時に保存されなければならないと言っていますが、それは、史蹟名勝天然紀念物保存法ができる、今から一〇〇年前に話したことが、今、鞠智城において、文化財保護の真価が問われている。あらゆるものを見合して研究していくことで、とても魅力あるテーマなのではないかなと思います。

これは明治大学が進めている古代学研究所、この古代学という枠組みも、吉村先生はそういうことを意図されてこの研究所を立ち上げられているんじゃないかなと思うんですが、まさにその古代学の最大のテーマなのではないかなというふうに思いますが、いかがでしょうか。

佐藤

(信)・ありがとうございます。今日、館野さんから長者伝説の話もありましたし、あるいは地名の話もありました。黒板勝美さんが考えた、文献史料だけから語るのではなくて、遺跡や遺物も含めたかたちで総合的に、今日に残るさまざまな文化遺産全部から歴史を考えるべきだということですね。

ある意味では、そういうことが鞠智城の場合できるのではないか、ということだと思います。今の話も踏まえて、吉村さん、お願いします。

吉村

・ 今日、冒頭で紹介しましたが、井上ひさしの言葉ですね。「難しいことを易しく、易しいことを深く、

深いことを面白く」。結局、こうしたことなどをどう具体化していくか、ということになります。

地域に根ざしてやることを考える場合、たとえば僕が住んでいるは小金井ですが、古代・中世の文字資料はほとんどない。駅は国分寺ですが、小金井の隣が国分寺です。その隣が府中市で、古代の国府があります。国分寺と国府に近接している場所に住んでいます。古代では、「都市型」の街といえましょうか。

今、市川市史の編さんを手伝っていますが、市川には国府と国分寺があります。古代の政事の中心です。具体的に言えば、文字資料は多くの墨書き器が出ています。ただし、下総国の場合、旧国造の政治的拠点という的是市川ではありません。別の所にあります。おそらく拠点から離れた場所に国府が造られた。下総地域には三国造がいたのですが、どうも国造の拠点から離れた場所に、国府を造つたのではないかと考えています。市川の場合も都市型なのです。

鞠智城の場合は都市型ではなくして、「田舎型」といたら怒られるかもしれません。田舎型の魅力をどのように醸し出すのか。最近ではいろいろ工夫されているかと思います。

かつては市町村の通史とか、地域の博物館の地方史を考えますと、日本の歴史を重視して、地域的特色が描かれなかつた時期がありましたね。最近では、それでは駄目だということで、地域に残されたものから日本の歴史を見ればどうなるのか。こうしたプレゼンが意外と難しいのですね。

今、鞠智城の跡は二つの市にまたがっています。ただし、アクセスを見ていただければ分かります

が、今一つです。皆さん、旅に出ようとすると、温泉があることに注目しますよね。これは悪くはないし、鞠智城周辺にも温泉があります。古代史ファンですと、最初に見たいのは、装飾古墳や江田船山古墳だと思います。こういう場所と何とかつなぎ合わせれば、鞠智城の魅力もさらに増していくのではないかでしようか。つまり、学術的な価値だけではなく、もう少し歴史と自然との魅力を引き出せるんじゃないかと思います。しかも、鞠智城は二時間もあればだいたい回れますし、自然も満喫できます。ほかの基肄城なども、実はアクセスが悪いのですが、一般的に山城というのはアクセスが難しいのですね。

鞠智城の場合は、確かに館野さんも言わされました、熊本空港からレンタカーを借りて回るのが一番いい。できましたら温泉に泊まってもらって、温泉に浸りながら疲れを癒やすのがいいようになります。ですから、魅力はいっぱいあるように思います。これを教育委員会の人も含めて議論し、どう面白く、どう古代を追体験できるようにしていくか、というところに尽くるかなと思います。

ただ、鞠智城の場合には、熊本県立装飾古墳館の分館扱いなのですが、温故創生館という施設があります。また、近くに装飾古墳館があつて、ここもなかなか面白い場所ですし、温故創生館を通じて、主体的に学ぶ条件にできるのですよね。それをどう地元の方が導いてくれるのか、ということです。たとえば東京から、どうして訪れるのか、もう少し工夫してくれればいいかな、と思います。

熊本交通センターから菊池温泉行きバスで約六〇分と言わっても、熊本交通センターがどこにある

かよく分かりません。熊本駅前だと約七五分と書かれていますが、遠くてがつかりしますよね。ということがあるので、アクセスの方法とか、あるいは鞠智城だけではなく、一日かけてどこを回るのか、親切さがほしいですね。終わつたら、温泉に泊まつて美味しい幸をほおばるとか、こういうかたちにしてもらうと、歴史的な魅力が増しますね……。

やはり、ある程度ストーリーを作つて魅力を感じてもらわないと駄目みたいで、そういう、もう少し歴史的な魅力を交えたストーリーを作つて、一日ここで過ごしてもらっプランがあればと思います。

昔、われわれの若い時代には、新婚旅行というと阿蘇とか別府とかに行きましたよね。レンタカーを借りて回つた方もおられましたが、その辺をちょっと掘り起こすようなことはできないでしょうか。鞠智城には、温故創生館のような学習施設もありますので、もう少しこれを生かして、魅力作りをしてほしいですね、どうして行くかが難しいですから、歴史的魅力を作つていけば、訪問者も多くなるんじゃないかと思います。ですから、周辺地を含めて歴史的魅力を語つていくストーリーがいるかな、と思っています。

佐藤

(信)：これまでの話でも、鞠智城が色々な交通の要所であつたり、様々なネットワークの中で位置付けられます。アジアとの関係があるし、大和王権との関係もあるし、大宰府とももちろん関係あるわけです。あともう一つ。東北の多賀城という古代の城柵に行くと、多賀城駅前に地元のまんじゅう

屋さんの看板があつて、それに天守閣が描いてあるんです。多賀城まんじゅうに。古代のお城には天守閣はありません。天守閣は近世になつてからのもので、熊本城にはあるわけですけれども。ですから、やはり古代の城を訪れる方には、古代の城はこういうものだということを知つていただきたいなと思うのです。こういうものが古代の城であり、古代の城は近世の城郭と違つて、こういうものであつたのだと。今、吉村さんの話が第三章の領域にも入つていましたが、古代の山城、あるいは鞠智城でストーリーを作るとしたら、どういうストーリーになるかという点では、吉村さん、いかがでしようか。

吉村： 急に言われてもなかなか難しいのですが、この時期、具体的には七世紀後半から八世紀初めは、人の一生に例えると、日本の青春時代ではないかと思つています。そうしますと、どういう国づくりをめざしたかということですし、そこでどういうインパクトが多かったのか。

直接には関係しませんが、皆さんは当然戸籍に入っています。学生時代に、最初に籍帳を考えた時、戸籍なんかどこの国にもあるように思つていました。しかし、戸籍がある国は、古代とも関係しますが、中国、朝鮮、日本ぐらいでしようか。確かに、中国の周辺諸国しかないのですね。こういう戸籍が、日本では古代から伝わっている。そして、太宰府市の国分松本遺跡からは、戸籍に関係する木簡が出ています。

ちょっと難しいのですが、日本の国づくりと関係させて鞠智城のストーリーを作つて、来てもらう。夜は温泉に入って、また鞠智城のことを思い出してもらう。これがいいのではありませんか。

佐藤（信）…あと、おいしい料理もない駄目かもしません。次に館野さん、お願ひします。鞠智城の歴史的な魅力について。

館野…もう今、吉村さんが、私が三番目に活用でしゃべらうと思つてたことをほんと言われてしまつて、あとでどうしようかと思つてたんですけど。鞠智城の魅力としては、先ほど歴史的価値のところでも、非常に広い平坦地が広がつてると言いましたけど、こういうふうに見渡せる、パンフレット「鞠智城」の表紙にもありますように、見渡せるというこの景観自体が魅力じゃないかなと思っています。一部復元もされますので復元建物、あるいは礎石が並んでる所、土壙線、あるいは貯水池の跡とか、こういうものが見渡せる。

例えは4ページの鞠智城跡全体図というのをご覧いただきますと、西側土壙線という赤い線が書かれている所の真ん中辺りに、灰塚と呼ぶ所があります。これはちょっと独立した丘陵というか、山の頂上になつてまして、ここに行くと非常に眺めがいいです。東側を見れば長者山とか、長者原とかの鞠智城内が見えますし、それから、西のほうを見ますと、今度は裏表紙の、鞠智城のマークから左斜め上のほうに四～五センチ行つた所に、不動岩展望所というのがある。不動岩という、高さ八〇メートルもある大きな岩が、そそり立つてゐる景色も見える。灰塚からの眺望というのは大変な魅力ではないかと思うところです。

ちよつと思い出しましたが、ソウルから南のほうへ行つた所の南漢山城という、ソウル近郊の山城

へ行つたら、大勢の人がいるんですね。山城ですから山の中なのですが、そこは結構歩くとか、トレッキングとか、そういう聖地になつて大勢来られているのですね。ですから、鞠智城も、平坦地もあり、ある程度のアップダウンもありということで、そのようなことにも使えるのではないかなど思います。そのためにもまたアクセスが大事になつてくるのですけど。

それからまた、私がちょっととご紹介しました米原長者伝説といったもの、これもそういうものがあるということ自体、一つの魅力だと思いますので、その活用ということでも魅力アップにつながるのではないかと思います。以上です。

佐藤（信）：ありがとうございます。確かに、鞠智城で灰塚に登れば、誰でも感激すると思います。おそらく当時の人も灰塚に登つて同じような景観を眺めたと思います。そういう歴史的景観が今も残っている。ふもとの平坦地には条里制の水田の遺構も結構残っていますし、車路という名前が残っているような古代の官道の跡も一応推定されている。そういつた景観的な魅力みたいなものは、歴史的な意味とプラスして大きな価値を構成すると言つてもいいかも知れないと思います。それでは木村さん、歴史的な魅力についてお願ひします。

木村：四番目だともうだいたい皆さんに言い尽くされてるところがあるんですが、ちょっとかぶるんですけど、私も一つは灰塚という地点をお勧めします。こちらに登ると、天気がいい時、3ページの下の写真に載っていますけども、長崎県の雲仙・普賢岳がはっきり見えたり、三六〇度すごい見晴らせる地

点になつております。

ちなみに灰塚という地名の由来ですけども、ここがのろし台だったんじゃないかなという説がござります。そののろしを上げる時に出る灰がたまつて塚になつたので灰塚じやないかといういわれがございます。ただ、発掘調査したところ、特に何も出なかつたというふうに聞いています。

あと鞠智城の魅力といいましたら、やっぱり建物等を若干ですけど復元してあるのがあるかと思います。特に八角形の建物等は、実際こういう建物だったかという問題はちょっとあるんですねけれども、やはり実際現地に来ていただいて見ていただくとかなり迫力があるものになつてます。ただ、来る方の大半は、これが天守閣かと言つて見て帰られる方が多いので、われわれが外にいる時は、古代の山城には天守閣というのはないんですよとちゃんと説明しますが、その辺の工夫は今後していく必要があるかと思つております。以上です。

佐藤

(信)… ありがとうございました。多賀城と同じようなことがあつたのかとちょっと思いました。それでは、最後の第三章で活用に向けてのご意見をいただこうと思います。すでに第二章の中で踏み込んでお話しいただきましたが、簡潔にお話ししていただこうと思います。今度は一番最初に木村さんにお尋ねしたいと思います。鞠智城は、写真にありますように若干の復元建物があつたり、園路も整備してあるわけですが、現在どういう整備がされていて、どういう活用をしてるかということについてご紹介いただきますとともに、普段考えておられる課題がありましたら、お話しいただきたいのです。

木村・

現在、平坦面の部分、長者原という地区になりますけど、こちらにつきまして芝生広場にしており、建物跡につきましては四棟を復元しております。そのほかの建物につきましても、この写真を見ていただくと白い四角になつたりすると思いますけども、建物があつた場所を表現してることになつております。そのほか城内くまなく散策できるように園路を設定したり、あと、部分部分に椅子やベンチ、あと休憩所とかを設置するというかたちで整備を進めさせていただいているところです。

今後も整備を続けていく予定で計画を立てているんですけども、新しく作った計画で大きくなつて課題がござります。一つは復元した建物です。2ページの下に、こちらに三つ建物が建つて写真があると思います。八角形の建物と米倉と兵舎三つなんですねけれども、実はこれを復元した平成一年までの間には、この三つの建物は同じ時期のものだと考えて復元してますけれども、現在、新しく報告書を作る段階であらためて精査しましたところ、この三つの建物が同じ時期のものではないという結論になつております。

これで言いますと一番左の長屋風の兵舎が一番最初の時期に建つてまして、その次が奥にあります八角形の建物、手前にはあります米倉につきましては鞠智城IV期という時期の建物ということで、ほんとは同じ時期にあつてはならない状況になつてるので、こういうものを今後どういうふうに整備して、見学に来られた方に説明して見せていくかという、そういうことが今、整備の課題として一つ挙げているところです。

もう一つが、これは鞠智城のメリットでもあるけどデメリットにもなるんですけども、鞠智城は、レンタカーを使っていたらしく、一番最初にお城の中核の部分に来ることができるんですね。来てから建物を見て、資料館を見て、隣に物産館もありますので、そこに寄つてそのまま帰るという方が多いんですけども、やっぱり山城ですので、ほんとは土壘ですとか城門跡、その辺もじっくり回りたいっていう方もいらっしゃるんです。ただ、その城門や土壘にアクセスするためには、この駐車場に車を置いて歩いて二〇分とかでようやく到達するんですけども、まだ実はその辺りの整備が進んでおりませんので、あまりじっくり見ることが出来ないということがあります。

それに比べてほかの山城ですと、例えば先ほどから名前が挙がっております岡山県の鬼ノ城ですと、実は外郭の石垣を一周三時間とかで歩いたり、そういうふうにできますので、その辺の鞠智城の整備を今後進めていく必要があるところかなということで考えております。

佐藤（信）　ありがとうございます。あと、三人のご講演の方も現地に行かれていると思いますが、今後の活用についてのご意見を順番に、今度は佐藤正知さんから、お願ひいたします。

佐藤（正）　活用ということで言えば、古代山城サミットというのが毎年やられており、注目しています。先ほどの、館野先生がご紹介された長者伝説に関連して申し述べれば、あそこでは米原長者は負けてしまったわけです。金をたくさん集めたけれども、男子がいなかつたと。その話は今じゃとても通用しない話です。今、男女共同参画社会ですから男も女も分け隔てなくやってるわけですが、そこで

大事な伝承は、人だということだと思いますよ。つまり、山鹿、菊池、それから熊本県の方々がここを中心にいかに入づくりをしていくかということが大事なんじゃないかなと。それをすれば米原長者、あるいは○○長者にも負けない遺跡になるのではないかなということを思いました。

私は、わが国の思い出係でありますから、一言付け加えると、生き物係と思い出係という、自然と文化を相手にする仲間が一緒の法律でやつてるんです。これは世界にはないんです。世界では自然遺産と文化遺産って大きく二つに分けるんですけども、われわれは幸いそれを一つの法律でやつています。それがこの古代山城の魅力でもあるわけです。どこからどこまでが自然で、どこからどこまでが文化的なんだっていうものじゃなくて、山城っていうのは自然と文化が一緒になった記念物なんじゃないかなと思いますので、そういう点でも非常に面白いものではないかというふうに思つております。

佐藤（信）立地としての菊池川との関係もあると思います。ありがとうございます。吉村さん、お願いします。

吉村：熊本の方は小学校、中学校の遠足で鞠智城に来られるかもしません。しかし、それ以外の人が、どういうかたちで行くのか。特に関東圏なんかから行くのは、近くの国府や国分寺に行くのとは違いますね。館野さんも言われましたが、トレッキングつというか、歩くことを意識したストーリーも作ればいいのではありませんかね。

東京の方では、たとえば東海道だけではなく、いろいろな所を歩くというのが盛んなようです。僕もつい最近、神奈川の長柄桜山古墳を見に、逗子市にある丘陵を歩いてきました。道がかなり整備されていますし、帰りに逗子市郷土資料館になつて、実業家の別邸を見学してきました。そういう場所には、写真も展示してありました。

さきほど木村さんが言われましたが、歩くコースみたいなのも整備していかないと、見学には分かれづらいと思いますね。考古学研究者ではありませんが、城門を造るなど具体的に分かることが必要ですね。周辺には古墳もみられますし、歴史を体験できる展示があればいいですね。

それと大宰府、あるいは全国の古代山城と提携する。すでに山城サミットをやっておられるかもしれません。国府サミットとか、国分寺サミットというのがありますが、それなりに盛んなようです。あちこち訪問するのも楽しいですが、鞠智城としても何年に一回かはサミットのような催しを誘致されて、鞠智城周辺とタイアップしていく。相乗効果が出るように思うのですが。装飾古墳の見学といつても、すぐ行って見られるということではありませんよね。公開日というのが春とか秋とかになつているかと思いますが、そういうイベントを含めて見学できるようにすれば、いいのではなかろうかと思います。

もう少し大きな話をすれば、JALとかANAとかと提携して、鞠智城ツアーとかやっていけば、一泊二日とか、二泊三日で鞠智城と熊本を回つていけるのではないかでしょう。

九州だとJR九州が列車観光を行なっていますね。高額なので、われわれ年金生活になると無理ですから、もう少し気楽に行けるツアーがいいですね。JAL・ANAを利用する、鞠智城、あるいは装飾古墳を回るツアーをやっていただく。そういう時には、公開日じやなくとも、見てもさしつかえない装飾古墳をガラス越しに見られようにしていただければ、いいのではなかろうかと思つたりします。

佐藤（信）：ありがとうございました。館野さん、お願ひいたします。

館野：ダブルどころもあると思いますが、アクセスをよくしていただくことと、近辺に、今おつしやったような装飾古墳たとか、江田船山古墳だとか、魅力的な遺跡がいっぱいあるわけですから、そういうものと一体となつた活用というか、回るというようなルートを作つていただくとか、あるいは、私のお話の中でさせていただきましたように、長者伝説を使う。どうしたらいいかはすぐには分かりませんが、米原長者もいれば、その近くに駄の原長者もいるし、結構近くにいろんな長者がいたようでありますから、熊本県内長者サミットも出来るのではないかと。あるいはもう少し広げて九州の範囲とか、いろんな部分でできるのかなと思います。

それから復元ですが、なかなか難しいです。今、八角形の鼓楼として復元していますが、ほんとにそうなのかという、そういう意見は今もあるかと思います。ですから、復元するということはもちろん一つの、遺跡を知つてもらう方策ではありますけれども、それ以外にもいろんな方策はあるのでは

ないかと思います。最近だとCGを使つたようなものがあつたりとか、福岡県古賀市の鹿部田淵遺跡では、アクリル板でしょうか、透明の板があつて、そこに絵を描いており、板の前に立つて見ると、向こうには掘立柱の建物があることが実感できるなどという例もあります。あるいは、出雲では、出雲大社をどう復元するか。遺構として見つかった大社の建物をどう復元するかという問題で、出雲歴史博物館へ行くと、人によつて復元案が違うので、五つぐらい模型が作られているのですよね。これもお金がかかることがありますけれども、そういうような手もある。一つ復元建物を造ると、平城宮の大極殿でもそうですが、ああいうものだつたと皆さん当然思つてしまふのではないかと思うのですが、一〇〇% そうではないのです。何十%かは今復元したような姿だつたかもしれないけど、そうでなく違う形で復元できる可能性も、何十%かはあるのですね。ですから、こういうような復元案もあるというような、そういうバリエーションを理解できるような工夫というのも、必要ではないかと思います。以上です。

佐藤

(信)：ありがとうございます。鞠智城には温故創生館という大変立派なガイダンス施設があります。

そこに活躍していただけて、訪れた方が、古代の山城とはこういうものだということを理解していただく。ほかにも日本列島には古代の山城がありますけれども、鞠智城はわりと条件がいいと思っています。それで、八角形の「復元」した鼓楼を見て、これが天守閣かということがないようになると大変ありがたい。他にも、体験学習などもやつていただきて、古代の戦いはこういうものだつたという

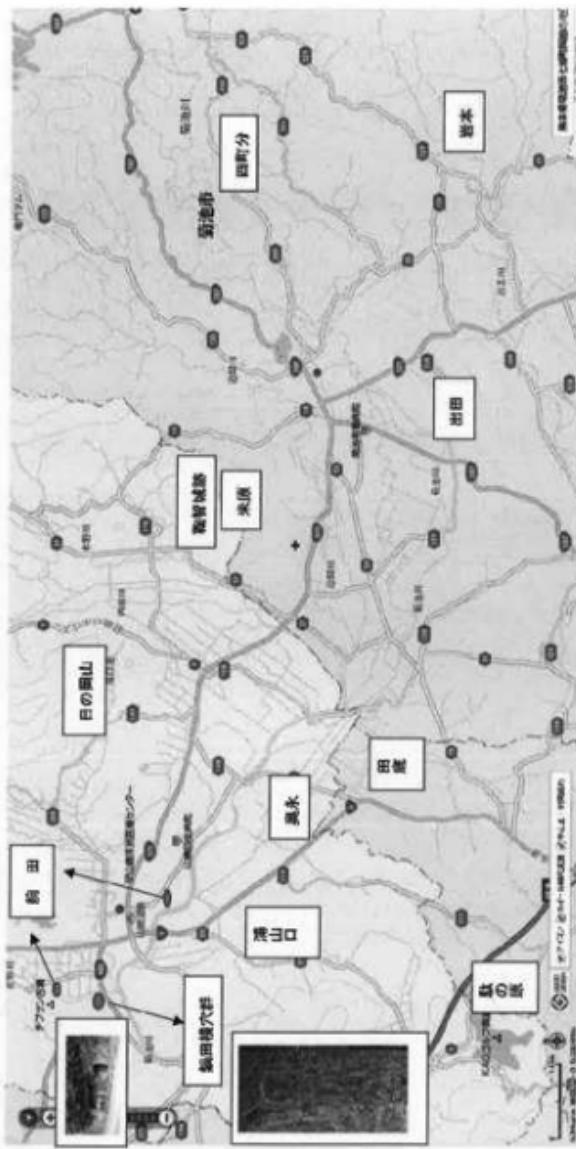
ことも含めて、理解してもらえるようになるといいですね。

私、今伺うと、サインだとか説明板が圧倒的に少ないのではないのかなだと思います。一人で歩いても分かるようになるといいなと思います。もう一つ、今はボランティアガイドの方はいらっしゃるでしょうか。木村さん。

木村：　はい。

佐藤（信）：　そういう地元の市民の方の協力も得ながら、鞠智城の歴史的な意義というものが市民にも分かるようななかたちで伝わるようになるといいなと思います。もうここで時間が来てしまいましたので、進め方の不備についてはおわび申し上げますが、これで今日の「鞠智城・東京シンポジウム 鞠智城跡－その歴史的価値を再考する－」を閉じさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

図3 米原長者伝説の広がり（マピオン地図による）



江戸時代の森本一瑞『肥後国誌』(明和9(1772)年)、渋江公正『菊池風土記』(寛政6(1794)年)などに始まり、20世紀に本格化（坂本經堯「鞠智城跡に擬せらるる米原遺跡に就て」(1937年、「肥後上代文化の研究」1979年に所収)など)

#### 発掘調査の開始以後

1967～1970年の熊本県教育委員会による学術調査が嚆矢

→72棟の建物跡、3カ所の門跡、貯水池跡、土壘線など検出

1959年、県指定史跡「伝鞠智城跡」→1976年「鞠智城跡」→2004年、国指定史跡に

文献史料や地形・交通路、大宰府との関係など、多岐にわたる論点からの研究蓄積  
遺跡の整備、建物の復元など進む

#### 6 文化遺産としての鞠智城跡

##### 鞠智城を見る視覚

米原台地周辺 →菊池郡 →肥後国 →西海道 →東アジア、の中での鞠智城

##### 発掘調査の継続と、文献史料・地理資料などの総合研究

→学術的な意義の確定 →文化遺産としての価値を高める →整備もそれに基礎を

##### 今後の鞠智城跡

公共交通機関の整備 →アクセスを容易に →近辺の遺跡との連携

米原長者伝説の範囲、さらには全国の長者伝説の中での鞠智城を語る

→米原を越え、全国的な交流も



図3 平城宮跡内の小字名

(奈良女子大学古代学学術研究センター

#### 4 平城京との比較

和銅3(710)年3月	藤原京から平城京へ遷都
天平12(740)年12月	恭仁京へ遷都
天平17(745)年5月	甲賀宮(紫香楽宮)から平城京へ還都
延暦3(784)年11月	平城京から長岡京へ遷都
延暦13(794)年10月	長岡京から平安京へ遷都
大同4(809)年12月	平城上皇が平城宮に移る 一遷都後も施設の一部は残る
天長元(824)年7月	平城上皇死去 一平城京の歴史にピリオド。以後、水田化進む

#### 和歌に詠まれる

『詞花集』春・29

一条院の御時、奈良の八重桜を、人のたてまつりて待りけるを、そのおり、御前に待りければ、その花をたまひて歌よめと仰せられければ詠める 伊勢大輔いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふ九重に にほひぬるかな  
「伊勢大輔の歌以降、その影響のもとに、(中略) 奈良の八重桜をとりあげる歌が多く詠まれるようになった」

\* 一条天皇：在位986～1011、1011没、伊勢大輔(～1060年)

『為忠家初度百首』(藤原為忠主催の百首歌、長承3(1134)年頃成立)

古砌蘿葉 (源) 仲正

すみれ咲く奈良の都の跡とてはいしづゑのみぞかたみなりける(110)

「すみれが咲く奈良の都の跡としては、礎石だけが旧都をしのぶよすがなのであるよ、の意」「平安後期に至ると、類型を打ち破った目新しい表現を模索する気運が生じ、それまで和歌に詠まれてこなかった語句や題材を取りこんで歌を詠むことが盛行する」

岡崎真紀子「旧都の礎—平安後期と歌に見る平城京」奈良女子大学古代学  
学術研究センター『都城制研究(10)』(2016年)

#### 平城宮跡の遺存地名(図3)

「大宮」「東大宮」「大り宮」

「大黒の芝」—「大極殿」(関野貞『平城京及大内裏考』(1907年))

#### 遺存地割

平城京の条坊地割は、廃都後も存続 一現存地割に平城京の痕跡

#### 5 鞆智城跡の再発見と調査・研究

浦山口：山鹿市鹿央町岩原

前田千町：山鹿市石と山鹿市山鹿に前田地名あり

奥永千町：山鹿市鹿央町千田奥永

庄崎・土用月・川崎はいずれも奥永の東、山鹿市鹿本町中川のバス停名にあり

焼米の出土・礎石の存在 一口碑情報の伝来 一焼米・礎石などと結びついて受容  
一米原長者伝説の成立 一地名などの付会的解釈 一伝説の定着 一周辺への拡大  
新たな地名の誕生も（長者原・長者山・長者屋敷など）一伝説はより確かに  
上記の地名は、米原長者伝説の受容範囲を物語るか

#### 長者伝説の広がり

板橋蓮「高山掃部長者伝説焼米出土遺跡」『岩手大学学芸学部研究年報』第16巻第1部（1960年）によると、当時の焼米の出土事例は21件、うち5例は長者屋敷跡

条里制・古代都市研究会編『日本古代の都街遺跡』（雄山閣 2009年）によると、

台渡里庵寺跡長者山地区（茨城県水戸市）：常陸国那賀郡街

長者ヶ平遺跡（那須烏山市：下野国芳賀郡街 焼米出土、八幡太郎義家の長者屋敷  
焼き討ち伝説の地

長者原遺跡（横浜市青葉区）：武藏国都筑郡街 菊田村に長者が住んだ長者丸地名

奈良文化財研究所古代地方官衙関係遺跡データベースによると、

遊賀駅家推定地（山形県最上郡舟形町長者原）：遊賀駅家

清水台遺跡（郡山市）：陸奥国安積郡街 虎丸長者伝説あり

郡山台遺跡（二本松市杉田字郡山台・長者宮）：陸奥国安達郡街

長者山遺跡（日立市）：常陸国蓬島駅家カ、別院倉庫

長者屋敷遺跡（常陸太田市）：寺院、集落、駅家か久慈郡街

今池遺跡（上越市）：越後国府か国司館 長者原周辺。本長者原庵寺と間違か  
長者川遺跡（羽咋市）：能登国羽咋郡街か

長者屋敷遺跡（磐田市）：豪族居宅か郡衙館別院

伊勢国府（長者屋敷）遺跡（鈴鹿市）：伊勢国府

長者原遺跡（鳥取県西伯郡大山町）：伯耆国汗入郡街正倉か正倉別院か奈和駅家

長者屋敷遺跡（鳥取県西伯郡伯耆町）：伯耆国会見郡街正倉カ

福原長者原遺跡（行橋市）：官衙

五万長者遺跡（雲仙市）：肥前国高来郡街か高来郡寺

長者屋敷官衙遺跡（中津市大字永添字長者屋敷）：豊前国下毛郡街正倉 などあり

坂口で出会った。米原長者には1人の男子もなく、金銀よりも男子が多いことが浦山し（羨まし）と言ったので、そこを浦山口という。と言う。…④  
これらの僅説は一笑に堪えないが、遅く老農の伝える話なので、記して万笑に備える。

『菊池風土記』(渋江公正 宽政6(1794)年) 卷1

長者屋敷

一 米原村に有。米原長者の遺跡と云。鳥の城と唱へたる由。長者の姓氏時代しれず。名は孫三郎と云たる由。俗説に前田千町、奥永(今玉名郡庄崎・土用月・川崎辺ヲ云)千町を有てりと云。涼殿・玉屋殿・月見櫓・藏床、今其跡有。藏床と云ハ、俗不動倉の跡を長者に傳会するなり。

\* 庄崎・土用月・川崎：いずれも山鹿市鹿本町中川のバス停名にあり

鈴木元(熊本県立大学文学部)「『菊池風土記』卷一註釈」(同氏のHP「地域文化研究の部屋」)による

米原長者伝説は、日本各地に残る長者伝説(「長者屋敷」①③、「炭焼長者」②、「宝競べ」④)と同工異曲一この地で生まれたものではない

(柳田國男「辞書解説原稿」『定本 柳田國男集 第26巻』(筑摩書房 1964年)) 参照

それが定着するにあたって、鞠智城跡の遺構や近辺の地名などが取り入れられる

「通例の形は二人の長者が地を接して住み、一方は米俵を堤に築き、又は金銀を路に布いて、それを踏みながら出会いしたところが、他の一方はただ十二人の男を引連れて出て来た。これより以上の實は、この世の中にはあるまいと、一方の子を持たぬ長者が、初めて人生の寂寞を感じたといふ風に語つて居り、肥後ではその口碑を受け入れ易くするために、浦山といふ地名を援用した伝説もあつた。」(柳田「宝競べ」322頁)

遺構等：涼ノ殿、月見櫓、玉屋敷、藏床、長者の鐘掛松

出土物：团粉土(禹余糧)、焦米の砂

地名・地物(図2)

出田村：菊池市出田、米原：山鹿市菊鹿町米原(長者原地区)

四町分村(長者屋敷)：菊池市四分町

一岩本村(屋布の谷)(菊池市旭志井利岩本) 一米原村へと移動

河原の車石、出田村付近の屋布跡

菊池谷、山鹿郡茂賀ノ浦、田底：熊本市北区植木町田底

山鹿郡日ノ岡山：鞠智城跡の西北方、山鹿市蒲生と下内田の境界が走る

踏切の崖の婢女像：山鹿市鍋田東の鍋田横穴群の人物像か

仮名は孫三郎。涼ノ殿、月見櫻、玉屋敷、藏床などという旧跡あり。藏床は四方に土居あり、中に礎あり。近辺に礎石だとして大石多かったが、近世耕作の妨げとして、半ばは地中に埋めた。一石には長者の姫の足跡あり。また長者の鍾掛松というのがあったが、近年大風で砕けた。この辺には团粉土あり、禹余糧である。また焦糞の砂があり。…①

里俗に言うのは、昔ある公卿の娘は美しく、常に泊瀬の観音を信仰し、参詣していた。娘が16歳になったので、父母は結婚先を探すが、娘は大悲草（=観音）を信じると必ず感應があるので、7日間を限って仏意を聞き、それに任せたいと言う。参籠して祈ると、観音が夢で「汝の夫婿は肥後国菊池郡の賤夫である孫三郎である。早く下れ」と告げる。娘は過世の拙きを悲しむが、父母の許しを得て、婢女10余人を連れて都を出て菊池郡に来て、出田村の辺りで籠（=籠）を作つて生計を立てていた孫三郎に出会い、夫婦の約束をしてここに移り、富有の身となり米原長者と号した。

一説には、清水寺の觀世音を信じていた16歳の娘が、清水寺に通夜したところ、夢で観音が「汝の夫婿は肥後国菊池郡四丁分にいる熊郷小三郎という者である。これに嫁せば、福寿は意のままになろう」と告げる。娘は四丁分に到り貧しい小三郎に事の由を語り、夫婦の縁を結ぶことを求める。小三郎は驚き、自分の貧しさを語る。娘は娘から金2両を出し、今夕の食事を買って来るよう頼む。小三郎は出かけたが、戻ってきててしまう。その理由を聞くと、下の谷まで行って川にいた鷺を捕らうと金を投げたが、逃がしてしまったと言う。娘は驚き、どうするのかと言うと、小三郎は、これ（金）はわが屋敷（やしき）に多くある理であると答える。そこで鎌で家の裏の土を掘ると、黄金が大量に出てきた。そこで夫婦になり、家は富み栄えた。その跡は、今四町分村の長者屋敷である。その後、岩本村に移り住んだ所を屋敷の谷と言う。その後米原村に移る。河原にある車石という石は、長者の財宝を車に積んで岩本に移る時に、路傍の石に車を引っかけ輪が折れた所である。出田村の辺りにも屋敷跡というのがある。…②

また里老の説に、用明帝の時に富饒の者が朝廷から長者号を賜り、米原長者と号した。奴婢・牛馬1000余を有し、菊池谷から山鹿郡茂賀ノ浦まで、田底3000町を耕作した。毎年1日で田植えを種えていたが、ある年漸く半分終わったところで、日は西に傾いた。長者は金の扇で招き返したが、なお終わらなかった。長者は油樽3000を出し、山鹿郡日ノ岡山に灑いて火を付け、その光で田植えを終えたところ、その天罰でその夜火輪が出て屋宅・倉庫は尽く焼けた。それ以来、火ノ岡山は焦土となり、山石黒く木は茂らず。その時星飯にした团粉は焼土となり（禹余糧である）、藏に蓄えていた米穀は焼けて砂のようになって今にある。耕作の道は踏切という切通しである。星飯を運んだ婢女10余人の像が踏切の崖に残っている。…③

かつて長者は山本郡の駄ノ原長者と財宝比べをしようと、米原から茂賀浦の坂口まで、田底3里に黄金の踏石を敷いた。駄ノ原長者は男子24人を連れて来ただけで、彼らは

(前略) 大宰府宮、去五月一日、大風暴雨、官舍悉破、青苗朽失。九國二嶺尽被損傷。又肥後國菊池城院兵庫並自鳴。同城不動倉十一宇火。(後略)

『三代実録』貞觀17(875)年6月20日辛未条

大宰府宮、大鳥ニ集肥後國五名都倉上、向西鳴。群鳥數百。唯抜菊池都倉會葦草。

『三代実録』元慶3(879)年3月16日丙午条

(前略) 又肥後國菊池郡城院兵庫戸自鳴。

#### 発掘調査からみた施設の状況

土塁で囲まれた面積約55ha(内城地区)

掘立柱建物・礎石建物・倉庫など72棟、門、貯水池など検出

時期区分: 成立→整備・改修・改変…存続→終焉

矢野裕介「鞠智城跡の調査と成果」熊本県教委『鞠智城東京シンポジウム2014

成果報告書』2015年による

I期: 7世紀第3四半期～第4四半期

城門・土塁・掘立柱倉庫・兵舎・貯水池

II期: 7世紀末～8世紀第1四半期前半

コの字型の「管理棟の建物群」・八角形建物・倉庫群 一施設が最も充実

III期: 8世紀第1四半期後半～第3四半期

小規模な礎石建物出現

土器の空白期間

IV期: 8世紀第4四半期～9世紀第3四半期

「管理棟の建物群」なくなり、貯水池中央部の埋没開始

大型礎石の建物 →食糧などの備蓄機能が主体に

V期: 9世紀第4四半期～10世紀第3四半期

建物数減少、大型の礎石建物 →食糧の備蓄機能存続

#### 2 鞠智城の終焉以後

10世紀中頃には終焉を迎える

施設の廃棄・破壊 →遺跡化 →忘却

回想

関係地名の成立・遺存(図1)

涼みヶ御所・佐官(しゃかん)どん・少監どん・紀(まつり)屋敷・長者井戸など

米原長者伝説の成立

#### 3 鞠智城跡の米原長者伝説

『肥後國誌』(後藤是山編 1916年)に見える長者伝説(概要)

## 文化遺産としての鞠智城

館野 和己（奈良女子大学特任教授）

### はじめに

鞠智城が成立して以後、文化遺産となるまでの歩みをたどる

鞠智城の成立→存続→終焉→忘却→伝説の成立→再発見→調査・研究→整備

### 1 鞠智城の成立と存続

#### 所在地

米原台地

#### 鞠智城前史

縄文時代晚期・弥生時代中期～後期、古墳時代後半に集落営まれる

鞠智城の成立 一大地への働きかけ

#### 成立の要因

##### 必要性

白村江の敗戦以後の対外的危機 一金田城・基肄城・大野城・水城などと一体

大宰府の後方支援基地（南へ約63°）

有明海・八代海方面への前進基地

南島対策、対隼人 など

#### 立地

低い丘陵上（標高約100～168mの米原台地上）、広い平地

菊池川の河口から直線距離で約27°。

菊池川流域に肥沃な菊鹿盆地（台地との比高差約100m）、県下有数の穀倉地帯

交通路：「車路」「車町」地名 一菊池川・内田川流域を官道が通る

肥後國菊池郡城野郷に比定

#### 文献史料の存在

『続日本紀』文武2(698)年5月甲申(25)条

令大宰府緒治大野・基肄・鞠智三城。

『文德実錄』天安2(858)年閏2月丙辰(24)条

肥後國宮・菊池城院兵庫鼓自鳴。

『文德実錄』天安2(858)年閏2月丁巳(25)条

又鳴。

『文德実錄』天安2(858)年6月己酉(20)条

メモ

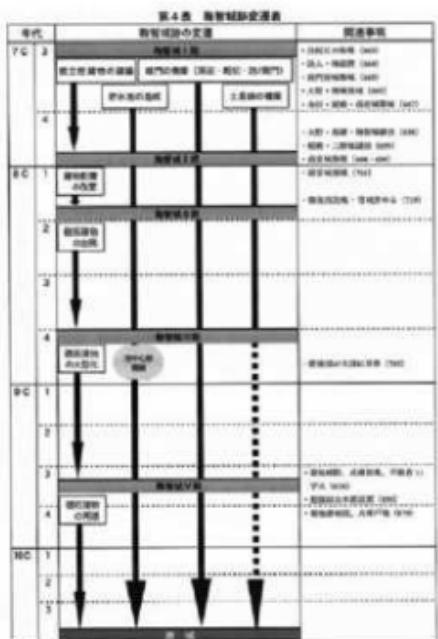
- 702 大宝 2 8 命に逆らう薩摩・多機を征討し、戸を枝へ吏を置く。〔国司・島司〕  
10 噶更國司ら「国内要害の地に柵を建て、戍を置きて守らむ」と言う。
- 712 和銅 5 1 河内國高安烽を廃す。
- 713 和銅 6 4 大隅國を置く。
- 718 養老 2 養老律令（律10巻、令10巻。施行は757年（天平宝字1））
- 719 養老 3 12 備後國安那郡茨城、蘆田郡常城を停する。
- 756 天平勝宝8 6 怡土城を築く。
- 765 天平神護13 大宰大式佐伯宿祢今毛人を兼怡土城專知官、少式采女朝臣淨庭を修理水城專知官とする。

#### 【参考文献】

- 赤司善彦「古代山城研究の現状と課題」『月刊文化財』631、2016年
- 小田富士雄『古代九州と東アジアⅡ』同成社、2013年
- 狩野 久「瀬戸内古代山城の時代」『坪井清足先生卒寿記念論文集』2010年
- 下向井龍彦「日本律令軍制の形成過程」『史学雑誌』100-6、1991年
- 鈴木拓也「軍制史からみた古代山城」『古代文化』61-4、2010年
- 向井一雄『よみがえる古代山城』吉川弘文館、2017年
- 八木 充「百濟滅亡前後の叛乱と古代山城」『日本歴史』722、2008年
- 熊本県教育委員会『鞠智城跡 Ⅱ』2012年
- 熊本県教育委員会『鞠智城跡 Ⅱ』論考編 1・2、2014年
- 熊本県教育委員会『古代山城 鞠智城を考える』山川出版社、2010年
- 熊本県教育委員会『古代山城 鞠智城を考える』Ⅱ、2012年
- 熊本県教育委員会『鞠智城シンポジウム』2012、2013年
- 熊本県教育委員会『鞠智城東京シンポジウム』2014～2016年
- 熊本県教育委員会『ここまでわかった鞠智城』2013年
- 熊本県教育委員会『鞠智城と古代社会』1～5、2013～2017年

【年表】

- 663 天智 2 8 白村江の戦いで大敗。
- 664 天智 3 5 唐使郭務悰が、表図・獻物を進上する。この年、対馬島・壱岐島・筑紫國等に防と烽とを置き、筑紫に水城を築く。
- 665 天智 4 8 長門国に城、筑紫国に大野・烽（基跡）の二城を築く。9 唐使劉德高・郭務悰と驍軍（旧百濟官人）が、表図を進上する。遣唐使派遣。
- 667 天智 6 3 近江に遷都。唐使が、遣唐使を筑紫に送る。11 大和國高安城・讃岐國屋島城・対馬國金田城を築く。
- 668 天智 7 1 天智天皇即位。9 新羅が調を貢納する。唐が高句麗を滅ぼす。この年、唐が倭國征伐の船舶を修理するが、新羅攻撃かという（『三国史記』）。
- 669 天智 8 1 算我赤兄が筑紫率。8 高安城を造ろうする。冬に、高安城を修り、城内の田税を収む。9 新羅が進調。この年、遣唐使を派遣。唐使郭務悰ら2000人が遣わされる。
- 670 天智 9 2 戸籍（庚午年籍）を造り、盜賊・浮浪を断つ。高安城を修りて、穀と塩とを積む。また長門城一つ・筑紫城二つを築く。8 新羅が高句麗王を冊立（唐・新羅の対立）。9 遣新羅使。
- 671 天智10 1 冠位・法度を施行（「近江令」の存否）。唐使が上表。天智天皇没。
- 672 天武 1 6 壬申の乱。大海人皇子が近江朝廷軍を破る。
- 673 天武 2 2 大海人皇子が即位（天武天皇）。
- 675 天武 4 2 天武が高安城に行幸する。3 栗隈王を兵政官長とする（栗隈王は壬申の乱時に筑紫大宰）。10 歳内の諸王・有位者に武装させる。〔676, 679, 684, 685, 693, 699, 700〕
- 676 2 唐が朝鮮半島支配を放棄する。
- 683 天武12 11 諸国に詔して、陣法を習わせる。
- 685 天武14 11 軍用の楽器・兵器の私家所蔵をやめ、郡家に収める。
- 686 朱鳥 1 9 天武天皇没。持統皇后称制。
- 689 持統 3 6 浄御原令（22巻）施行。戸籍作成（庚寅年籍）。兵士への武事教習。9 石上朝臣麻呂・石川朝臣蟲名らを筑紫に遣し、位記を給送する。また新城を監す。10 天武が高安城に行幸する。
- 690 持統 4 1 持統天皇即位。
- 693 持統 7 12 諸国に陣法博士を遣わし、兵法を教習させる。
- 694 持統 8 12 藤原宮遷都。
- 698 文武 2 4 南島に使を遣わし、国をもとめさせる。5 大宰府に、大野・基跡・難智三城を繕治せしむ。8 高安城を修理する（天智5年築城）。
- 699 文武 3 9 天武が高安城に行幸する。11 南島より帰る。12 大宰府に、三野・稚積二城を修せしむ。
- 700 文武 4 6 筑紫惣領に、菟國使を脅迫した薩末比売・衣詳督・助督・肝衝難波を処罰させる。〔菟國使は698年の遣使か、新たな遣使か〕10 筑紫惣領・大式を任せ。
- 701 大宝 1 8 高安城を廢す。 大宝律令（律6巻、令11巻）完成。



(『鹿智城跡 II』)

表1 大宰府の成立開拓略年表

		536(宣化元) 那津官家遷造		備註
		609(推古17) 筑紫大宰都見		
		663(天寶2) 白村江戰に大敗		
大宰府初期	西國海防	554(天寶3) 対馬・壱岐・筑前に移入・烽をおき 水城大堤を築く		備 註 大 宰 府
	新設開闢(上)	580(持統3) 6月飛鳥淨御麻令制定 9月位記伝達使が筑紫に到る		
		690(持統4) 7月大宰・國司遷任 694(持統8) 12月唐原京遷都 698(文武2) 5月大野・基御・輪管3城を修築		
大宰府中期	II 大 宰 府	701(大宝元) 8月大宝律令制定 710(和曆3) 3月平成京遷都		後 期 大 宰 府
	或 石 築 造	769(持統景雲3) 「此府人物雄業天下之一都會也」 (續日本紀)		
大宰府後期	III 大 宰 府	941(天慶4) 6月藤原範友の乱・政事全焼		大 宰 府

(小田富士雄圖)



図3 西日本の古代山城分布図

(向井一雄図)

出土土器からみた古代山城の時期消長表

学史的な分類	山城名	時期			
		7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
<b>初期式山城</b>					
	大野城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	基肄城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	金田城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	磐崎城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	高安城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	物皆城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
(特徴石器) 西日本の山城	椿吉山城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	大庭小堀山城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	鬼ノ城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	藤枝城山城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	永納山城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	石城山城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
(特徴石器) 九州の山城	石城山神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	須所ヶ谷神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	阿志岐山城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	高島山神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	雷山神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	女山神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	鹿毛馬神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	磐原山神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	おつは山神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	肥木神籠石	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	廣原山城	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
備考		■ 出土遺物などからみて確実			
		■■ 可能性がある			
		■■■ 出土遺物はあるがごく少量であるなど不確実			

(赤司善彦図)

### 大宰府Ⅱ期

#### (2) 鞆智城

第1期 7世紀第3四半期～第4四半期

創建期

第2期 7世紀末～8世紀第1四半期前半

コの字型建物群、八角形建物。土器等の遺物出土量が多く、内部施設が充実化。

第3期 8世紀第1四半期後半～第3四半期

礎石建物出現

第4期 8世紀第4四半期～9世紀第3四半期

礎石建物の大型化

第5期 9世紀第4四半期～10世紀第3四半期

倉庫機能

## 2 大宝令の施行と鞆智城

### a 大宝令制下の防衛体制

\* 律令制的軍團制

\* 律令法と城櫓

\* 大宰府と新たな鞆智城

### b 大宰府と鞆智城

\* 鞆智城維持の目的

### c 山城・鞆智城の諸施設

\* 舎屋（高安城）、税倉（高安城）、不動倉（鞆智城）、兵庫（鞆智城）、

城庫（大野城）、穀・塩倉（大野城）

むすびにかえて

b 「總領」「大宰」と古代山城

- (1) 筑紫大宰
- (2) 東国總領
- (3) 吉備・周防・伊予の總領

c 筑紫大宰と古代山城

- (1) 初期の官衙施設
- (2) 交通路

4 山城築城の技術者

a 百濟系技術者の築城

- (1) 大宰府の系譜
  - \* 南朝建康城 → 百濟泗沘城 → 大宰府都城 (小田富士雄説)
- (2) 百濟系技術者と山城
  - \* 「速率億礼福留・速率四比福夫於筑紫國、築大野及様二城」  
(『書紀』天智4年(665)条)

b 寺院建設の場合

- \* 飛鳥寺の伽藍配置
- ・高句麗 清岩里庵寺の影響

c 評制の場合

- \* 部民制の廃止と評制の施行

## II 鞠智城をめぐる諸問題

### 1 筑紫大宰と鞠智城

a 鞠智城成立に関連する文献史料

- (1) 『統日本紀』文武2年(698)5月条
  - \* 「大宰府をして、大野・基跡・鞠智の三城を繕治はしむ」
  - \* 「修治」の評価
- (2) 『日本書紀』天智4年8月条
  - \* 「速率億礼福留・速率四比福夫を筑紫國に遣して、大野及び様(基跡)二城を築かしむ」
  - \* 肥後国の鞠智城はない。

b 大宰府と鞠智城

- (1) 大宰府の成立

\* 小田富士雄「大宰府の成立關係略年表」

大宰府Ⅰ期

古段階、新段階

# 列島古代史における鞠智城

吉村 武彦

はじめに

## I これまでの研究を問い直す

- (1) 古代山城の築城意図・形態は同じなのか？
- (2) 「朝鮮式山城」と「神籠石」は同じであるのか、設置意図が違うのか？
- (3) 百済系技術者が築城すれば、百済系の山城になるのか？
- (4) 九州・瀬戸内の古代山城の運営は、国衙なのか總領（大宰）なのか？
- (5) 廃止される山城と、継続する山城があるのはなぜか？

## II 古代山城の諸形態

### 1 朝鮮式山城と神籠石

- a 『日本書紀』記載の有無と古代山城
- b 古代山城の名称

### 2 古代山城の種類 一 狩野久説の批判的継承

#### a 山城の種類

- (1) 西日本の山城
  - \* 大宰府管内の山城
  - \* 瀬戸内の山城
- (2) 畿内の山城
  - \* 高安城
- (3) 東北の城柵
  - \* 日本海側の城柵
  - \* 太平洋側の城柵

#### b 瀬戸内の山城

\* 体系的な防衛シフト

#### c 大宰府管内の山城

- \* 大宰府都城（筑前）の山城
- \* 大宰府都城外の山城

### 3 「總領」と「大宰」

- a 「總領」「大宰」の種類
  - (1) 筑紫大宰
  - (2) 東国總領
  - (3) 吉備・周防・伊予の總領



【表5】古代山城関係年表

山城 年号	紀事
650 沢原	6月、新羅に亡り在詣請む。
651	10月、首許三兄弟の妻の精霊と附宿客の酒造を看護。天皇、百濟征伐のための出兵を命じる。
652 天智	2月、新羅軍に従軍し、百村江で戦い、倭連・百済連見軍が大敗。
654	3月、河内・丹波・播磨・筑前・筑紫・肥前・肥後に赴き、又筑紫に水野を置く。
655	6月、遠平貢川奉船を成され、奥門國に更城、遠平懸川守督・遠平西比守使を筑紫郡に遣わし、大野・遠江に城を築く。
657	8月、近江・滋賀宮に遷る。
658	11月、滋賀國・高安城、岐阜國山田郡・越畠城、刈馬郡に金田城を築く。
659	7月、高句麗滅亡。
660	8月、天皇、高安城に登る。高安城の工事を中止する。
661	9月、高句麗征伐。畿内の田税を収む。
662	高句麗征伐(～676)
670	3月、御牛年晦日を通り、御殿・浮舟を解禁。高安城修復、敷石を積む。又長門に城一つ、筑紫に城二つを置く。
671	10月、高昌守朝那自らに位す。
672	6月、御膳王を御城主とする。
673	11月、御膳王と御武大率府に進す。
674 天武	元月、土師の船始ま。7月、三尾城と高安城が落城(高安城は移転を図る)。
675	4月、高安城行幸。
676	8月、新羅が御朝をあきらめ。
677	7月22日、筑前大地震。
679	9月11日、初めて御城を高安山、大若山に移す。難波に御近勢置。
681	10月、赤坂城を築城開始。
682	3月、日本書紀の御靈開拓。
683 開成	3月、赤坂原今荒成。
684	9月、筑前に石上御兵らを遣し、佐紀を送る。かつ、新羅を根絶させる。
685	10月、高安城行幸。
686	4月27日、高安城に遷る。
687	10月、記後國足守郡生金陣石郡に高木沢を移す。久しく樹にあって苦しんだことをむぎらうのこと。
688 大武	3月、大宰府に大野・基羅・能登の三城を修理(修理)させる。
689	6月、高安城改修(大若元年が改めていい城である)。
690	御南都修理。
691	3月9日、高安城改修。
692	12月、大宰府に三野・和泉の二城を修(つくり)らせる。
700	4月8日、大家傳伊豆守により、御前御主・蘇我不比等19人に遷す。
701	10月、筑前守・高田守・高田守・高田守を三翁。
702 大宝	6月、大家令施行。
703	4月、高安城通主・赤坂・御の御物を大宰、河内二箇に移し持えも、無主を専負。
704	2月8日、近畿使再興。
705 初創	3月9日、平城前遷。
712	3月9日、河内御高安寺を遷し、高安寺と大宰御召日御各就き、平城に遷りさせる。古事記遷。
714	1月、吉備守。
715 番栗	7月2日、記清人について歴史を著義させる。
720	9月2日、御前御主御御の御城、御前御の高城を修築する。
721 神龟	4月9日、日本書紀記述。
722	4月8日、洛南城が日本第一の御湯便を高處。
726 天平勝9	9月6日、赤坂城を修理。
729 天平中9	3月8日、新羅庭造三毛城。
744	2月5日、御朝入式の今名を吉備院とす。
760 天平中9	元月3日、佐伯宿主今名を奈治上祖守除院主とする。奈治郡御守在佐伯川領守在主とする。
765 中條貴重	2月2日、御前御主吉良守就任。
772 佐伯	3月11日、改新派大津城を改修(修理)を止す。
794 仁惠	13年正月遷。
795	10月4日、大家所管の名を以て侍を置く。
822 天長	3月11日、大家所管内諸城の兵士を遣し、筑前・高主各置く。大家所には耕種40人、高主400人を配属。
855 天安	2月2日、記後國御高安城の兵庫の跡が自らあると報告。又高心。
879 仁惠	6月、記後國御高安城の兵庫の跡が自ら場所。同前の不動真言十一字が儲失する。
889 仁惠	11月、御御施城の御多道は度支頭の御神を除家。
875	11月、大家作が、大鳥2羽が近後進入る郡の鳥の上に西北に向かって飛ま、また鷹音羽が同じ郡の鳥の上に飛みほぐすことを知じる。
879 仁惠	3月、記後國御高安城の御城の戸が自ら鳴る。
889 仁恵	元4月、大家作、御御施の城が度支頭御御所に入却し、民衆を従いて御御施を遠方間に送出したことを報告する。
895 仁恵	5月1日、御御施の城が御御施御御所を譲る。
	6月1日、大家作、御御施の城が度支頭御御所に入却し、民衆を従いて御御施を遠方間に送出したことを報告する。

年份	新增面积(公顷)	新增率(%)	新增地类
2006	11	1	1
2007	19	1	1
2008	20	2	1
2009	21	1	1
2010	22	1	1
2011	23	1	1
2012	24	1	1
2013	25	2	1
2014	27	2	1
2015	27	1	1
2016	28	1	1
2017	29	1	1
	106	56	3
		13	1
		4	1
		34	9
		48	1



【表4】祭祀信仰関係史跡の指定の歩み

大野城跡	昭和 7 年 7 月 23 日 昭和 28 年 3 月 31 日 昭和 51 年 12 月 22 日 *	2・3 (四・二)	大野城跡並四王寺跡 特別史跡指定・名称 変更 大野城跡附四王寺跡 追加指定・名称変更
石城山神籠石	昭和 10 年 6 月 7 日	1 (九)	
基跡（株）城跡	昭和 12 年 12 月 21 日 昭和 29 年 3 月 20 日 平成 20 年 7 月 28 日	2 (四)	特別史跡指定 追加指定
怡土城跡	昭和 13 年 8 月 8 日 昭和 19 年 6 月 5 日／昭和 19 年 3 月 23 日	2 (四)	追加指定
鹿毛馬神籠石	昭和 20 年 2 月 22 日 平成 14 年 3 月 19 日	1 (九)	追加指定
城山	昭和 26 年 6 月 9 日	1	
帶隈山神籠石	昭和 26 年 6 月 9 日	1	
女山神籠石	昭和 28 年 11 月 14 日 昭和 52 年 7 月 14 日	1	追加指定
高良山神籠石	昭和 28 年 11 月 14 日 昭和 51 年 12 月 25 日／平成元年 10 月 9 日	1	追加指定
御所ヶ谷神籠石	昭和 28 年 11 月 14 日 平成 10 年 9 月 11 日	1	追加指定
おつぼ山神籠石	昭和 41 年 6 月 21 日 平成 16 年 9 月 30 日	1	追加指定・一部解除
紀木神籠石	昭和 47 年 12 月 9 日	1	
金田城跡	昭和 57 年 3 月 23 日	2	史跡・特別史跡
鬼城山	昭和 61 年 3 月 25 日	2	
鞠智城跡	平成 16 年 2 月 27 日	2	
大瀬小瀬山城跡	平成 17 年 3 月 2 日	2	
唐原山城跡	平成 17 年 3 月 2 日	2	
永納山城跡	平成 17 年 7 月 14 日 平成 19 年 7 月 26 日／平成 29 年 2 月 9 日	2	追加指定
阿志岐山城跡	平成 23 年 9 月 21 日 平成 24 年 9 月 19 日	2	追加指定

\* 城山は昭和 31 年 3 月 9 日、帶隈山神籠石は昭和 29 年 10 月 5 日付けの官報で告示。

表2【史蹟名勝天然紀念物保存要目】

史蹟ニシテ保存スヘシト認ムヘキモノ左ノ如シ	
一	都城跡、宮跡、行宮跡、其ノ他皇室ニ関係深キ史蹟
二	社寺ノ跡及祭祀信仰ニ関スル史蹟ニシテ重要ナルモノ
三	古墳及著明ナル人物ノ墓並碑
四	古城跡、城砦、防壁、古戦場、国郡廳跡其ノ他政治軍事ニ関係深キ史蹟
五	聖廟、鄒學、藩學、文庫又ハ是等ノ跡其ノ他教育学芸ニ関係深キ史蹟
六	薬園跡、悲田院跡其ノ他社会事業ニ関係アル史蹟
七	古閑跡、一里塚、窯跡、市場跡其ノ他産業交通土木等ニ関スル重要ナル史蹟
八	由緒アル旧宅、苑池、井泉、樹石ノ類
九	貝塚、遺物包含地、神籠石其ノ他人類学及考古学上重要ナル遺蹟
十	外国及外国人ニ関係アル重要ナル史蹟
十一	重要ナル伝説地

【表3】古代山城の史跡指定の歩み

(太字は特別史跡、\*は以降の履歴を省略、指定基準を算用数字で表示(保存要目は漢数字))

名 称	指定履歴	基 準(要目)	備 考
水城跡	大正 10 年 3 月 3 日	2 (四)	
	昭和 13 年 12 月 28 日		追加指定
	昭和 28 年 3 月 31 日		特別史跡指定
	昭和 49 年 8 月 10 日*		追加指定
雷山神籠石	昭和 7 年 3 月 25 日	1 (九)	

表1 【特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準】

	昭和26年5月10日	平成7年3月6日	各号に含まれる道路の例示
左に掲げるもののうちわが国の歴史の正しい理解のために欠くことができず、且つ、その道路の施設、出土遺物等において学術上価値あるもの	<p>一 貝塚、遺物包含地、住居跡（堅穴住居跡、散石住居跡、洞穴住居跡等）、古墳、傳籠石その他の類の遺跡</p> <p>二 郡城跡、宮跡、太宰府跡、國都序跡、城跡、防壁、古戦場その他の政治に関する遺跡</p> <p>三 社寺の跡又は旧境内、經塚、前屋仏その他の祭祀信仰に関する遺跡</p> <p>四 塁塹、蕃学、蕃学、私塾、文庫その他の教育学芸に関する遺跡</p> <p>五 奉園跡、慈善施設、その他の社会事業に関する遺跡</p> <p>六 国道、一里塚、並木街道、急里制路、堤防、窓跡、市場跡その他の産業交通土木に関する遺跡</p> <p>七 墓墓並びに碑</p> <p>八 旧宅、園池、井泉、樹石及び特に由緒のある地域の類</p> <p>九 外国及び外国人に関する遺跡</p>	<p>一 貝塚、集落跡、古墳その他の類の遺跡</p> <p>二 郡城跡、国都序跡、城跡、官公署、戰勝その他の政治に関する遺跡</p> <p>三 社寺の跡又は旧境内その他の祭祀信仰に関する遺跡</p> <p>四 学校、研究施設、文化施設その他の教育、学芸・文化に関する遺跡</p> <p>五 医療・福祉施設、生活関連施設その他の社会・生活に関する遺跡</p> <p>六 交通・通信施設、治山・治水施設、生産施設その他の経済・生産活動に関する遺跡</p> <p>七 墓墓及び碑</p> <p>八 旧宅、園池その他の類に由緒のある地域の類</p> <p>九 外国及び外国人に関する遺跡</p>	<p>貝塚、集落跡（遺物包含地、住居跡等を含む）、古墳、墓地など</p> <p>郡城跡・・郡城、宮殿、官衙など 国都序跡・・大宰府、國府、國衙、國守、郡名など 城跡・・城櫓、城門、城郭、防壁、要塞など 官公署・・官庁、議事堂、裁判所、地方自治体の序署など 戰跡・・古戦場、戦災跡など その他の政治に関する遺跡・・領事館など外交に関する遺跡、政治活動・事象に関する遺跡</p> <p>社寺の跡・・寺・神社の堂宇、壇場又はその遺跡 旧境内地・・現存する社寺の本来の境内 その他の祭祀信仰に関する遺跡・・經塚、前屋仏、供養塔、石仏、靈場、祭祀遺跡、道場、教義、修道院など</p> <p>学校・・堅朝、蕃学、蕃学、私塾、國公私立学校など 研究施設・・文庫、図書館、研究所、試験所、実験場など 文化施設・・博物館、美術館、劇場など その他の教育・学芸・文化に関する遺跡・・新聞社、放送局、出版社、図書館、スポーツ施設など</p> <p>医療・福祉施設・・豪園、療養所、病院、慈善施設など 生活関連施設・・上下水道、公園、集合住宅など その他の社会・生活に関する遺跡・・娛樂施設、観光施設、災害跡、社会運動に関する遺跡など</p> <p>交通・通信施設・・閘・扇場、一里塚、並木街道、道路、築道、運河、港湾、運河、烽火台、郵便、電信、電話施設など 治山・治水施設・・堤防、ダムなど 生産施設・・窓跡、製塙遺跡、製鉄道路、紙山、工房、工場、急里制路、莊園跡など その他の経済・生産活動に関する遺跡・・会所・商店、市場、金融機関、仓库、発電所、疋水、恐慌その他の経済的な変動・事象に関する遺跡など</p> <p>墳墓・・墓、大名家その他の著名な人物の墓所など 碑・・古碑、記念碑など</p> <p>旧宅・・著名な人物の生家・居住など 園池・・庭園、公園 その他の特に由緒のある地域の類・・歌枕、著名な伝説・伝承地、井泉、樹石など</p> <p>外国及び外国人に関する遺跡・・我が国における外国人の活動に関する遺跡など</p>

く場所であったことを示し、山城の特質的一面を語っている。その時、駅使や府の役人らが休んだであろう施設の存在も想定できよう。筑紫国は「敵まもる おさへの城ぞと きこしをす」とも詠まれている(20-4331)。『万葉集』に詠まれた時期は、古代山城が大野城、基肄城・鞠智城の3つに收められた時期である。残念ながら、鞠智城を詠んだ歌は收められていない。これら文学のなかの山城もまた、我々が古代山城に向かう際、大切にすべきものであろう。

史跡名勝天然記念物保存法の成立に大きく関わった長崎県波佐見町出身の歴史学者黒板勝美は、史跡(以下、史跡とする。)と遺物の両者を記念物(記念物)と呼び、両者の保存を同時にわなければならないと主張した。黒板の遺物には建築物、彫刻、絵画、古文書等を含むものである。保存すべき史跡の分類を行うなかで、最終的には「保存要目」のなかに位置づけられることはなかったのであるが、彼は、「河床、河岸、海岸線の頸から、湖沼及び温泉等」も保存すべきものとして挙げ、「若しこれを史跡といふことが出来ぬならば、少くとも史跡と共に保存すべきものの一に数へねばなりません」と主張したのであった。

(注 20) 高度経済成長を経て、歴史的環境への関心が高まった。景観法も平成 16 年に制定され、史跡を周辺の環境とともに後世に残すことが可能な条件が整備されてきている。古代山城は軍事的記念物として、東アジアにおける我が国の政治・軍事・外交のあり方を知る重要な遺跡であるとともに、自然と文化との関係を考える好適な材料である。史跡を保存し、それを活用していくことは、とりわけ古代山城のように規模の大きな遺跡においては容易なことではない。また、冒頭で述べた古賀寿が言うように、地域の「埋もれている」ものに光をあてていくことが必要である。

古代山城論は、熊本県等の取り組みの成果でもあるが、近年もっとも活気に満ち、かつ知的好奇心を呼び起こしているテーマであるといってよい。これまでにも各種学術的な取り組みや古代山城サミット等が展開されているが、古代山城が本来的に有している広域連携の本質に立ち、関係自治体の連携によってその保存と活用が推進されていくことを期待したい。軍事的記念物を通じて、軍事や外交について考えることはきわめて重要なことである。(注 21)

(注 20) 黒板勝美「史跡遺物保存に関する研究の概説」『史跡名勝天然記念物』1-3・4・5・6、大正 4 年 1・3・5・7 月(黒板勝美『虚心文集』第四、吉川弘文館、昭和 15 年に収録)

(注 21) 佐藤信氏が鞠智城の調査研究の課題を列挙している。同「鞠智城の歴史的位置」『鞠智城跡Ⅱ—論考編 1—』熊本県教育委員会、2014 年 3 月

欠)」が天平4年(732)頃、大宰少監として赴任した田中朝臣三上である可能性が高く、この班給が天平7年の大宰府管内における疫病患者らに対する賑給と関わるのではないかとの指摘がすでにされている。(注18)一方、大野城については、城の管理についての史料が残されている。天長3年(826)に大宰府管内の軍団兵士制が廃止され、その代わりに統領・選士が置かれた。さらに、これまで兵士らが担っていた兵馬の飼育や貢上染物所・作紙所での雑役、大野城の修理などに充たる衛卒200人が置かれた。また、貞觀18年(876)3月13日の太政官符には城司と衛卒がみえる。權帥在原行平が大野城を訪れた際、付近の家屋が壊れ、人々の姿がみえないことの理由を尋ねたところ、城司らは、衛卒が40人おり、月24斛の糧米を城庫に納めていた頃は、百姓らが糧米の交換(売買)の利を求めて集まっていたが、税庫に納めるようになって去っていったと応えている。官符は從来通り、糧米を城庫に納めることを許可している。大野城には武器や兵糧のほか、衛卒の糧米も収納されていたことがわかる。

鞠智城についてはこれまで繰り返し述べられてきたように、兵庫と不動倉の存在が確認できることが重要である。特に不動倉については焼失した数量が11字と明示されており、それが発掘調査で検出されたなどの建物であるのか知りたいところである。

鞠智城が史料に現れる時期(9世紀後半)は、新羅の海賊が北部九州周辺に現れ、対外的な緊張が高まった時期である。また、貞觀8年(866)の記事に明確に示されているように、当時脅威として認識されていたものは、新羅の來寇と疫病の流行とであった。(注19)

鞠智城は7世紀の後半、白村江の敗戦を契機とする山城による國土防衛構想のなかで築城された城のひとつであるが、文武2年(698)5月25日条にみえるように、大宰府によって大野城、基跡城とともに修理がなされた。それは大宰府の体制的確立と密接に関わっている。豊かな穀倉地帯である菊池川流域を控えたこの地は大宰府の兵站としての役割を有したと考えられる。

(16)『史跡鞠智跡保存活用計画書』増補版、熊本県教育委員会、2015年

(17) 狩野久 前掲注14

(18) 松川博一『平安時代の大宰府と古代山城』『鞠智城東京シンポジウム 鞠智城の終焉と平安社会~古代山城の追憶~』2017年

(19) 松川博一 前掲注18

## 7. 古代山城の保存と活用

古代山城に限らないが、土地と深く結びついた文化財(記念物と呼ぶ)は、自然と深く関わっている。軍事的記念物である山城はとりわけそうした傾向が顕著である。『万葉集』には、大野城(大野山)を詠んだ歌が4首あり(5-799、5-823、8-1474、10-2197)、同じく、基跡城に関わる歌は3首ある(8-1472・1473、4-576)。いずれの歌からも軍事性は読み取ることはできない。わずかに8-1472にみえる「望遊」は、基跡城が展望のき

いる。その点について、石城山神籠石、播磨城山、讃岐城山で確認されている石製唐居敷は興味深い。鬼ノ城と同じ角柱剥込タイプであるが、軸摺穴を有さない。向井氏は地盤に軸摺穴を設ける方式を想定しつつも、讃岐城山では未製品と考えられる門礎があることから、軸摺穴を持たない3つの山城の城門は未完成であったとしている。(注 15)

(13)『第9回西海道古代官衙研究会資料集』西海道古代官衙研究会、2017年1月

(14)狩野久「瀬戸内古代山城の時代—築造から廃止まで—」『坪井清足先生卒寿記念論文集—埋文行政と研究のはざまで—』下巻、坪井清足先生の卒寿をお祝いする会、平成22年11月、同「西日本の古代山城が語るもの」『岩波講座日本歴史・月報』21(第21巻)、岩波書店、2015年12月、白石成二『永納山城と熱田津—伊予国からみた古代山城論—』ソーシアル・リサーチ研究会、2007年

(15)向井一雄「西日本山城の城門構造」『季刊考古学』第136号

## 6. 鞍智城の価値

鞍智城の本質的価値については、次のように整理がなされている。(注 16)

東アジア情勢が緊迫化するなか、西日本各地に構築された古代山城は、7世紀の対外関係を如実に示す遺跡として、歴史上・学術上の価値は高い。なかでも、大宰府防衛の拠点として構築された鞍智城跡は、それ以降10世紀の中頃まで存続し、遺構やそれが立地する地形の保存状況が良好なことから、『続日本紀』等の国史の記述と相俟って、古代山城の役割、性格及び構造など、多岐にわたる考察が可能な遺跡である。

大宰府の防衛網も飛鳥を守る国土防衛の一部をなすと考えるものであるが、九州と瀬戸内、畿内に至る防衛ラインは全体として機能したものである。(注 17) その点、この防衛構想の放棄（それはそれに代わる新たな軍事的体制の構築を意味するものである）にあって重要なのは、大宝元年（701）8月の高安城の廃止記事である。そこでは、城内の建物やそこに貯えられていたものを大倭國と河内國に移している。その後、高安城は和銅5年（712）の記事を最後に史料から見えなくなるので、8世紀の初頭に役割を終えたこととなる。養老3年（719）の茨城、常城もやや時期が遅れるが、山城を主体とする防衛構想の終わりを告げるものといえる。

鞍智城が9世紀の後半にまで史料に登場し、発掘調査による出土遺物からは10世紀中頃までの存続が確認されている。これは、大宰府を防衛するために設けられた大野城や基肄城の存続とも関係するものである。山城による国土防衛構想の放棄ということからすれば、「縦治」は律令体制の成立に伴う軍事体制の再編と評価すべきものであろう。3城の「縦治」以後、まもなくして高安城は廃止されるのであり、「縦治」は山城による国土防衛に代わる、大宰府を中心とする軍事外交体制の確立を目的としたものと考えられる。統領制の止揚とも言える重要な画期となるものである。

基肄城に貯えられていた稻穀を筑前・筑後・肥前等の国に大宰府官人の手で班給されたことを示す木簡が大宰府史跡の不丁地区から出土している。高安城にも備蓄されていた稻穀が8世紀以降も保管・備蓄されていたことがわかる。その木簡にみえる「田中朝臣（名

ったとする解釈が少なくないが、天に漲った炎を映し出して赤くなつたのではないだろうか。

(8) 水城や大野城・基肄城の建設により、それまで那津にあった筑紫大宰府とその管掌組織は現在の大宰府跡の地に移駐したと考えられる（倉住靖彦『古代の大宰府』吉川弘文館、1985年）

(9) 「天智紀」山城の出現とその背景」『月刊文化財』631号（平成26年4月号）

(10) 出宮徳尚『古代山城の機能性の検討』『高地性集落と倭國大乱』小野忠熙博士追記記念出版事業会、昭和59年11月、雄山閣出版

(11) 向井一雄氏は新規築城説である。『よみがえる古代山城 国際戦争と防衛ライン』吉川弘文館、2017年

(12) 稲田孝司「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』第34号、稻田氏は城壁を石の加工方法や構築方法により4つの系統に分類し、唐居敷を用いて編年を試みている。物智城の唐居敷が大野城より後出するとする見解は方立が省略されることに着目する赤石善彦氏にもみえる（「物智城に築城時期と貯水池について」『ここまでわかった物智城』物智城シンポジウム2012成果報告書、熊本県教育委員会、2013年3月）。向井一雄氏は基肄城東北門や物智城の方立を省略したタイプは長方形方立タイプのバリエーションであるとしている（『西日本山城の城門構造』『季刊考古学』第136号、2016年8月）

## 5. 神籠石系山城の位置づけ

従来、朝鮮式山城と神籠石系山城の関係は後者が前者に先行するとの見解が一般的であった。近年はそれとは逆に神籠石系山城が後出するものとする見解が多いように見える。

阿志岐山城の発見は從来から指摘のあった大宰府をめぐる羅城の存在を支持する一つの材料として受け止められていたが、先ごろ筑紫野市前畠遺跡において存在が確認された丘陵上の土壘は、大宰府を取り巻く羅城の存在の可能性を強く印象付けるものとなった。（注13）阿志岐山城が大野城や基肄城と同時に存在し、大宰府の防衛を担っていたことは、いわゆる神籠石系山城の時期編年にも影響を与えるものである。下限をいつに求めるかは別にして、天智朝の山城に連れて、それを補完し、都城を形づくるものとして整備されていった可能性がある。他の九州における神籠石系山城も大宰府から放射状に延びる駅路に沿って配置されていることからすれば、大宰府の防衛という観点を抜いて考えられない。羅城の存否についての検討を行うため、広く残存遺構の調査が進むことを期待したい。

神籠石系山城の築城時期の解明は7世紀史の大きな課題である。出土遺物からは、7世紀前半まではさかのぼらないとする見解が有力であり、先にふれた石製唐居敷の分類・編年などにより、築城時期の解明が進められているという状況にある。言うまでもないことであるが、文献資料、遺構、遺物等を総合的に解釈することが求められている。

古代山城の築城や運営（経営）の主体は、狩野久氏や白石成二氏が指揮するように、筑紫、周防、伊予、吉備に派遣された広域行政官である總領であったと考えられる。また、狩野氏は、瀬戸内の山城について長門と屋嶋の2城以外にも本来は記録があったが、書紀編纂の段階で機能が消失していたものは記載されなかったのではないかと述べている。（注14）文献にみえないことを単に偶発的な出来事と片付けてはならないことを教えてくれて

齊明6年（660）、唐・新羅により百濟が滅ぼされると、百濟の遺臣鬼室福信らによる百濟復興運動がおこる。百濟の王子余豊璋の帰國と救援軍の派遣の要請を受けた倭は、その要請に応じ、齊明7年（661）、狭井連檍柳・朴市秦造田来津に五千余の軍を率いさせ、豊璋を本国に送還した。豊璋を百濟王に迎えることによって百濟復興運動は高揚するが、新羅の反撃により苦戦を強いられ、内部に亀裂が生じるようになる。戦局の不利を察した倭は、天智2年（663）3月、前將軍上毛野稚子・間人連大董・中將軍巨勢神前臣詠・三輪君根麻呂、後將軍阿倍引田臣比羅夫・大宅臣鎌柄に、二万七千人の兵を率いさせて派遣し、新羅を攻撃した。そうしたなか豊璋が福信を殺害するという事態となり、8月、倭はさらに大日本國救将麿原君臣に万余の兵を率いさせて派遣した。倭は錦江河口部の白村江において唐の水軍と戦い、完敗する。（注7）敗因は、倭軍が基本的に国造軍の域を出ず、唐軍のように、律令にもとづく統一的な指揮命令系統のもとに訓練された軍隊でなかったことに起因する。白村江の戦いに投入された倭の兵士は遠く陸奥国まで及ぶもので、國を擧げての戦争であつただけにその敗北は以後の國づくりに大きな影響を及ぼした。

天智3年（664）に対馬嶋・壱岐島・筑紫国等に防人と烽を置き、筑紫には水城を築いた。水城の近年の調査成果によれば、敷粗朶工法に用いられた樹枝類の同定から、晩春から夏（五月中・下旬から七月中旬頃）に伐採され、敷きこまれたものとされている。翌4年には百濟の亡命貴族を派遣し、長門国と筑紫国に城を築いている。後者は大野城と様城である。（注8）これを第一次防衛網とし、天智6年（667）11月の高安城、鹿嶋城、金田城の3城を第二次防衛網とする見解がある。小田富士雄氏は前者を大宰府都城の形成とし、後者の金田城について、鞠智城も同時に築城されたものと推定し、両城は百濟泗沘羅城周辺の外城に相当する大宰府都城の外城的位置にあたるとしている。（注9）

天智6年の築城は關門海峡を突破し、瀬戸内海を攻めてくるであろう敵國を想定したものである。鹿嶋城が郡名（山田郡）を冠することから、同じ讃吉（讃岐）国に所在する城山城（阿野郡）はそれ以前に築城されていたとする見解もある。（注10）これら天智朝に築城されたことが明らかな山城とは別に文武朝に築城されたとも考えられる三野城・福積城がある（文武3年12月4日条）。「修」の文字が使われており、「つくる」と訓んでいる。新規に築城されたとする説、修築されたとする説の両者があり、三野城を耳納丘陵に存在する高良山神龍石に当てる説がある（注11）。

これらとは別に、修理や停廃記事から築城時期の下限がおさえられる城がある。鞠智城は文武2年（698）5月に大野城・基肄城とともに大宰府が修理にあつたことがみえる。先述したように、大野城・基肄城は天智4年に築城記事があるものであるから、それとほぼ同じ時期に築かれた城とする見解が一般的である。

一方で、築城時期については、山城の城門を構成する石製唐居敷の分類・編年研究が進められており、たとえば、鞠智城の石製唐居敷は型式に崩れがみられることから、大野城の築城時期までさかのばらないとの意見も出されている。（注12）

（7）『旧唐書』は「其の舟四百艘を焚く。煙焰天に覆る。海水皆赤し」と記す。海水が兵士の血で赤くな

称すべきとの意見もあるが、学問の発展や文化財保護の歴史を考える上で、それ自身に価値があると考えられる。

- (4)「史跡名勝天然紀念物保存要目中史跡の解説（続）」『史跡名勝天然紀念物』4-4 (大正 10 年 4 月)
- (5) 古代山城が有する歴史的意義の解明やまちづくりへの活用について議論するサミットは平成 19 年 2 月の「神籠石サミット」に始まった。4 回を重ねたのち、平成 22 年には「古代山城サミット」として再編・拡大されて今日に至っている(『月刊文化財』631 号、平成 28 年 4 月特集号「古代山城の世界」を参照のこと)。當うまでもないことであるが、古代山城を考える上で、「大宰府」の存在が重要である。

### 3. 古代山城の保護

古代山城の史跡指定は外郭壁（土塁等の城壁遺構）のみにとどまらず、内部についても保護することが必要であるが、史跡指定されている山城がすべてそのような形で保護がなされているわけではない。たとえば、石城山神籠石（注 6）や城山は周囲の列石や水門等を保護しているのみである。表 3 のうち、鹿毛馬神籠石、女山神籠石、高良山神籠石、御所ヶ谷神籠石は、当初、列石の両側各 5 m の範囲を指定するものであったが、追加指定によって全域に指定が拡大されている。

神籠石論争は先に古賀寿の論考を引用したように、すでに過去の論争と呼んでよいが、神域説の根拠となった高良大社や石城神社等の成立時期を究明することは神籠石論争の止揚という観点からも取り組む必要のある課題である。表 4 に示すように、わが国の寺院や神社の史跡指定は前者に著しく偏っていることがわかる。世界文化遺産の登録にあたり、日本文化を世界に紹介するにあたって神道の役割に光が当たられ、史跡指定が進んだ事例があるが、神社の史跡指定が進んでいない理由として、戦前において神社が国家による保護を受けており、文化財として守る必要性がなかったことが最大の理由である（戦前の指定は寺院境内に附けたり指定された毛越寺境内附鎮守社跡、丹波国分寺跡附八幡神社跡を除けば（表ではそれぞれ寺院境内、国分寺・尼寺跡に含めている）、唯一、新地貝塚附手長明神社跡があるのみである。もちろん遺構・遺物として把握しにくいところがあった事情もあるが（たとえば寺院においては礎石や瓦など）、神社がわが国の信仰史において重要な意義を有していることは疑いなく、神社について、「わが国の歴史の正しい理解に欠くことができない」遺跡（「遺跡」の語はこの場合法律用語であって、廃墟を意味するものでは決してない）として保護していく必要性があると考えるものである。神籠石論争が展開された時代に、神社境内地を文化財として保護するという発想があったとすれば、異なる論争の展開もあり得たのではないか、と思う。高良大社は筑後國一宮であり、高良山神籠石として境内地が保護されているとはいえ、わが国の信仰のあり方を知る上で重要な神社境内地としての価値づけが必要なのではないだろうか。

- (6)『史跡石城山神籠石保存管理計画策定報告書』平成 23 年 3 月、光市教育委員会

### 4. 天智朝の山城

準は平成7年に一部改正がなされているので、その対照表を表1に示す。さらに文化財保護法の前身にあたる史蹟名勝天然紀念物保存法における指定基準（「保存要目」という）を表2に示す。

平成7年一部改正は、基準のなかに近代遺跡を読み込めるように、たとえば、史蹟基準二の「古戦場」を「戰跡」と表現し直したところに特徴がある。それまで指定基準一にみえた神籠石が消えていることも注目されよう（例示にもみえない）。神籠石をめぐる論争の状況が反映したものと見えることが可能である。こうした点を考慮すると、神籠石という名称を付しての史蹟指定は今後行われることはないと思われる。（注3）

表1と表2を比較することで見えてくることは何か。古代山城に限定してその変化をたどれば、保存要目九「貝塚、遺物包含地、神籠石其ノ他人類学及考古学上重要ナル遺蹟」が、指定基準一「貝塚、遺物包含地、住居跡（堅穴住居跡、敷石住居跡、洞穴住居跡等）、古墳、神籠石その他この類の遺跡」に変わったのである。保存要目を解説した当時の文章を参照すると、「人類学とか考古学の上から必要なるもの」とし、「學術上の価値」が述べられている。（注4）「古墳」は保存要目では三に分類されていたが、同様の理由で一に編入されたものと考えられる。神籠石系山城を機能論で分類するとすれば、山城説であれば保存要目の四とすることも可能であったはずであるし、壇域説であれば同じく二であっても良かったことになる。それをあえて神籠石として九に編入したことは、文献に記述がみえないという第一の判断があったにせよ、文化財として保護する上ではある意味質問な判断であった、と思う。

一方で、今日、朝鮮式山城と神籠石系山城の構造上の相違はかつて考えられていたように隔絶したものではなくなってきている。今後は古代山城として両者の時期差や性格の相違を解明していくことが求められているといえよう。（注5）

古代山城の史蹟指定の歩みを表3に示す（鹿毛馬神籠石までは保存要目九による指定である）。神籠石の名称を有する史蹟の指定は把木神籠石までである。昭和26年の城山には神籠石は付されておらず、戦後の鬼城山も指定基準は二であるが「城跡」の名称を付していない。両者は史蹟名称そのものに城跡であることが含意されていることになる。

さらに、戦前と戦後の相違点として注意を喚起しておきたいことは、保存要目が「政治軍事」の語を使用しているのに対し、指定基準が「政治」とそれを縮めている点である。確かに「軍事」は「政治」に包含される概念ではあろうが、分類のなかから「軍事」の言葉がみえなくなったことは、「軍事」についての我々の感覚に何らか影響を与えていたということはないであろうか。あるいは、それは逆で、我々の「軍事」に対する感覚が、こうした分類を生んだ根源であるという言い方のほうがふさわしいかもしれない。

私は古代山城の本質を軍事的記念物であると考えている。白村江敗戦を契機として、唐・新羅が攻めてくるという国際的危機に対応して作られたものが古代山城であったと考えるのである。

（3）縄文時代の集落遺跡である「尖石石器時代遺跡」などと同様、歴史的な名称となった遺跡名称を改

## 古代山城の保存と活用

佐藤正知

### 1. 神籠石

古代山城は『日本書紀』に記述のみえる大野城や基跡城などのほか、記述は見えないものの、山地や丘陵に城壁（城壁）を廻らすものがあり、「わが国の歴史の正しい理解に欠くことができない遺跡」として、史跡指定がなされてきた。文献に記述がありながら未発見の山城も存在し（注1）、今後の引き続いての踏査・発見が期待される。大野城や基跡城は百濟亡命官人の技術的指導を受け、その構造等が朝鮮半島の山城と類似したものであることから、「朝鮮式山城」と呼ばれるのに対し、文献に見えないものは、列石が廻るという特徴を有することから、靈域、神域を区画する施設との解釈もなされ、高良大社に関する史料にみえる「神籠石」の名称があてられた。明治時代から大正時代にかけて神籠石論争が展開したことはよく知られているところである。朝鮮式山城に対し、後者は神籠石系山城と呼ばれている。

神籠石の名称の元となった高良山の列石は、天正12年（1584）の奥書がみえる『高良玉垂宮縁起』では「八葉の石壇」と呼ばれ、神籠石はその別称であるかのような割注がみえる。しかし、戦国期の成立と考えられる『高良記』（高良玉垂宮神秘書）では、「八葉の石壇」と「神籠石」とは別物として登場する。そこでは、列石が「八葉の石壇」であるのに対し、高良大菩薩の神馬の爪痕がある、現在の馬跡石が神籠石とされている。そうした理解は『鍋本著色高良大社縁起』においても同様である。それに対し、安永6年（1777）編纂の地誌『筑後志』では、列石を神籠石と呼ぶように変化している。そこでは、「俗に蓮花石と云は非也」と、仏教に由来する「蓮華八葉」の名称を否定し、神籠石の名称を採用するに至った。これが小林庄次郎による明治31年（1898）の学界への報告へとつながっていったのである。（注2）

（1）うち、長門国の城については城名が伝えられていない。

（2）高良山神籠石の名称の由来を追跡した古賀寛寿は、このように神籠石が本来、列石の名称でないことを明らかにする一方、「コウゴ」「カワゴ」「カゴ」「カゲ」等の語が巨石の頭とする井上農夫の説を紹介し、それをさらに広く収集し、それが「磐座」の別名に他ならないと結論づけている。古賀は、幕末の久留米藩士矢野一貞が山城説を主張していることにも注目し、「明治以前の記録・文献の中に、神籠石の名前由来を解く難や、郷土先人の優れた業績が認められていたのである。しかし、これら地方に遺る記録・文献の類いも実は調査研究の不徹底なため、空しく埋もれていることが多いのである」と述べている（『高良山神籠石研究史序説』昭和42年）。

### 2. 史跡指定の歩み

ここでは史跡指定の歩みをたどり、古代山城を文化財保護という観点から考えてみたい。朝鮮式山城と神籠石系山城を総称して古代山城と呼ぶこととする。

文化財保護法は昭和25年に制定され、同26年に指定基準が定められている。指定基

鞠智城・東京シンポジウム

# 「鞠智城跡－その歴史的価値を再考する－」

日時：平成30年1月28日（日） 13:00～17:30

場所：明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール（東京都千代田区神田駿河台1-1）

主催：熊本県・熊本県教育委員会・明治大学日本古代学研究所

後援：明治大学博物館・明治大学社会連携機構・熊本県文化財保護協会

## 日程

12:00 開場

13:00 開会

　　あいさつ 熊本県教育長 宮尾 千佳子

　　明治大学文学部教授・日本古代学研究所長 石川 日出志

　　来賓紹介

13:20 基調講演 13:20～14:20

『古代山城の保存と活用』

　　佐藤 正知（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官）

14:20 休憩

14:35 講演① 14:35～15:15

『列島古代史における鞠智城』

　　吉村 武彦（明治大学名誉教授）

15:15 講演② 15:15～15:55

『文化遺産としての鞠智城』

　　鎌野 和己（奈良女子大学特任教授）

15:55 休憩

16:10 ディスカッション 16:10～17:30

　　コーディネーター 佐藤 信（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

　　パネラー 佐藤 正知（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官）

　　吉村 武彦（明治大学名誉教授）

　　鎌野 和己（奈良女子大学特任教授）

　　木村 龍生（熊本県教育委員会）

17:30 閉会

平成29年度(2018年1月28日開催)

# 資料編

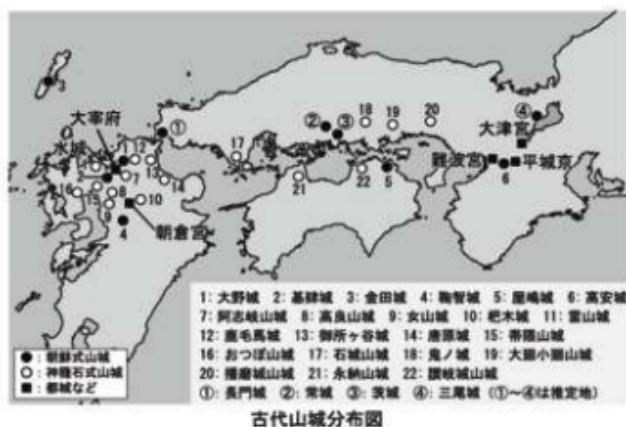
鞠智城・東京シンポジウム  
成果報告書



鞠智城関連年表

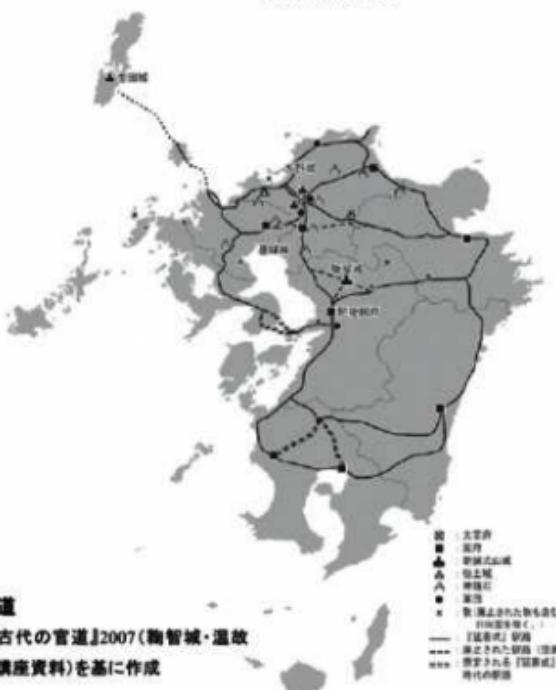
西暦（年号）	内容
645（大化元）年	大化の改新。
646（大化2）年	改新の詔の発布。
660（齊明6）年	唐・新羅により百濟滅亡。
661（齊明7）年	朝倉橋広庭宮に遷宮
663（天智2）年	白村江の戦い ※大和朝廷軍が唐の水軍に敗れる。
664（天智3）年	対馬、壱岐、筑紫等に防人と烽を置く。筑紫に水城を築く。
665（天智4）年	筑紫に大野城、基跡城を築き、長門国に城を築く。
667（天智6）年	近江大津宮に遷宮
669（天智7）年	大和に高安城、讃岐に屋嶋城、対馬に金田城を築く。
670（天智9）年	高安城を修理。
672（天武元）年	壬申の乱
676（天武5）年	新羅が朝鮮半島を統一。
678（天武7）年	筑紫国大地震
696（持統10）年	※「肥後國」の文献上の初見。
698（文武2）年	大宰府をして、大野、基跡、鞠智の三城を繕治する。
699（文武3）年	高安城を修理。
701（大宝元）年	大宰府をして、稻積、三野の二城を修理する。
710（和銅3）年	大宝律令制定。
719（養老3）年	平城京に遷都
756（天平勝宝8）年	備後国安寧郡の茨城、葦田郡の常城を停める。
794（延暦13）年	怡土城を築城。
799（延暦18）年	平安京に遷都
858（天安2）年	大宰府管内を除いて、烽を廃止。 （閏2月）菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。 （5月）肥後国菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。 （5月）菊池城の不動倉11棟が火災に遭う。
875（貞觀17）年	カラスの群れが菊池郡倉舎の葦草を噛み抜く。
879（元慶3）年	肥後国菊池城院の兵庫の戸が自ら鳴る。

《參考資料》



古代の西海道

\*日野尚志『古代の官道』2007(鷹智城・温故  
創生館 築長講座資料)を基に作成



研究会) 熊本県教育委員会

- 古賀寿 1967『高良山神籠石研究史序説－神籠石なる名称の由来と明治以前の研究史－』筑後地区郷土研究会
- 斎藤忠 1974『日本考古学史(日本歴史叢書34)』吉川弘文館(1995新装版)
- 斎藤忠 1976『神籠石雑考』『月刊考古学ジャーナル』117号、ニュー・サイエンス社
- 佐伯有清 2006『邪馬台国論争』(岩波新書990)』
- 板詰秀一 1976『神籠石の名称』『月刊考古学ジャーナル』117号、ニュー・サイエンス社
- 鈴木靖民 2011『七世紀後半の日本と東アジアの情勢－山城造営の背景－』『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館
- 田村晃一 1971「『神籠石』に関する若干の考察」『青山史学』2、青山学院大学文学部史学研究室
- 筑紫豊 1972『筑紫文化財散歩』学生社
- 西川宏 1973「消されていた朝鮮式山城」『日本のなかの朝鮮文化』17号
- 仁藤教史 2006『女帝の世紀(角川選書391)』
- 仁藤教史 2010「七世紀後半の領域編成－評と大宰・總領－」『日本歴史』748号
- 乗岡実 1992『古代山城』近藤義郎編『吉備の考古学的研究』下、山陽新聞社
- 堀江鑑 2016「百済滅亡後における倭国の防衛体制－齐明紀「諸修城榜」再考－」『日本歴史』818号
- 松本清張 1971『神籠石は山城か(上)(下)』『藝術新潮』263号、264号(『遊古疑考』1973年所収)
- 南健太郎 2017「瀬戸内海沿岸における古代山城の年代論」『徹底追求! 大宰府と古代山城の誕生』(大宰府学研究・古代山城に関する研究会合同シンポジウム)九州国立博物館・熊本県教育委員会
- 森浩一 1990『地域王権と古墳』『歴史読本』臨時増刊'90-3、新人物往来社
- 向井一雄 1991「西日本の古代山城遺跡－類型化と編年についての試論－」『古代学研究』125号
- 向井一雄 2004「山城・神籠石」『古代の官衙遺跡II(遺物・遺跡編)』奈良文化財研究所
- 向井一雄 2010「特輯『日本古代山城の調査成果と研究展望』に寄せて」『古代文化』61・4
- 向井一雄 2016『よみがえる古代山城－国際戦争と防衛ライン(歴史文化ライブラリー440)』吉川弘文館
- 村上幸雄・乗岡実 1999『鬼ノ城と大廻り小廻り(吉備考古学ライブラリィ2)』吉備人出版
- 八木充 2008「百済滅亡前後の戦乱と古代山城」『日本歴史』722号
- 柳田國男 1910『石神問答』聚精堂(『柳田國男全集15(ちくま文庫)』東京、筑摩書店1990年所収)
- 李進熙 1977「朝鮮と日本の山城」『城(日本古代文化の探求)』社会思想社
- 渡辺正氣 1988「神籠石の築造年代」『考古学叢考』中、吉川弘文館

## 註

(1) 中村修也が 2015 年に『天智朝と東アジア一唐の支配から律令国家へ』(NHK ブックス) で発表した唐築城説は 1983 年に田辺昭三が『よみがえる湖都一大津の宮時代を探る』(NHK ブックス) で発表した既の焼き直しだが、田辺の著書への言及はない。1979 年、古田武彦は『ここに古代王朝ありき—那馬一国の考古学』(朝日新聞社) で神龍石=九州王朝築城説を発表している。古田は 1998 年にも『失われた日本』(原書房) の「神龍石の証明」で 79 年とほぼ同じ論旨を繰り返し主張しているが、何故か瀬戸内の山城には触れられていない。晚年の古田や九州王朝支持者は、この指摘に慌てて瀬戸内の山城も九州王朝が築いたと主張し始めている。

(2) 1959 年『神龍石の諸問題』『考古学研究』6-3 で愚城説を発表した原田大六は、85 年の『日本歴史大辞典』(河出書房) の神龍石の説明で「朝鮮式山城の形式化した非実戦的城塞と考えられる」と九州の神龍石系山城の核心部分を指摘している。喜田が愚城説に拘ったのもこの点であり、出宮徳尚も 2006 年「(神龍石系山城) はむしろ成しの造形、地域を軍事的に威圧するための一つの道具として造られて来たのではないか」という。非常に概念的評価をしています…実戦的機能面から見ると…非常に施設や設備の欠落して、簡略化した構造状況でも、結構山城として日本列島では通用したと考えています」と述べ、神龍石系山城の非実戦的な性格を指摘している(『大庭小堀山城跡の謎に迫る—吉備最大の古代山城—』(国指定記念シンポジウム記録)、岡山市教育委員会)。

(3) 689 年(持統 3)の「筑紫新城」を北部九州の神龍石系山城に比定する意見を 1970 年代に筑紫豊や田村見一が提起しているが、年代を古く考える研究者にとってこの記事は論外で、一顧だにされていない。当時の年代論が各研究者のこの種の遺跡に対する先入観に左右されていた点は否めない。

## 参考文献

- 赤司善彦 2002 「筑紫の古代山城」『東アジアの古代文化』112 号、大和書房  
石野博信 1991 『古代近畿と東西交流』学生社  
稻田孝司 2012 「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』34 号  
井上和人 2017 「日本列島古代山城の軍略と王宮・都城」『日本古代学』9 号、明治大学  
江上波夫 1967 「騎馬民族国家—日本古代史へのアプローチ(中公新書)」  
近江俊秀 2018 「律令国家の誕生と鶴賀城」『鶴賀城と古代社会』6 号、熊本県教育委員会  
大塚初重・戸沢光則・佐原真編『日本考古学を学ぶ』(1) 有斐閣  
小澤佳彦 2012 「朝鮮式山城と神龍石系山城—古代山城の考古学的検討ー」『日本考古学協会 2012 年度  
福岡大会研究発表資料集』  
小野忠熙 1986 「日本における朝鮮式山城の考古地理学的考察」『日本考古地理学研究』大明堂  
狩野久 2015 「西日本の古代山城が語るもの」『岩波講座日本歴史 月報』21 号  
龜田修一 2015 「古代山城を考える—遺構と遺物—」『古代山城と城壁調査の現状』(全国公立埋蔵文化財  
センター連絡協議会第 28 回研修会) 岡山県古代吉備文化財センター  
木村龍生 2016 「土器の様相から見た古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城』(古代山城に関する

のである。80年代の研究は占地分類が主流だったが、最近は城壁構造の研究が目立つ。軍事施設である古代山城を評価するためには、両面からの検討こそ重要である。さらに山地の高低や城壁単体の比較に止まらず、中世城郭における繩張り研究と同じような視点を持って遺構を分析する必要がある。当然のことかもしれないが、古代山城に取り組むには広い意味での城郭や軍事（戦闘・戦争）に関する知識が必須であり、攻城側の導線設定（守城側に有利に設定されている）や横矢掛け（守城側が二方向以上から攻撃できるように工夫されている）など、城としての遺構の機能や目的を読み取る方法や知識を最低限身に付けなければならない。日本における中・近世城郭の研究は長い研究実績を持ち、城の研究として中世城郭の研究に学ぶべきところは多い。

日本の古代山城の築城年代を7世紀後半と考える筆者は、まず「軍事性」を基軸として山城の占地を評価しようとしている。そこに繩張りと城壁構造の編年を組み合わせて一軍事性が高い城から低い城へ、列石に関しては原初的なものから装飾的なものへ変化するとみる—この点に関しては研究の進んだ韓国側資料とも照合して編年序列をクロスチェックすることも忘れてはいけない。日本列島に古代山城が伝播した時期は、百濟・高句麗の滅亡、統一新羅の成立と渤海の建国という激動の時代の中で韓国の城郭が大きく変化した時期でもある。そのダイナミズムを見極める上でも日本の古代山城研究は韓国側から注目されている。戦争という両国間の悲しい歴史から生まれた遺跡であるが、互いの歴史研究、城郭研究に寄与する重要性もまた大きい。

日本では、古代山城を「対外防衛用」「逃げ込み城（避難用）」とするイメージが根強いが、韓国では古代の城郭に関して国防施設というより、朝鮮三国の互いの進出地域での「支配拠点」や侵攻作戦の「軍事基地」として捉える傾向が強い。日本でいう逃げ込み城用途のものは高麗以降の保民用山城が機能的には近いとされている。これは日本の古代山城が白村江の敗戦を契機に造られたと記録にみえることや80年代に韓国の山城が日本に紹介された時、「朝鮮半島の城郭は日本の中世城郭と違って異民族の侵略から一般住民を避難籠城させる『逃げ込み城』である」と強調されたことによるのだろう。韓国の古代山城では小型の山頂式山城が圧倒的多数を占めることもかなり以前から指摘されているが、列石構造が統一新羅以降普及することと同様、日本の古代山城研究では共通認識とはなっていない。

古代山城は旧国単位で一、二箇所といった分布状況であるため、一遺跡だけの検討に陥りがちだが、汎西日本的な分布は国家的レベルの遺跡であることを示し、他の古代山城との比較を行うことで遺跡の評価が可能となる。神龍石系山城に比べて、朝鮮式山城は文献に記録があるため、国防・有事籠城というステレオタイプなイメージのまま調査が進められてきたが、城内の大量の倉庫群の存在など他の古代山城にはない特殊性を持っており、初築当時の構造や律令期の「城」としての性格について再検討が必要となっている。今こそ、古代山城の研究は年代論や築城主体論から次フェーズの研究段階へステップアップしていくことが求められている。

ていることを印象付けた。2012年、稲田孝司は、山城築城の年代的な範囲が天智・天武朝を中心とした7世紀後半期にあるとし、山城が系統差を超えて3段階で変遷することを論じた。同年10月の日本考古学協会の福岡大会では文化会シンポジウムで小澤佳彦が、九州の考古学者の中では赤司善彦に統いて神龍石系山城の後出説支持を打ち出した。

古代山城は文献記録が少ないこともあって、文献史学の研究者による研究は活発とはいはず、文献史学では、日本の古代山城は全て白村江戦後に同時に造られた防衛施設と捉えるような論調が多い。そういう中で、鈴木靖民は2010年9月開催の「鬼ノ城フォーラム」で、古代山城について「大宰・總領との対応関係…が考えられ」「山城群は、(徵兵・武器集中、民衆把握の) 施策との密接な関連のもとに…おおむね 670~680年以降の時期に…造営された」とする考えを発表した。仁藤教史も同年「朝鮮式山城造営と連動して「筑紫」「周防」「伊予」「吉備」という広域行政ブロックが機能していたことは明か」と述べている。2015年には狩野久が7世紀後半に大宰・總領が置かれた地域に集中して古代山城が築かれ、庚午年籍作成の契機を山城築城による倭丁・軍丁調達と関連付ける論考を発表している。山城築城が単に防衛網を造っただけではなく、武器の集中管理と戸籍による民衆把握によって「軍国体制」を立ち上げることと連動した事業だったとする点は今後特に重要な観点になっていくだろう。

2017年、井上和人は古代山城の軍略に関する論文を発表、南健太郎も同年開催の九博と熊本県の合同シンポジウムで瀬戸内の古代山城の築城年代について発表している。いずれも基本的に築城年代は後出説を取るが、井上は同時築城を主張し、南は筆者や乗岡、稻田の編年観とは異なる案を提起するなど、後出説の中でも編年指標の捉え方で微妙な違いを見せている。2018年3月には近江俊秀が物語城跡「特別研究」成果報告会で講演して、古代山城の築城を7世紀後半の三段階に分け、駅路との関係で整理を試みている。

2015~16年、木村龍生や亀田修一は古代山城からの出土遺物の整理を行っている。木村は、朝鮮式山城は白村江直後に築城され、神龍石系山城はやや遅れて築城された傾向が認められ、神龍石系山城には白村江直後から若干下がった時期に築城されたものと7世紀第4四半期~8世紀第1四半期に築城されたものがあるとする。亀田は7世紀中葉~後半と7世紀末~8世紀初め頃の遺物が多く、遺物の多いグループ(朝鮮式と一部の神龍石系)と遺物の極めて少ないグループ(神龍石系)に分けられそうだとしている。

### 3. おわりに—古代山城研究法

古代の日本列島には「城」がない時代が長く続いた。そのため研究者ー特に考古学者たちにとって城はあまり馴染みのない研究対象であるのも事実である。韓国韓國の研究者らは三国時代といふいわば戦国時代が研究対象であり、城の研究は避けて通れないのとは対照的といえる。日本の考古学・古代史の研究者にとって城は苦手な研究対象といえるかもしれない。

山城遺構を検討する上で「占地・縄張りプラン」と「城壁構造」は車の両輪のようなも

## 2010年代の研究

従来の考え方方に見直しを迫ったのは鬼ノ城の発掘調査の進展だった。絶社市による外郭線の調査によって鬼ノ城の外郭線や城門などの構造面が明らかにされると共に、1999年の岡山県による城内試掘調査、2006年からの本格調査によって鬼ノ城の年代を示す土器が多量に出土した。鬼ノ城が古代山城として朝鮮式山城と比べて遜色ない構造を持つこととその築城・維持された年代が7世紀第4四半期を中心としていることは、文献未記載の山城を齊明天皇四年は歳条を頼りに説明してきた先行説の研究者も無視できず、再考を迫ることになった。御所ヶ谷城や永納山城など文献に記録のない山城からも7世紀後半の土器が出土することに対して、神龍石系諸城の未完成・放棄、白村江戦後の一帯修築・朝鮮式山城との並存といった一種の解釈論・折衷案が出された。

2008年に発表された八木充の論文は、齊明朝築城説の再考を促す文献史学からの警鐘となった。八木論文の要旨は、齊明四年は歳条の「國家」が倭国ではなく百濟であり、この記事の「兵士甲卒、陣西北畔」「繕修城櫓」が百濟滅亡後の復興軍の活動を示しているということで、新解釈によれば齊明朝築城説はその論拠を根底から失いかねない。翌年開催された「神龍石サミット久留米大会」では八木論文の影響からか、齐明天皇一色だった論調がトーンダウンし、これ以降、考古学者が齊明朝築城説を表立って主張することはなくなった。

八木説への反論は渡辺からは出されなかったが、2016年、堀江潔が反論を発表した。堀江は齊明四年は歳条の「由是」以下の文は倭国を主語として読むべきで、倭国の西と北の国境地域（九州・北陸地方）で兵士配置と防護・木櫓などを備えた何らかの施設の修築が行われたことが読み取れるという。北部九州各地では神龍石・山城の築造・修築など防衛体制整備が進められたというが、考古学的根拠はほとんど提示されていない。そもそもこの齊明四年は歳条の記事は、658年（齊明4）の出雲における雀魚大量漂着から始まる予兆記事であり、『日本書紀』編者は、不吉な雀魚の話から二年後の海の向こうの百濟滅亡を予言し、百濟救援軍の派遣とその後の防衛体制の話をこの記事に語らせたかっただけかもしれない。齊明四年は歳条の解釈に頼って考古学的検討を怠り、八木論文で簡単に転向した考古学者らも無責任だが、不確かな文献史料では神龍石系山城の築城年代を決めるることはできない。この記事を重視するならば、583年の日羅の墳墓や689年の筑紫の新城(3)、699年の三野・船積城も取り上げねば、恣意的だと説きを受けて仕方がない。齊明四年は歳条に「繕修」とあることからそれ以前に城があった証拠だと解釈する考古学者も多いが、考古学者が年代を決めるのに、文献史料だけに頼るようになってはもはや考古学者ではない。

2010年3月の条里制・古代都市研究会「山城と都市・交通」では、筆者らによって、古代山城の発掘調査の最新成果や駅路、国境などと密接に関係した「地域編成」と関わる遺跡であると報告が行われ、歴史地理学・文献史学研究者に古代山城の研究が様変わりし

ち返ることが求められている。

### 齊明朝築城説

1988年に渡辺正気の「齊明天皇西下時築城説」が発表されると、九州の研究者や調査担当者はこぞってこの説を引用、支持するようになった。神龍石遺跡から土器などの出土が少ないと年代を推定する上で最大のネックとなっており、考古学研究者らを悩ませていたが、齊明四年是歳条分注「成本」は長年の問題を解決する福音となった感がある。渡辺説は九州の神龍石遺跡に限定したものだったが、その後、他の研究者によって瀬戸内の古代山城も齊明朝に造られたと拡大解釈されるようになる。

80年代の古代山城研究は、瀬戸内の山城発見を契機に古代山城遺跡を再評価するところから始まった。しかし発掘が充分に行われていない段階であったため、築城年代を絞り込むことができず、文献記載=朝鮮式、文献未記載=神龍石系という分類に固定化されたことが山城遺跡の多様性を見る視点を失わせ、最終的に齊明四年是歳条という文献史料に築城年代や契機を仮託するに至った。80年代の研究によって、70年代までに一定のコンセンサスが得られつつあった年代論・築城主体論が再び振り出しに戻されてしまった感が強い。本来の神龍石の名称にはなかった「文献に記録のない山城」という定義が広まり、讃岐城山城や鬼ノ城といった山城も城山神龍石、鬼城山神龍石と呼ばれ始めたのもこの時期で、神龍石という分類呼称が考古学的意味を失っていった。

90年代に入ると史跡整備のために各地の古代山城で継続的な調査が開始された。瀬戸内では1985~89年の大廻小廻山城の後、94年から鬼ノ城の調査が総社市によって行われ大きな成果を上げることになる。また熊本県では1994年から鹿智城の史跡公園計画が始動し、93年からは金田城や御所ヶ谷城、94年に鹿毛馬城の調査が始まるなど九州でも山城調査の機運が高まっていく。1987年の播磨城山城の発見や98年の屋嶋城での南嶺石壁の発見、そして1999年の阿志岐山城、唐原山城の発見など90年代は新しい遺跡・遺構の発見も続いた。このような新しい研究状況の下で、古代山城論にも新しい動きがみられるようになった。それは、1988~92年にかけて、山上弘や乗岡実、筆者などから、相次いで後出説が発表されたことである。神龍石系山城の年代を朝鮮式山城より新しくみる後出説自体は既に70~80年代に小野忠熙、田村晃一などによって提唱されていたが、新しい後出説の特徴は遺跡の占地や縄張りと城壁構造から類型化を行い、その上で山城遺跡の編年を検討しようというところにある。しかし学界の趨勢としては齐明朝築城説を前提とした論説が数多く発表され、後出説は異端視され今暫く受け入れられない時代が続いた。



図3 阿志岐山城の石垣

今までの調査で長期間にわたる維持使用や改築の痕跡は確認されておらず、古墳時代後期に築城後、律令国家が再利用したというストーリーは根拠のない想像に過ぎない。

### 考古学史上の編年論争

「文献に記録のない山城が在地勢力の逃げ込み城である」というイメージは今でも古代山城研究にまとわりついている。「神龍石系が古く、朝鮮式は新しい」という年代観も固定されたイメージとなっている。これでは古代山城の研究が始まった明治末年の段階と何も変わっていない。古代山城は近年の発掘調査や研究の進展によって、ようやくその真の姿をあらわしつつある。しかし一部の書籍などには戦前からの旧説が今だに生き残っており、学界での研究成果が古代史ファンをはじめとする一般の方々へ正確に伝えられていない。

考古学上の年代や編年観が複雑な事例は意外と多い。研究や資料が少ない段階ではよくある話ともいえる。例えば、古墳の埋葬施設である「竪穴式石室」と「横穴式石室」について、かつて喜田貞吉が「前期の古墳には竪穴式石室（＝石室）があり…後期の古墳はもっぱら横穴式石室である」と論じたのに対して、高橋健自は「横穴式石室はずっと古い時代から行われたもので」「竪穴式石室の方は、横穴式石室に比べると寧ろ後に起つて…横穴式石室の方が竪穴式石室よりも古い」と反論している。高橋の論旨は、イザナギの黄泉国訪問譚の光景が横穴式石室に相当するというもので、喜田は後期の横穴式石室について「韓土との交通より、高句麗の葬法を輸入せるもの」と大正段階の研究としては優れた見解を示している。

日本における近代的な考古学研究は1877年（明治10）のモースによる大森貝塚の発掘から始まった。その後、東京市本郷区向ヶ岡弥生町で弥生土器が発見されたが、その所属年代については、多くの意見が提出されて長く議論が続いた。名称についても、弥生式土器、中間土器、有紋素燒土器、埴輪土器など様々な意見があった。中間土器は、古墳出土の土器（土師器）と石器時代の土器（縄文土器）との間に位置するという意味であり、埴輪土器は土器の製作材料から古墳出土土器（土師器）も含めた名称である。1900年代の初頭では、縄文土器と弥生土器の差を、それを使用した民族の違いと見ようとする意見が多く、中間土器を提倡した八木英三郎は弥生土器の使用者を「國栖土蜘蛛種族等の遺物であり」「マレイ族の一派」としている。縄文土器と弥生土器との年代的関係は1917-18年（大正6-7）の国府遺跡（大阪府）の発掘調査によって、層位的に立証された。

横穴式石室の年代根据にイザナギの黄泉国訪問譚を用いたり、縄文土器と弥生土器の差を民族の違いと見る研究は、日本考古学草創期の古典的な段階の研究とはいえ、ある意味示唆に富んでいる。安易な文献史料との対比が研究の停滞を招いた事例は「倭國大乱と弥生中期の高地性集落」や「仁徳・応神天皇陵と中期古墳の編年」など、その後も時折見られ、考古学者が陥りやすい傾向である。型式学的な研究方法は現在では常識となっているが、古代山城研究においては朝鮮式と神龍石系を対立的に捉える考えが強く、この点は19世紀的との説りも免れない。考古学研究はまず考古資料の検討からという王道に今こそ立



図2 兼ノ城西門と阪築土塁

発表されたが、かたや学説が乱立し混乱した時代でもあった。西川宏は、瀬戸内地域でも確認されはじめた古代山城を広く渡来系の遺跡と捉えて注意を喚起し、また地方勢力の築城から律令国家の修築まで長期間にわたる段階的な使用を想定した。西川は「古代貴族は…（神龍石を）記録の上から消そうとしたのである」と述べ、この頃の古代山城研究の思想的動機が奈良にあったかが窺える。このような「古代山城再評価」は当時、上田正昭や金達寿

らの進める「渡来文化見直し論」と軌を一にするもので、李進熙の「渡来系氏族築城説」はその最も先鋭化した説といえる。西川や李の従來說との違いはその段階的使用を想定しているところで、朝鮮半島の山城が時代を越えて継続使用されているという知識によっている。

松本清張も神龍石について論じており、「神龍石は『國家』の命令によって、構築されたものではなく…地方豪族によって造られたもの」で、防塞的機能が貧弱であることから「神龍石を『山城』と考えることはできない」とし「神龍石の宗教性」から住民の「集会・祭祀・避難場所」だったとしている。江上波夫も騎馬民族説の考古学的証拠として「神護（ママ）石についての再検討」を主張している。森浩一は古代山城周辺の古墳群と山城の築城主体を同一視する説を繰り返し述べており、文献に記録のない山城を在地勢力の逃げ込み城とする見方が一般の方々に流布し、民間古代史論における古代山城像のベースになっていることは間違いない。このように地域勢力築城説が現在でもなお命脈を保っている理由は、森一人の責任ではない。地方豪族築城説は石野博信など専門研究者の間でも神龍石系の山城に対する一つの城郭觀となっている。石野は「地域の豪族によって築造された神龍石は文献に記録されず、大和政権が築造した公城は文献に登場する」とされる。最近の調査によって築城年代や縄張り、工法の規格性・共通性などが判明してきたため、築城工事の発動（命令）は畿内政権とし、工事の実務については民間（地方豪族）が担当したと考える一種の折衷説も考古学者の間では根強い。

地域勢力築城説が根強い人気を誇るのは、80年代頃から盛んに提唱され始めた「地域国論」や「地域国家論」の影響も大きい。古代山城がそういった強大な地方勢力の象徴もしくは過去に実在した証拠として説明し易い遺跡であるため、築城年代が新しいと判明しても、現在地表に残る遺跡の下層に古く遡る遺構が眠っているのではないかと想像し「空想の複合遺跡」を想定する説が跡を絶たない。さすがに最近は神龍石と邪馬台国を結びつける説は見かけなくなってきたが、これらの諸説に共通するパターンとして、神龍石の所在地には7世紀以前（古くは3世紀）から何らかの施設（聖地・宮殿・山城）があり、列石はその遺構で、山城として改築・利用されたのは白村江敗戦後と考えている。しかし現

### 神籠石呼称の存続の是非

「神籠石」が古代山城を表わす名称として不適当な呼称であることは明らかなのだが、学界では慣習としてこの名称を使い続けている。神籠石論争の遺産として愛着のある名称であり、捨てがたいというのは學問的とはいえない。

1971年の鬼ノ城、73年の大通小通山城の再発見、そして77年には永納山城が発見されるに及んで、瀬戸内での古代山城の存在が注目される中、斎藤忠は、神籠石を「神籠石式山城」のような形で史学的な名称として継承しようとしたのに対し、坂詣秀一は、まず西日本の古代山城を一括して把握し、外郭構築技術と内部機能の検討によって新たな遺跡呼称を検討する必要性を説いた。両人共に神籠石という名称が「その対象について不明瞭」「先入観となって歪められる」「名」と「実」とが一致していない」と述べていること、そして「文献にないことをもって必要以上に穿鑿し、想察すべきではない」としていることは注意すべき点である。70年代末の瀬戸内での古代山城遺跡の発見は研究史の上で大きな転機になるはずだったが、80年代以降の研究者は「神籠石」という分類名称を使用しつづけ、かえって分類を固定化してしまった。文献に記録があるか、ないかといった「文献の記載状況」に研究の主眼を置かれることになっていった。

現在、古代の山城については、記録の残る山城は「朝鮮式山城（天智紀山城）」、記録のない山城は「神籠石系山城」と呼ばれているが、文献に記録のあるなしによる分類は考古学的分類としては実態にそぐわない。近年の調査成果によると、神籠石系山城もいくつかの類型に分けられるし、朝鮮式山城自体多様である。遺跡の多様なあり方を先入観なしに見定める上にもまず「古代山城」として一括して捉えるべきであろう。

## 2. 研究の推移

### 地方勢力築城説の源流

戦前の神籠石論争以来、1960年代の発掘調査までは、神籠石系山城（特に北部九州の山城）はその分布から邪馬台国や磐井といった九州の在地勢力に関係するもの、年代も文献史料になく伝承も残されていないことから、かなり古い時代に造られ忘却された遺跡とする考えが支配的だった。史書にみえない山城を在地勢力に関わるものと捉える考え方は決して目新しいものではない。古くは矢野一貞が高良山の八葉石塁（神籠石）を磐井が築いた山城と『筑後國郡志』などに書き残している。神籠石論争に先立つこと十年前に、久米邦武が高良山や雷山の遺跡に注目し「筑紫君の邪馬臺は此地方に在べし」と指摘している。橋本増吉は女山や高良山を現地調査して、「邪馬臺国に統属していた倭人諸国が…韓人諸國の山城制を移入するに至るべきことは、寧ろ当然」で「同一型式の遺跡が、当時の倭人諸國の根拠地と認められる各地に、現に残存している」と結論している。

### ‘80年代の古代山城ブーム

古代山城ブームの時代ともいわれる1980年代は従来の枠にとらわれない研究が次々と

言葉であること以外、詳細はわからない。柳田も「カウゴ（こうご）」の字義については意味不明としている。

### 神龍石論争の帰着点

「神龍石號」の3年後の1913年（大正2）、『考古学雑誌』4・2で山城特集号が組まれ論争の趨勢としては山城説に傾いたかに見えた。論争の第二ラウンドは閔野や谷井といった朝鮮半島の山城を熟知した研究者が参加し、閔野は列石を木権の根止め石とし、谷井は列石上に土壁（土塁）の存在を想定した。その後の調査の知見に照らせば谷井の「土壁の基石」説が正論を射ていたわけだが、切石列石の不経済的、虚飾的な部分が、城郭研究者である大類伸をして列石造構を城郭と断するのを躊躇させたようだ。大類は『考古学雑誌』4・7の「『神護（ママ）石』問題解決尚早論」で列石上の星櫓論に疑問を呈し、「山城々壘と『神護（ママ）石』列石との間には、尙研究の餘地を存する」としている。

列石上の土壁の存在を立証せよという問い合わせに対し、発掘調査を伴わない調査段階であったため、戦前の考古学者たちは答えることができなかつた。今では山城説と壘城説は互いに相容れない対立する学説のように理解されているが、大類は「（神龍石は）朝鮮山城の思想を学びしもの」と述べ、列石が山地を廻る囲繞形態—遺跡の平面プランが朝鮮式山城に類似している点は大類、喜田両人共に認めており(2)、論争の最終段階では遺跡の立面構造の解明が焦点となっていた。

### 朝鮮式山城という学術用語

「朝鮮式山城」という用語は、閔野が最初に用いており、朝鮮半島様式の城郭という意味で大野城などに対して「朝鮮式直写の山城」と表現している。学術用語としては、戦後、鏡山猛が論文・著書などで用いて定着した。「朝鮮式」の意味について、大野城などの築城を百濟からの亡命貴族が指導したことによるという解釈を時に見かけるが歴史的には誤解である。ちなみに「古代山城」という用語は、神龍石論争時に谷井が「日本上世山城」という表現を最初に使っている。1960年代頃まで古代の山城を表す用語は「朝鮮式山城」しかなく、北部九州を中心分布する高良山などの神龍石遺跡は単に「神龍石」と呼ばれていた。朝鮮式山城と神龍石を総称した名称としては当初「古代城櫓」が用いられていたが、斎藤忠が「古代山城」を提唱し、葛原克人や出宮徳尚が神龍石と朝鮮式山城を「古代山城」と総称した論文を発表、徐々に使用する研究者が増え学術用語となった。

朝鮮式山城を「ちょうせんしきやまじろ」と訓む研究者もいるが、朝鮮の山城=さんじょうから造られた造語であり、鏡山も「ちょうせんしきさんじょう」としている。古代山城も同様に「こだいさんじょう」と訓むのが正しい。史跡名称として、唐原山城跡以降、古代の山城を「さんじょう」、中世以降の山城を「やまじろ」と名付けようというルールもあるようだが、学術用語としては上記のような経緯があることをご理解いただきたい。

それでは「神龍石」が「古代山城」の遺跡呼称としてどうして定着してしまったのか？その経緯について神龍石論争の推移に沿って確認してみよう。勃興期の日本考古学界において、法隆寺再建論争と並ぶ二大論争といわれる神龍石論争は、八木茂三郎、闇野貞、谷井清一の山城説に対して、喜田貞吉が壇域説を唱えることで 14 年に及ぶ論争となった。論争はおおよそ明治、大正の二時期に分けられるのだが、こと遺跡の名称として喜田は「神龍石」の使用を繰り返した。これに対して闇野や谷井は「神龍石の名称は改めねばならぬ」「普通名詞として…冠するは絶対に避けざるべからず(避けなければならない)」と主張し、闇野はその著書の中でも「高良山山城」などと表記し、神龍石という言葉は一切使っていない。

確かに神龍石という名称は高良山だけで見られるもので、各地で発見された他の同種の遺跡には神龍石の名称はなかったー例えば雷山は「簡城」、鹿毛馬は「牧の石」、御所ヶ谷は「景向天皇行宮」、石城山は「山姥の穴」など様々な呼称が付けられていた。後年、古賀によって高良山の列石も元は神龍石と呼ばれていなかったことが明らかにされたが、時既に遅く古代山城の遺跡呼称として「神龍石」が定着していた。喜田がこれらの遺跡に対して「神龍石」と呼ぶことを止めなかつた理由は、自説である壇域説に有利な名称であったからに他ならない。「神の籠もる石」ーいかにも壇域、神域を画する列石として神々しく、少し変わった読み方も不思議なインパクトを与えたのだろう。

#### 柳田國男の神龍石批判

喜田は、高良山の列石造構の報告の後、次々と各地で発見された同種の遺跡をまとめて、1910 年（明治 43）に『歴史地理』15・3 で「神龍石號」を出して、壇域説こそ真説であると主張した。ところが同年『石神問答』で柳田國男から強力な反論を受けることになる。柳田は「(神龍石は) 孤立せる奇石の名なり」と喜田の磐境説を支持するどころか、神龍石を列石造構の名称として使用することに疑義を唱えた。これを受けて喜田は『歴史地理』16・3 の「神龍石と磐境」と題する論文中で、「(神龍石の名称を) 真の意味に於ける「神靈の鎮座せる巨岩」に附するを至當とす」と一旦は柳田の整座説を認めていた。しかし一度学界に流布した呼称は一般名称化し、喜田はその後も神龍石を列石造構の名称として使用することを止めようとはしなかつた。

柳田は、神龍石が皮龍石、革龍石、交合石、皇后石、川子石など様々な当て字で表記され、全国的な分布状況を持つ点も指摘しているが、今まで筆者が収集した神龍石類似の神体石や地名は全国で 140 例以上、北は宮城県から南は鹿児島県まで広がっている。神龍石は、革龍石、香合石など石材の形態に由来するものや交合石のように夫婦岩信仰が加わったもの、また北部九州に多い神功皇后伝承と関連付けられた皇后石など、いずれも本来の意味から離れて別の由来や伝承が付会したものも多い。文献的には高良大社や忌宮神社（下関市）に伝わる文書・絵図から鎌倉時代頃まで遡れるが『記紀』などにはみえず、古代まで遡る呼称ではない。式内社クラスの古社に多く、磐座などの岩石祭祀と関係のある

假ることからの名。」とある。教科書で定評のある『山川 日本史小辞典(改訂新版)』2016年では「こうごいし【神籠石】大きな切石を隙間なく連ねた列石を根固め石とする土塁と水門・門などからなり、9ヶ所とも築造方法は基本的には同じ。7世紀代に、大和朝廷によって交通上の要衝や政治的に重要な地点の近くに構築された。」「現在9ヶ所が確認される(岡山県大廻・小廻山、愛媛県永納山の類似遺構は含めない。)」と少し詳しい説明となり、朝鮮式山城については「ちょうせんしきさんじょう【朝鮮式山城】天智朝以後、朝鮮の山城築造技術の影響をうけて、西日本各地に造られた山城をさす。(中略) 築造には、朝鮮半島からの渡来人が参画していたが、山城の立地、縄張り、城壁の構築法、水門の構造、城門施設などは各山城の間で一様ではない。」「その多くは文献の記載と一致するが、城山遺跡(香川県)のように文献に記載されていないものもある。」となっている。

引用が少し長くなつたが、いずれも簡にして要を得た説明といえる。ただしこの短い説明文の中にも、古代山城論の混乱が見え隠れしている。2003年刊行の『日本考古学事典』ではどうだろう。神籠石は「朝鮮式山城の多くが『日本書紀』に記事のある城をさすのに對して、その種の記録のないものを一括して呼ぶ。(中略) 重城をさす名称を避けて神籠石式(系)山城と呼ぶ人もいる。」とし、列石をめぐらすことではなく、記録のあるなしが分類呼称として登場する。2008年の『歴史考古学大辞典』では「こうごいし【神籠石】西日本、特に瀬戸内・北部九州に分布する古代山城。(中略) 近年は、神籠石の呼称をなくして古代山城跡として一括整理する研究者が多い。」とあり、『広辞苑』や『山川 日本史小辞典』よりも最近の研究成果に基づいた記述が増えている。

### 神籠石の呼称

「神籠石」というと福岡県久留米市の高良山を題る列石のこととされているが、実は1898年(明治31)、高良山の列石遺構が小林庄次郎によって学会誌へ報告された際に「列石の呼称は神籠石」と誤って紹介されたことによる。高良大社の宮司を務め地域史研究家でもある古賀寿の研究によると、列石遺構はかつて「八葉の石疊」と呼ばれていたこと、現在高良大社の参道脇にある「馬蹄石」という巨大な岩盤が「本来の神籠石」だったことがわかる。

高良大社の最古の文書である『高良記』によれば、高良山にはもともと地主神である高牟礼神がいたが、高良大菩薩(高良玉垂命)が結界(=列石)を張って高牟礼神を驅して追い出したという。この大菩薩の神馬の爪跡が馬蹄石に残る産みだとされている。馬蹄石と参道を横切る列石線はすぐ近くにあるため、江戸時代には既に両者は混同されはじめていて、明治の学界への報告でも誤認したというのが真相らしい。



図1 高良山の馬蹄石

### 【講演③】

#### 神龍石系山城の捉え方－築城年代・築城主体論の克服

向井 一雄（古代山城研究会代表）

##### はじめに

神龍石系山城の研究はこの数年落ち着きを見せている。学界では長い論争の末、特に20～2012年の鬼ノ城の城内調査によって築城年代の議論がようやく収束を見せ始め、研究者間にコンセンサスが形成されつつある。

筆者は1991年に拙稿「西日本の古代山城遺跡」を『古代学研究』誌上に発表して以来、日本の古代山城に関する論考を発表してきたが、築城年代と築城主体についての検討に時間とエネルギーを割いてきた。日本の古代山城に対する关心が「いつ」「だれが」「何のため」に築城したのか、誰の遺跡とされる神龍石系山城の議論に集中していたからだ。

学界での議論がまとまり始めたものの、民間古代史論においては神龍石系山城を在地勢力による築城とする考え方が蔓延している。最近では唐の倭国占領軍が築城したとする陰謀史観的な珍説が再提起されるなど(1)、古代山城研究をめぐって議論がやまない状況が続いている。

本稿では、神龍石系山城の研究史を振り返り、築城年代や築城主体の議論がどのように推移し、現在の研究がどのような段階にあるのか、わかりやすくご紹介したいと思う。

#### 1. 朝鮮式山城と神龍石系山城

##### 古代山城と学術用語

古代山城に対するイメージはどこかモヤモヤとしたものがつきまとっている。年代や築城主体の明かな朝鮮式山城がある一方、神龍石と呼ばれる遺跡は誰が何のために造ったのかわからない「謎の遺跡」といわれている。「神龍石」という不思議な名前も謎の遺跡感をいっそう高める。シンロウセキを「こうごいし」と読むことをどのくらいの人がわかるだろうか？「城」なのに何故「石」なのか？とますます古代山城に対する焦点が定まらなくなってくる。かたや、一般向けの概説書を読むと、朝鮮式山城も神龍石もいっしょの地図に描かれ、神龍石は朝鮮式山城と同じ古代山城の一種だと説明されている。同じ種類の遺跡なのに、朝鮮式山城、神龍石、古代山城……と、どうして様々な名前で呼ばれているのか？混乱は深まっていく。

試みに「神龍石」を辞典で調べてみよう。最新（2018年）の『広辞苑（第七版）』では、「こうごいし【神龍石】古代の山城の遺跡。北九州与中国・四国に10ヶ所ほどが知られる。丘陵上に切石で列石をめぐらし、谷間には水門のある石壁がある。門址のあるものもある。神龍石式山城。」となっている。朝鮮式山城は「ちようせんしきやまじろ【朝鮮式山城】唐や新羅の侵攻に備えて七世紀後半に西日本で築かれた山城。構造が朝鮮半島の城に



穀が貯蔵されていたことになる。立地条件の違いを超えてほぼ同数の倉庫が維持されていたことになり、仮定すれば穀の蓄積量が事前に定められていて、計画的な倉庫の造営と管理・運営がなされていたことを示している。

なぜ平地ではなく山城に膨大な穀を蓄積しておく必要があったのか。まずは唐・新羅の侵攻に備え、山城の兵糧を蓄積することが重要だと思われる。次に天平年間の大宰府政庁前面の溝からは、基跡城に蓄えている穀を九州北部の各國へ分け与えるよう記した木簡が出土している。天変地異などの非常事態に備えて穀（稻米）を蓄えていたことも大きな理由である。

西海道は、他地域と異なり中央にとって歴史的に警戒すべき地域でもあった。地域の豪族層によって成立している郡衙正倉に頼ることなく、大宰府の管轄下で独自の財源を確保しておくために大野城・基跡城・鞠智城の内部に不動倉とでもいべき穀倉を形成したと思われる。そこには、大宝初年より拡充された倉庫制度が国司を通じて国家管理を進めようとした姿が重なってくる。大野城・基跡城そして鞠智城の大型で礎石化した倉庫群が、8世紀前半に整備された意図が見えてくる。つまり、古代山城に膨大に蓄積された穀は、非常事態への備えであるだけでなく、地域支配に不可欠な不動穀としての性格を備えていたということになる。8世紀前半になると太宰府口城門は防御機能よりも莊嚴化や威儀を保つ方向に転換されるなど大きな方針の変更があったことを物語っている。

また、9世紀になって大野城と鞠智城で倉庫群の大規模な拡張がなされる。各種の史料からは8世紀末ごろから新羅への脅威や外国人がもたらす疫病（感染症）に対する対外的な不安がうかがえ、こうした背景の中で古代山城は物心両面での支えとなる存在としてクローズアップされたと考えられる。山城の立地は穀等を長年にわたって保存するうえで平地より適していたということである。争乱や盗難・破損などの人的な要因、地震や台風、水害・火災などの災害要因、湿度や紫外線などによる劣化要因、虫やカビなどによる生物要因など、さまざまな影響要因について考慮した結果だと考えられる。

最も恐れるのが略奪や盗難である。ひとたび乱が起きると、場合によっては灰塵に帰することも想定される。当然ながら山城は要害堅固である。しかも、昼夜を問わず警備がなされていた。つまり収納物を護るのにこれ以上の場所はないであろう。この強固な警備が山城に倉庫を造営した最も大きな要因といえるかもしれない。このように朝鮮式山城は兵站から備蓄へと主要な機能が変化したのである。

III期（9世紀～10世紀代） 大野城で $3 \times 4$ 間の礎石式純柱建物が造営された時期である。基跡城では現在のところ $3 \times 4$ 間は確認されていない。鞠智城では8世紀後半は空白期だが、9世紀以降になると、礎石が大型化し $3 \times 4$ 間の定型的な規模の倉庫が多数造営されるようになる。9世紀ごろから八角形建物や各種の倉庫が造営される。大野城と同じ動向があり、不動穀蓄積の停滞期から増加期に転じたとも考えられる。

年代の根拠は大野城では9世紀前半までの土器や、平安期の瓦が主城原地区を中心に出土する。鞠智城では比較的まとまって9世紀から10世紀後半ごろまでの土器が出土している。

このように筑紫城として全体を俯瞰すると、変遷と存続時期が細かい点まで全て合致するわけではないが、7世紀末から8世紀前半の長倉形式の礎石純柱建物の出現と続く礎石式倉庫群の造営、さらには9世紀の礎石倉庫群の拡張は同じ歩調と理解できる。

#### おわりに 一筑紫城の倉庫群の意義—

古代の史料では一口に倉庫といつても、その呼称は内容によって異なっていた。稻・穀・粟などを収納する「倉」、兵器・文書・書籍・布帛・宝物を納める「庫」、そして、クラの総称あるいは中央政府の貯蔵施設の意味で用いる「蔵」の使い分けがある。これら山城の倉庫は、重量に耐えうる純柱高床構造で桁も長い。桁の長い倉は壁材に角材を使った板倉と考えられ、一般的には稻穀等を収納する倉と考えられている。大野城では、これまでに尾花地区で倉に接した位置で炭化米がまとまって出土している。詳細な調査によるものではないが、かなりの量が廃棄埋没している。鞠智城に関する史料には『日本文徳天皇実錄』天安二（858）年に不動倉11棟の火災記事がよく知られている。このように、これらの倉庫の多くは稻穀を不動穀として貯積されていたとみられる。

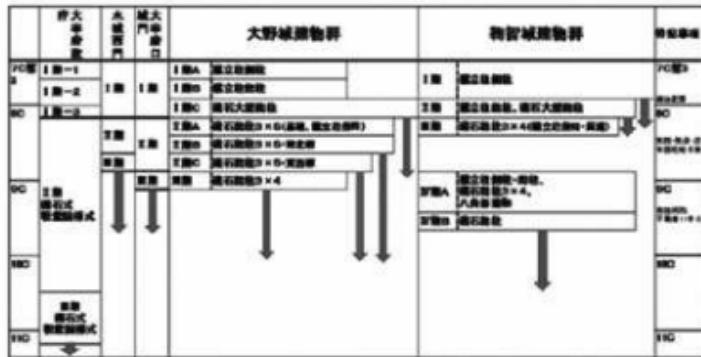
ところで、全国の諸国都に設置された倉を正倉と呼ぶ。各国の場合は国司が管理して原則として郡衙に付属して設置されるものである。これら山城の倉庫群も配置や規模からみると、永年蓄積を目的に郡衙正倉と同じ管理方式に則って倉庫が形成されていることが理解できる。また3つの山城には長倉が造営されていた。郡衙正倉には法倉と呼ばれる超大型もしくは高質の倉庫が設置されている。古代山城の長倉も法倉と類似した規模で、倉庫群の中心的位置にあるのは違いない、この点でも山城の倉庫群が律令制の財政基盤となる正倉のあり方を本質的にそのまま適用していることが指摘できる。しかも規模が大きいことから、大郡クラスの郡倉に対比でき、諸国郡の稻穀収納の場所へと性格が変化したのではないかと考えている。この指摘は日本の古代山城の性格を考える上で重要である。

さて、II期の大野城と基跡城では $3 \times 5$ 間の規則的な規模の倉庫が造営されているが、その棟数は、大野城で確実な例で32棟、不明なものを加えると35棟となる。基跡城では確実なものが23棟を数える。不確実な倉庫建物が12棟である。これまでに $3 \times 4$ 間は確認されていないので、この規模が不明なものも桁行5間の可能性があり、これを加えると35棟となる。両城とも同時期にはほぼ同数の倉庫が造営されているのである。つまり同量の

柱建物へと建替えられる。Ⅰ期の終わりには、大野城・基肄城・鞠智城には礎石式の建物が出現する。礎石式建物の初めての造営で、 $3 \times 8$ 間以上（おそらく9間か）の長倉である。文武二（698）年の大野城・基肄城・鞠智城の修繕記事が、この礎石式への転換に該当するとみられる。同じ頃、7世紀末になると大宰府政府域に筑紫大宰府の中核施設と思われる大型の掘立柱建物が整然と配置される。

時期決定は基肄城の大礎石群（長倉）出土の百濟系单弁八葉軒丸瓦と三重弧文軒平瓦が7世紀後半であること。大野城主城原地区出土も高句麗百濟系とされる鎌弁の单弁八葉軒丸瓦は鞠智城出土と同系統であり、同時期とみられる。瓦は掘立柱形式の建物にも用いた可能性があるが、礎石式建物に葺かれていたと考える。

Ⅱ期（8世紀初頭～8世紀末） 大宰府政府Ⅱ期の殿舎が完成した時期から、794年の平安遷都の頃の時期までである。大野城と基肄城では全ての規模とプランさらには柱間寸法まで規格が統一された $3 \times 5$ 間の礎石倉庫が随所に建てられる。主城原地区では、礎石式の長倉をこの形式の建物に建て替えており、大きな画期となっている。大野城では、まず基壇を有する建物や掘立柱を巡らせた礎石・掘立柱併用建物が造営される。しかも全て南北棟である。次に基壇や周囲に掘立柱を備えない南北棟で構成される。その後順次拡張され南北棟の用地確保が難しくなったためか、東西棟が造営された時期である。鞠智城では、この時期に $3 \times 5$ 間の規模の礎石式倉庫はないが、 $3 \times 4$ 間のうち、礎石掘立柱併用建物や周溝を巡らした大野城と同じ格の高い礎石式倉庫がこのころ築造されたと考えられる。



次に、大規模な総柱式の高床倉庫の存在も、共通する特徴である。鞠智城では $3 \times 9$ 間の規模で、基壇を有す格の高い建物である。大野城では、 $3 \times 8$ 間以上の建物が最も見晴らしの良い主城原地区に建てられ、基跡城では大礎石群と呼ばれる $3 \times 10$ 間の建物が、倉庫群の中で最も高い場所に造営されている。大野城の重複関係では、 $3 \times 5$ 間の倉庫に先立って造営されていたことが判明している。倉庫の礎石化はまさに倉庫景観の中心となるような場所に建てられることから始められている。先行研究の成果を援用すれば、郡衙正倉には、一般的な倉庫とは異なる長大な規模や瓦葺きあるいは基壇を有すなどの高質な倉庫が1つもしくは複数設置される特定の倉庫があり、これは法倉の可能性が高いとされる。法倉は飢餓などの大災害や天変地異が起こった際に、民衆を救済するため賑給用の稻穀を納めた特別な倉とされる。

なお、大野城・鞠智城そして高安城にのみ、礎石の周囲に掘立柱を巡らせた礎石・掘立柱併用建物が確認できている。8世紀前半頃の造営で、他の倉庫より高品位と考えられる。



第3図 大野城礎石式倉庫跡

#### 6 大宰府と古代山城（筑紫城）の関わり

筑紫城の建物について、その時期変遷を検討するが、基跡城は発掘調査が実施されていないので掘立柱建物は未確認である。地表に残る礎石を手掛かりにするだけである。

筑紫城の建物の変遷を大きく3つの二期で整理してみた。Ⅰ期は大宰府政庁Ⅰ期である。Ⅱ期は大宰府政庁が礎石式となって大きく生まれ変わった政庁Ⅱ期である。Ⅲ期は政庁Ⅱ期の存続期であるが、平安時代からの大きな動きのあった時期である。

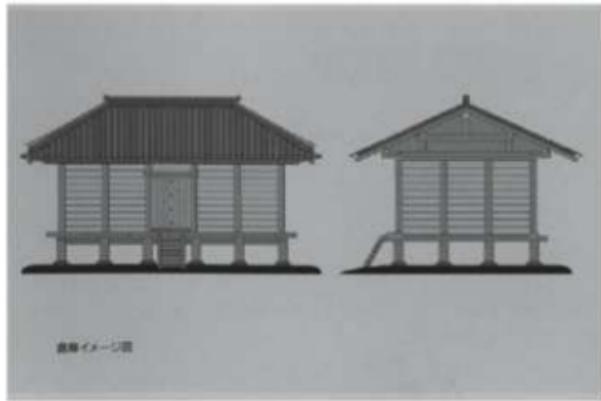
Ⅰ期（665年～8世紀初） 大野城が築城された当初の時期である。大野城の主城原地区と鞠智城の長者原地区に掘立柱式側柱建物が造営される。大野城ではその後掘立柱式の総

量の武器や甲冑などの武具類が集積されていたことが分っている。大宰府での厳密な管理下で大野城は必要最小限度の兵站機能を担っていたと結論できる。では山城の倉庫はすべて兵站機能かというと、そうではない。

### 5 筑紫城の存続と備蓄

朝鮮式山城のうち大宰府管轄下の山城は「筑紫城」と呼ばれていた。その大きな特徴は、城内で多数の建物が築造されていたことである。大野城ではこれまでに 9か所で 49 棟の高床倉が確認された。最も棟数の多い建物は、短辺が 3間（柱と柱の間の数）で、長辺が 5間の礎石式の高床倉である。奈良時代の前半頃から末頃まで順次建て続けられていた。これが総計で約 35 棟を数える。南の基跡城でも同一の倉が、約 35 棟あったと考えられる。鞠智城ではこれまでに 72 棟が確認されている。少なくとも構造と主軸方位が判明しているものは 62 棟である。このうち掘立柱建物は側柱建物が 25 棟、純柱建物が 13 棟造営されている。礎石建物は 21 棟で、20 棟が純柱建物である。このほかに、日本の古代山城では初めて検出された八角形建物がある。八角形建物は掘立柱式と礎石式がある。

共通する建物の特徴を探してみたい。礎石建物では大野城と基跡城では 8世紀前半以降に  $3 \times 5$  間の規格化された純柱建物が造営され、早くとも 8世紀末頃以降で 9世紀を主な時期として  $3 \times 4$  間の純柱建物が造営されている。鞠智城では  $3 \times 5$  間は確認されていないが、 $3 \times 4$  間は確実なところで 9棟である。純柱建物が 20 棟であることからすると約半数を  $3 \times 4$  間の純柱建物が占めていることになる。なかには、柱間寸法が七尺等間で、大型の礎石を用いているところも大野城の  $3 \times 4$  間と共通する。



第2図 3間×5間の倉庫建物

重視されたのは交通路の封鎖であり、峠（関）、河川（渡河地点）、港（上陸地点）を迎撃地点として陣を構えて、弓矢による戦闘が主体をなしていたという。さらに壬申の乱での三野城と高安城を舞台にした使われ方も踏まえて、古代山城は戦場となることを想定しておらず、兵士を派兵するための集結場所、供給する兵糧・武器の守衛、高所からの敵軍把握が想定されていたと推測している（小嶋篤「鞠智城築造前後の軍備」『鞠智城と古代社会』4 熊本県教育委員会 2016）。

山城が高所に位置しているのは、防御に適しているからである。斜面を登るというのは攻めにくい。さらに眺望がきく利点がある。では高ければどこでもよいかというとそうではなく、適地には意味がある。大集団の軍隊は交通路を進んで攻め込んでくるので、その交通路の要所で迎撃する戦略である。その場所に近接した位置で眺望がよく、さらには攻めにくい複雑な地形の山が選ばれているのである。高所であれば敵軍がスルーすればよいではないかと考える人もいるが、通過後、野営場を背後から攻撃される恐れがあり無視はできない。つまり攻守の適地が選ばれているのである。事実、古代山城は先述したように古代の主要幹線に接した位置に築城されている。古代山城は戦闘時に迎撃のために駐屯し、作戦に必要な兵士、武器・武具、食料などの補給や整備、そして監視による連絡という兵站機能が重要視されていると考えられるのである。

大野城や鞠智城で築城時の建物がいくつか確認されている。それらは兵舎やその関連施設とも解釈されてはいるが、仮に数百名単位での常駐を考えると、あまりにも少ない。『類聚三代格』貞観十二（870）年と貞観十八（876）年には大野城の倉庫は「城庫」と呼ばれ、守衛兵士に支給する米や武器武具を収納していたことがわかる。大野城の兵站機能を裏付けるものである。おそらく築城時の建物がこうした兵站の倉庫だったとみられる。ところが、武器となる鞠智城での鉄鎌の出土例を唯一として皆無である。平時の警備や訓練で使用によって破損した武器・武具も見いだせないのである。大野城は面積 200ha 近い広さである。廢城された段階もしくはその後にひとつ残らずきれいに持ち去られたとする可能性はない。落としたものなども含めてすべての痕跡を消し去ることは不可能であろう。であれば、平時には城内への多量の武器類の持ち込みはなかったということかもしれない。武器武具をなどの鉄製品を制作していた鍛冶遺構もないことから、すべての武器武具は外から運び込まれたと考えられる。もちろん、兵士は最小限度の武器は携帯していた。

軍防令では徵發された兵士は武器類を各自自ら用意して備えることとされていた。各自が弓 1 張と弓矢 50 隻、大刀 1 口などの武器のほか、行軍や野営に必要な飯袋、水桶あるいは刀子や砥石などの工具も携帯させ、これらが欠けたり少なかつたりしてはならないと定められていた。つまり戦闘時には、大量に使用される弓矢など消耗品は、そのつど外部から運び込まれ、平時には必要最小限度の武器類が収納されていたと思われる。

松川氏によると、大宰府での大量の武器類は大宰府政府の付近に設置された兵庫に備蓄されていたとみている（前掲書）。近年、大宰府政府の西に隣接する藤原地区では大型礎石建物とともに複数の高床倉庫建物が存在し、さらには戦闘用の矢（鉄鎌）を主体にした大

た。戸籍の作成は一般農民から兵を徴発する基盤である。白村江での敗因ともいべき豪族軍主体の軍事編成に変えて、新たに国家統制のとれた軍團制への移行が文献史学で説かれていたが、これを7世紀末段階で裏付ける資料となった。

九州北部を中心とする大宰府管内では、防人制がこれに加わる。つまり外的な防備は天智朝期に成立した防人制が統いており、奈良時代の西海道の軍制は、防人制と軍團制との2本立てが特徴である。防人は主に対馬・壱岐・筑紫の沿岸部で国境警備のために配備された兵士で、8世紀中頃以降に西海道が負担するまで、東国の出身者を中心に3千人ほどが徴発されていた。その配備地は、「防」という施設で、「さきもり」の読みからして岬などの沿岸部とみられる。佐賀県唐津市中原遺跡出土の「甲斐國」・「戍」銘木簡は、防人が肥前国の沿岸にも配置されていたことを示すだけでなく、8世紀末に、東国防人廃止後も現地に留まっていた東国防人の実在を示す資料である。これら防人が配備された「防」や「戍」の遺跡はまだ明らかではないが、中世の元寇防壁にみられるように海辺での防衛ラインが想定されていたとみられ、内陸の山城も守護の対象として兵士が常駐していたと考えられている（鈴木拓也「軍制史からみた古代山城」『古代文化』61-4 2010）。

さて、山城の維持管理は本来は所在国の国司が担っていた。大野城は筑前国、基肄城は肥前国、鷹智城は肥後国となる。各国司の管轄下に置かれた軍團が平時には国府と併せて山城の警固も担っていたのであるが、大野城の場合の大宰府が直接関わってもいた。西海道（九州）には、西海道を統括し対外的な交流や防備を担った大宰府が大野城の南麓に置かれた特殊事情があった。大宰府管轄下のみは各國から交代勤務で集められた軍團兵士が常駐していた。彼らが大宰府の諸官衙をはじめ大野城を守護するなど、大宰府常備軍の母体をなしていたと考えられている（松川博一「大宰府軍制の特質と展開—大宰府常備軍を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』37 2012）。このように防人もしくは軍團兵士が古代山城の警固や修繕などを担っていたと考えられるがその人数や実態は不明な点が多い。

#### 4 朝鮮式山城の兵站機能

古代山城は軍事施設であるので、多くの人が要塞としての機能を思い浮かべると思われるが、実態はほとんどわかっていない。昔から大野城は大宰府の官人や周辺農民の逃げ城だといわれてきた。難城したとしても唐や新羅軍が圧倒的に強く攻め込まれたら助からない確率が高い。それならば、地の利に長けていた地元の農民であれば、敵が来ないような奥深い山中に身を潜めてやり過ごした方が助かるのではないだろうか。そもそも朝廷が一般農民を救う根拠史料も希薄であり、もっと考慮すべきではないかと思う。多数の一般農民の難城を本気で想定した築城とは、施設面や防御面でとても思われない。住民の保護とはかけ離れたところで山城は築城されているようだ。

ではどのような機能が想定されたのだろうか。古代山城の築城後、幸い唐・新羅軍との戦争は現実には起こらなかったので、本当のところはわからない。『日本書紀』の戰闘記事を分析した小嶋薫氏によれば、山城や砦などの防御施設主戦場にした戦闘は乏しく、最も

第1表 古代山城の出土土器からみた存続時期

建物の柱や門扉の軸、方立を受ける仕口があり、掘立柱に伴う唐居敷もある。門の床面は段差のないのが一般的だが、前面に段差のある懸門構造や、石敷きの階段を設けたものもある。また、城門強化のための半円形の城壁である壇城も一部で確認されている。

城内では兵舎や兵庫とおもわれる建物や、後述する稻穀を貯積したとみられる多数の倉庫群が確認されている。そのほかに井戸・貯水場・工房などが確認されている。ただし、朝鮮半島の山城で通有の人工的な貯水構造はまだ発見されていない。

**築城と存続時期** 出土土器や瓦から7世紀後半に築城されたことは確実である。土壘や石壁の構造も類似点が多い。ほとんどの山城が8世紀には廢城となるが、大野城・基肄城・鞠智城・高安城は8世紀後半以降も存続している。考古学の成果からみると、山城の消長を示す土器や瓦等の遺物は非常に少なく、第1表に示した通りであるが、確実なところでは7世紀後半～8世紀前半と考えられる。このようにほとんどの山城は、文献史料と同じく8世紀前半で役割が終わったと考えられる。ところが近畿の高安城と九州の大野城・基肄城・鞠智城のみは、8世紀後半以降も存続していることが確実である。この三つの山城は698年に大宰府が大野城・基肄城・鞠智城を修理した城である(『続日本紀』)。また、718年の養老衛禁律には「筑紫城」に不法侵入した場合の罰則がある。この筑紫城は九州のこの3つの山城を指すと考えられている。

### 3 古代山城の兵士

奈良時代の律令制下では、戸籍に基づく徵兵制が敷かれ、徵発された一般農民出身の兵士は各國ごとの軍團に編成される。太宰府市国分松本遺跡から、7世紀末の戸籍に関する木簡が出土した。現在の福岡市西区・糸島市にあたる船評の戸籍で「兵士」の文字があつ

知られるようになった。間野貞氏は実地調査した翌年、朝鮮半島各地の古代山城を「朝鮮式山城」と呼び、その特色を示すとともに、大野城・基跡城は朝鮮式山城の形式と同一であり、百濟人の関与があったことから朝鮮式であることは当然とだと記す（「所謂神龍石は山城址なり」『考古学雑誌』4-2 1913）。そして天智朝期の金田城や屋嶋城、高安城なども朝鮮式山城であろうとみなした。神龍石が山城であるというのが趣旨ではあったが、神龍石と区別して朝鮮式山城の名称が用いられた。その後「上代九州山城」などの名称も用いられることもあった。

戦後、九州考古学をリードした鏡山猛氏がいわゆる朝鮮式山城の研究を行い、昭和34年度文部科学研究費による総合研究のテーマ名は「西日本に於ける朝鮮式山城の研究」であり、鏡山氏の論考で朝鮮式山城の名称が広く浸透していった。

## 2 朝鮮式山城の特徴

**立地** 立地は、全て官道成立以前の古い交通路が近くにあるなど、交通の要衝となる場所に位置している。金田城は対馬中央の浅茅湾に面し、屋嶋城は瀬戸内海に面しともに船舶の寄港に最適の地である。なにより全ての山城が見晴らしのよい高所を取り込むことが多い。

**土壘** 城壁は、谷を取り込み規模が大きい。また城壁線は全周するのではなく自然の急崖を利用する場合が多い。土壘は丘陵尾根線の少し下がった傾斜部に片壁式（内托式）にもたせかけて構築することが多い。尾根線に両壁式（接築式）で土壘を築き上げるより、工法上簡略化できることが大きいが、高所を城壁内側に置くことの優位性も大きい。

構築方法は、まず土壘構築する地面を段切りして基礎盛土を行い、その上に版築による築土をおこなう。作業工程上、受け持ちの範囲が決まっていたと思われるが、土壘正面から見たとき区切りのない連続的な版築に見えることが多い。

大野城では1m前後の厚さで築土の単位が認められる。版築のための土壘前面の埋板柱穴は直線的に延び、間隔は2m前後である。一部で土壘に補強の盛土がある。また、土壘下部に列石を有する土壘の例もある。

**石積** 総石垣の石墨と内部が盛り土の貼り石垣がある。基本は一定の規格性のある自然石あるいは野面（板石・玉石）の割石を予め揃えて、布目地だけでなく縱目地も意識した乱積みとする。現地で採取した石材を用いる。横目地の単位が1m弱～1.5mで認められる。横目地は築石だけでなく、内部もこれに合わせて平坦面が認められ、大野城では接続する土壘の積み土と対応していた。この時に作られる平坦な上面は、作業の通路として機能していたものか。接合面は現場での部分調整（合端合わせ）をおこなう。隙間はあるが小石で埋めることはしない傾向にある。築石の背後に栗石より大ぶりで控えの長い石材を積んでいるところもある。

**施設** 城壁には水門や突出部あるいは一部に堀切が伴うことがある。また、城壁で最も重要な施設が出入りとなる城門で、掘立柱式や礎石式の建物が設置される。城門の礎石には

『日本書紀』によれば、663年の白村江敗戦の翌年に、対馬・壱岐両島と北部九州の沿岸部を中心に防人（さきもり）と烽（とぶひ）を配置し、同時に九州北部の筑紫に水城を築造。その翌665年には瀬戸内への関門である長門、筑紫に大野城・櫓（基跡）城と、さらに2年後には近畿の高安城と瀬戸内の屋嶋城、対馬に金田城を築いたと記す。戦略としては、まず防人による海浜警備と、通信網となる烽火の体制を整えたのである。次に太宰府地域に内陸の防衛拠点を形成して、さらには対馬から瀬戸内そして畿内の王都に至るまでの陸路・海路の主要幹線に多重防御線を敷いたと解釈できる。

さて、上記のように文献記録に表れる城は665年の長門国の城・筑紫の大野城・基跡城の築城に始まり、7世紀末の修復時期を経て、719年の茨城・常城の廃城記事にみられるように8世紀前半には終焉を迎えている。このように7世紀後半の築城から7世紀末の修繕、そして8世紀前半には廃城という短い存続期間がおおまかに文献記録からは窺える。ところで、築城期が天智朝にあることから、「天智紀」あるいは「天智朝期」山城と呼ばれることもある。史料に名称が記載されていたのは、編纂された段階で戦略的に維持する必要のある城だったからだと思われる（狩野久「西日本の古代山城が語るもの」日本歴史月報21 2015）。

## 1 朝鮮式山城とは

辞典には「663年の白村江の敗戦後、朝鮮からの来襲をおそれた日本の古代政権が国土防衛のため築造した山城。北九州から瀬戸内海沿岸の重要な地点に、亡命百濟人の指導で朝鮮様式に築かれた。筑紫の大野城・基跡城、対馬島金田城・讃岐国屋嶋城・大和国高安城などがある。多くは標高300~400mの急峻な地形にある。稜線に沿って石垣または土塁を築き、城内に倉庫群があり、谷間に渓流が流れれるか泉があるのが特徴。なお北九州・瀬戸内地方に分布し、宗教施設と考えられてきた神龍石は、近年の発掘調査によって古代の山城遺構であることが確定的となった。」（百科辞典マイペディア 平凡社）である。

朝鮮式山城の名称はいつから用いられたのか 大野城・基跡城の認識は貝原益軒の『筑前国續風土記』（1706年）の中で、大野城は「四王寺山、則大野城なる事明らかなり」、基跡城については「坊中山というは・・櫓城を築せ玉ふ」と記す。また、文化三（1806）年制作の『太宰府旧蹟全図』には両城の城壁線が描かれている。このように近世の史料には両城が現在地に比定されていることが知られていたが、明確に意識されるようになったのは明治時代の後半以降のことである。

明治31年に久留米市高良山を取り巻く列石遺構が神龍石の名称で中央の学界に報告された。その後も雷山や女山などの列石遺構が発見されたことで注目が集まり、その性格をめぐって城郭説と壇域説とに分かれたいわゆる神龍石論争が始まった。この長い論争の中であらためて大野城や基跡城に注目が集まつた。

実は両城については史料に关心のある人間には知られていたが、遺跡の現状を実地踏査する人はいなかったようで、大正元年に關野貞氏の実地調査を皮切りに多くの人に現状が

【講演②】

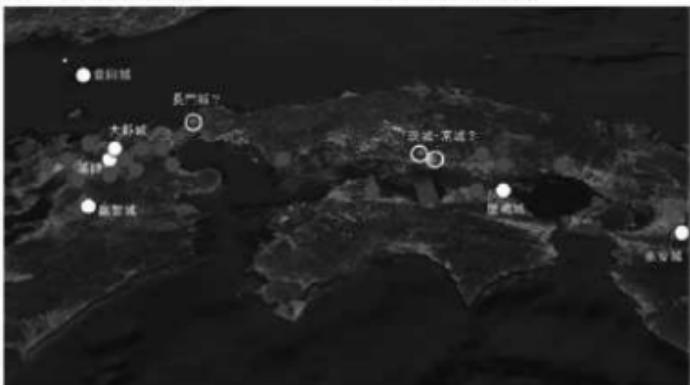
朝鮮式山城の特徴 ー主に兵站と備蓄についてー

赤司 善彦（大野城心のふるさと館長）

はじめに

文献に記載のある朝鮮式山城と、記載のない神籠石系山城という分類がなされて久しい。近年では、各地で古代山城の調査が進展し、この分類は学史的な用語として扱われ、全ての山城を共通の事項で検討することが定着してきた。ここでは朝鮮式山城に限った特徴を示したい。『日本書紀』・『続日本紀』記載いわゆる朝鮮式山城は以下の12城である。

長門城	天智4（665）年築	所在地不明（山口県）
大野城	天智4（665）年築・文武2（698）年繕	福岡県大野城市・太宰府市・宇美町
基肄城	天智4（665）年築・文武2（698）年繕	佐賀県基山町・福岡県筑紫野市
金田城	天智6（667）年築	長崎県対馬市
屋嶋城	天智6（667）年築	香川県高松市
高安城	天智6（667）年築・天智9（670）年修・文武2（698）年修	
	大宝元（701）年廃	大阪府八尾市・奈良県平群町・三郷町
三尾城	天武元（672）年築	所在地不明（滋賀県）
鞠智城	文武2（698）年繕	熊本県山鹿市・菊池市
三野城	文武3（699）年修	所在地不明（福岡県）
稻積城	文武3（699）年修	所在地不明（福岡県）
常城	養老3（719）年修	所在地不明（広島県）
亥城	養老3（719）年修	所在地不明（広島県）



第1図 古代山城分布図

天智期—筑紫大宰	対外防衛と辺要地域の行政
周芳大宰・伊予大宰(越智郡の立郡)・吉備大宰	
天智～天武期—国宰の分離と併存	西国(壬申紀)から東国(天武五年)へ展開か
持統期—大宰・国司の併存／六年サイクルの交替制度開始	
律令期—大宰と山城の廃絶	西海道大宰府のみ残存

山城との密接な関係—对外的緊張による軍管区として機能 →在地支配の拠点

『日本書紀』天武元年六月丙戌条

筑紫國者元成ニ辺賊之難ニ也。其岐、城深、隣、庭、海守者、豈為ニ内賊ニ耶。今畏命而發レ軍、則國空矣。

## 参考文献

- 池内宏「百濟滅亡後の動乱及び唐、羅、日の關係」(『渤海研究』上巻第二号、吉川弘文館、1966)
- 坂本太郎「天智紀の史料批判」(『日本古代史の基礎的研究』上、東京大学出版会、1964)
- 鈴木清民「百濟救援の役後の百濟および高句麗の變について」(『日本歴史』241、1968)
- 大和岩雄『古事記と天武天皇の説』大和書房、1969
- 鈴木清民「百濟救援の役後の日唐交渉」(『続日本古代史論集』上、1970)
- 松田好弘「天智朝の外交について」(『立命館文学』415・4、1980)
- 高木孝次郎「近江確実における日唐關係の一考察」(『木永雅雄先生寿記念論叢論文集』、春良明信社、1985)
- 鬼頭晴明「壬中の亂と国際的実機」(『千葉史学』13、1980)
- 新藤正道「『白村江の戰』後の天智朝外交」(『史泉』71、1989)
- 下向井龍彦「日本律令軍制の形成過程」(『文学報誌』100・6、1990)
- 森公車『白村江以後』講談社選書メチエ、1998
- 森泰敬『古代朝鮮・三国統一戰争史』岩波書店、2012
- 川本芳昭「白村江の戰いと古代東アジアにおける世界秩序の変動」(『文明研究・九州』11、2017)
- 早川庄八「律令制の形成」(『天皇と古代国家』講談社、2006、初出1975)
- 狩野久、「山城と大宰・總領と「道」編」(『永納山城跡－平成14年度～16年度調査報告書－』西条市教育委員会、2005)
- 狩野久、「應永内古代山城の時代－築造から廢止まで－」(『坪井清足先生卒寿記念論文集』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会、2010)
- 鈴木拓也「文献からみた古代山城」(『奈良朝・古代都市研究』26、2010)

伊予・讃岐(土佐・阿波?)	讃岐国山田郡屋島城 ←御城郡(含山田郡か)
吉備・播磨	鬼ノ城
畿内・河内・大和(摂津・山背?)	高安城
東国・東国全体(東方八道)	天武の信濃遷都計画 新城と難波京の三京

#### ★白村江敗戦以降順次整備

天智期の朝鮮式山城築城記載と神龍石系山城(鬼ノ城)の時期差ありや

★大宰府が庚午年籍七七〇卷を直接管理 →令制国の非存在

#### ★山城と大宰

『統日本紀』文武二年五月甲申条

令・大宰府縛・治大野・基跡・鞠智三城

「大宰府出土木簡」(『日本古代木簡選』五〇〇号) 天平期

為・班・給筑前・筑後・肥等国・造・基跡城稲穀・隨・大監正六上田中朝□□□□

#### ★大宰府と山城の密接な関係

大宰府と三城(肥後国菊池城院・文德実錄/肥前国基跡郡) 広域行政

大宰府大監が基跡城稲穀を筑前・筑後・肥(前)等国に班給

★畿内(河内・大倭)と東國(常陸)の広域行政ブロックの可能性 →按察使へ継承

壬申の乱における畿内・美濃・尾張および東国からの迅速な兵力動員体制

#### 畿内国司

畿内・「畿内」国司・「畿内」国(大化二年) 河内国司守と倭京留守司

高安城に「畿内」の田税(天智八年)

東國・「倭京」・筑紫・吉備へ興兵使(壬申紀) 倭京留守司と小笠田兵庫

「畿内」国司の任命(天武五年)

高安城の雜物を「大倭・河内」に移動

★四至畿内(孝德期)→四畿内(天武・持統期)

用語は持統六年/四国名は天武四年

★高安城に畿内の田税/穀と塩/大倭と河内二国へ雜物を移動→広域行政と軍事

天武朝に周芳惣令所と筑紫大宰へ「借用物」の送付例 →軍事物資か

壬申紀の国司=伊勢・美濃・尾張・河内 倭京留守司=大和

#### 【おわりに】

七世紀後半における広域行政組織としての大宰(官司)・總領(長官)制の存在

大宰府の帶筑前国と同じような大宰の帶国制度=國宰の統括官司 国司とも表現される

孝德期-畿内国司と東国国司 国を超える広域行政官/立評を担当 下位の国司なし

### 『日本書紀』天武十四年十一月甲辰条

儲用鉄一万斤送於周芳惣令所、是日、筑紫大宰諸備用物、一百疋、糸一百斤、布三百端、庸布四百疋、鐵一万斤、箭竹二千束、送下於筑紫。

#### ★周芳惣令所と筑紫大宰 軍事物資の集積

大宰=官司名 惣領=長官名の区別

長官のいる所=「周芳大宰惣令所」の意 「筑紫將軍所」(崇峻五年十一月条)

筑紫大宰府=この他にも地名+大宰が存在か 吉備大宰

### 『日本書紀』持統三年八月条

詔伊予惣領田中朝臣法麻呂等曰、讚吉國御城郡所、獲白莫、宜放鷹焉

#### ★伊予惣領田中朝臣法麻呂 讀吉國御城郡への命令

伊予國司田中朝臣法麻呂 宇和郡からの獻上(持統五年七月庚午条)

#### ★大宰惣領と國司の併任例か

「御城郡」は隣接した山田郡の羅島城と関連

### 『日本書紀』持統四年七月辛巳条

大宰・國司皆遷任焉

#### ◆文武北共用

### 『統日本紀』文武四年(七〇〇)六月庚辰条

薩末比売・久売・波豆、衣許督衣君県、助督衣君昱自美、又肝衝雞波、從肥人等、  
持兵刺幼観国使刑部真木等。於是勤竺志惣領、准犯決罰

### 『統日本紀』文武四年十月己未条

以直大壱石上朝臣麻呂為筑紫惣領。直広參小野朝臣毛野為大式。直広參波多朝臣牟後間為周防惣領。直広參上毛野朝臣小足為吉備惣領。直広參百濟王遠室為常陸守。

#### ★文武四年六月に竺志惣領-薩摩・大隅の土豪に处罚命令

十月に竺志惣領(長官)・大式(次官)・周防惣領・吉備惣領/常陸守

### 『統日本紀』文武二年七月癸未条

以直広肆高橋朝臣鳩麻呂為伊勢守。直広肆石川朝臣小老為美濃守。

#### ★美濃・伊勢国司も大山位(天武四年条)-勤位-六位クラスより上位

大宰惣領や常陸と同じく直位-五位クラス 総領的国司の存在

伊賀(天武朝に分立)・志摩・飛騨国など周辺の下国の諸国との関係

→白村江敗北以降に、美濃・尾張では西国大宰総領と同様な勤員体制

#### ◆大宰総領と山城

筑紫-西海道(筑紫国)

水城・大野城・櫟(基肆)城・鞠智城

帶筑前国

対馬国金田城

周芳-安芸 長門は独立?

長門城

「大唐(皇)帝敬問=日本國天皇」の書と国書書面の題「大唐皇帝敬問=倭(和)王-書」  
(『善勝国宝記』所引元永元年四月二十七日「皆原在良勘文」、『異國牒状記』)

#### 筑紫大津の審査に安置→入朝を認めなかつた天智(反唐的立場)

二度目の国書→天智の死後に親唐の大友皇子への書か

唐『日本書紀』天武元年(672)五月壬寅条

以-甲・胄・弓・矢-賜-郭務悰等。是日。賜-郭務悰等-物。総合・一千六百七十三匹。  
布二千八百五十二端。綿六百六十六斤。

★郭務悰に、大量の甲冑・弓矢と、布・綿を賜る→唐との軍事的同盟の証

大友皇子は新百濟・唐的立場か 前年12月に天智死去

以後702まで唐との交渉が途絶えるのは應津都督府の滅亡と親唐派の没落(大友皇子)  
→大宰總領・山城体制の存続と対応

#### ◆高句麗滅亡後の外交路線の対立一分裂外交

天武・鎌足。(天智)→反唐・親新羅的大津(新羅僧行心)

大友皇子・蘇我赤兄→親唐・反新羅的近江朝廷の立場 持統(大宝遣唐使)

#### ◆唐・新羅との国交回復時期→唐との正式な国交回復いつか?

666 唐への遣使「封得の臣」① 白村江の捕虜と留学生による参列か

668 新羅と國交回復(新羅使・遣新羅使開始) ←高句麗滅亡 天智即位

670 唐への遣使「貢平高句麗」② 676まで新羅の対唐戰争

この間30年間唐との通交なし 親新羅外交

大宰總領・山城体制の維持 親唐派(大友皇子)による一時的な和平か

701 大宝遣唐使③

## 【大宰總領と國司】

《總領の設置時期・範囲・職掌》

・大宰と總領の異同

竺志總領(長官)・大式(次官)の任命記事(『統日本紀』文武四年十月己未条)

大宰=官司名 總領=長官名の區別

・国司(国宰・宰)との上下關係

津田説→國の長官の別称

坂本説→國司の統括官司→通説化

東國國司と東國總領 以後と異質

時期差→開見説/國司統括官→薗田・坂元説

伊予總領と伊予國司 指察使との類似→總領と國司の兼帶と書き分け

「以西諸國司等」(壬申紀)の内容と權限

筑紫大宰府と筑紫國の兼帶/天智期以前は西海道地域は筑紫一国

「大唐(皇)帝敬問=日本國天皇」の書と国書書面の題「大唐皇帝敬問=倭(和)王-書」

(『善隣國宝記』所引元永元年四月二十七日「善原在良歎文」、『異國牒狀記』)

#### 筑紫大津の客籠に安置—入船を認めなかつた天智(反唐的立場)

二度目の国書—天智の死後に親唐的大友皇子への書か

唐『日本書紀』天武元年(672)五月壬寅条

以\_甲・胄・弓・矢\_賜\_郭務惊等。是日。賜\_郭務惊等\_物。総合。一千六百七十三匹・  
布二千八百五十二端。綿六百六十六斤。

★郭務惊に、大量の甲冑・弓矢と、布・綿を賜る—唐との軍事的同盟の証

大友皇子は親西済・唐的立場か 諸年12月に天智死去

以後702まで唐との交渉が途絶えるのは熊津都督府の滅亡と親唐派の没落(大友皇子)

→大宰總領・山城体制の存続と対応

#### ◆高句麗滅亡後の外交路線の対立一分裂外交

天武・鎌足。(天智)—反唐・親新羅的大津(新羅僧行心)

大友皇子・蘇我赤兄—親唐・反新羅的 近江朝廷の立場 持統(大宝遣唐使)

#### ◆唐・新羅との国交回復時期—唐との正式な国交回復いつか?

666 唐への遣使「封得の臣」① 白村江の捕虜と留学生による参列か

668 新羅と國交回復(新羅使・遣新羅使開始) ←高句麗滅亡 天智即位

670 唐への遣使「貢平高句麗」② 676まで新羅の対唐戰争

この間30年間唐との通交なし 親新羅外交

大宰總領・山城体制の維持 親唐派(大友皇子)による一時的な和平か

701 大宝遣唐使③

## 【大宰總領と國司】

《惣領の設置時期・範囲・職掌》

・大宰と惣領の異同

竺志惣領(長官)・大式(次官)の任命記事(『統日本紀』文武四年十月己未条)

大宰=官司名 惣領=長官名の区別

・国司(国守・守)との上下関係

津田説—國の長官の別称

坂本説—国司の統括官司→通説化

東国国司と東国惣領 以後と異質

時期差—闇見説／国司統括官—薗田・坂元説

伊予惣領と伊予国司 按察使との類似→惣領と国司の兼帶と書き分け

「以西諸国司等」(壬申紀)の内容と權限

筑紫大宰府と筑紫国の兼帶／天智期以前は西海道地域は筑紫一国

遣-阿倍連頼重於新羅-。

★遣新羅使② 新羅と唐へ新・唐戦争の状況把握のため使者

天智十一年(671)

唐『日本書紀』天智十年(六七一)正月辛亥条

百濟鎮将劉仁願遣-李守真等-上表。

★百濟鎮将劉仁願の名前を借りた使として李守真ら上表 7/11帰国

668 三年前に劉仁願は配流-百濟鎮将不在(池内宏説) 韓津への博羅派遣と対応

天智六年以來、四年ぶりの使者 百濟遺民と唐は対立せず-旧百濟領の維持で一致

★この段階では百濟支援は唐支援と同義となる

★高麗・新羅と百濟(三部使人)・唐が倭國へ相互通に外交攻勢

★熊津都督府の衰退、唐による百濟領の維持政策と倭國への警戒緩和

唐『日本書紀』天智十年(六七一)十一月癸卯条

對馬國司遣-使於筑紫大宰府-言、月生二日、沙門道文・筑紫君薩野馬・韓岐勝安婆・布師首領四人從-唐來曰、唐國使人郭務僚等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、合二千人、乘-船四十七隻-、俱泊-於比智崎-、相謂之曰、今吾輩人船數衆。忽然到-彼、恐彼防人驚駭射戰。乃遣-道文等-、預精披-陳來朝之意-。

唐軍の倭人捕虜・亡命百濟入遣還か

威圧ではなく情報収集、対新羅外交への牽制 唐本國ではなく都督府との交渉

→軍事援助の要請か 唐の援軍が対吐蕃勢の大敗により困難な時期

★671 大唐總管の薛仁貴が大軍の兵を新羅へ派遣 唐兵が百濟を救いに来る

(『三国史記』新羅本紀文武王十一年七月二十六日条)

仁貴の樓船竟に帆帆に翼し、旗を連ね北岸を巡る。

この大軍の一部が倭國へ派遣か

新『日本書紀』天智十年(六七一)十一月壬戌条

是日、賜-新羅王絹五十匹。・五十四。綿一千斤。韋一百枚-。

★天智七年の使者よりも賜物多い 百濟旧領支配の熟認

新羅への賜物 671 →以後天武元年 672 における唐への武器援助への変化

★二国外交ではなく、この間に外交方針の転換か

前年12月の天智死去、10月新羅派の大商人出来 による外交方針の変化

天武元年(672)

唐『日本書紀』天武元年(六七二)三月壬子条

郭務僚等再拝、進-書函与信物-。

新羅を討つため倭國との軍事同盟を結ぶ高麗の書函

◆昔原在良が隋唐以来、本朝に獻じられた書例を調べたもの

★新羅との通交が再開－新羅使と遣新羅使　異例なほど丁寧な扱い

御調船を送ることにより和平を受け入れ朝貢を求める。

高句麗滅亡 9/12 が確実な段階で、半島支配の主導権を狙う新羅の思惑

★高句麗滅亡により唐・新羅による倭襲攻への恐怖緩和と新羅の対唐戦争の前提

→新羅・倭襲両國の協謀連携の動き 反唐的立場を共通点（底堅）

## 天智八年（669）

唐『日本書紀』天智八年（六六九）是歲條

遣シ小銘中河内直鯨等シ、使シ於大唐シ。

又以シ佐平余自信・佐平鬼室集斯等男女七百余人シ、遷シ居近江国膳生郡シ。

又大唐遣シ郭務律等二千余人シ、シ削除

★第⑥次遣唐使、河内鯨等を唐に遣わす。

★郭務律の記事は天智十年と重複→削除（池内安・坂本太郎・鈴木雄民訳）

◆十一月、倭國使、唐朝に到り方物を献じる（『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三）。

倭國故遣シ使獻シ方物シ。

◆翌年三月条に高句麗平定を祝賀する目的の使者とある 前年末からの使者派遣  
遣唐使記事はいずれも是歲条で、不正確な記事のみ

10月の高句麗滅亡以降、日本侵攻が現実化したこととの関連→是歲派遣か

★親新羅派の中臣鎌足十月に死去 →親唐派による遣唐使

天智八・九年には筑紫率に親唐派我妻兄が在任

天智七年七月（重複記事か）と天智十年六月に栗隈王の筑紫率の記事。

唐『三国史記』新羅本紀文武王下、文武王十一年秋七月二十六日条

国家（唐）は船艦を修理し、外には倭國を征伐するに託し、其の実は新羅を打たんと欲す

★是歲、唐は日本遠征を計画、新羅が唐に反するのは翌年

◆天智十年に「唐人所計」とあるのは、前年からの倭國征討の準備

天智九年、百濟救援の役に出征して捕虜となり、唐に抑留中の筑紫上陽咩郡の人大伴部博麻・土師富杼等四人と唐の情報を日本に伝えることを謀る

唐總管薛仁貴セツノキの軍は日本遠征を準備していたか

## 天智九年（670）

唐『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三

倭國王遣シ使賀シ平シ高麗シ。

◆三月是月、倭國王、唐に遣使して、高句麗平定を貢す（『唐會要』『新唐書』）。

親唐派による派遣か

新『日本書紀』天智九年（六七〇）九月辛未朔条

### 『旧唐書』卷八四

欽德二年、封泰山。仁軌領新羅及百濟・耽羅・倭四國酋長赴会。

### 『資治通鑑』卷二百一唐紀十七

劉仁軌以新羅・百濟・耽羅・倭國使者、浮海西還、會祠泰山

### 『冊府元龜』外臣部盟誓

高宗麟德二年八月、開府儀同三司新羅王金法敏・熊津都尉(督)扶余隆、盟于百濟之熊津城。……於是、仁軌領新羅・百濟・耽羅・倭國四國使、浮海西還、以赴太山之下。

★劉仁軌は8/13の熊津での盟の後、新羅・百濟・耽羅・倭國四國使を連れて出発

白村江の戦いに耽羅も関係(『旧唐書』劉仁軌伝「倭衆并耽羅國使、一時並降」)

都督・刺史は12月に泰山集合の命令

10/29に東都を出発した「倭國參奏」と劉仁軌に率いられた「倭人國使」は別

★唐使に対する非積極的な対応 664から反唐的外交方針の転換一二面外交か

### 『善誥國宝記』所引元永元年中原師安勘文所引「海外國記」

今見客等來狀者、非是天子使人、百濟鎮將私使

## 天智六年(667)

### 唐『日本書紀』天智六年(六六七)十一月乙丑条

百濟領將劉仁願遣熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法聰等。送大山下境部邊石積等於筑紫都督府。

劉仁願は前年の高句麗征討時に開拓し、高句麗と日本の連携を阻止する使者か

対高句麗軍の兵力集結を倭國は脅威と認識している可能性

倭國高安城・讚岐國山田郡屋島城・對馬國金田城築城(天智六年十一月是月条)

★天智六年までは防衛拠点の構築記事あり、警戒態勢を維持

### 『日本書紀』天智元年(六六二)三月是月条

府人・新羅人・伐高麗々々乞救國家。仍遣軍將、筑硫留城、由是唐人不得略其南境、新羅不獲輸其西壁。

★倭國が高句麗に援軍を送った先例を警戒

前年には高麗からの救援要請の使者あり

## 天智七年(668)

### 新『日本書紀』天智七年(六六八)九月丁未条

中臣内臣使沙門法弁・秦筆、賜新羅上柱大角干庚信船一隻、付東嶽等。

★『豪傑』の「或人懷之」一雄足・大海人の親新羅政策への反対論の存在

### 『日本書紀』天智七年(六六八)九月庚戌条

使布勢臣耳麻呂、賜新羅王輪御調船一隻上、付東嶽等。

- 664 熊津都督に扶余隆(『旧唐書』百濟伝)  
五部から州県制への再編→現地勢力の登用による懷柔策(『旧唐書』本紀・百濟伝)  
665 新羅王法敏と劉仁願との誓盟により両国境を決定(新羅本紀文武王十一年)  
666 唐での封得の権  
668 高句麗の滅亡、唐は安東都護府を平壤に置く  
669 高句麗遺民の反乱→唐の州県化困難となる  
670 新羅は高句麗遺民刺牛蕃<sup>カノガシ</sup>と結び封底戰争へ参戦  
新羅の対唐戦争は 671/6~676/11 676 に統一完成  
677 唐は安東都護府を遼東半島へ移転  
→朝鮮征服を断念し、新羅が大同江以南の統一

## 【天智期の外交】

### 天智四年(665)

唐『日本書紀』天智四年(六六五)是歲条

遣シ小館守君大石等於大唐シ、云々。《等謂シ小山坂合部連石積・大乙吉士岐弥・吉士針間シ、並送シ唐使人シ乎。》

★是歲、守大石・坂合部石積等を唐に遣わす 第⑤次遣唐使派遣?

記載に混乱/官位表記の曖昧さ →親唐派による非公式の派遣か

★翌年の封得の会には時間的に間に合わない 帰國は 12/14(『日本書紀』)

遣唐使? = 聞交回復のための金権大使? → 送唐人使と百濟からの遣唐使と間違か

★大唐へ行った守君大石と遣唐使人坂合部連石積とは別使節、『書紀』が誤解し合飯か  
守君大石は百濟救援の將軍で帰國記事ないので唐の捕虜か 小館という曖昧な位階  
天智四年に唐へ送られた使節のうち坂合部連石積のみが帰國、守君大石の名前はない

実際の送使は大乙吉士岐弥・吉士針間

坂合部連石積は白雉四年から天智六年まで在唐か→天智四年の出発不可能

天智六年十一月乙丑条に石積の帰國記事 白雉四年以後の帰國記事なし

★劉仁軌に率いられた百濟在留捕虜の「僕人使」元将軍守君大石は唐に残留

留学生の坂合部連石積が京都を出発した「僕人使」として封得に参加後、帰國

### 天智五年(666)

唐『冊府元龜』外臣部盟誓

麟德二年十月丁卯、帝發東都赴東嶽、……倭國及新羅・百濟・高麗等諸蕃酋長、各率其屬扈從。

★新羅・百濟・耽羅・高麗等四國酋長泰山の封得に赴会す 正月五日(冊府元龜)

『冊府元龜』に「古來帝王封禪、未シ有シ若斯之盛者也」とある盛儀

★以下の史料と異なる内容=耽羅と高句麗の異同

## 【講演①】

### 七世紀後半の国際関係と古代山城

仁藤 敦史（国立歴史民俗博物館教授）

## 【はじめに】

### ★高安城を素材に山城と大宰・総領制の関係を考察

報告「七世紀後半の高麗と高安城」第3回古代史サマーセミナー企体会報告「高安城とその時代」二〇〇五年九月二五日、於信貴山

拙稿「高安城からみた広域行政区画」（原秀三郎先生卒寿記念文集『学林』、二〇一四年）

### ★広域行政区画として大宰・総領制を考察

拙稿「広域行政区画としての大宰・総領制」（『国史学』二一四、二〇一四年）

### ★七世紀の外交的対立関係

拙稿「大化改新と東アジア情勢」（『日本史かわら版』四、朝國書院、二〇一七年）

## 【白村江後の倭國の立場】

### 唐軍の百濟駐留

#### →日本侵攻の現実的可説性（天智8・9年ごろ）

「在・代倭國」新羅本紀／「唐人附・封」持統四年十月条

→・西日本各所に山城造営

「築・長門城一・筑紫城二」（天智九年二月） 四年八月条の重出説あり

・百濟「兵法」（天智十年正月条）の導入

・天智十年に筑紫の防人が唐使を侵攻軍と誤解（彼防人驚駆射戦）

・広域行政組織整備と山城運動 国造軍から軍団兵士制への転換

大宰（筑紫・周防・伊予・吉備／畿内・東國）・国宰・評・五十戸体制

★高安城も畿内ないし倭・河内国を単位とする総領により造営管理されたか

天智期における評の分立

国造の大規模評からの分立 一百済役における国造軍の活動

防衛体制の強化と立評・詳寺（白鳳寺院の全国的拡大増加）の関係

五十戸=一里制を前提とした律令軍團制の導入（一里から兵士五十人）

庚午年籍（天智九年）に収載される評の再編分立と五十戸編成

・近江連郡・倭京留守司（天智六年三月条）- 国土防衛

### ★唐・新羅は、百済滅亡後、高句麗征討に集中→高句麗滅亡→新羅の対唐戦争

663 新羅に鶴林州都督府を置き、全体を州県体制に組み込む

都督に金春秋の子、法敏を任命

664 新羅王弟金仁問と百済元王子扶余隆との和親誓盟



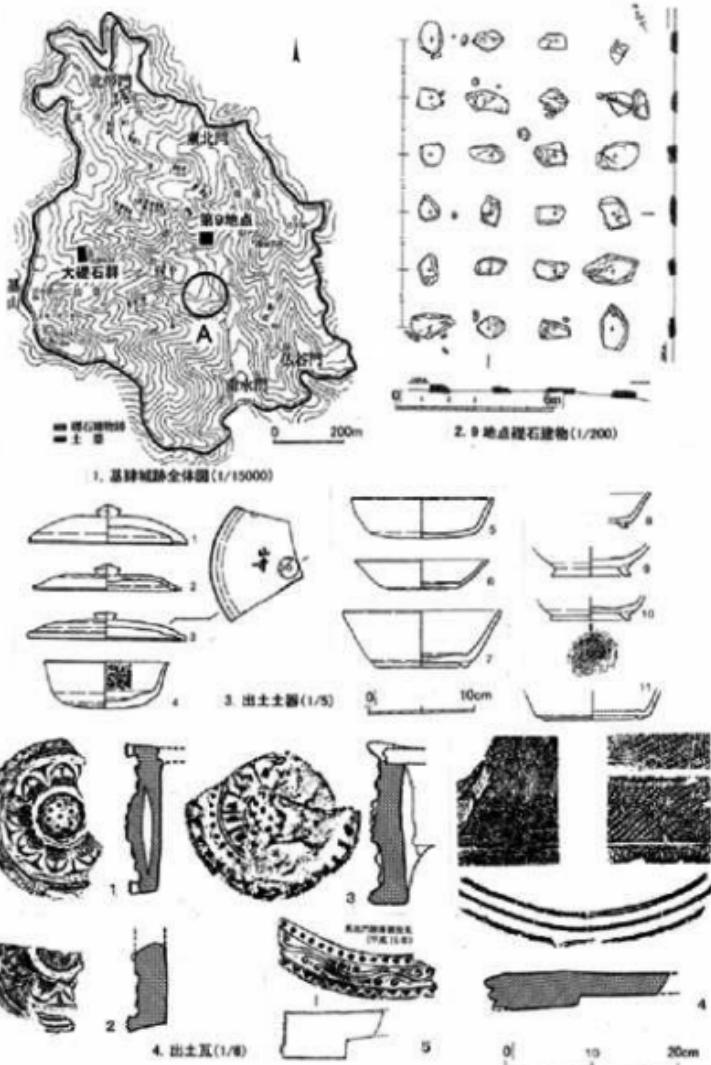


図9 肥前基跡城跡の遺構と遺物

年 代	大 宰 府 政 府	水 城 西 門	大 宰 府 口 城 門	大野城建築群		御智城建築群	特記事項
				Ⅰ期	Ⅱ期		
7C 第3	1期一古			Ⅰ期A 垂立柱式側柱		Ⅰ期 垂立柱式側柱	7C第3
	1期一新	Ⅰ期		Ⅰ期B 垂立柱式側柱			7C第3
8C	8C一高室			Ⅰ期C 砖石式大型柱材(高倉)		Ⅰ期 垂立柱式側柱、壁面式大型柱材(高倉)	8C
		Ⅱ南	Ⅱ期	Ⅱ期A 砖石式柱材3×6(基礎、垂立柱使用)		Ⅱ期 壁面式柱材3×4(基礎柱使用-高倉)	8C 8C 8C
		Ⅱ北	Ⅱ期	Ⅱ期B 砖石式柱材3×5-南北軸			8C 8C
			Ⅲ期	Ⅲ期C 砖石式柱材3×5-東西軸		Ⅲ期 壁面式柱材3×4	8C
			Ⅲ期	Ⅲ期D 砖石式柱材3×4			8C
9C	9C 壁面 壁面凹凸式					Ⅳ期 壁面式柱材3×4	9C
						Ⅴ期 壁面式柱材3×4	9C
10C		Ⅳ期 壁面 壁面凹凸式					10C
11C							11C

図7 赤司善彦の大宰府政庁・大野城・御智城の変遷図案

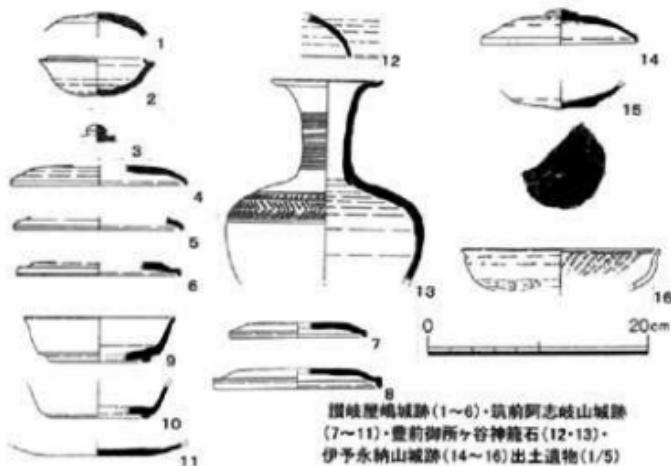
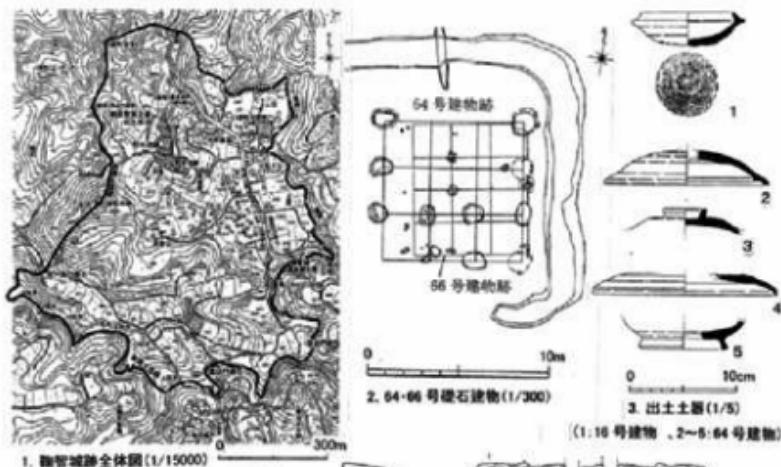


図8 古代山城出土遺物  
讃岐壓頬跡(1~6)・筑前阿志岐山城跡  
(7~11)・豊前御所ヶ谷神籠石(12~13)・  
伊予永納山城跡(14~16)出土遺物(1/5)

図8 古代山城出土遺物



2. 64・66号櫓石建物 (1/300)

(1:10号建物、2~5:64号建物)

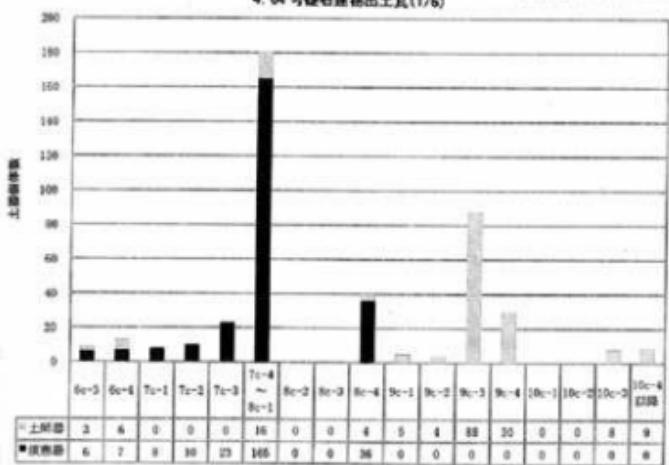
0 10m

0 10cm

3. 出土土器 (1/5)



0 20cm



5. 鬼智城跡出土土器の時期別数量比較図

図6 肥後鬼智城跡の遺構と遺物

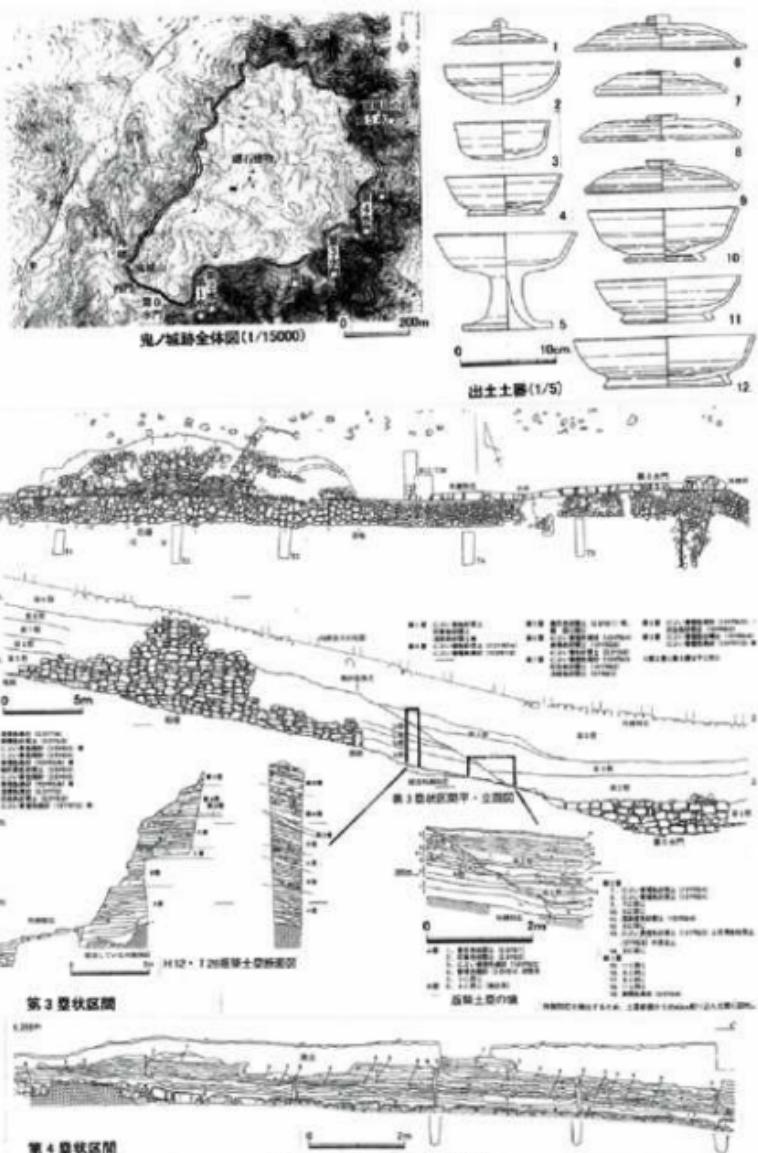


図5 倭中鬼ノ城の遺構と遺物

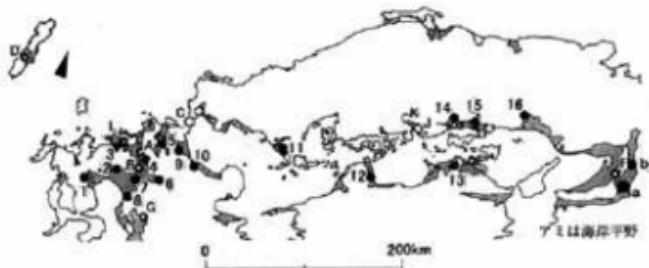


図1 開通遺跡の分布

- A. 大野城跡 B. 瑞穂城跡 C. 長門城 D. 金田城跡 E. 星崎城跡 F. 高安城跡 G. 鹿曾城跡  
 H. 三野城 I. 福留城 J. 芙城 K. 常城 L. 怖土城跡 1. おつぼ山神籠石 2. 衛門山神籠石  
 3. 雪山神籠石 4. 阿志岐城跡 5. 麋毛馬神籠石 6. 木本神籠石 7. 高良山神籠石 8. 女山神籠石  
 9. 鶴所ヶ谷神籠石 10. 唐原山城跡 11. 石塙山神籠石 12. 水納山城跡 13. 清岐城山城跡 14. 先ノ城  
 15. 大里小里山城跡 16. 滅磨城山城跡 a. 飛鳥寺・牛子環古墳・高松環古墳・キトラ古墳 b. 高御寺  
 C-H-Iは所在地不明



1. 奈良唐原山城跡

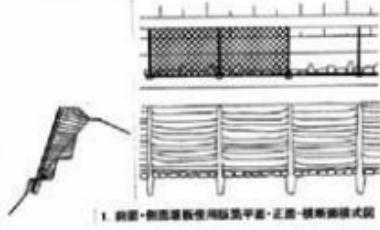


2. 奈良阿志岐城跡

図2 未完成の古代山城



図3 奈前御所ケ谷神籠石土塁築造復元図



1. 石垣-側面幕板使用版筑平面-正面-積石築模式図

2. 石垣幕板使用-側面幕板不使用版筑平面模式図

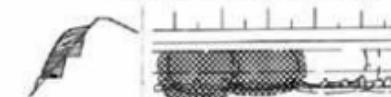


図4 作型模式図 2. 幕板不使用版筑平面-積石築模式図

- 小田富士雄編 1983『北九州郷戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書 10、名著出版
- 小田富士雄編 1985『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書 13、名著出版
- 龜田修一 2014a「古代山城は完成していたのか」熊本県教育委員会編『物智城跡Ⅱ—論考編—』
- 龜田修一 2014b「百濟山城と刻印瓦の附属性（予察）」『半田山地理考古』2、岡山理科大学地理考古学研究会
- 龜田修一 2015「古代山城を考える—遺構と遺物—」岡山県古代吉備文化財センター編『古代山城と城壁調査の現状』
- 平成 27 年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第 28 回研修会発表要旨集、全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会
- 龜田修一 2016「西日本の古代山城」須田勉編『日本古代考古学論集』同成社
- 龜田修一 2018a「日本列島古代山城土器に関する観察—版築・櫛板について—」『水利・土木考古学の現状と課題Ⅱ』大韓民国国立文化財研究院
- 龜田修一 2018b「締められた大野城・基跡城・物智城とその他の古代山城」『大宰府の研究（大宰府史跡発掘調査 50 周年記念論文集）』高志書院
- 木村龍生 2012「第 VI 章 第 1 節（1）物智城跡出土の土器について」『物智城跡Ⅱ』熊本県教育委員会
- 木村龍生編 2015『物智城跡出土土器・瓦の生産地推定に関する基礎的研究』熊本県立装飾古墳館分館歴史公園物智城・畠故創生館
- 熊本県教育委員会 2012『物智城跡Ⅱ—物智城跡第 8～32 次調査報告—』
- 松川博一 2018「律令制下の大宰府と古代山城」『九州歴史資料館研究論集』43、九州歴史資料館
- 宮小路賀宣・龜田修一 1987「神龍石論争」「論争・学院日本の考古学 6 歴史時代」雄山閣
- 向井一雄 2010「古代山城研究の成果と課題—近年の調査成果からみた新古代山城像—」『季刊福馬台国』105、祥書院
- 向井一雄 2018「よみがえる古代山城—国際戦争と防衛ライン—」歴史文化ライブラリー 440、青川弘文館
- 矢野裕介 2012「第 VI 章 第 3 節 遺跡の時期区分と変遷」『物智城跡Ⅱ』熊本県教育委員会
- 渡辺正気 1988「神龍石の鑄造年代」斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編『考古学叢考』中巻、吉川弘文館

#### 【引用脚註】(いざれも一部改変引用)

- 図 1：村上幸雄・柴間実 1999『鬼ノ城と大崩り小崩り』吉備考古学ライブラリイ 2、吉備人出版
- 図 2、図 5 全体図、図 9-1：古代山城サミット実行委員会 2010『古代山城サミット展示会 あつまれ!古代山城』
- 図 3、図 8-12・13：小川秀樹 2003『史跡御所ヶ谷神龍石』行橋市教育委員会
- 図 5 土器：金田善敬・岡本泰典編 2013『史跡鬼城山 2』岡山県教育委員会
- 図 5 遺構図：村上幸雄・松尾洋平 2005『古代山城鬼ノ城』総社市教育委員会
- 図 6：熊本県教育委員会 2012
- 図 7：赤司 2016
- 図 8-1～6：高松市教育委員会 2010『古代山城日韓シンポジウム～郷戸内・日本・東アジアからの視点で置城城の実像にせまる～』、7～11：草薙啓一編 2006『阿志岐城跡』筑紫野市教育委員会、14～16：渡邊芳貴 2012『史跡永納山城跡Ⅱ』西条市教育委員会
- 図 9：小田富士雄「基跡城跡」基山町史編さん委員会編『基山町史 資料編』基山町

ただ、一方で、出土土器を詳細にみると8世紀前半以降の土器も少なからずある。しかし、これらが「城」で使用されたのか、それとも「城」機能終了後に何らかの意味で使用されたのか、その検討も重要である。

筑前大野城跡では宝亀5(774)年に對新羅用に西天王寺地像(塑像)4体が作られている。肥前基跡城跡では8世紀後半の「山寺」墨書き土器も出土している。備中鬼ノ城においても詳細な時期は不明であるが、瓦塔が出土し、隆平永寶(初跡 796年)が柱穴から出土した平安時代前半の仏堂が検出されている。

さらに筑後高良山神籠石には『延喜式』式内社高良大社があり、『日本紀略』延暦14(795)年条に、高良神が初めて從五位下の神階を受けられたことが記されており、周防石城山神籠石にも『延喜式』式内社石城神社があり、『日本三代実録』貞觀9(867)年条に石城神が從四位下の神階を受けられたとある。

このように神籠石系山城の中には8世紀前半以降に宗教施設に変容したものがあるようである。8世紀以降の土器に関してはそのような視点からの検討も必要である。

#### 古代山城の変容—使用され続けた古代山城—

上記のように、古代山城が廢止され、その後わからなくなつたもの、寺や神社にかわったものがあるが、筑前大野城・肥前基跡城では8世紀前半代の軒先瓦を含む瓦が使用され、瓦葺建物が新築、改築されたことがわかる。これらに関しては、すでに検討されているように、大宰府の地域支配との関係も含め倉庫群が新たに建てられ、維持管理されたことが考古資料・文献史料から明らかにされている(赤司2016、松川2018など)。

また、肥後御智城跡に関しては、8世紀中頃に一時空白があり、8世紀末頃から新たに瓦葺建物が建てられ、倉庫などとして使用されたことがこれも考古資料・文献史料から明らかにされている。ただ、ここでは8世紀の軒先瓦は確認されていないようである(熊本県教育委員会2012、木村2015など)。

そして、これら698年に繕治された3つの城は9世紀後半頃には使用されなくなったようである。

#### 5. おわりに

7世紀中頃から後半の百濟の滅亡・白村江の戦いなどを契機に築城された日本列島の古代山城は8世紀初め頃の廃止・停止を経て、そのまま存在が確認できなくなった城と、寺や神社など形態は異なるが、宗教施設に変わり、その宗教施設が今まで続いているものがある。

一方、大宰府周辺の大野城・基跡城・御智城は宗教施設も含みながら、9世紀後半頃までやはり単なる城ではなく、地域支配の機能も含めて、性格をやや変えながら継続している。

古代国家・大宰府、それぞれの地域にとって重要と認識された城は途中途切れることもあったかもしないが、変容しながら継続し、あるものは今まで続いたようである。

#### 【参考文献】

- 赤司善彦 2016 「御智城の建物景観の推移」『海と山と里の考古学』山崎純男博士古稀記念論集編集委員会  
明日香村教育委員会 2006 「酒船石遺跡発掘調査報告書」

両論ある。

#### 660 年の百済滅亡、663 年の白村江の戦いの後に築かれた古代山城

天智天皇 2 (663) 年の白村江の戦いに破れた後に築かれたものが、『日本書紀』同 3 (664) 年の水城、同 4 (665) 年の長門城・筑紫国大野城・株城（基跡城）、同 6 (667) 年の倭国高安城、讃吉国山田郡屋嶋城、対馬国金田城跡である。

これらは明らかに唐・新羅の攻撃を意識して築かれたものであり、長門城・大野城・基跡城に関しては百済から亡命してきた達率客体春初・憶禮福留・四比福夫らの指導によることが記されている。

そして『続日本紀』文武天皇 2 (698) 年に緒治された城が大野城・基跡城・鞠智城である。肥後鞠智城跡に関しては初めての記録への登場であり、築城年代は不明である。ただ、この緒治記事への登場、その後の記録などから 665 年の大野城・基跡城、または 667 年の金田城などと同時期に築かれたものと推測されている。ただ、その地理的な位置から対唐・新羅用、対隼人用の意見がある。

#### 神龍石系山城はいつ築かれた?

神龍石系山城の築城時期に関しては、朝鮮式山城の前、同時期、後という考え方があるが、これまで述べてきたように決定的な出土遺物がなく、現在も意見は定まっていない。

そのなかで備中鬼ノ城に関しては、比較的調査が進み、ほかの神龍石系山城に比べると出土遺物も多い。城壁は完成し、修繕もされ、城内に管理棟・倉庫などもあり、懸門・石敷き門道などの城門構造、角櫓（雉城）の存在などの諸特徴が対馬金田城跡、讃岐屋嶋城跡などと類似することから、筆者はこれらと同時期に築かれたと考えている。北部九州から河内・大和への交通路上の重要性から、瀬戸内海（備讃瀬戸）を挟む讃岐に屋嶋城が築かれ、吉備に城が築かれないと考えにくいこともその考え方の基礎にある。さらに出土土器も肥後鞠智城跡の土器の出土傾向を参考にすると、やはり上記の想定で問題ないと考えている。

そのほかの神龍石系山城に関しては、やはり決め手に欠けているといわざるをえない。瀬戸内海沿岸地域と北部九州地域の神龍石系山城、これらがすべてほぼ同時に築城を開始したのか、それとも地域的に時期がズレながら築城されていったのか。未完成・完成という観点からもさらに検討すべきであると考えている。

また、築城の背景に関しては、鬼ノ城に関しては朝鮮式山城と同じように対唐・新羅防御用と考えている。さらに地域支配のための山城築城の考えに関しては、築城時期によってより検討しなければならないが、山陰道や東山道など西日本の古代山城築城地域以外になぜ築かれなかったのかという点に関する検討も必要であろう。

#### （2）古代山城の終焉とその変容

##### 古代山城の停歎記事

以上のように 664 年の水城、665 年の大野城・基跡城などの築城、698 年の大野城・基跡城・鞠智城緒治など、7 世紀後半には古代山城が築かれ、維持管理されている。しかし、大宝元（701）年の高安城を廢城、和綱 5（712）年の河内国高安峰の廢止、そして養老 3（719）年の備後国安那郡荒城・葦田郡常城の停止記事などと、各山城の出土遺物からほとんどの古代山城は 8 世紀初め頃には停止されたのではないかと考えられている。

1、2点、7世紀末頃から8世紀初め頃の土器が4、5点出土すると確実な年代として7世紀末頃から8世紀初め頃の山城であると理解されることがある。

鷹智城跡では7世紀第3四半期の須恵器が23点、7世紀第4四半期～8世紀第1四半期の須恵器が165点出土している。鷹智城の築城年代はわからないが、698年に縄治されており、後者の165点はこれに関わるものと考えられている。そして前者の23点が築城時間遅のものと考えられている。この数字を1/10にしてみると、築城時間が2、3点となり、縄治段階が16点前後となる。この数字はそのまま神龍石系山城築城年代決定に反映できるとは言えないが、十分参考になる。

このような出土遺物の検討は筑前大野城跡や肥前基跡跡でも進められているが、より検討を進めていただければ、そのほかの古代山城研究に大きな影響を与えるものと考えている。

遺物が比較的多く出土している山城は698年に縄治された大野城跡・基跡跡・鷹智城跡と、これら3つの城ほどではないが、対馬金田城跡、備中鬼ノ城がある。これらは完成したと考えられる山城である。遺物出土量の多寡も完成・未完成論で説明しやすいと考えている。

### (3) 遺構と遺物の総合化

遺構と遺物のそれぞれの検討例をあげたが、古代山城にかかわらず、考古学では両者を総合的に検討しなければならないと考えている(亀田2015)。

遺構があれば、人間が大地に関わった痕跡であり、遺物も残ると考えている。その遺構の数が多ければ、遺物もそれに応じて残っていると考えている。これまで述べてきた古代山城の遺構と遺物の話もこれと同じであると考えている。

古代山城の発掘調査・研究が進んでいる肥後鷹智城跡を例に挙げると、木村龍生(2012)の土器変遷案と矢野裕介(2012)の遺構変遷案は重要な調査研究成果である。両者にはややズレがあると赤司善彦は考え、2016年の論文においての両者の関係の修正案を提示している(図7)。確かに、木村と矢野の考えをそれぞれ少しづつ幅広く捉えるとうまいくいのではないかと思われる(亀田2018b)。

このような遺構と遺物の総合化は、肥前基跡跡の礎石建物群と百濟系単弁軒丸瓦・重弧文軒平瓦の使用のされ方に通じるものと考えている(図9)。

## 4. 古代山城の成立と変容

### (1) 古代山城の成立

#### 660年の百濟滅亡、663年の白村江の戦い前に築かれた古代山城

660年の百濟滅亡、663年の白村江の戦い以前に築かれた可能性がある古代山城関連遺跡が酒船石遺跡である。『日本書紀』齊明天皇2(656)年是歲条に記された「宮の東の山に石を累ねて垣となす」の「垣」である可能性が推測されている。ただ、石列の南東部は途切れしており、全周はしていない。全長は確認されていないが、約700mはあるようである。時期は出土土器などから7世紀中頃に造営され、天武天皇13(684)年の白鳳南海地震で倒壊したものと推測されている(明日香村教育委員会2006)。

また、渡辺正氣(1988)は『日本書紀』の齊明天皇4(658)年是歲条の末尾にみえる「成本云。至庚申年(660)七月、(中略)由是國家以兵士甲卒陣西北畔。縄修城柵、断塞山川之充。」に注目し、前半が齊明天皇の西征、後半が神龍石を示すのではないかと考えた。この渡辺説に関しては、現在も賛否

### 3. 遺構と遺物の個々の検討と総合化

#### (1) 遺構

古代山城の遺構としては、土壘・門・建物・その他いろいろあるが、土壘に関しては一般的に版築土壘と考えられている。ただ、この版築土壘も詳細に検討すると、一般的に描かれる「堰板」がすべて使用されているのか、その使用に関しても前面（正面）・側面すべてに使用されているのか、よくわからないものが多い。そのような意識で版築土壘を検討すると、堰板使用版築土壘も全面堰板使用版築土壘・一面堰板使用版築土壘などがあり、堰板を使用していない堰板不使用版築土壘も存在することが推測できた（図3・4、亀田2018a）。

例えば備中鬼ノ城の西門南東部では前面（正面）・側面に堰板を使用した全面堰板使用版築の可能性が推測できる（図5）が、その他大多数の山城の土壘は少なくとも側面にいつも堰板を使用していたのではないかようすに推測でき、さらに備前大畠小畠山城では前面・側面ともに堰板を使用していない堰板不使用版築土壘の存在の可能性が推測できた。

このような土壘構築技法に関しては、朝鮮半島の山城においてもみることができ、これらの違いがどのような意味を持つのかは今後さらに検討しなければならないが、少なくとも日本列島の古代山城の土壘構築技法が単純ではなく、朝鮮半島からの土壘構築技術の伝播のあり方も意識して、古代山城全体を検討すべきと考えた。

そのほか門の構造（振り柱門【唐居敷の有無】、礎石立門）、門の完成・未完成・建て直し、いろいろな建物（管理棟・兵舎・倉庫など）の有無、その他貯水施設（井戸・池）、鍛冶場、石切場など多くのことが検討されており、これまで述べてきた小生の完成・未完成論で考えるならば、神龍石系山城の城内遺構の確認・未確認・多さ・少なさも説明しやすいように思われる。

#### (2) 遺物

古代山城出土遺物としては、土器・瓦・その他がある。最も多く確認されるものは土器である。しかし、神龍石系山城は調査地点との関わりもあるであろうが、一般的に出土量は少ない。

また、瓦が出土する山城は筑前大野城跡、肥前基附城跡、肥後鞠智城跡、そして実際に城内の城内建物に使用されたかはわからないが、備中鬼ノ城で少量出土している。7、8世紀における瓦の使用は寺院、官衙などが一般的で、その他の施設ではほとんどみることができない。古代山城は國家が関わる「城」であり、「官衙」関連として使用されることはあるが、確実な古代山城使用例は上記の3つの山城である。瓦の使用も山城の「重要性」「機能」などを表わしている可能性がある（亀田2014b）。ただ、古代山城に宗教施設が造営される、古代山城が宗教施設に変容するなかで瓦が使用される可能性も考えておくべきである。

そのほかの遺物も含め、土器・瓦類は山城の築城・使用・廢城年代決定に重要な意味を持つ。ただ、多くの神龍石系山城では前述のようにその点数が極めて少なく、年代決定に苦労しているのが実態である（図8）。そのような中で木村龍生（2012）が行った鞠智城跡出土土器の検討は極めて重要で、土器出土量の変遷によって鞠智城の変遷が推測できるようになった（図6）。この鞠智城跡の土器出土量の変遷とその他神龍石系山城の出土遺物を比較検討することで多少なりとも神龍石系山城の年代も推測できるようになっている。神龍石系山城では全体で数點しか土器が出土しない場合、7世紀中頃の土器が

## 古代山城の成立と変容

亀田 修一（岡山理科大学教授）

## 1.はじめに

古代山城（小椎では朝鮮式山城・神籠石系山城をあわせてこのように呼ぶ）に関する研究は、古くよりなされ、これまでの成果では、660年の百濟滅亡前後の朝鮮半島における混亂、663年の白村江の戦いの敗戦を契機として、対唐・新羅用に築かれたとの考えがおもな意見と考えられる（図1）。ただ、細部ではいろいろな意見もある。

今回の発表では、これまでの諸先学の研究成果によりながら、「古代山城の成立と変容」について、小生が最近、おもに指摘していることがら、「未完成と完成」、「遺構と遺物の総合化」などを中心にお話ししたい。

諸先学の研究成果に関しては、報告書も含め多くのものがあるが、ここでは末尾に参考文献としておもなもの、今回の発表に関わるものにくわかあげさせていただいた。

## 2.未完成と完成

古代山城が未完成であることは古くから指摘されている。亀田は2014aの論文で改めて未完成であることについて取り上げ検討し、半数以上（9/16）の神籠石系山城が未完成、またはその可能性が推測されることを指摘した。筑前阿志岐城跡・鹿毛馬神籠石・杷木神籠石、筑後女山神籠石、肥前おつば山神籠石、豊前唐原山城跡、周防石城山神籠石、讃岐城山城跡、播磨城山城跡などである（図2）。

ただ、これらの未完成に關しても、土塁造成予定場所を加工し、列石を途中まで並べたが、土塁を盛っていない豊前唐原山城跡や、列石十土塁はできあがっているが、その列石土塁が全周していない筑前阿志岐城跡・筑後女山神籠石など、また門の唐居敷用の石を途中まで加工して門の場所近くまで運んでいるが、その加工が途中で止まっている讃岐城山城跡などいろいろな段階の未完成がある。

逆に、完成している、またはほぼ完成している古代山城は、朝鮮式山城のその所在地が確認されている6カ所のうち、4カ所が挙げられる。筑前大野城跡、肥前基肄城跡、対馬金田城跡、肥後御賀城跡である。このほか神籠石系山城であるが、備中鬼ノ城も完成していると考えている。

このほか詳細がわからないものが多いが、上記のような完成・未完成の古代山城をすべて同列に扱って古代の防衛体制を論じて良いかというのが、亀田の考え方の一つである。

さらに、文献史料から719年頃までには古代山城の機能は停止されたと考えられているが、698年の「縛治」を含めて8世紀以降も維持管理、再利用されたことが考古資料・文献史料から確認できるものが筑前大野城跡、肥前基肄城跡、肥後御賀城跡の3つの城である。これら北陸・中部九州に位置する3つの城はこれまでの諸先学が述べているとおり、当時の国家・大宰府が特別に重要視・意識した山城と考えられる（亀田2018b）。

鞠智城・古代山城シンポジウム

**古代山城の成立と変容**

日時：平成30年10月14日（日） 10:30～17:10

場所：明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール（東京都千代田区神田駿河台1-1）

主催：熊本県、熊本県教育委員会、明治大学日本古代学研究所

後援：明治大学博物館、明治大学社会連携機構、熊本県文化財保護協会

日 程

9:30 開 場

10:30 開 会

あいさつ 熊本県教育長 宮尾 千加子

明治大学日本古代学研究所所長 石川 日出志

来賓紹介

10:50 基調講演 10:50～11:50

「古代山城の成立と変容」

亀田 修一（岡山理科大学教授）

11:50 昼食休憩 11:50～13:00

13:00 講 演① 13:00～13:40

「七世紀後半の国際社会と古代山城」

仁藤 敦史（国立歴史民俗博物館教授）

13:40 講 演② 13:40～14:20

「朝鮮式山城の特徴—主に兵站と備蓄について—」

赤司 善彦（大野城心のふるさと館館長）

14:20 講 演③ 14:20～15:00

「神籠石系山城の捉え方～築城年代・築城主体論の克服」

向井 一雄（古代山城研究会代表）

15:00 休 憩 15:00～15:20

15:20 パネルディスカッション 15:20～17:10

コーディネーター 佐藤 信（大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事）

パネリスト 亀田 修一 仁藤 敦史

赤司 善彦 向井 一雄

中村 友一（明治大学准教授）

五十嵐 基善（明治大学兼任講師）

矢野 裕介（熊本県教育委員会）

17:10 閉 会

※10/7～10/15「古代山城の城門（パネル展）」を開催（アカデミーコモン1F展示スペース）

平成30年度(2018年10月14日開催)

# 資料編

鞠智城・古代山城シンポジウム  
成果報告書

編智城・古代山城シンポジウム「〇二八 成果報告書

# 古代山城の成立と変容

発行年月日 平成三二（二〇一九）年三月二二日

編集・発行 熊本県教育委員会

〒八六二一八六〇九

熊本市中央区水前寺六丁目一八番一号

電話 ○九六一三八三一二二二（代表）

サンコー・コミュニケーションズ株式会社

印 刷

この電子書籍は、古代山城の成立と変容 鞠智城シンポジウム成果報告 2018 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：古代山城の成立と変容

鞠智城シンポジウム成果報告 2018

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2022 年 7 月 21 日